

535

特233

71

民那精神總動員變記念出版

國に奉ずる

兵庫縣立第三神戸中學校校友會

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





昭和十二年九月四日
第七十二臨時議會開院式にあたり下し賜ひたる
勅語

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク
帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ
非榮ノ實ヲ擧クルハ是レ朕カ夙夜軫念措カサル所ナリ中華民
國深ク帝國ノ真意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見
ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百艱ヲ排シテ其ノ忠
勇ヲ致シツツアリ是レニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ
平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス
朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニ
シ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム
朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル追加豫算案及
法律案ヲ帝國議會ニ提出セシム卿等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協
贊ノ任ヲ竭サムコトヲ努メヨ



貴族院の奉答文

貴族院議長 臣松平頼壽 誠恐誠惶謹テ
 叙聖文武天皇陛下ニ上奏ス
 爰ニ第七十二回帝國議會開院ノ盛典ヲ行ハセラレ優渥ナル
 勅語ヲ賜フ恭ク惟ルニ帝國ノ意圖ハ隣邦ト提攜シテ東亞ノ安定ヲ確保シ共榮ノ實ヲ擧クルニ在リ然ルニ中華
 民國ハ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ起スニ至レリ
 陛下深ク軫念アラセラレ臣民カ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシテ事ニ從ヒ以テ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞
 ノ平和ヲ確立セムコトヲ示サセ給フ
 聖慮ノ深遠ナル洵ニ感激ニ勝ヘス臣等謹テ
 叙旨ヲ奉體シ慎重審議協贊ノ任ヲ竭シ以テ
 皇猷ヲ贊襄セムコトヲ期ス 臣頼壽 恐懼ノ至ニ任ヘス謹テ奉答ス

衆議院の奉答文

恭シク惟ルニ
 叙聖文武天皇陛下茲ニ臨時帝國議會ヲ召集シ
 車駕親臨開院ノ盛式ヲ擧ケサセラレ優渥ナル
 勅語ヲ賜フ 臣等 恐懼ノ至ニ堪ヘス願フニ帝國カ東洋平和ノ確立ニ邁往シ中華民國ト互ニ提攜シテ其ノ任ニ
 當ラムトスルコト久シ然ルニ民國ハ誠意ヲ無視シ頻ニ事端ヲ滋クシ遂ニ今次ノ事變ヲ起スニ至ル 聖慮ノ洪
 大ナル尙且彼カ反省ヲ促シ東亞安定ノ速カナラムコトヲ望マセラレ國民ノ嚮フ所ヲ示サセ給フ 臣等感激措カ
 サル所ナリ今ヤ我カ陸海軍ハ北ニ南ニ連戰連捷シ克ク忠勇ヲ致シ國威ヲ宣揚ス是レ偏ニ
 陛下ノ稜威ニ頼ラスムハアラス國民ハ學ツテ堅忍持久以テ終局ノ目的ヲ達セサルヘカラス 臣等慎重審議協贊
 ノ任ヲ竭シ上
 陛下ノ聖旨ニ應ヘ奉リ下國民ノ委託ニ酬イムコトヲ期ス
 衆議院議長 臣小山松壽 誠恐誠惶謹ミテ奏ス

國に盡す道

目次

勅語 千一
 勅語奉答文 千一
 序 會長 賀須井 千一
 第一篇 皇室の御仁慈 三
 第二篇 國民精神總動員 一〇
 一、近衛首相の施政演説 一〇
 二、内閣告諭 一一
 三、國民精神總動員に關する首相の講演要旨 一三
 四、國民精神總動員實施要項 一五
 五、國民精神總動員に關する知事告諭 一六
 六、兵庫縣實施要項 一七
 七、生活改善十則 一七
 八、國民精神總動員強調週間に於ける本校の實施事項 一九
 第三篇 支那事變 二〇
 一、事變に關する政府の聲明 二〇
 二、支那事變日誌 二三
 三、戰線美談 二六
 その一、陸軍の部 二六
 その二、海軍の部 二七
 その三、空軍の部 二八
 その四、軍屬其の他の部 二九

四、應召美談	105
五、出征家族美談	108
六、銃後美談	119
七、出征職員卒業生よりの陣中たより、その他	127
第四篇 時事論説 其の他	134
一、時事論説	134
國民精神總動員と我等の覺悟	贊助員 近藤恭一郎
五年 大曲、土岐、佐野	四年 坊ヶ内、増井、三年 疋田、中末、田中、二年 上村、奥西、武田、一年 酒井
新聞社説抄	136
二、皇軍慰問	137
出征の皇軍將兵各位に捧ぐ (北支の部)	學 校
五年 上杉、小川、四年 永福、山崎、三年 今村、關、二年 清瀬、今村、一年 片山、木崎	138
三、時事和歌 (五年生有志)	139
四、時事俳句 (五年生有志)	140
五、時事漢詩	141
膺懲暴支歌	贊助員 和田利男
雁門關占領	贊助員 小川堯平
五年 諫山、淺尾、大曲、横正	142
附 錄	143
本校關係の應召者芳名錄	143
現職員、舊職員、卒業生、生徒の父兄	144
編輯 後記	145

序 會長 賀須井 千

今次事變勃發以來既に三閱月、當初より政府は我が國の態度を中外に聲明して東洋に於ける平和の速なる克服維持を希つたのである。而も支那は不幸にして帝國の眞意を解せず、國際信義に悖つた不法態度は日増しにその度を加へるに至り、我が國は自衛上遂に現地解決不擴大方針を一擲せざるを得なくなつた。その間皇軍の勇猛果敢なる進撃は北支に中南支に續けられ、陸海空軍の緊密周到なる聯絡の下に寡兵よく衆敵を制壓、破竹の勢を以て膺懲の師を進め、國威を中外に發揚して來たのである。此の赫々たる武勳に對して我々國民は衷心より感激深謝措く能はざる次第である。

過般第七十二臨時議會開院式に方つては、畏くも優渥なる 勅語を下し賜り、國民の嚮ふべき所を示し給うた。聖慮深遠眞に恐懼感激に堪へない。茲に 聖旨を奉戴し、舉國一致、銃後の護を堅くし、外は運征の將兵諸士をして後顧の慮なからしめ、以てその威力を遺憾なく發揚せんことを希ひ、内は愈々國力の充實發展を圖り、かくて一日も早く所期の目的を達成し以て 聖旨に對へ奉らんことを期せねばならない。

顧ふに支那事變の動因は遠く深くその排日教育に胚胎するものであるが、特に最近漸く統制段階に上つた南京政府の増上慢、就中その武力への過信と我が國情に對しての大なる錯覺とに出でてゐることは争はれない所である。果せる哉、皇軍將士の一死報國の撃滅により敗戦に繼ぐに敗戦を繰返し、好んで抗戦の遷延を策しながら事實は漸次敗色の濃かに、遂に戦意の喪失をすら蔽ふべくもないのである。

然しながら時局は既に新たなる進展を見せ、列國は虚妄なる支那の宣傳に乗つてか、或は否らずで我が國に對して不當なる非難の矢を向け、相携へて帝國の行動を制肘せんとしてゐる。誠に持久と守成とに對する國民の重大なる決意は今日以後に於て愈々その要を痛感させられる。他なし我が國の目的が支那爲政當局の背後にある第三國の策動如何に拘らず、支那無辜の國民を其の塗炭の苦より救ひ、更に歐米列國をして我が國の東亞に於ける地位使命を

昭和十二年十二月十六日

東京市神田區神田橋今

江藤

殿侍史

謹申 年末に當り諸事御多忙と拜察仕り候。次に左記の事項に關し特に御注意を煩し度願上候

北支新政權は日本國民の期待に反せり

清朝亡びて以來民國二十六年間の支那政治史を一覽すれば袁世凱。孫文。黎元洪。徐世昌。馮國璋。曹琨。段等の大軍閥・大官僚の全面的鬭争史にて國民は殆んど奴隸使役と忍苦に半世紀間慘害塗炭の生活を繼續し精神境地を彷徨せることに候。全く人道的に人類福祉の社會的にも隣邦國民として不問に符すべきものにあらず、とは天の攝理に反逆するものと存候。

今支那を擧げて大動亂の禍中に卷込まれたることは此の民族民衆の日本に對する敵對行爲に因るにあらずして力者の軍閥官僚合作の抗日機關の波動工作により日本侮辱の行爲を實演し東亞の局面を破る爲に日本は不得止結果に立至たるものに候。支那民族民衆に對しては眞に同情と愛憫を以て臨み此の民衆の自覺によりて支那新することが日支兩民族の誠の使命と考へられ候。然るに何ぞ哉、支那國民即大衆意識に基かざる官僚軍閥の徒中央強化と稱して新政府の樹立に狂奔したることは實に天理正道に逆轉し東亞兩民族提携の眞生命を没却蹂躪すべきものに候。

第一政權の發表に際し國教を明にせず、政治の主體を指示せず、政權慾に焦慮して權力威力を以て大刀を大に重壓して號令叱咤の形にて政權の發表を爲し再び國民を奴隸的使役に服さしめんとする氣構は有り有りと眼全く北支民衆は抜打的に吃驚すると同時に民衆とは全々無關係なる存在なることを立證するものに候。

私の觀察は北支政權は私生子にて然かも天津英佛租界に巢籠せる支那政治常習犯の惡質ブロカー連中が暗夜にたる盲目跋歩の醜體の私兒にて是れを支那國民の頭上に頂くことが果して大衆に満足を與へ得られるものなりべし、民意に反したる政府の存在は逆に益々南京殘骸政府の人氣を高め蔣介石をして抗日長期の理由をはつき民衆か新政權に對する失望をより轉じて南京側の空氣を支持する奇態なる現象を生むことを記憶するものに候兵と共產赤化の分子合流により急角度に赤化擴大し收拾出來ざる状態を示さんとせることは既に御報導申上たとに候。老賢臺。今度の事變の重大性は漸次日本國民一般に認識しつつあることにして此の時局が何年に及ぶは國民が切に政府に聽かんとする處に候、政府は果して我國民に満足なる答辯を與へ得る哉は私も亦政府に尋老賢臺篤と御批判を與へられんことを。

日本と支那に關する限り日本は四十年の對支策に就て果して何事を爲したる乎、其得たるものは何ぞ曰く支那ものを掴め得たる丈に候。曰く支那通なるものに軍人支那通、政治家支那通、外交官支那通、實業家の支那智く支那浪人而して現代名士として登場したる是等の人々の支那指導は全部觀點を誤りたるものにして最早過去在候。尙も現在日本の指導的階級にある政府部内の支那に關する智識には全部一大修正と頭腦組織の再検討をに展開したる北支の政權に關しても其誤りたる危険なる頭腦を以て見届られたる事の何たる暴狀なることこの何此の日本が岐路に立つ重大なる時に如斯き純理に合せず公理に適せず正義人道に従はざる中間的一夜作りの政も我が帝國人民を侮辱し輕視し吾人を偶像化に取扱ふものとして政府當局に對し切實に忠告を試むものに候。

を更生せしむるには 皇室の御稜威を感得せしめ東亞大局の確固不動の信念を養成して建國の大業を達成せ衆自體が茲に自覺して動作する自治の向上堅疊の形にあらざれば立國の大本は絶對に樹たざるものに候。此のはしむる所に日本の希望と翼成と提携が結ばれるものに候。民衆は無力なり民衆に權力なし兵權なし、此の無治の精神によりてこそ日本は如何なる考も理想も是れに飛び込んで東亞大成の實を遂げ得られるものに候。私

年十二月十六日

東京市神田區神田橋今城館

江藤大吉

殿侍史

御多忙と拜察仕り候。次に左記の事項に關し特に御注意を煩し度願上候
本國民の期待に反せり

十六年間の支那政治史を一覽すれば袁世凱。孫文。黎元洪。徐世昌。馮國璋。曹錕。段祺瑞。張作霖。蔣介石
全面的鬭争史にて國民は殆んど奴隸使役と忍苦に半世紀間慘害塗炭の生活を繼續し精神、物質兩面共に假死の
候。全く人道的に人類福祉の社會的にも隣邦國民として不問に符すべきものにあらず、現状の儘に放任するこ
るものと存候。

の禍中に卷込まれたることは此の民族民衆の日本に對する敵對行爲に因るにあらずして、實に一部指導階級權
抗日機關の波動工作により日本侮辱の行爲を實演し東亞の局面を破る爲に日本は不得止す血を以て血を争ふの
候。支那民族民衆に對しては眞に同情と愛憫を以て臨み此の民衆の自覺によりて支那新更生の政治公道を確立
の誠の使命と考へられ候。然るに何ぞ哉、支那國民即大衆意識に基かざる官僚軍閥の徒が再び北支に暗躍して
府の樹立に狂奔したることは實に天理正道に逆轉し東亞兩民族提携の眞生命を没却蹂躪したる不逞の行爲と斷
國教を明にせず、政治の主體を指示せず、政權慾に焦慮して權力威力を以て大刀を大上段に構へ民衆を強制的
形にて政權の發表を爲し再び國民を奴隸的使役に服さしめんとする氣構は有り有りと眼前に彷彿するものに候
に吃驚すると同時に民衆とは全々無關係なる存在なることを立證するものに候。

私生子にて然かも天津英佛租界に巢籠せる支那政治常習犯の惡質ブローカー連中が暗夜に手探りして私情投合し
私兒にて是れを支那國民の頭上に頂くことが果して大衆に満足を得られるものなり哉。其結果たる哉恐る
政府の存在は逆に益々南京殘骸政府の人氣を高め蔣介石をして抗日長期の理由をはつきりせしめて反對に北支
失望をより轉じて南京側の空氣を支持する奇態なる現象を生むことを記憶するものに候。既に北支一帯が敗殘
流により急角度に赤化擴大し收拾出來ざる状態を示さんとせることは既に御報導申上たる通り信じて疑なきこ
の事變の重大性は漸次日本國民一般に認識しつつあることにして此の時局が何年に及ぶ乎、いつ終局に趨ふか
かんとする處に候、政府は果して我國民に満足なる答辯を與へ得る哉は私も亦政府に尋ねんとする一員に候。
へられんことを。

り日本は四十年の對支策に就て果して何事を爲したる乎、其得たるものは何ぞ曰く支那に對する認識を誤りた
候。曰く支那通なるものに軍人支那通、政治家支那通、外交官支那通、實業家の支那智識、曰く支那批評家曰
名士として登場したる是等の人々の支那指導は全部觀點を誤りたるものにして最早過去の存在にて試験済と被
指導的階級にある政府部内の支那に關する智識には全部一大修正と頭腦組織の再檢討を要するものに候。直面
權に關しても其誤りたる危險なる頭腦を以て見届られたる事の何たる暴狀なることの何たる大膽なることに。

重大なる時に如斯き純理に合せず公理に適せず正義人道に従はざる中間的一夜作りの政權樹立と發表は餘りに
し輕視し吾人を偶象化に取扱ふものとして政府當局に對し切實に忠告を試むものに候。私は思ふ、眞正に支那
皇室の御稜威を感得せしめ東亞大局の確固不動の信念を養成して建國の大業を達成せしむるにありて右は民
動作する自治の向上堅壘の形にあらざれば立國の大本は絶對に樹たざるものに候。此の建國を國民によりて行
望と翼成と提携が結ばれるものに候。民衆は無力なり民衆に權力なし兵權なし、此の無方にして團結したる自
日本は如何なる考も理想も是れに飛び込んで東亞大成の實を遂げ得られるものに候。私は斯く成らんが爲、斯
那民族と提携して自治の向上に邁進したるものに候。

清朝亡びて以來民國二十六年間の支那政治史を一覽すれば袁世凱。孫文。黎元洪。徐世昌。馮國璋。曹錕。段祺瑞等の大軍閥・大官僚の全面的鬭争史にて國民は殆んど奴隸使役と忍苦に半世紀間慘害塗炭の生活を繼續し精神、境地を彷徨せることに候。全く人道的に人類福祉の社會的にも隣邦國民として不問に符すべきものにあらず、現時とは天の攝理に反逆するものと存候。

今支那を擧げて大動亂の禍中に卷込まれたることは此の民族民衆の日本に對する敵對行爲に因るにあらずして、力者の軍閥官僚合作の抗日機關の波動工作により日本侮辱の行爲を實演し東亞の局面を破る爲に日本は不得止す結果に立至たるものに候。支那民族民衆に對しては眞に同情と愛憫を以て臨み此の民衆の自覺によりて支那新更することが日支兩民族の誠の使命と考へられ候。然るに何ぞ哉、支那國民即大衆意識に基かざる官僚軍閥の徒が中央強化と稱して新政府の樹立に狂奔したることは實に天理正道に逆轉し東亞兩民族提携の眞生命を没却蹂躪しすべきものに候。

第一政權の發表に際し國教を明にせず、政治の主體を指示せず、政權慾に焦慮して權力威力を以て大刀を大上段に重壓して號令叱咤の形にて政權の發表を爲し再び國民を奴隸的使役に服さしめんとする氣構は有り有りと眼前全く北支民衆は抜打的に吃驚すると同時に民衆とは全々無關係なる存在なることを立證するものに候。

私の觀察は北支政權は私生子にて然かも天津英佛租界に巢籠せる支那政治常習犯の惡質ブロカー連中が暗夜に手たる盲目跋歩の醜體の私兒にて是れを支那國民の頭上に頂くことが果して大衆に満足と與へ得られるものなり哉べし、民意に反したる政府の存在は逆に益々南京殘骸政府の人氣を高め蔣介石をして抗日長期の理由をはつきり民衆か新政權に對する失望をより轉じて南京側の空氣を支持する奇態なる現象を生むことを記憶するものに候。兵と共產赤化の分子合流により急角度に赤化擴大し收拾出來ざる状態を示さんとせることは既に御報導申上たるに候。老賢臺。今度の事變の重大性は漸次日本國民一般に認識しつつあることにして此の時局が何年に及ぶ乎は國民が切に政府に聽かんとする處に候、政府は果して我國民に満足なる答辯を與へ得る哉は私も亦政府に尋ね老賢臺篤と御批判を與へられんことを。

日本と支那に關する限り日本は四十年の對支策に就て果して何事を爲したる乎、其得たるものは何ぞ曰く支那にものを擱め得たる丈に候。曰く支那通なるものに軍人支那通、政治家支那通、外交官支那通、實業家の支那智識く支那浪人而して現代名士として登場したる是等の人々の支那指導は全部觀點を誤りたるものにして最早過去の在候。尙も現在日本の指導的階級にある政府部内の支那に關する智識には全部一大修正と頭腦組織の再検討を要に展開したる北支の政權に關しても其誤りたる危險なる頭腦を以て見届られたる事の何たる暴狀なることの何たる此の日本が岐路に立つ重大なる時に如斯き純理に合せず公理に適せず正義人道に従はざる中間的一夜作りの政權も我が帝國人民を侮辱し輕視し吾人を偶像化に取扱ふものとして政府當局に對し切實に忠告を試むものに候。私を更生せしむるには 皇室の御稜威を感得せしめ東亞大局の確固不動の信念を養成して建國の大業を達成せし衆自體が茲に自覺して動作する自治の向上堅疊の形にあらざれば立國の大本は絶対に樹たざるものに候。此の建はしむる所に日本の希望と翼成と提携が結ばれるものに候。民衆は無力なり民衆に權力なし兵權なし、此の無治の精神によりてこそ日本は如何なる考も理想も是れに飛び込んで東亞大成の實を遂げ得られるものに候。私にくせんが爲に眞劍に支那民族と提携して自治の向上に邁進したるものに候。

老賢臺驚くべし。新政府否新政府の背後にある威大なる力なるものは今回完全に民衆による自治全部を解散してぐ必らず強要することのこと。自治は機械にあらず。然し強壓の前には民衆は無力なり必らず解散は實行せらるべ斯くして北支より消へ官製官僚の自治會は黄金政策によりて堂々たる建物の中にて私生するものと思はれ候。是もなし。大自然の眞理に逆行して結成せらるるものは崩壊も亦一般の早さを示すことを。而して逆轉せる世相は遂に全支を覆ふことは如實明々さを味ふものに候。以上御報導申上候。今年は年末年始の禮を缺くことに候。幸福を祈上候。

追て小生は來る二十五日天津に歸ることに候。敬 具

覺らしめ、以て眞の東洋永遠の平和を確立するにあるが故である。

新興勢力皇國日本の躍進は既に約束せられてゐる嚴然たる事實である。嘗て日清日露の兩役を経て世界列強に伍して以來未だ半世紀をも過ぎないのに、更に是に一大飛躍を餘儀なくさせられてゐる、誠に大國民の資質と能力とを遺憾なく發揮すべきである。よく時艱の克服に參して新たなる東亞の天地に雄飛せんとする、是全く聖代に生を享けたる者の痛快事ではなくて何ぞ。

而も其の間、前途には尙幾多の難關の起伏することにも豫め用意しなければならぬ。近代戦は戦線のみならずして實に國力の持久戦なることはかの歐洲大戦が痛い程我等に教へた所である。戦時體制下に國家の身構は既に出來た。残された問題は之をよく實踐して各自の生活様式並に態度に如何に具現すべきかに係つてゐる。精神的に經濟的に國民の一人一人の覺悟が嚴正なる再檢討をなされるべき要ある所以である。嚮に國民精神總動員の唱道せられ、目下その第二次の強調週間に於て、否事變の全面的な解決を見る日まで、更に帝國使命の遂行と相伴つて愈々學國一致の實績の要望せられるのも實に此の意味に外ならない。

由來本校は國士の府を以て任じ、諸子は次期の日本を背負ひ、國民の中樞として第一線に立ち、その潑刺たる活躍を期待せられてゐる人々である。宜しく大局に立ち、健全なる判斷力を持ち、現下時局の重大性を正しく認識して愈々國民的自覺を深める様に努めなければならぬ。苟くも騒然たる氣分に落着きを失ひ、流言に惑うて輕舉する様なことがあつてはならぬ。常に沈着今日努めるべき本分に從ひ、緊張のうちに次の時代に處すべき實力を養はなければならぬ。

茲に事變を巡つて澎湃と捲き起つた國民的意識の波の強さと深さと廣さとを記念する爲に若干の記事を採録して諸子の國民的教學の資に供する。

鐵は灼熱せる中に鍛へよといふ、翼は直下に心眼を睜いてこの激潮として躍動する「まこと」の諸相に參し、その體得に努めんことを。他なし此の民族的自覺は白雲のよそに求めるものではなく、傳來の血の中に脈々として湍り流れ、不斷の精進に對へ響に應じて、洞然開眼するものだからである。諸子、一段の省察と工夫とを期待する所以である。(了)

第一篇 皇室の御仁慈

【其一】

將兵に垂れ給ふ深き大御心畏し
仰ぎ奉る三陛下の御近狀

天皇陛下には時局を御軫念あらせられ、去月十二日葉山から還幸以來炎暑の候にもかゝはらせられず、宮城に在しまして、日夜御軍務御政務に御精勵あそばされ、事變の擴大とともに遂に今夏は御避暑をさへ御取やめあそばされた由に承はるが、皇后、皇太后兩陛下におかせられても、出征將士の上に深く御心を垂れさせ給ひ、御慰問御救恤などの御事も繁く、御仁慈には側近者一同感涙にむせんとする事で、松平宮相は十八日午後三陛下の御近狀につき、左の如き謹話を發表した。

宮内大臣謹話

天皇陛下におかせられては、今春以來相つゞ政變などのため大御心を勞させ給ふこと繁く、かつ特別議會の關係もありましたので、例年よりいくぶん早く葉山へ行幸を御願ひ致しましたのでありますが、御駐紮數日ならずしてこの度の事變勃發致しまするや、急遽還幸仰せ出され、爾來炎暑の中を御

厭ひもなく御精勵あらせられますことは、まことに畏き極みでございます。宮城においてはなんら冷房設備などもなく、連日御熱心に國務、軍務を御親裁あらせられますが、玉體はいよ／＼御健かにわたらせられ、事變後參謀總長官、軍令部總長官をはじめ奉り、國務大臣等の拜謁奏上の頻繁なるは申すまでもなく、また侍從武官を経て刻々事變現況を聽召され、なほ議會關係の諸法令等の御允裁を仰ぐもの多く、諸事極めて御多端に拜し奉ります。申すも恐れ多いことでございますが、事變の推移については日夜宸襟を惱まし給ひ、また酷暑の折柄異境にあつて奮闘する陸、海軍將兵、ことに戦死者、傷病者および軍人遺家族、ならびに在留民の身の上を思召されては、深き大御心を垂れさせ給ひ、しば／＼側近者に御下問あらせらるゝことは、たゞ／＼恐懼感激の至りに堪へぬ次第でございます。

なほ皇后陛下におかせられましても日夜女官を督し給ひ、御手づからも繻帯を御巻きあそばされ、義眼、義肢とともに御下賜あらせられ、また皇太后陛下におかせられましても、出征軍人の勞苦を思召されて、出動部隊に對し御慰問の品を賜はりました。今回の事變に際して、學國一致緊張のうちにも

沈着の態度を失はず、競つて國防、恤兵などの資金を獻じ愛國の至誠を捧げつゝあることはまことに欣ばしいことで、一面また將兵をして後顧の憂なからしむべく、軍人遺家族の扶助などについてもます／＼意を注がるゝところ厚からんとするは眞に心強き次第であります。希くはいよ／＼官民力を戮せ、わが國威の發揚をはかるとゝもに、東亞の時局を安定し、もつて宸襟を安んじ奉りたいと存じます。(大朝、八・一九)

【其二】

皇后陛下の御仁慈畏し

皇后陛下には北支事變に猛暑を冒して惡戰苦闘するわが將兵の身の上を深く御案じ遊ばされ、絶えず側近奉仕者に種々御下問を賜はると拜承するが、五日午後三時杉山陸相を宮中に召され、大奥において拜謁仰付けられ、優渥なる御言葉を賜はり、特に第一線に起つて花々しく勇戦し、名譽の負傷をした將兵に對し、繙帶ならびに義肢、義眼を下賜あらせらるゝ旨の有難き御沙汰あり、陸相は重ね／＼畏き思召を拜し、感激恐懼、厚く御禮を言上して退下した。なほこれらの御下賜品を捧持して、陸軍省官房付木下中佐は五日夜九時東京驛發の列車で西下、現地へ向つた。(大朝、八・六)

【其三】

皇后陛下繙帶を賜ふ
皇太后陛下よりも
有難き御慰問品を下賜

皇后陛下には北支の皇軍第一線で勇戦負傷した將兵に對し、五日畏くも繙帶、義眼、義肢などを御下賜あらせられたが、十八日さらにさきの滿洲事變關係ならびに北支事變關係の關東軍傷痍者に對しても繙帶下賜の御沙汰あり、陸軍省小泉醫務局長は同日午前十時皇后宮職に出頭、廣幡大夫を通じて賜品を拜受、重ね／＼の有難き思召しに感激して退下した。また皇太后陛下にも、同日今回の事變に出動せる在支陸海軍部隊に對し御慰問品下賜の御沙汰あり、陸軍省寺倉少將、海軍省近藤大佐は午後二時大宮御所へ伺候、御慰問品氷砂糖多量を拜受し、厚く御禮を言上して退下、それ／＼傳達の手續きをとつた。(大朝、八・一九)

御下賜品を捧持現地に出發

陸軍省副官吉田長秋歩兵大尉は別項の如き皇后陛下御下賜の繙帶を捧持して、十八日午後九時東京驛發現地に向つて出發した。

【其四】

皇后陛下畏し・海軍
將士に繙帶を下賜

皇后陛下には炎熱の支那各地で活躍する皇軍將士の上に深く御心を注がせられ日夜女官を督して御手づから繙帶を巻かせ給ひ、すでに二回にわたつて在北支の陸軍傷痍者ならびに關東軍關係の傷痍將兵に繙帶、義肢、義眼などを下賜あらせられたが二十日さらに上海並に江南各地で轉戦負傷した海軍將兵に對しても繙帶、義肢、義眼下賜の御沙汰あり、米内海相は同日午前九時四十分參内、皇后宮職に出頭して廣幡大夫より賜品を拜受、大奥において皇后陛下に拜謁仰付けられ畏き御慰問の御言葉を拜し厚く御禮を言上、重ね重ねの御仁慈に感激して退下した。

なほ高松宮妃殿下には事變以來宮殿下が軍令部へ御出仕遊ばされたのちしば／＼宮中へ御參内、畏くも皇后陛下の御手傳ひを遊ばされこのたびの海軍への繙帶下賜に當つては當日まで引續き四日間午前中宮中大奥において繙帶を御巻き遊ばされたとの趣で「海の宮様」の妃殿下としての深き御心遣ひには側近のものも感激申上げてゐる。(大朝、八・二一)

【其五】

皇后陛下重ねて
繙帶を下賜

皇后陛下には事變に活躍する將兵の勞苦に深く御心を寄せさせ給ひすでに數回にわたつて陸、海軍に繙帶など下賜の御沙汰あらせられたが、七日重ねて陸、海軍の傷痍將兵に御手巻の繙帶を下賜あそばされる旨御沙汰あり、陸軍省小泉、海軍省高杉兩醫務局長は同日朝十時皇后宮職に出頭、廣幡大夫から賜品を拜受、感激して退出した。(大朝、九・八)

【其六】

皇后陛下銃後の諸團體へ
畏し、御歌を賜ふ

畏くも皇后陛下には支那全戦線に奮闘する將士の上を思召され御親ら巻かせられた繙帶を下賜するなど深き御心を注がせ給ひ、また銃後の護りの家族の上に對しても絶えず御仁慈を垂れさせられ毎日報せられる幾多の銃後美談など必ず御眼を通させ給ひ遺家族の心情を思召された御歌さへも詠ませ給

うたとも承るが、この度これら出征遺家族御救恤の畏き思召から銚後諸團體に對し、別項の御歌とともに御内帑金十萬圓下賜の御沙汰あらせられたので廿一日午前十時卅分馬場内相は宮中に參内松平宮相より右下賜金を拜受つゞいて廣幡皇后大夫を通じて御歌を拜受退出した。ありがたき御歌を拜した馬場内相は午後一時半内相官邸で大村社會局長官にこれを傳達、同時に内務省訓令をもつて北海道長官ほか府縣知事に對し鑑旨の存するところを奉體し一層淳勵の誠を效しもつて銚後の後援に遺憾なきを期すべしとの訓令を發した。

皇后宮御歌

なくさめむことの葉もかなた、かひの

にはをしのひてすくすやからを

(大毎、九・二二)

【其七】

各皇族殿下

北支將兵を御慰問

畏くも高松宮、同妃兩殿下を初め奉り各皇族殿下には御渡歐中の秩父宮、同妃兩殿下とも御相談遊ばされ目下炎天下の北支に活躍するわが將兵一同に對し忝けなくも慰問品を賜は

る旨四日御沙汰あらせられたので、陸軍省の寺倉高級副官はこの日午從三時高輪の高松宮御殿に伺候しこの有難き御沙汰を拜受した、慰問品は種々御研究の上、繡詰、手拭、扇子の三種類と定められ御心づくしの品はいづれも支那駐屯軍司令部からそれ〴〵傳達される趣である。(大毎、八・五)

【其八】

七妃殿下の御仁愛

畏くも日本赤十字社に成らせらる

日本赤十字社篤志看護婦人會ではかねて事變の勇士に贈る繡帶、病衣、消毒品など製作の恤兵奉仕作業を行つてゐるが畏くも總裁伏見宮妃殿下におかせられては作業御獎勵の思召から十三日午前十時梨本宮、閑院若宮、伏見若宮李王、李鍵公、李鋼公の各妃殿下御六方とお揃ひにて同社に台臨、畏くも白衣の會員制服を召させられ親しく會員と御共に作業に御從事遊ばされ、會長徳川公夫人をはじめ一同いたく感激、正午御歸還遊ばされた、御慈愛こもる宮様方御手づからの製作品は近く戦線の將兵のもとへ届けられるはずで、なほ引つゞき台臨を賜はる御由である。(大朝、九・一)

【其九】

畏し北白川宮殿下御三方

出征兵士を御見送り

北支、中南支の各戦線において皇軍大勝の報がつゞき銚後の士氣いよ〴〵盛んなる折柄、佐藤、江橋、中根、大堀部隊などの將兵は秋氣澄みきつた朝、原隊を出發、怒濤のごとき萬歳と歡呼の聲に送られて勇躍任地に向つた。北白川宮家御用掛水戸部孚氏令息正君も佐藤部隊の一員として任地に向つたが、この旨御聞きあそばされた北白川宮永久王殿下には特別の思召をもつて佐藤部隊ならびに中根部隊に對し調を賜はる旨御沙汰あり、晴れの出征を前にこの豫期せぬ無上の光榮に感激した佐藤、中根兩部隊長以下は芝高輪の宮邸に伺候した。

永久王殿下には陸軍砲兵大尉の御正装を召され、黒のドレスの大妃房子内親王殿下、御和装の祥子妃殿下と御ともに宮邸前において約五分間親しく御慰勞と御激勵の御言葉を賜はり、兵全部に對し菓子一包づつを御下賜、さらに佐藤部隊長に對しては永久王殿下御自ら目の丸の旗一旒を御下賜「部隊の目印とせよ」との仰せあり三殿下御揃ひで玄關前まで御見送りあそばされた。(大朝、九・一九)

【其十】

伏見宮博義王殿下

御健やかに御活躍

海軍將兵とともに波荒き延長數千哩の洋上に御出動、支那沿岸遮斷の多難な軍務につかせられる伏見宮博義王殿下の御活躍は全軍將兵の恐懼感激にたへないところであるが、〇〇要港部司令部では二十一日朝殿下が〇〇に御入港遊ばされたのを機會に左のごとく發表した。

二十一日〇〇要港部發表 伏見軍令部總長宮殿下の若君にあらせられる博義王殿下には今次事變勃發以來、〇〇驅逐隊司令として事變地第一線の各地に御行動中のところ二十一日早朝驅逐艦〇〇に御乗艦、〇〇に御入港遊ばされた。御不自由多き驅逐艦内の御生活、しかも東奔西走多端なる軍務に寸暇もなき御日常にも拘はらせられず、極めて御健康にあらせられる御英姿を拜し奉ることは我々國民の感激おく能はざるところである。殿下には早曉〇〇山招魂社に御參拜、燃料など補給を終るや、直ちに御出港、勇躍〇〇方面の任務行動につかせられた。(大朝、九・二二)

伏見宮博義王殿下
黄浦江にて御奮戦
御手に御負傷遊ばさる

伏見宮博義王殿下には第三驅逐隊司令として麾下驅逐隊を指揮せられ、重要任務に御從事中のごとく昨二十五日午後黄浦江潮江中上海日本郵船株式會社浦東棧橋附近の倉庫内に據れる敵を發見攻撃中、午後三時四十分ごろ敵弾のため長くも御左手に御微傷を負はせ給ひ、また部下に若干の戦死傷者を生じたるも倍々御奮戦、竟に敵を制壓し當面の御任務を完うせられたり。殿下には御負傷後も極めて御元氣にわたらせられ引續き艦上において指揮をとられつゝあり。

浦東側の殘敵はいまなほ後を斷たず、諸外國建築物の蔭に隠れあるひは便衣を着して黄浦江上のわが警備艦船、共同租界の無辜の居留民やまたは上海出入航の各國艦艇に對し依然卑劣なる射撃を續けてをり、わが第三艦隊の艦船は海軍航空

× × ×

御縋帶姿にて凜々しく御指揮

伏見宮博義王殿下御乗艦の第〇艦隊驅逐隊〇〇は二十五日午後黄浦江を溯つて上海招商局碼頭に進んでゐた。この日浦東の敵は頻りに砲火を租界方面に浴せ、江上の我が艦隊一齊に敵陣目がけて砲撃を開始してゐた最中だつた。雄々しく〇〇が進んでゐるとき敵の迫撃砲一弾は飛んで〇〇艦上に炸裂した。殿下には御雄姿も凛々しく御指揮中にあらせられたが、憎むべき敵弾の小破片は畏れ多くも殿下の御左腕をかすめ御左手に御輕傷を負はせられたのであつた。殿下には部下一同が御手當申上げんとお傍近く集るのを御斥け遊ばされ、僅かに縋帶で御左腕を吊らせられそのまゝなほも御指揮を續けさせられ御機嫌いよゝ御麗しくわたらせられた。その御勇ましき海の宮様の御姿には全艦の將兵ひとしく感泣、一層奮ひたつたのであつた。〇〇は直に暴虐なる浦東の敵に對し一齊に砲撃を開始、間もなく敵を完全に制壓してしまつた。畏れ多くも殿下には上海御入港後〇〇の野戦病院にお出で遊ばされ御手當を受けさせられたが、御經過は頗る御良好の山漏れ承る。なほ〇〇艦橋に炸裂した敵弾のため殿下の御附武官早川幹夫中佐が輕傷を負うたほか同艦の將兵若干名死傷した。本社川谷映畫班員が殿下の御姿を拜したのは御負傷の御直後のことであつた。

隊と協力して日夜監視の眼を離さずこの執拗なる敵に對し膂懲の手を加へてゐたが、二十五日も終日この支那軍は招商局華棧附近よりわが艦船に對して射撃を行ひ、わが艦隊は直ちに應戰してこの敵を粉砕し沈黙せしめた。當時恰も江上警備中のわが伏見宮博義王殿下が司令として親しく指揮し給ふ第〇驅逐隊も他艦と協力して猛烈なる艦砲の一齊射撃を行つて美事なる戦果をあげたが、殿下には金枝玉葉の御身をもつて終始最も危険なる艦橋に立たれ、敵弾雨飛の中を親しく全隊を指揮遊ばされ、同部隊の奮闘は一段と目覺しく、忽ち敵の密集部隊を蹴散してこの日第一の戦勳と拜察しまゐらせた。この日の敵の射撃はいまゝでの戦闘中最も猛烈を極め一弾は殿下の御身近に飛來炸裂し御負傷遊ばされたが、御微動だに遊ばされず終始見事なる指揮を續けさせられた。この激戦の後殿下には御寸暇もあらせられず直に〇〇方面に御出動遊ばされた。軍令部總長として夙夜海軍作戰を御總攬遊ばされる伏見大宮殿下には過ぐる日露の役には戦艦三笠の砲臺長として彈丸雨飛の中に御奮戦遊ばされ、今次事變に際しては博義王殿下はじめ華頂侯、伏見伯御一族あげての第一線部隊に御參戰にて國民一同とともに誠に恐懼感激の至りに堪へないところである。

× × ×

御戦傷遊ばされた伏見宮博義王殿下
御弟君お二方も御奮戦

第三驅逐隊司令として風狂ふ黄浦江上、御乗艦〇〇にて御勇戦中長くも敵弾のため御負傷あそばされた伏見宮博義王殿下は伏見軍令部總長宮殿下の第一王子にましまし、明治三十年十二月八日御生誕。大正六年十一月二十四日少尉候補生、同七年八月海軍少尉に御任官あそばされ、昭和三年十二月海軍少佐、同八年十一月同中佐に御進級あそばされたが、この間昭和八年十月には驅逐艦天霧の艦長より海軍大學校選科に御入學、同九年十一月御卒業とともに那珂副長に、ついで嚴島艦長に御就任、のち間もなく現職に御轉じあそばされた。水雷戰術並に驅逐艦の運用に關しては部内並ぶ者なき權威におはし、つねに海上の第一線に立たせられて具さに將兵と辛苦を御共にあそばされ、わが海の精銳の景仰を御一身に集めさせ給ふところである。

なほ殿下の御弟君に當らせられる海軍大尉華頂博信侯は〇〇戰隊所屬軍艦〇〇の水雷長として、また同じく海軍少尉伏見博英伯も〇〇艦隊所屬軍艦〇〇の航海士として事變當初より御活躍、文字通り御一家を擧げさせられて皇國のため御奮闘あそばされてゐる。(大朝、九・二七)

第二篇 國民精神總動員

第七十二帝國議會劈頭

近衛首相の施政演説

皇國烈々の決意を宣明

昨日開院式に當りまして時局に關し特に優渥なる勅語を拜しましたことは眞に恐懼感激の至りに堪へませぬ。私は諸君とともに謹んで聖旨を奉戴して一意報效の誠を竭し宸襟を安んじ奉りたいと存するのであります。

去る七月七日、北支に事變が勃發致しまして以來、帝國政府が支那に對してとり來りましたる根本方針はあくまでも支那政府の反省を求めて、その誤れる排日政策を放棄せしめ、もつて日支兩國の國交を根本的に調整せんとするにあるのであります。この方針は今日といへども何ら變るところはないのであります。たゞこの方針を遂行する手段と致しまして從來政府は出来るだけ事件の擴大することを防ぎ、局面を限定して事態を收拾すべく努めたのであります。このことは今日までしばしば聲明いたした通りでありまして、諸君も御諒承のことと思ふのであります。しかるに支那側は公正なる帝

帝國が斷乎一撃を加ふるの決意をなしたることは、獨り帝國自衛のためのみならず正義、人道の上より見ましても極めて當然のことなりと堅く信じて疑はぬものであります。

けだし、東亞の平和なくして東亞國民の幸福なしと信ずるからであります。もとより帝國の打撃を加へんとする目標はかゝる謬れる排外政策を實行しつゝあるところの支那政府および軍隊でありまして、帝國は斷じて支那國民を敵とするものでないであります。また支那政府に致しましても眞によく反省を致し、今後我國と提携して相ともに東洋文化の發達と東洋平和の確立に向つて力を致さんとする誠意を示すに至りましたならば、帝國としては、それでもなほこれを追及せんとするものではないのであります。しかしながら今日この際帝國としてとるべき手段は、出来るだけ速かに支那軍に對し徹底的打撃を加へ、彼をして戦意を喪失せしむる以外にないのであります。かくしてなほ支那が容易に反省を致さず、あくまで執拗なる抵抗を續くる場合には、帝國として長期にわたる戦ももちろん辭するものではないのであります。

惟ふに、東洋平和確立の大使命を達成するためには、なほ前途に幾多の難關が横はつてゐるのであつて、この難關を突破するがためには、上下一致堅忍持久の精神をもつて邁進するの覺悟を要すると思ふのであります。今やわが忠勇なる將兵は全支にわたり萬難を排して堂々正義の陣を進め、皇軍の

10

國政府の眞意を諒解せざるのみならず、帝國政府の隱忍に乗じてます。侮日抗日の氣勢をあげ、統制なき國民感情の激するところ事態は急速なる悪化を來たし、局面は北支のみならず中支、南支にまでも波及するに至つたのであります。隱忍に隱忍を重ねて参りました我が政府も、こゝに從來の如く消極的かつ局地的にこれを收拾することの不可能なるを認むるに至りまして、遂に斷乎として積極的かつ全面的に支那軍に對して一大打撃を與ふるのやむなきに立ち至りました次第であります。そも一國が特定の他の一國を排斥侮蔑することをもつてその國策となし、國民教育の方針として、かゝる思想を幼少なる兒童の頭腦にまで注入するがごときことは、古今東西の歴史において未だ曾つて類例を見ざるころでありまして、これが將來における結果を考ふる時には獨り日支兩國の國交のためのみならず、東洋の平和、ひいては全世界の平和のために眞に寒心に堪へないものがあるのであります。帝國政府としては從來しばしば支那政府に對しその態度を改めんことを要求したにかゝらず、毫も省みるところなく遂に今次の事變を惹起せしむるにいたつたのであります。かくのごとき國家に對してその反省を求むるために、

威力を中外に宣揚しつゝあることは國民のひとしく感謝、感激に堪へぬところでありまして、またこれと同時に全國津々浦々にいたるまで銃後の熱誠が沸き立ちまして、麗しき學國一體の實を示しつゝあることも洵に力強く感ずる次第であります。願はくは一時の戦捷に酔ふが如きことなく、この緊張を持續して時艱を克服し、終局の目的を達成しなければならぬと思ふのであります。政府はこゝに時局の急務に應ずるために必要な豫算案及法律案を帝國議會に提出いたしてをります。これらの法律において政府はこの非常事態に對應するやう財政經濟の體制を整ふることゝいたしたのであります。もとよりこれがため財界に無用の衝激を與へることは、出来るだけこれを避くるやう十分の注意を拂ふ心算であります。なほ事變の經過、外交の事情、財政の計畫などにつきまして、は、それ／＼主務大臣より申述べます。政府はこの重大なる時局に當り諸君とともにこの國家の大事を翼賛し奉ることをもつて洵に光榮とすると同時に、責任のいよいよ重大なるを痛感するのであります。諸君におかれましてもよろしく政府の意のあるところを諒とせられ、慎重御審議の上協賛を與へられんことを切望する次第であります。(大朝、九・六)

X

X

X

内閣告諭

第七十二回帝國議會開院式に當り優渥なる勅語を賜ひ帝國の嚮ふ所を明にし、國民の進むべき道を示させ給へり 聖慮宏遠にして眞に恐懼感激に堪へざるなり

惟ふに帝國は東亞の安定を望み、常に日支兩國の相提携して以て世界平和の基を樹てんと欲す是れ比隣其の幸を一にし、列國其の福を同じくするの道にして帝國一貫の國是なり、然るに支那は常に隣交の誼を忘れ信義を失し、永年排日抗日を以て國策とし、帝國の權益を侵して暴狀を極め、遂に今次の事變を生ずるに至れり

今や出征の將兵、外に膺懲の歩を進め、銑後の國民、内に奉公の至誠を致す、然りと雖今次の事變は其の由つて來る所遠く、事態の推移亦遽に豫斷を許さざるものあり、此の秋に當り國民齊しく時局の重大性に鑑み、益々堅忍不拔の志操を堅持して今後に來るべき如何なる艱難にも堪へ、所期の目的を貫徹する爲敢然邁進するの決意あるを要す

凡そ難局を打開し國運の隆昌を圖るの道は、我が尊嚴なる國體に基き盡忠報國の精神を益々振起して、之を國民日常の業務生活の間に實踐するに在り、今般國民精神の總動員を實施する所亦亦此に存す

古來我が國民は艱難に遭遇するや、必ず之を克服し、以て國家興隆の成果を收めざるなし、時局に際し國民深く如上の趣旨を體し、忠誠公に奉じ和協心を一にし、日本精神を昂揚して舉國一致の實を擧ぐると共に、之を實踐に現して愈々國力の伸張を圖り、以て 皇運を扶翼し奉る所あるは本大臣の深く全國民に期待する所なり

昭和十二年九月九日

内閣總理大臣 公爵 近衛 文麿

國民精神總動員に際し

日比谷公會堂に於ける

近衛首相の演説

發展日本のため新紀元を劃せん

九月十一日東京日比谷公會堂における政府主催國民精神總動員大演説會における近衛首相の演説左の如し。

國民精神總動員運動の開始に當り私の所信を披瀝して諸君と共にこの歴史的なる國民運動の前衛たらんことを期するのである。吾々の不擴大方針が支那政府の無誠意によりて顧みられず、北支事變がつひに支那事變となり、支那の排日侮日に對して全面的かつ率直なる膺懲を必要とするにいたつたことは諸君すでに御承知の通りである。

ことごとくにいたつては、たゞに日本の安全の見地からのみに止まらず、廣くは正義人道のため、とくに東洋百年の大計のために、これに一大鐵槌を加へて、直に抗日勢力のよつてもつて立つ根源を破壊し、徹底的實物教訓によつてその戰意を喪失せしめ、しかるのちにおいて支那の健全分子に活路を與へ、これと手を握つて俯仰天地に恥ぢざる東洋平和の恒久的組織を確立するの必要に迫られてきたので

ある。このことたるわれ／＼が今日これを解決せざれば、われ／＼の子孫がさらに大なる困難のもとに、いづれの日にか解決を必要とするものである。果してしからば、この日本國民の歴史的の大事業をわれらの時代において解決するといふことは、むしろ今日生を享けたるわれら同時代國民の光榮でありわれ／＼は喜んでこの任務を遂行すべきであると思ふ。

顧るにかくの如き歴史的の大事業が、何らの困難なしに出來ると思ふならばこれは思ふ方が無理であらう、今後或はいろ／＼の方面から困難が起つて來ることも覺悟せねばならぬ。われ／＼に肝要なことは、いかなる困難が起つて來ても必ずこれに打勝ち、いかに長期にわたるとも有終の美を成し遂げずんば、斷じて已まぬといふ不退轉の決意である。申すまでもなくこれは決して一政府、一軍隊の力によつて出來ることではない、全國民の全勢力を綜合蓄積して國家の最高目的の前にこれを動員しこれを傾倒してはじめて可能であると信ずる。實に銃劍をとるものも鋤・鋏・算盤をとるものも、同じく國家的戰鬪の一單位にして、單にその持場が異つてゐるに過ぎない。かくの如き自覺をもつて全國民が國家總動員のうちに織込まれて來るならば、われ／＼に課せられたる時代的使命を遂行し、發展的日本のために一新紀元をつくることは決して困難でないと思ふ

る。

私は少くとも二つの方面からかく信じて疑はぬ理由をもつてゐる。その一つはわが日本の歴史は極めて古いが、國家の生活力は青年のやうに旺盛であるといふことである。このことは今日の日本を公平に觀察するもの、内外一致せる認識である。顧るにわれ／＼の祖先は過去において幾多の大困難に遭遇し、よくこれを克服して今日の如き國家的遺産をわれ／＼の手に遺したのである。日本の發展せんとするところ、そこに必ずや大なり小なりの摩擦は免れぬ、今次の事變の如きも、また日本が偉大ならんとするために必然的に遭遇したる國際的摩擦の一過程である。第二にはひとり日本の主觀的立場からばかりでなく、世界歴史の全體から見て、日本は今世界における進歩的國家としての重要な役割を働いてゐるといふ確信である。日本の行動の本質は世界歴史の本流において眞の國際正義を主張せんとするものである。かくの如き確信の下に、全國民が己を空しうして國家の最高目的の前に、打つて一丸となれば前途何の恐るべきものもない。國家の一大事の前に、國內あらゆる階層が協力一致して義勇奉公の誠を盡すといふことは、わが日本本來の姿である。かくの如き協力のよつて來るところ、つひにわが日本國體の尊嚴無比なる歴史的、先天的組織に淵源することを思ふ時、私は日本臣民たるの恩

一四

寵を今更の如く痛切に自覺せざるを得ないのである。

國家は一つの文化的使命を有するところの協同目的體であり、國民は共通の利益を追及する唯物的存在にあらずして、民族國家の組織を通じて人類に寄與せんとするところの精神的存在である。かくの如きは西歐の唯物的文化に慥らざる人などの間に、澎湃として最近湧き起つてゐるところの新しい要求である。しかるにこの要求は萬世一系の皇室を中心とするわが日本の國家組織においては、先天的に具現せられてゐるのである。われ／＼が國家に對する自覺の深まるるところ、そこに國家總動員は強制を俟たずして自ら成るのである。御承知の如く、天皇陛下におかせられては北支事變の發生するや直に葉山より還幸遊ばされ、日夜軍國のことに御精勵遊ばされ給ふ。私は拜謁を賜はる度毎に御精勵の御模様を拜し恐惶感激に堪へざる次第である。本月四日開院式の勅語において

「朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達成セムコトヲ望ム」

と仰せられたことは既に御承知の通りである。この大御心に副ひ奉るべく、我が同胞軍隊は戰場にありて赫々たる忠勇をいたし、この大御心に副ひ奉るべく銃後の經營に全力をつくすことは我々一般國民の義務である。

(大朝、九・一二)

國民精神總動員實施要項

社會風潮を一新日本精神發揚へ

政府は十三日午前支那事變に處する國民精神總動員計畫の實施要項を發表した、その内容左の如し。

實施方法

- (一) 内閣、各省はそれ／＼その所管の事務施設に關聯して實行
- (二) 廣く内閣及び各省關係團體に對し適當の協力を求む
- (三) 道府縣においては地方實行委員會と協力して具體的實施計畫を樹立實行
- (四) 市町村は綜合的にかつ部落または町内ごとに實行に付とめ各家庭にまで滲透するやうつとむ
- (五) 諸會社、銀行、工場、商店などに協力を求む
- (六) 各種言論機關に對して協力を求む
- (七) ラヂオの利用
- (八) 文藝、音楽、演藝、映畫など關係者の協力を求む

實踐事項

△日本精神の發揚、社會風潮の一新

(一) 堅忍持久の精神涵養

(二) 困苦缺乏に堪へる心身の鍛鍊

(三) 小我を捨て、大我につくの精神の體現

(四) 各人の職分恪循

△銃後後援の強化持續

(一) 出動將兵への感謝及び銃後後援の普及徹底

(二) 隣保扶助の發揚

(三) 勤勞奉仕

△非常時經濟政策への協力

(一) 勤勞報國

(二) 勞資協力

(三) 利益壟斷の抑制、暴利抑制

(四) 國債應募獎勵

(五) 冗費節約、貯蓄獎勵

(六) 國際收支の改善

(七) 金の使用節約

△資源愛護

なほ本運動の實施に關し地方長官を會長とし地方における重要な官公衙の職員、市町村長、貴衆兩院議員、道府縣會議員、各種團體代表者、通信報道機關代表者、教育家、宗教家、社會事業家、實業家その他民間の有力者を網羅して地方實行委員會を組織す。(大朝、九・一四)

兵庫縣告諭

支那事變ハ日ニ逐ウテ愈重大ヲ加ヘ前途眞ニ容易ナラザルモノアルノ秋ニ當リ第七十二回帝國議會開院式ニ於テ畏クモ優渥ナル勅語ヲ賜ヒ帝國ノ嚮フ所ヲ明ニシ國民ノ當ニ進ムベキ道ヲ示サセ給ヘリ 聖慮宏遠誠ニ恐懼感激ノ至リニ堪ヘズ政府亦踵デ 聖旨ヲ普ク國民ニ徹底セシムル爲告諭ヲ發シ國民總動員運動ヲ起シ官民一致時艱ヲ克服シ以テ宸襟ヲ安ンジ奉ラムコトヲ期セリ

惟フニ帝國ハ東亞ノ安定ヲ以テ一貫ノ國是ト爲シ日支提携シテ共存共榮其ノ福祉ヲ享ケントス然ルニ中華民國ハ隣交ノ誼ヲ忘レ永年抗日排日ヲ以テ國策ト爲シ赤化勢力ト苟合シテ東亞ノ攪亂ヲ謀リ自己兵力ヲ過信シテ不法暴戻ノ限リヲ盡シ遂ニ今次ノ事變ヲ惹起スルニ至リ今ヤ忠勇ナル皇軍ノ將士ハ外陸海空相應ジテ膺懲ノ歩武ヲ進メ銃後ノ國民内其ノ護ヲ固クシツツアリト雖モ事變ノ因由スル所遠ク且ツ深キモノアルニ鑑ミレバ前途ノ推移容易ニ豫測ヲ許サザルモノアリ是ヲ以テ國民ハ深ク時局ノ重大性ヲ認識シ堅忍持久今後如何ナル難局ニ遭遇スルコトアルモ克ク之ヲ打開シテ所期ノ目的ヲ達成シ以テ皇謨ヲ翼贊シ奉ルノ一大覺悟ナカル可カラズ凡ソ時艱ヲ克服シ國運ノ興隆ヲ圖ルノ道ハ我方尊嚴ナル國體ニ基キ益日本精神ヲ振起シ舉國一致盡忠報國ノ實ヲ國民日常ノ業務生活ノ間ニ具現スルニアリ因ツテ今回行ハルル國民精神ノ總動員運動ニ於テハ

社會風潮ノ一新 銃後後援ノ強化持續

日本精神ノ發揚 非常時經濟國策ヘノ協力 資源ノ愛護

ヲ以テ其ノ實施目標ト爲シ縣内各方面ノ力ヲ協セテ之ガ實踐躬行ヲ圖ラントス若シ夫レ市町村、部落、學校、諸團體、銀行、會社、商店、工場等ニ在リテハ此ノ五大目標ニ基キ夫々適切ナル實行事項ヲ定メ之ヲ各自日常ノ業務生活ノ間ニ滲透セシメ相倚リ相勵シテ其ノ實踐ヲ學グルニ最善ノ方途ヲ講ゼラレンコトヲ望ム

翼クハ縣民各位能ク本運動ノ趣旨ヲ諒會シ之ガ實踐ノ成果ヲ收ムルニ於テ萬遺憾ナキヲ期セララルベシ

昭和十二年十月一日 兵庫縣知事 岡田周造

國民精神總動員實施要項（本縣）

- 一、趣 旨
 - 舉國一致堅忍不拔ノ精神ヲ以テ現下ノ時局ニ對處スルト共ニ今後持續スベキ時艱ヲ克服シテ愈々皇運ヲ扶翼シ奉ル爲官民一體トナリテ一大國民運動ヲ起サントス
- 二、運動ノ目的
 - 「舉國一致」「盡忠報國」ノ精神ヲ鞏ウシ事態ガ如何ニ展開シ如何ニ長期ニ亘ルモ「堅忍持久」總ユル困難ヲ打開シテ所期ノ目的ヲ貫徹スベキ國民ノ決意ヲ固メ之ガ爲必要ナル國民ノ實踐ノ徹底ヲ期スルモノトス
- 三、實施事項

運動綱領	實踐要目	具體的實行事項
日本精神ノ發揚		神社參拜祈願（一日、十五日等學校、團體、部落等） 家庭ニテ朝夕神佛禮拜又ハ遙拜 神饌田ノ設置（市町村、部落、學校等） 祝祭日ノ本義ノ徹底（家庭ニ於ケル祭事ノ執行） 御聖德御坤德ノ謹話 御製御歌ノ謹詠 第七十二回帝國議會開院式ニ賜リタル 勅語奉讀 九月九日內閣告諭ノ朗讀 日本精神ノ昂揚ニ資スヘキ國民歌詩ノ高唱 非常時美談（出動將兵、遺家族、銃後活動等）ノ講話

社會風潮ノ一新
①堅忍持久ノ精神涵養

1、不動精神ノ鍛鍊

武道、相撲、強行軍、家庭體操、團體々操、(ラヂオ體操、皇國體操、建國體操等)
力持、綱引、登山、ハイキング、水泳等
冷水摩擦、冷水浴等
靜座、坐禪

一八

2、必勝ノ信念ノ堅持
3、對敵心構ヘノ訓練

戰勝祝賀記念行事(演習、演技)

國家ノ機密ヲ守ルコト
流言蜚語ニ迷ハヌコト
事變ニ關スル言動ヲ特ニ慎ムコト
防空訓練

②困苦缺乏ニ堪フル心身
鍛鍊

1、勤儉力行
2、生活ノ刷新

銃劍術、護身術、戰鬪術(徒手格闘、投擲等)
平常以上ノ勤勞(早起、夜業等)
時ノ尊重、時間ノ勵行
家庭ノ整理整頓
豫算生活ノ勵行
掛買ノ廢止
榮養食普及
服裝ノ改善(華美ナル服裝ノ廢止、團服、會服、作業服等ノ着用)
冠婚葬祭ノ改善
虛禮ノ廢止

③小我ヲ捨テテ大我ニ就クノ精神ノ體現

3、享樂ノ節制

宴會ノ改善
不健全ナル室內遊戲ノ廢止
無駄ノ排除
未成年者飲酒喫煙ノ絶滅
青年ノ頭髮丸刈獎勵
虛飾廢止(指輪、ネクタイピン等)
相剋ノ排除、鬨争ノ處理解決
我儘勝手ノ排除
決議申合セ事項等ノ嚴守
公租公課ノ完納

④各人ノ職分恪循

1、派遣軍人家族慰問家
業補助

各自業務ニ淬礪
公務公職ニ精勵
他ノ業務ノ尊重
業務間ノ協調

①出動將兵ヘ感謝及銃後
後援ノ普及徹底

出動將兵遺家族ノ慰問(家庭訪問、慰安會、慰問品等)
出動將兵遺家族ノ家業援助(勞力奉仕、生業資金融通、各種斡旋等)
出動將兵遺家族ノ負擔ノ輕減(公課、夫役各種料金等)
出動將兵遺家族ノ就職斡旋及授産
出動將兵慰問狀、慰問袋、其ノ他慰問品ノ發送

一九

- ②隣保相扶ノ發揚
- ③勤勞奉仕
- 非常時經濟政策ヘノ協力
- ①勤勞報國
- ②勞資協力
- ③利益壟斷ノ抑制ト暴利抑制

- 2、殉國者慰靈、家族慰問、家族補助
- 3、銃後援獻金獻品
- 1、奉仕事業ノ促進
- 2、共同勞作ニ依ル生産力ノ維持

傷痍軍人ノ就職斡旋及授産
 戰歿者慰靈祭
 戰歿者ノ墓參
 戰歿者ノ寫真肖像等ノ掲出(神社拜殿、講堂、公會堂等)
 戰歿者ノ戰功録編纂
 傷痍軍人及戰歿者遺族ノ特待優遇
 國防獻金
 皇軍慰問獻金
 縣、市町村軍人後援團體ヘノ贈金
 隣保組織(五人組等)ノ實施
 共同施設ノ普及
 共同作業(播付、田植、除草、耕作、收穫、開墾、開拓町内清掃等)
 部落常會ノ普及活動
 鄉倉ノ設置
 餘裕アル者ノ社會奉仕(物質、勤勞)
 勤勞主義ノ強調
 產業報國精神ノ強調
 從業員ノ福利施設防災施設ノ充實
 勞資懇談會ノ普及活動

- ④國債應募ノ勸奨
 - ⑤冗費節約貯蓄奨勵
 - ⑥國際收支ノ改善
 - ⑦金ノ使用節約
- 資源ノ愛護

- 1、國産品ノ使用
- 2、輸入品ノ使用抑制
- 3、國産代用品ノ使用擴充
- 1、消費ノ抑制

勞資間ノ紛議防止
 暴利取締令ノ趣旨ノ徹底
 標準價格ノ周知
 買占、賣惜ミ行爲ノ自省自肅
 勤勞及節約ニヨル國債應募
 個人應募及共同應募(一戸一枚一團一枚以上)
 團體ノ基本金ノ國債化
 冠婚葬祭、社交儀禮ノ冗費節約貯蓄
 貯金ノ實行(一日一錢貯金、握米貯金等)
 國産品ノ愛用
 國産品ニ國産マーク押捺
 販賣業者ニ對シ國産品販賣ノ勸奨
 舶來品ノ使用抑制(洋酒、煙草、紅茶、コーヒー、化粧品、時計、裝身具、家具、日用品、ラヂオセット、寫真機、其ノ他)
 國産代用品ノ使用ノ擴充
 鐵、羊毛、棉花等ノ輸入品ヲ原料トスル製品及ガソリン等ノ節約
 金製品ノ使用抑制(時計類、盃、裝身具、裝飾品類、其ノ他)

	<p>2、代用品ノ使用</p> <p>3、廢品ノ蒐集提供</p> <p>4、發明創造</p> <p>5、資源ノ蓄積</p> <p>6、國防資源ノ獻納</p>	<p>軍需資材ノ使用抑制（鐵、アルミニウム、ニッケル、錫、其ノ他ノ金屬類、棉花、ガソリン、ゴム、其ノ他）</p> <p>電力、瓦斯、石炭、其ノ他燃料ノ節約</p> <p>廢品蒐集利用（鐵、アルミニウム其ノ他ノ金屬、毛絲、毛織、紙類、ガラス、木棉、ゴム等）</p> <p>發明發見ノ獎勵助成</p> <p>開墾、造林及空地沼澤地ノ利用</p> <p>水源涵養、鑿井</p> <p>馬糧保藏及獻納（乾草、麥類、種類、藁其ノ他）</p> <p>養畜獎勵（牛、馬、豚、兔、鶏類）</p> <p>水産養殖及養魚</p>
--	--	--

注意

具體的實行事項欄ニ例示セル實行事例ハ市町村部落、學校、各種團體及銀行、會社、商店、工場等ノ職場ニ於ケル實行事項決定上ノ參考トシテ例示シタルモノニシテ之ガ決定ニ付テハ本事例ヲ參考トシテ從來ノ申合セ事項其ノ他適切ナル事項ヲ夫夫ノ事情ニ即シテ選定シ一致協力其ノ普及徹底ヲ期スルコト

四、實施方針

實行事項ヲ自發的能動的ニ實踐スルコト

五、實施方法

盡忠報國ノ至誠ヲ日常ノ業務及生活ニ具現スルコト

- 1、縣ハ官民合同ノ「國民精神總動員兵庫縣實行委員會」ヲ組織スルト共ニ之ト協力シテ政府及中央委員會ト連絡ヲ圖リ以テ本運動ヲ實施ス
- 2、市町村ニ於テハ市町村長中心トナリ各種團體等ヲ總動員シ綜合的ニ本運動ノ實施計畫ヲ樹立シ更ニ部落又ハ町内毎ニ實行事項ヲ定メテ之ガ實踐ニ努メ各家庭ニ至ル迄之ヲ滲透セシムルコト
- 3、學校ニ於テハ學校毎ニ適切ナル實施計畫ヲ樹立シ縣及市町村ト連絡シテ之ガ實踐ヲ圖ルコト
- 4、各種團體ハ其ノ使命ニ應ジ團體等ニ適切ナル計畫ヲ樹立シ縣及市町村其ノ他ト密接ナル連絡ヲ保チ所屬團員ヲ督勵シテ其ノ實ヲ舉グルコト
- 5、諸會社、銀行、商店、工場、鑛山等ノ職場ニ於テハ其ノ責任者ニ於テ實施計畫ヲ樹立シ市町村其ノ他ト連絡シテ之ヲ實施スルコト
- 6、各種言論機關ニ對シテハ本運動ノ趣旨ニツキ懇談シテ其ノ積極的協力ヲ求ムルコト
- 7、文藝、音樂、演藝、映畫等關係者ノ協力ヲ求ムルコト
- 8、ラヂオ利用ヲ圖ルコト

六、實施ノ順序

第一期（自十月一日至十月十二日）

事變ノ意義ト國民ノ覺悟ヲ強調（國民精神總動員ノ趣旨徹底）

縣ニ於テ行フモノ

- 1、知事 告 諭
- 2、國民精神總動員兵庫縣實行委員會設置

- 市町村其ノ他ニ於テ行フモノ
- 1、市町村ニ於ケル實施計畫ノ樹立
 - 2、講演及協議會ノ開催

- 3、部落ニ於ケル實行事項ノ決定
(部落常會ノ設置)
- 4、部落別時局講演會
- 5、各學校ニ於テ適切ナル實行計畫ノ樹立
- 6、各種團體ノ協議會、講演會等ノ開催實行計畫ノ樹立
- 7、會社、工場、銀行、商店等ノ職場ヲ單位トスル講演會並ニ實施計畫ノ樹立
- 8、出征軍人「母(妻)の會」ノ開催

- 3、實行委員會ノ開催
- 4、言論機關トノ懇談會
- 5、神職宗教家等ノ協議會
- 6、興業主懇談會
- 7、學校長會ノ開催
(學校ニ於ケル實施計畫ノ樹立)
- 8、縣單位各種團體ノ協議會
- 9、大講演及び協議會
- イ、會場 五市
- ロ、出席者
〔協議會〕
市長、區長
學校長
社會教育委員
各種團體幹部
- 〔講演會〕
協議會ニ出席セル者
一般市民
- ハ、講師
政府及中央委員會ヨリ派遣
- 10、各郡講演會協議會並ニ映畫會

- イ、會場 各郡一箇所
 - ロ、出席者
〔協議會〕
町村長、學校長
社會教育委員
各種團體長並ニ幹部
 - 〔講演會〕
協議會ニ出席セル者
一般町村民
 - ハ、講師陸海軍其ノ他
 - 11、ポスター作製及配布
 - 12、時局ニ關スルパンフレット配布
 - 13、時局ニ關スル歌謡配布
 - 14、映畫班ノ派遣
- 第二期(自十月十三日
至十月十九日)
- 事變ト生活ヲ強調
縣ニ於テ行フモノ
- 1、縣下共通實行事項ヲ定メテ實行ノ強調
 - 2、リーフレットノ配布
 - 3、映畫班ノ派遣

- 市町村其ノ他ニ於テ行フモノ
- 1、縣ノ共通實行事項ノ勵行
 - 2、市町村ノ實情ニ即シテ適當ナル事項ヲ定メテ實行
 - 3、工場、會社、商店、鑛山等ノ職場ニ於テ夫夫適當ナ

第三期(十月二十日以後)

事變ト實踐

縣ニ於テ行フモノ

- 1、出征軍人家族慰問及戰病死者募參
- 2、縣主催、慰靈祭
- 3、本縣出征將兵ニ慰問狀、慰問品發送
- 4、銃後活動美談集印刷配布
- 5、縣下出征勇士殊勳集ノ刊行
- 6、映畫班ノ派遣

- ル事項ヲ定メテ實行
- 4、學校各種團體ニ於テ夫適當ナル事項ヲ定メテ實行
 - 5、神社、寺院、教會等ニ於テ夫適當ナル事項ヲ定メテ實行

市町村其ノ他ニ於テ行フモノ

- 1、市町村、部落、各學校、銀行、會社、工場等ノ職場毎ニ既定實行事項ノ實行ノ徹底ヲ期スルコト

(十月六日 兵庫縣報 號外)

海犬養岡麻呂

御民吾生けるしるしあり天地の榮ゆるときに逢へらく思へば (萬葉集卷六)

藤原仲麻呂

いざ子等狂行なせそ天地のかためし國ぞ大和島根は (萬葉集卷十九)

社會風潮一新生活改善十則

(其の一)

- 1、時艱の克服、一致團結
- 2、不動の精神困苦に堪へよ
- 3、協力一致銃後の固め
- 4、働け身の爲め國の爲め
- 5、備へよ常に、あらゆる力
- 6、陋習の打破、形よりは精神
- 7、工夫して物を活かせ
- 8、舶來品より國產品
- 9、無駄を省いて國力を培へ
- 10、戦に勝つても者に負けるな

(其の二)

一、時艱の克服、一致團結
 比の度の事變は其の由つて來る所が遠いので、之れがどんなに移り變るか容易に見透しはつきません、國民たるものは堅忍不拔の精神を以て、今後に來るべき如何なる艱難に對しても和衷協同、力強い團結に依り之を克服して、所期の目的を貫徹せねばなりません。

二、不動の精神困苦に堪へよ

我が國民性は熱し易く醒め易いと言はれますが、決してそうではありません。遠くは元寇の役といひ、近くは日清日露の戦役といひ、滿洲事變といひ、如何なる艱難をも克服し來つた事は國史の示す所でありませぬ。此の度の事變に當つても一時的興奮にからるゝことなく、帝國の大使命たる東亞の平和實現の爲め、不動の精神を以て克く困苦に堪へ、各自の持場を守りませう。

三、協力一致銃後の固め

支那各地に出勤せる忠勇なる皇軍將兵諸士は、粉骨碎身あらゆる辛苦をもとせせず、死を決して陸に、海に、空に、皇軍の威力を發揮して居ることに對しましては、全國民の深く感謝して居ることでありませぬから、これ等出勤將兵諸士への慰問を忘れてはなりません。これ等出勤將兵諸士は家に在つては一番の働き者であつたから、出勤した後に残つた家族が困るやうなことがあつてはなりません。最寄の者は互に助け合つて後顧の憂なからしめるやうに致したいものであります。斯く助け合ふ共同勞作は、生産力の維持といふ意味深いことにもなるのであります。

四、働け身の爲め國の爲め

忠勇なる皇軍將兵諸士は、水火を物ともせず盡忠報國の誠を捧げて居りますが、我等内に在る國民たるものは、

明治天皇の御製

國をおもふみちにふたつはなかりけり

軍の場にたつもたたぬも

の大御心を奉戴し、各自の職分を通じて、働き働き、根限り働いて奉公の誠を致したいものであります。

五、備へよ常に、あらゆる力

近代の戦争は武力だけの戦でなく國のあらゆる力の戦であります、従つて總ての國民が戦地に在るの心構を以て常に備へて居らねばなりません。それにはまづ各人の健康が第一であります。又家庭に於ける防空訓練の如きも、他人まかせではいざ鎌倉といふ時に役に立ちません。又豫算生活の如きも常に収入の幾分かを除き、之を蓄積して不時に備へ、尙進んで國債等に應募するやうに致したいものであります

六、陋習の打破、形よりは精神

我が國の冠婚葬祭、宴會、贈答等はとかく虚禮虚飾に流れ、形式に走つてゐることが多く、又時間勵行なども傳統の久しき容易に改善し得ないで今日に至りました。此の時局に際してこそ國民心を合せ、是等の陋習を打破し、夫れ等の精神を重んずるやうに致したいものであります。

七、工夫して物を活かせ

我が國の資源は割合に乏しいのにかゝはらず、一般に資源の愛護に留意せず、又物の活用に對する工夫努力が十分と

は申されません。されば此の際お互に資源の愛護、代用品の使用等を工夫して資源の活用に努めたいものであります。特に毛織物、金屬類、ゴム、紙類等の消費を抑制し、是等の廢物利用には十分の工夫をこらしたいものであります。

八、舶來品より國産品

我が國民には、外國より來たものを舶來品として尊重するの風が残つてゐますが、今日では國産品に却つて優良なものが多いし、よしんば多少悪くとも益國産品を愛用して其の生産を盛んならしめ、ひいては海外輸出を進展せしめ、以て國運の隆昌を圖りたいものであります。

九、無駄を省いて國力を培へ

吾々の生活には無駄が多く、爲に自然と生活費がかさみ、貯蓄の餘裕が少ないのであります。然るに一家の經濟は結局國家經濟力の基でありますから、比の際大いに覺醒して、生活の方法を改善整備し、出來るだけ無駄を省き冗費を去り、依つて生じた餘裕を貯蓄して、大いに國力を培ひたいものであります。

一〇、戦に勝つても奢りに負けるな

ローマは戦では勝つたが、奢侈贅澤で亡んだと云はれてゐます。之は往往にして有り勝のことではありますが、國民は戦勝に酔うて奢侈に陥る様なことがあつてはなりません。

よしんば如何なる苦難に遭つても最後の勝利を期し、我が國民に與へられたる此の度の歴史的大事業を我々の時代に

於て解決するの覺悟を以て、日日の業務を果さねばなりません。

國民精神總動員(第二期)強調週間行事 (本校)

十三日(水)「時局生活ノ日」國民朝禮參加

戊申詔書奉讀式、議會ニ賜ハリタル勅語奉讀、内閣告諭

知事告諭朗讀、學校長訓辭、防空設備(遮蔽装置)完備ノ日

本週間ヲ無遅刻週間トスルコト、及校規校則嚴守、分擔

任務精勵(各學年ニテ指導)服装檢査(各學年指導)

十四日(木)「出動將兵ヘノ感謝ノ日」國民朝禮參加

出征將士ニ對スル慰問繪葉書ヲ各自三枚以上作ラシムル

コト愛國ポスター製作指導、愛國標語募集

十五日(金)「非常時經濟ノ日」國民朝禮參加

非常時經濟ニ關スル講演(近藤教諭)

國産品使用、發明發見獎勵、資源愛護

1、服装品、書物、學用品調査、使用法修繕法指導

2、水道、瓦斯、電氣節約、校舍校具愛護

十六日(土)「銃後ノ護ノ日」國民朝禮參加

非常時美談ノ講演(田口教諭)防毒マスク製作指導、製作

獎勵、出征職員父兄卒業生ノ遺家族慰問、愛國切手購入

獎勵、全國中學生飛行機獻金(五十錢宛)徵集

十七日(日)「神社參拜、殉國勇士ヲ讃フルノ日」國民朝禮

參加

長田神社參拜(七、二〇運動場集合 七、三〇出發

八、〇〇參拜了)市内行進、(歸校)

神宮遙拜祈願、殉國勇士ノタメノ默禱、運動會

十八日(月)「勤勞報國ノ日」國民朝禮參加

長田神社參拜 境内清掃(五年)

校舍内外ノ整理清掃、家事手傳獎勵

十九日(火)「非常時心身鍛鍊ノ日」國民朝禮參加

全校體操舉行、出動勇士ヲ偲ビ晝食ハ國旗辨當トス

全校閱兵分列式舉行

第三篇 支那事變

一、政府の聲明

【其一】 (七月十一日)

相踵ク支那側ノ毎日行爲ニ對シ支那駐屯軍ハ隱忍靜觀中ノ處從來我ト提携シテ北支ノ治安ニ任シアリシ第二十九軍ノ七月七日夜半蘆溝橋附近ニ於ケル不法射撃ニ端ヲ發シ該軍ト衝突ノ己ムナキニ至レル爲メ平津方面ノ情勢逼迫シ我在留民ハ正ニ危殆ニ頻スルニ至リシモ我方ハ和平解決ノ望ヲ棄テス事件不擴大ノ方針ニ基キ局地的解決ニ努力シ一旦第二十九軍側ニ於テ和平的解決ヲ承諾シタルニ不拘突如七月十日夜ニ至リ彼ハ不法ニモ更ニ我ヲ攻撃シ再ヒ我軍ニ相當ノ死傷ヲ生スルニ至ラシメ而モ頻リニ第一線ノ兵力ヲ増加シ更ニ西苑ノ部隊ヲ南進セシメ中央軍ニ出動ヲ命スル等武力的準備ヲ進ムルト共ニ平和的交渉ニ應スルノ誠意ナク遂ニ北平ニ於ケル交渉ヲ全面的ニ拒否スルニ至レリ以上ノ事實ニ鑑ミ今次事件ハ全ク支那側ノ計畫的武力抗日ナルコト最早疑ノ餘地ナシ

思フニ北支治安ノ維持カ帝國及滿洲國ニトリ緊急ノ事タルハ茲ニ贅言ヲ要セサル處ニシテ支那側カ不法行爲ハ勿論排日毎日行爲ニ對スル謝罪ヲ爲シ及今後斯カル行爲ナカラシムル爲メ適當ナル保證等ヲナスコトハ東亞ノ平和維持上極メテ緊要ナリ仍テ政府ハ本日ノ閣議ニ於テ重大決意ヲ爲シ北支派兵ニ關シ政府トシテ執ルヘキ所要ノ措置ヲナス事ニ決セリ

然レトモ東亞平和ノ維持ハ帝國ノ常ニ顧念スル所ナルヲ以テ政府ハ今後共局面不擴大ノ爲平和的折衝ノ望ミヲ捨テス支那側ノ速ナル反省ニヨリテ事態ノ圓滿ナル解決ヲ希望ス又列國權益ノ保全ニ就テハ固ヨリ十分之ヲ考慮セントスルモノナリ

【其二】 (八月十五日)

帝國夙に東亞永遠の平和を冀念し、日支兩國の親善提携に力を效せること久しきに及べり。然るに南京政府は排日抗日を以て國論昂揚と政權強化の具に供し、自國國力の過信と帝國の實力輕視の風潮と相俟ち、更に赤化勢力と苟合して反日毎日愈々甚し、く以て帝國に敵對せんとするの氣運を醸成せり。近年幾度か惹起せる不祥事件何れもこれに因由せざるなし。今次事變の發端も亦此の如き氣勢がその爆發點を偶々永定河畔に選びたるに過ぎず、通州に於ける神人共に許さざる殘虐事件の因由亦茲に發す。更に中南支に於ては支那側の挑戰的行動に起因し帝國臣民の生命財產既に危殆に瀕し、わが居留民は多年營々として建設せる安住の地を涙を呑んで遂に一時撤退するの已むなきに至れり。

顧みれば事變發生以來屢々聲明したる如く、帝國は隱忍に隱忍を重ね事件の不擴大を方針とし、努めて平和的且局地的に處理せんことを企圖し平津地方に於ける支那軍屢次の挑戰及不法行爲に對しても、わが支那駐屯軍は交通線の確保及我が居留民保護のため眞に已むを得ざる自衛行動に出でたるに過ぎず。而も帝國政府は夙に南京政府に對して挑戰的言動の即時停止と現地解決を妨害せざる様注意を喚起したるにも拘はらず、南京政府はわが勸告を聽かざるのみならず、却て益々我が方に對し戰備を整へ、嚴存の軍事協定を破りて顧みることなく、軍を北上せしめてわが支那駐屯軍を脅威し、また漢口上海その他に於ては兵を集めて愈々挑戰的態度を露骨にし、上海に於ては遂に我に向つて砲火を開き帝國軍艦に對して爆撃を加ふるに至れり。此の如く支那側が帝國を輕侮し、不法暴虐に至らざるなく全支に亘るわが居留民の生命財產危殆に陥るに及んでは、帝國としては最早隱忍その限度に達し、支那軍の暴戾を膺懲し以て南京政府の反省を促す爲今や斷乎たる措置をとるの已むなきに至れり。此の如きは東洋平和を念願し日支の共存共榮を翹望する帝國として衷心より遺憾とする所なり。然れども帝國の庶幾する所は日支の提携に在り。之が爲支那に於ける排外抗日運動を根絶し今次事變の如き不祥事發生の根因を芟除すると共に、日滿支三國間の融和提携の實を擧げんとするの外他意なく、固より毫末も領土的意圖を有するものにあらず。又支那國民をして抗日に踊らしめつゝある南京政府及國民黨の覺醒を促さんとするも、無辜の一般大衆に對しては何等敵意を有するものにあらず且列國權益の尊重には最善の努力を惜まざるべきは言を俟たざる所なり。

二、支那事變日誌

七月八日◇午前零時頃、夜間演習中の豊台駐屯の我が部隊に對し、蘆溝橋附近の支那軍（第二十九軍第三十七師に屬する二百十九團の一部）が突如不法射撃をなしたに對し我が軍から嚴重な交渉を開始せんとするや、午前五時半頃又も蘆溝橋北方一キロメートル龍王廟附近の支那軍より射撃を加へたるを以て我軍は該部隊に對し應戦を開始、これを撃退して龍王廟を占據。我が方が平和解決の方針をとり停戦を要求したに拘らず冀察政權及二十九軍首脳部は不同意を表明せるため、現地交渉は午後三時半決裂し再び交戦状態に入る。◇北平市と天津市には夜から特別戒嚴令が布告され、北寧線は午後四時より全線の運行を停止した。午後八時十分に至り、關東軍は「暴戻なる第二十九軍の挑戦に基因して今や北支に事端を生ぜり。我が關東軍は多大の關心と重大なる決意を保持しつゝ、嚴に本事態の成行を注視す」との重大決意表明の聲明を發表。◇午後九時より陸相官邸に陸相、次官以下關係者參集、現地の情報に基き對策を協議。深更に至り、京都以西〇箇師團に對し七月十日除隊の豫定にある兵の除隊延期の緊急命令を發した。◇一方支那側に於いては午前八時南京よりの急電に接せる蔣介石は廬山に於て幕僚會議を開き、山東省樂陵に引籠り中の宋哲元に對し至急北平に歸任せよと電命。

九日◇八日深更まで繼續された日支兩軍代表の折衝により、九日午前五時を期して兩軍の撤退を實施することになったが、支那側は撤退を實行せず、却つて午前五時半に至り砲撃を開始せるため形勢は再び逆轉。九時十五分龍王廟と東辛庄を占據。午後六時、冀察當局は外國記者團に「今夜中に日支開戦ある見込みだが、我が方では日本側の發砲を待ち我が方よりは射撃せぬ意向である。」と非公式に發表した。

十一日◇平漢線方面の支那中央軍は北上を開始し、平津地方に極秘裡に布置せられたる藍衣社も各縣において策動を開始。一方十日夜重慶より急遽南京に歸つた軍政部長何應欽は直ちに軍事會議を開き津浦沿線、隴海線一帯の軍隊に動員待機令を下し、北平市長秦德純に急電を發し（一）如何なる日本側の要求條件をも接受すべからず。（二）一歩も軍事並に政治的の後退を許さず。（三）必要の時の犠牲の準備をなせ、との三項の指令を發した。◇政府は午後二時の五相會議について緊急閣議を開き北支派兵を決定、近衛首相より上奏御裁可の後中外に聲明したが、同時に廣田外相は在外使臣に訓令を發し帝國政府の根本方針を各國政府に諒解せしめた。廟議一決と同時に政府は眞の舉國一致の實を擧げるため言論機關、貴衆兩院議員、財界の各代表の參集を請ひそれ〴〵舉國一致の協力を要望。◇閣院參謀總長宮殿下には午後七時三十五分再度葉山御用邸に伺候あらせられた。◇尙豫て病氣靜養中の田代支那駐屯軍司令官は更迭され、香月清司中將が親補された。◇現地に於ては冀察側は遂に我が公明なる主張を認め、午後一時松井特務機關長に對し冀察側幹部の到達せる解決辦法を提示、同時に蘆溝橋一帯より撤退各部隊の原駐地引揚を開始したので我方も午後一時半主力の原駐地歸還を開始した。しかるに劉峙の第二路軍、炳龍助の第四十軍等の中央軍は朝來列車輸送を開始し續々北上、平漢線は全く戦時状態となつた。

十二日◇天皇皇后兩陛下にはこの日午後宮城に還御遊ばさる。◇支

轉。午前六時四十分北平より派遣された日支調停委員の現地到着により、支那軍への命令徹底し、茲に戦闘は全く停止、和平解決の曙光を見るに至つた。更に午前七時より午後零時半に及ぶ支那側との交渉及び第百十旅長何基豐が現地に着いて支那軍を説得せる結果、午後四時支那軍は永定河右岸地區に撤退を完了、我軍も戦闘行動を中止し、豊台方面に集結を開始、事件善後處置の交渉に入ることに成り事件は一段落を見た。◇一方北平市長秦德純は午前七時松井特務機關長の許に使者を派し非公式ながら命令不徹底による今曉五時以後の戦闘につき遺憾の意を表明。支那駐屯軍參謀長橋本少將は事件善後處理のため午後四時幕僚を帶同し天津より北平に到着した。◇他方帝國政府は、臨時閣議を午前八時五十分開會、蘆溝橋事件の處理方針を次の如く決定した。（一）今次事件の原因は全く支那側の不法行為に基くこと（二）我方として事件不擴大の方針を堅持（三）支那側の反省による事態の圓滿收拾を希望すること（四）若しも支那側に反省なく憂慮すべき事態を招來する危機を見るに至らば我方としては適切迅速に機宜の處置を講ずること（五）各關係は何時にても臨時閣議の招集に應じ得る様に待機すること。

十日◇午前十一時日高參事官は本省の訓令により王外交部長と會見、支那側の非をなじつて本事件による損害及び一切の合理的要求の留保を聲明。蔣介石は廬山會議の結果、徐州を中心に駐屯中の中央軍四ヶ師に對し十一日拂曉を期し河南省境に集中進撃準備を命令した。◇午後七時二十分、蘆溝橋附近永定河左岸に一兵も残さぬ筈の支那兵より、蘆溝橋附近の我が部隊に迫撃砲の集中射撃をなし、東辛庄附近でも兵力不明の支那部隊が同地一帯を占據せるため、我軍は敢然反撃、午後

那側は十一日夜の申合せを蹂躪し、有力部隊を永定河右岸より平漢線に置き、蘆溝橋の北二軒附近に至る線に一齊進出、我方に射撃を開始せるも我方は應戦せず遂に重大なる決意を固む。午後四時半に至り河北省主席第二十九軍第三十七師長馮治安は解決辦法を我が方に約定したが誠意は認め難く平津地方の在留邦人は續々引揚を開始した。

十三日◇午前十一時頃、馬村を我軍の小部分が自動車にて通過中、突如支那側部隊より機關銃の射撃を受け我軍これに應戦し撃退せるも日本軍の戦死三名、正午頃中央軍たる萬福麟軍約三團は長辛店に到着、第三十七師馮治安の一箇旅は北平廣安門、他の一箇旅は同門西方約四軒の競馬場附近に集結。徐州、蚌埠間にある胡宗南麾下の第一師及び教導師は徐州鄭州間に移動完了、他の中央直系軍も續々鄭州を中心に隴海沿線に集結。◇南京政府外交部は中央軍の北上を肯定し「單なる自衛に過ぎず」と聲明。蔣介石は戰時職制による陸海空軍總司令の資格で全軍に號令し、商震を平漢線北段防守司令に、韓復榘を津浦線防空司令に任命し、愈々積極的に對日交戦の決意を固め、通信交通機關の戰時的國家總動員を斷行するに決定、南京に準戒嚴令が布かれた。夜、堀内外務次官は駐日代理大使楊雲竹の抗議を一蹴し、支那側の現地に於ける諸約の即時實行を迫つた。

十五日◇重大時局に對處して舉國一致の實を擧ぐ可く午前十時より首相官邸に於て緊急地方官會議を開催。北支の現勢に鑑み本日内地より一部の部隊を派遣するに決定、陸軍省は「支那側は永定河左岸における兵力を撤退せる所か却つて増大し工事を増強、北上中の支那軍は平漢線を夜間運行により北送さる」と發表。◇中央軍は本日二期作戦準備に入り、既に動員令を下したもののほか安徽、河南兩省駐屯の特科隊に動員開始を命じ、宋哲元に對し「十五日中に事件解決せざる場合は中央軍五ヶ師を派遣する」旨電命した外「空軍増援のため二十機を先づ保定に急行せしめることに決定した」旨急電を發したが、宋哲元はこの日齊燮元張自忠と會見後張充榮、北寧鐵路局長陳覺生等の要人と和平解決につき協議を重ねた。

十六日◇陸軍省發表「北支へ移動中の支那軍は主力をもつて平漢線に沿ふ地區に、各々一部をもつて津浦線及び平綏線に沿ふ地區を前進中の如く、十五日迄に離海線以北山西省境以東の地區に集中せる兵力は平時兵力と合し既に三十ヶ師に達せり」◇全支の政界、學界、實業界、新聞界有力者三百名よりなる國策討論の廬山の談話會は主催者蔣介石汪兆銘出席の下に開會協議したほか、南京政府は日本を除く九國條約調印國全部に「北支の現状」を説明せる覺書を手交。◇午前八時過ぎ我が〇〇部隊が通州街道安平附近に達した際同村附近に配置されたる支那軍隊の監視より射撃を受け應戦する中、部落内の支那軍百名が來襲我軍はこれを撃退し支那軍の武裝を解除して同村に入つた。◇この日午前十一時、前支那駐屯軍司令官田代中将は天津の司令官官邸に於いて逝去した。

十七日◇午前の五相會議の結果現地解決の最後の方針として去る十一

日の支那側諸約の實行に對し帝國政府の最後の態度を支那側に表示することに一決。その措置に關し午後三時より外務、陸海軍關係三省の首脳部は重要協議を開き、在天津香月司令官宛重要訓令を發し、南京に於ては駐在武官大城戸大佐が帝國陸軍代表として何應欽軍政部長に會見を申込み、何應欽代理常務次長曹浩森と會見、我軍の決意を通告更に日高參事官も政府の重大訓令により官邸に王外交部長を訪ひ、挑戰的言動の即時停止を覺書を以て要求し、十九日に支那側の責任ある回答を得た旨を要求した。◇本日我が政府は閣議において北支事變に關する經費に充つるため一千萬圓の第二豫備金支出を決定した。

十八日◇去る十一日北平にて調印の松井、秦德純協定は支那側により再三不法に蹂躪されたが午後一時十分、宋哲元は張自忠と共に該協定の第一項たる日本側への陳謝のため香月支那駐屯軍司令官、橋本參謀長を天津日本租界偕行社に訪問、今回の事件につきその非は全く支那側にあると衷心陳謝の意を表し責任者の處罰、將來の保障、防共、排日取締の徹底等につき最短期間に實施すべき旨を誓ひ、事件は現地解決の第一歩に入つた。◇しかるに一方中央軍は續々北上し馮玉祥は督戰のため保定に進出支那軍第三十二師及び第五十八師は既に一部を以て保定に、主力を以て河北省南部に侵入、第三十軍は保定に達するに至つた。◇この情報により〇〇方面の偵察に出動せる小林曹長操縱酒井少尉同乗の我が飛行機は平漢線元氏順德の上空において北進する支那軍より不法にも一齊射撃を受け、自衛上止むなく交戦の後歸還した。

十九日◇十八日の宋哲元の正式謝罪に引續き、橋本參謀長は、第二十九軍代表張自忠との間に、なほ未解決の問題、責任者の處罰、蘆溝橋

附近より支那兵の完全なる撤退、將來の保障等の具體的事項につき交渉を繼續したが、支那側は諸約の全面的履行には難色を示し、宋哲元は天津より北平に到着、冀察政權及び二十九軍の最高首腦部を召集して時局收拾につき重要協議をなした。南京においては外交部長代理として董亞洲司第一科長が大使館に日高參事官を訪問、十七日の我が政府よりの重大通告に對する回答を覺書にし提出したが、この内容は(一)兩軍同時に軍事的行動を停止、武裝部隊の原駐地への撤退、(二)外交方法による解決を希望し、現地の解決は中央の許可を要する、等不遜極るものであつた。◇午後五時頃蘆溝橋において支那軍は突如我が〇〇部隊に猛射を浴びせ山崎部隊長負傷。同七時頃北平天津間軍用電話線切斷さる。

二十日◇南京にては午前八時半より日高參事官、王外交部長と會見したが依然強硬不遜なる態度を示す。東京にては午前九時外務省を訪問せる許駐日支那大使に對し外相より嚴重抗議をなした。一方十一日調印の松井・秦德純協定の實施は殘す所支那軍の蘆溝橋附近よりの撤退のみとなつたが、十九日以来の宋哲元の奔走にも拘らず解決の曙光を見ない。◇午後二時四十分、蘆溝橋附近の狂暴なる二十九軍の前線部隊は又復我が陣地に向け不法なる砲撃を開始、更に八寶山の支那機關銃隊も我方に向ひ射撃を開始せるにより、數次の支那軍の不信行爲に對し隱忍自重し來たる我軍も愈十九日夜の聲明に基き已むなく宛平縣及び蘆溝橋の第二十九軍に對し砲兵、機關銃を以て應戦、一時敵を沈黙せしめたが、此の間我方戦死一名戦傷一名を出す。午後七時頃又々蘆溝橋附近の支那軍は、永定河右岸高地の砲兵陣地より迫撃砲を以て豊臺附近の我が部隊に猛射を浴びかけたるにより、我方も砲撃を以て

これに應戦、蘆溝橋の望樓二個を撃破、午後八時漸く鎮靜に歸したが、この戦闘中、支那側は蘆溝橋兵營と宛平城内の兵器庫に火災を起した。政府は夜の緊急閣議により風見書記官長の談話の形式により「既定方針に則り自衛的適切の處置を講ずる」旨聲明す。

二十一日◇宋哲元のわが方に對する公約により衙門口附近一帶の第二十九軍は午前十時西苑兵營に向け引揚げを開始、午後一時完了したが永定河左岸八寶山及び右岸蘆溝橋附近一帶の支那軍は撤退せず、又もや支那側の諸約不履行に達着し憂慮すべき状態となり、松井特務機關長は今井武官並に中島顧問を帶同、午後六時進德社に宋哲元を訪ひ嚴重抗議す。これに對し宋氏は即刻同方面の部隊に撤退命令を示達する旨確約、その結果同地一帶の支那軍は同夜終結を開始した。◇ヒューゲツセン英大使は蔣介石と會見、蔣の眞意打診と同時に無謀極まる開戦論に對して再考慮を促す。◇冀東政府股長官は南京政府及び冀察政權に對して即時兵を收め冀東政府の主旨に合流し新政府を招來することに努力すべきことを要望した。◇午前、許駐日支那大使は官邸に廣田外相を再度訪問し南京側の主張に關し説明、外相はこれを一々反駁して支那側の猛省を促した。

二十二日◇前夜より西苑に集結中であつた馮治安の第三十七師主力は保定方面に移駐するに決し午後五時北平西直門驛より先頭部隊出發し北平正陽門驛より後續部隊の輸送を行ふ。又第三十七師に屬する北平城内兵第百十一旅、二百十八團部隊も涿州に移駐し、これに代り、城内警備に當るため張自忠麾下第三十八師の一部及び百三十二師趙登禹部隊の一部が入城準備を行ふ。◇南京政府外交部は第三十七師の撤退完了は和平交渉の前提として承認せるのではなく、軍事的衝突を避

くため実施したものなりと言明した。◆支那各地の抗日運動は複雑深刻化し上海では上海各界抗敵後援會創立大會が開かれたが、硬軟兩派の議論対立し大亂闘を演じ輿論不統一の醜態を暴露す。

二十三日◆陸軍では北支事變に關する日本と冀察政權側との現地細目協定の内容に關し午後八時二十分發表を行つた。之によれば支那駐屯軍に對して冀察側は七月十九日文書を以て抗日系各種團體の取締りを徹底することを協定し、次の如く申出た。(一)日支國交を阻害する人物を排す。(二)共產黨は徹底的に彈壓す。(三)排日的各種機關、諸團體及各種運動並に之が原因と目されるべき排日教育の取締りをなす。同時に第三十七師の移駐を通告して來た。◆第三十七師の撤退及び移駐は進行遅々として完了せず、西苑其他一帯に大部隊殘留するため我軍はその實行を監視す。◆ボゴモロフ駐支ソ聯大使は南京にて王外交部長と會見、重要意見の交換を行ふ。◆準戰時體制下にわが第七十一特別議會召集さる。

二十四日◆第三十七師は終日北平城外から一步も撤退せず加ふるに北平城外の東北方面に新陣地を構築する等誠意疑はしく本日北平にて宋哲元に會見、撤退の實行促進を要求した矢野參謀副長よりの報告に基き協議し二十五日一日監視することに決定。

二十五日◆馮治安部隊の撤退狀況は二十四、五兩日において一列車も南下せず、わが支那駐屯軍では幕僚會議を開き決定せる要求事項を細目協定調印の責任者張自忠に提示し、張氏は夕刻天津より北平に到り宋哲元に報告すると共に首腦部會議を開く。◆北平にあつて冀察首腦部の抗日を煽るに努めた參謀次長熊斌は早朝飛行機にて南京に歸任に際し宋氏より中央雜軍の河北進出は冀察當局として時局收拾上歡迎せ

その要求に應ぜざるのみならず、暴慢なる態度を示したので午前三時頃より冀東部隊と冀東保安隊とにより武裝解除を行ふ。◆廣安門事件以來不安増大した北平在留邦人に對する交民巷避難命令發せられ、正午頃大體收容を終る。◆宋哲元は中央の壓迫に進退窮し南京政府に對し冀察政務委員會委員長、第二十九軍々長その他一切の兼職を辭任する旨申出た。

二十八日◆午前零時松井北平特務機關長は香月軍司令官代理として宋哲元を訪問、二十六日手交した最後通牒に基き、我軍独自の行動に出づるの已むなきを通告するとともに全二十九軍の即時撤退を要求し同時に「事茲に至りては和平解決の萬策盡きて磨礪の師を進むる外なき」旨聲明を發す。◆我軍大決意通告後全二十九軍掃滅を期する總攻撃開始さる。上條、三輪、坂口等の各空軍部隊は午前五時出動二時間に亘り天津、北平を中心とする支那軍根據地を爆撃し、地上部隊は行宮を占領し、南苑を落城せしめ、馬村以東の戰鬪に於て第三十八師張自忠の主力を潰滅せしめ、二十九軍に致命的打撃を與ふ。◆南京政府は中央軍に前進方を電命、保定に待機中の第十師、第十三師は行動を開始し、長辛店に向つて前進、飛行隊も前線へ出動す。◆グルー駐日米大使及びドツツ英代理大使は夫々廣田外相を訪問、不擴大を切望、外相は帝國政府の現地平和解決、事件不擴大の方針をのべ支那側の不信行爲頻發を遺憾とする旨力説。

二十九日◆午前二時二十分我軍の集結せる北寧線天津車站は突如支那軍の襲撃を受け我軍は直ちに應戦し之を撃退せるも、續いて條約を無視して市内に侵入せる敗殘兵、保安隊等市内に於て我軍及び我租界に向け攻撃を行ひそれがため我租界附近の各所において市街戦を演じ之

ざる旨を中央へ傳へられたしと依頼す。

二十六日◆北支事變重大化す。平津沿線郎坊附近の軍用線が屢々切斷されるため二十五日午後十一時頃故障修理の通信隊擁護のため天津から派遣された五ノ井部隊は突如第三十八師百十三旅二百二十六團の部隊より射撃を受け、郎坊驛を包圍せるため二十六日午前零時過ぎ應戦を開始す。我軍は支那側の不信行爲に激昂、直ちに鐵道輸送により鯉登部隊を急派する一方、飛行機數臺を現地に飛行せしめ爆撃敢行、このため敵は退却を開始し鯉登部隊は午前八時過ぎ郎坊を占領す。◆郎坊不法射撃に端を發した日支衝突によつて支那駐屯軍は遂に第二十九軍に對し斷乎たる手段を取ることに決し、香月軍司令官は午後三時半遂に期限付最後通牒を宋哲元に手交す。◆わが居留民保護の任務を以て北平入城を命ぜられた廣部部隊は夕刻北平廣安門附近にありし支那軍と諒解の上、同門より入城する際支那軍は初め門を開き該部隊の凡そ三分の二を通過せしめたる後突然門を閉鎖し、手榴彈及び機關銃を以てわが部隊を猛射、廣部部隊は惡戰苦闘を續けること前後五時間半漸く翌二十七日午前二時二十分交民巷のわが兵營に入ることを得た。

二十七日◆わが政府は緊急閣議を開き北支事變に對する重大聲明を發表、帝國が必要なる自衛行動を採るの已むなきに至りしこと、何等領土的企圖を有せず列國の權益を保護すること、支那側の反省により局面を最少限度に限定し、圓滿なる解決を切望するにある旨を聲明す。◆午前五時通州城外に於て二十九軍に屬する支那兵一大隊と我が軍衝突し敵は暫時頑強に抵抗したが午前八時過ぎ我軍の空中爆撃を受け且地上部隊の總攻撃によつて南苑方面に潰走す。◆通州に駐屯する第二十九軍の獨立三十九旅の一營に抗日毎日行爲あり、撤退を求めたるに

を敗退せしめたが、茲において我軍は自衛上已むなく支那軍隊の據れる主要地點を爆撃するに決し、その旨駐屯軍司令部より聲明すると共に午後二時より空陸呼應して北寧、津浦兩鐵路局、保安總隊本部、警備司令部、市政府、大福公司其他の攻撃を開始し同三時その目的を達し、我守備隊は終日、東、中央兩停車場を完全に固守す。◆宋哲元、秦德純、馮治安等は後事を張自忠に託して二十八日午後十一時北平を退去、城内の二十九軍も之に續いて撤退せるためこの日朝來北平は平靜に復す。◆北平城を繞る四圍の戰線は前日南苑、西苑を始め大體掃掃し得たが、北部戰線に於て沙河鎮を占領し同夜夜襲を以て寶中寺高寺を占領せる酒井部隊はこの日正午西苑の敗殘兵の據れる萬壽山、玉泉山を占領したる後、黃村に入り、午後七時頃更に衙門口を占領、南苑方面の戰鬪に協力せる河邊部隊は殘兵を追ひつゝ、豐台の原駐地に引返したが、午後六時宛平を占領。かくて我軍は作戰開始より僅々二日に於て永定河左岸平津地方一帯を完全に占據した。◆午前八時十五分大沽に於て我驅逐艦は支那軍の迫撃砲射撃を受け已むなくこれに應戦、所在海軍部隊は陸軍と協力して大沽攻撃を開始す。◆北平東郊の冀東自治政府の所在地たる通州城外に二十九軍の敗殘兵出現し、冀東政府に屬する保安隊第一大隊が之と合流して居留民、我守備隊を攻撃し來つたため夕刻我飛行機出動し爆撃により敵に大打撃を與へた。◆貴族院本會議にて北支事件費追加豫算(九千六百八十萬圓)成立す。三十日◆天津の我租界隣接地に支那の敗殘兵出沒して間歇的射撃を加へるため午後三時より再び空陸呼應して掃蕩の攻撃を開始し多大の損害を與ふ。◆大沽におけるわが陸海軍協力の攻撃は二十九日夜に入り、その對岸の冀東地區に屬する塘沽よりも我守備隊及び冀東政府保安隊

が白河を渡河して之に参加し共同して攻撃せる結果、午前十一時大沽市街の半を占むる西沽を先づ占據更に午後一時半に到つて完全に大沽を占領す。◆北平にては江朝宗、地方自治會の會長に就任し、成立總會を舉行す。◆北平附近にては前日酒井部隊が占據せる西苑の地積きなる萬壽山、玉泉山に敗殘兵あるためこの日引續き同部隊及鈴木部隊が協力して包圍攻撃を行つた結果、敵は正午頃四散潰滅、一方前日宛平を完全に占領した河邊部隊は更に永定河を強行渡河して敵の河北省における本據、保定の第一線をなす長辛店を急襲して午後三時早くも之を占領す。◆天皇陛下には時局を御軫念遊ばされ午後四時議會に出席中の近衛首相を御召あり、首相は委曲奏上退下した。

三十一日◆午前五時頃より在天津高木部隊は總站附近織紡工場地區に殘留する敗殘兵を攻撃し四散せしめ天津附近は略々平靜に歸したので秩序回復の第一歩として北平同様治安維持會組織され、高凌霨が委員長就任に決す。◆通州において兵變を起した冀東保安隊の敗殘部隊約一千名は前夜より朝にかけて安定門外に於て完全に武装解除を行ふ。この日荳島部隊は通州に到着市内の保安隊敗殘兵を掃蕩してこれを確保す。尙殷況耕の拉致により冀東政府秘書長池宗墨が長官代理に就任に決す。

八月一日◆郎坊の支那兵營は加藤部隊により根本的に破壊され且敗殘の便衣隊約三十名を掃蕩。◆鈴木部隊は午後八時頃より北苑の滄元武の獨立第三十九旅(兵員三千二百)の武装解除を實施す。◆支那中央軍三個列車は一日津浦線を北上、滄州に到着。◆山東省主席韓復榘は蔣介石の招電により南京に入り馮玉祥、蔣介石と重大會見を遂げ、山東戦備につき作戦を擬議す。◆米國飛行士で支那側航空隊に参加希望

を有するもの、渡支を米國政府は中立法の精神に反するものとして阻止すべく活動を開始す。

二日◆我支那駐屯軍司令部は天津市内の掃蕩は本日の特第一區の掃蕩をもつて全部完了せる旨發表す。◆北平地方治安維持會は本日成立宣言を發表、天津治安維持委員會の成立式も舉行され、平津地方は平靜状態を持續す。◆支那中央軍の北上は益々激しく北平天津の包圍陣は略完成し、山西省の第八十四師(師長高桂滋)は察哈爾省境に侵入し、河北省北部の包圍體形を整へ、湯恩伯軍は張家口に侵入、胡宗南軍約二千も濟南を通過北上、其他續々北上し、洛陽飛行場には小型飛行機約二百台その他集結すとの情報あり。◆通州事變勃發以來城外の敗殘兵横行し連絡を絶たれた通州に向け北平より日本警察署の決死隊がトラックにて急行す。◆張家口方面の事態も漸次悪化の兆あるため邦人に引揚命令發せらる。

三日◆平津地方から潰走した二十九軍はその殘兵を平漢、津浦、兩線に集結し、河北省に進入して居る雜軍、中央軍の援助を得て對日作戰を準備し、又平綏線方面の戦備も強化され、張家口に於つた劉汝明の第四百十三師は日和見の態度を保持して居たが、平地泉、大同方面から湯恩伯の中央軍第八十四師の大部分が二三日前に張家口に進入して以來俄に對日挑戰の態度をとり始めた。その第八十四師が張家口から南口方面に汽車輸送中を我中富部隊は三日午前、下花園附近で爆撃、他三ヶ所に於ても輸送中の列車に爆撃を加へて多大の損害を與へた。やはりこの朝、我飛行機は通州東方約二里の燕郊鎮に集結せる多數の第二十軍兵並に冀東保安隊の敗殘兵を發見爆撃を加へた。◆香月司令官は今次事變による平津地方の窮民救済基金として銀十萬元を治安維持

會に寄附した。天津では萬國橋の通過も許可され、市内の交通は常態に復し漸く明朗な氣分が漲り始めた。

四日◆平綏線による中央軍第八十四師の輸送列車に對しては三日に午前午後二回の爆撃を行つたが、その爆撃を免がれて懷來、下花園兩驛に逃込んだ裝甲列車に對し四日午前三回の爆撃を敢行、又同線榆林堡驛及び同驛の中央軍の軍用列車七十輛を爆撃し、内二十輛は爆破顛覆し更に新保安驛東方を進行中の中央軍軍用列車を爆撃、多大の損害を與へた。又南雲部隊は四日夕刻戒台寺(長辛店南方三里)を攻撃し敗殘兵三十を捕虜とし、岡崎部隊は正午頃良鄉附近にて機關銃を有する七、八十名の敵兵と遭遇しこれを南方に潰走せしめた。

五日◆河北、察哈爾兩省における中央軍は總兵力二十萬餘となり、二十九軍殘兵は三萬に減じた。

六日◆南京において蔣介石司會の下に全國國防會議第一日が開かれ、全巨星出席し、何應欽より北支の戦況につき、汪兆銘より國際情勢につき報告し、最後の態度につき討議したが、主戰論と自重論對立、蔣介石は一言も發しなかつた。◆長江一帯の在留邦人は最近非常な不安下にあり、引揚げる者も續出の有様であつたが、漢口の日本租界は特に危険に瀕したため、通州事件の例もあるので、遂に六日總引揚げを斷行、老幼婦女子等は上海まで、壯年の男子等は取敢へず江岸の日清汽船ハルクまで引揚げた。漢口碇泊中の〇〇司令官は午前、日本居留民保護のため陸戰隊は適當の處置をとるの已むを得ざる旨申入れ、支那側の自重自戒を要求した。

七日◆首都南京の形勢も日に險惡化するため七日朝に到り南京居留民全部の引揚げを行ふことに決した。◆漢口の邦人は全部引揚げを行ひ上

海に向ふ。◆南京では國防會議第二日が續開、西安の顧祝同を加へ、何應欽より軍事委員會作成の(一)全國國防統一作戰計畫及軍區配置(二)中央地方を通ずる戰時體制の兩案を附議して可決し、こゝに全面的抗戰方針と長期作戰方略とを最終的に決定す、その何應欽が突如軍政部長の職を辭し後任に次長陳誠が代理に任せられた。◆川越大使は午後五時大連から上海に歸着、直ちに大使館首領部と協議を開始した。◆第七十一特別議會の最終日に北支事件第二次追加豫算四億一千九百六十萬圓及び増稅法案等の重要法案全部成立す。

八日◆蘆溝橋事件發生以來各地に轉戰武勳を建てた〇〇部隊は午前十時より北平入城を開始し正午過ぎ同部隊の入城を完了した。◆南京では八日國防會議を終り愈第三次動員を開始し夕刻、南京で待機中の中央軍機械化部隊の北上を命じ津浦線で出動した。◆我松浦部隊は午前開平北方の馬家溝にありし第二保安總隊(兵員約千八百名)を武装解除した。

九日◆この朝上海駐在武官から海軍省に達した公電によれば上海の情勢は險惡化し支那側防禦工事は公然行はれ、邦人に對する食糧品不賣や侮辱行為も頻發し、邦人一同不安と緊張の日を送りつつあつたが、九日午後五時に到つて大山海軍中尉射殺事件の勃發を見て事態は重大化された。◆我方では極めて重大視し南京政府に對し徹底的解決を要求することとし、陸戰隊は出動待機の姿勢をとつた。◆南京軍事當局は我軍の空襲に怯え、兩三日來前線又は地方から續々徵收を行ひその數百機にも達し目下晝夜を分たず猛練習中であり、又主要建物には高射砲を備へ防空設備に汲々たる有様である。

慎重なる態度を持し直ちに支那側に實地檢證を要求したが、支那側は誠意を示さず漸く十日朝に到つて檢證に同意した。實地檢證は早曉行はれ、その結果支那側が弄んだ説弁は完全に覆された。即ち(一)大山中尉が虹橋飛行場へ赴くものと誤認し事件が持上つたといふ主張は飛行場入口の現狀に照し撤回(二)保安隊員一名が大山中尉のために射殺されたといふ云ひ分は保安隊の同志打と判明これを認め(三)大山中尉が先づ射撃したとの主張も自動車の彈痕等から見ても事實に相違することを認めた。かくて我陸戦隊としては十分の證據固めを終り陸戦隊山内參謀、本田海軍武官等は夫々談話の形式で決意を表明した。◆上海附近を包圍する支那側の兵力は約十萬と報ぜられる。

十一日◆大山事件に關して海軍武官本田少將は午前十時、岡本上海總領事と會見し重要協議を行ひ、支那側の出様如何によつては斷乎たる行動をも決意せざるべからずとし政府に對し重大請訓を仰いだ。その會見後直ちに岡本總領事は上海領事團首席ノルウェー總領事の來訪を求め會談を遂げた。◆上海停戰協定委員會の第一回委員會でも支那側の協定踴躍は重大視されるに到る。◆我海軍は第三艦隊の兵力を増加して警備に任ずる旨發表した。◆北支に於ては數日來最も緊張して居た北平西北方の平綏線方面で、我軍は十一日午後二時半南口附近に於て中央軍第十三軍(軍長湯恩伯)の第八十九師(師長王中廉)と激突猛烈な砲撃を開始し、敵陣は一舉に潰滅し南口驛は火災を起した。事變勃發以來二十九軍とのみ砲火を交へて居た我軍としては始めて中央軍に見参したわけである。

十二日◆朝來南口附近の敵を攻撃中の我軍は午前八時燃える南口驛を占領、更に南口鎮を攻撃し、遂に午後八時三十分これを占據す。このは水上保安隊をして、黃浦江上流の防備のため、十二日夜支那側東門路附近の航路に三千トン級の汽船二隻を自沈せしめたが、更に十三日朝二十數隻の大型ジャンクを沈め上流への航路を閉鎖した。また我軍艦は午後四時半頃虹江埠頭附近で支那正規兵の重機關銃の射撃を受けたので、初めて砲門を開きこれを撃退すると共に同埠頭を破壊した。更に午後七時頃から上海市街を隔て、敵陣地へ猛砲撃を加へた。◆北支に於ては南口鎮占據の我軍は十三日午後鐵道線路兩側にある望樓を占領し、附近の要地も我有に歸した。◆南口鎮から退却する敵に對して我〇〇部隊はこれを空襲爆撃して殲滅し、榆林堡から張家口へ到る平綏線一帯の主要驛及び敵兵滿載の軍用列車三十餘輛を顛覆せしむ。◆我政府は上海事態惡化に對し、書記官長談の形式で聲明を發し、政府の方針を明かにした。

十四日◆上海戦局はこの日に到り俄然激化し空、陸、海にわたり激戦展開を見た。この日上海一帯は暴風雨に見舞れたが、早曉から地上戦闘頻發し、午前二時頃に北方と閩北及び虹江路の三方面から進撃して來た支那軍を砲撃退したのを手始めに、午前三時二十分北四川路、同四時二十分新公園方面及び八字橋方面、同五十分大紡方面の敵軍に應戦し閩北一面は強風に煽られ火焔猛烈を極め、八字橋一面の敵は迫撃砲で我軍に執拗に攻撃を續けた。我軍は午前五時二十分敵第一線根據地商務印書館に對し猛撃を加へた。◆夜に入つて我軍は敵の攻撃に應じ、總攻撃を開し、最も激烈な戦線は依然として八字橋三義里方面で、戦闘はそのまゝ翌朝まで引續いた。◆陸上と呼應して我軍艦〇隻は午後四時半頃吳淞砲台攻撃を開始した陸上の敵陣地目掛けて引續き砲撃を加へた。◆陸海の戦闘に加へて、今事變最初の空中戦が展開

際麥倉部隊長は重傷を負つた。◆午前二時過裝甲列車及び迫撃砲を有する五、六百の支那軍が良郷を攻撃して來たため我軍は直ちに應戦して午前五時過これを撃退した。◆南京政府は十一日夕刻、待機中の中央軍第八十七、八十八の二個師に上海租界へ向け出動命令を下し、軍用列車を連ねて進發し、十二日早朝には上海各驛に下車、停戰協定を無視して戦時配備を完了し、之に對應して我陸戦隊は午後八時租界内の非常警備についた。尙危險地帯の邦人に引揚命令が發せられた。◆停戰協定委員會は情勢により午後、臨時委員會を開會、列國は收拾案を提示したが命市長肯かず紛糾す。

十三日◆無氣味な緊張の中一夜を送つた上海では十三日朝九時半頃に到り、北四川路北站間の朝日街、寶興路、橫濱里等に便衣隊が現れビートル、機關銃等で我軍に對し射撃を開始したことに端を發し、我陸戦隊もこれに應戦し遂に上海も北支事變の渦中に卷込まれるに到つた。これと殆ど同時に同所附近の商務印書館附近の支那正規軍の機銃六十發發射あり、増援隊を送る等の敵對行爲露骨となつたため我陸戦隊は閩北方面一帯に進撃を開始した。正午過には支那空軍のマーチン爆撃機が租界上空に示威飛行を行ひ不法射撃は依然として繼續されるため、自衛上我軍は午後三時五十分これに對し發砲し應戦した。支那軍は午後四時十八分八字橋を爆破し、山砲を以て我陸戦隊本部方面を盛に砲撃し來つたため午後四時半に到り猛烈な攻撃戦が展開され、戦線は八字橋から東部工場地帯にまで擴大するに到つた、午後五時半には楊樹浦ゴルフリンクから西虹江クリクに至る地區の敵砲兵陣地から我東部防禦地帯に射撃し來り、又午後七時には江灣路東北端の我前線に突撃を行つたが、いづれも應戦し撃退した。◆支那側で

されたことは特記すべきである。午前十時支那軍の爆撃機一機が我陸戦隊本部上空に飛來して爆弾を投下、我陸戦隊は直ちに高射砲を以て應射、更に同時に、爆撃機四機は我軍艦〇〇に爆彈二個、また商景學校地區、楊樹浦紡績工場地帯、英人經營ジャードン・マゼンン會社上海碼頭通信省ケール修理船沖繩丸等に爆弾を投下した。こゝに於て隱忍をつけた我海軍も午後二時半、「必要にして且有効なる凡ゆる手段」を執る旨の聲明を發すると共に我空軍出動、午後三時郊外の眞茹上空で二機を以て敵一機を射落し、最初の空の血祭りとし、つゞいて虹橋飛行場を爆撃、更に閩北方面の中央軍を空襲しこれを掃射、更に同夜に入り、我〇〇海軍航空隊〇〇機は〇〇を出發し支那空軍根據地爆撃に出發、一部は午後六時半頃寬橋、杭州及喬司飛行場を、他の一部は午後七時半頃廣德飛行場を爆破し、寬橋格納庫一及庫外飛行機數機、廣德格納庫二、庫外飛行機十數機を爆破し、空中戦で敵の戦闘機四機を撃墜した。◆一方狼狽の支那機は盲滅法に爆弾を投下したため午後四時半にはバンド北京路に落ち、支那避難民多數を傷け、西京路に落ちたものはカセイ・ホテル玄關前に命中し、死傷者數百人、外人にも死傷者を出し、同四十五分には歡樂街大世界に落下支那人二百名死傷、その他浦東アジア石油のタンクに命中し、米艦オーガスタ號附近にも落下し又佛租界も多大の被害を蒙つたために英米佛各國の激怒を買つた。◆先日來上海同様抗日氣勢揚り事態惡化を見た青島では十四日午後一時頃我海軍巡邏隊四名が同市浙江路上を巡邏中カーキ服の一支那人が後方から自轉車で追かけて來てビートルを發射し二名を負傷せしめて逃亡、服部兵曹は一時間午後死亡した。我出先當局は日支共同調査委員會を組織し實地檢證を行ひ、同地もたゞならぬ雰囲気包

まれた。

十五日 この日に到り我空軍の活躍は果然壯烈を極めた。先づ午前八時半頃我〇〇編隊機は笕橋飛行場を爆撃、飛行場及格納庫に損害を與へ、空中戦で敵機九機を撃墜、更に午前九時喬司及紹興（杭州灣南岸）を爆撃。地上の敵機六機及格納庫を破壊、更に午前九時半には〇〇基地出發の我爆撃隊は長驅南京を空襲し、城内外の航空基地を雨中低高度にて爆撃し、格納庫三棟其他指揮所等を爆破し庫外飛行機十機以上を爆破す。尙蘇州附近及南京上空で敵戦闘機十數機と壯烈な空中戦を行ひ十機以上を射落す。尙正午に到つて暴風雨狭視界中に僚機を互に見失ひつゝ、敢然南昌飛行場を爆撃し格納庫三棟、庫外飛行機九機を爆破し、飛行場は大損害を與ふ。續いて午後四時半には杭州飛行場爆撃、地上の戦闘機一、格納庫四を爆破した。之に對し我軍では飛行機八台が犠牲となつた。上海では昨夜來引續く激戦に夜を明したが依然西部戦線八字橋附近が最も激戦で、午前五時戦線は膠着状態、我軍艦からも江灣一面の敵を攻撃、空軍もこれに呼應す。我武官室は敵の燒夷弾のため午前八時半全燒。正午前後支那軍は虹口の日本人密集地に砲火を集中し一時は恐慌を來したが損害なく我空海兩方の攻撃により沈黙す。この日の我空軍の大活躍、海陸の猛撃により居留邦人は怒眉を開いた。支那機の無軌道振りは依然續き、米艦オーガスタ號に爆弾二個を投下したが幸ひ被害はなかつた。北支において我軍は十五日夜、南口鎮兩側の高地を確實に占據す。〇事應極惡となつたので十四日夜我政府は緊急臨時閣議を開催重要協議の結果、十五日午前一時半に到り、隱忍を捨て、斷乎膺懲に出づる旨の聲明を發した。**十六日** 夜來の風雨も漸く歇み蒼空が靦く程度に回復、午前四時長谷

々全市を壓したが、十一時に到つて敵は沈黙した。十六日の閣議で全閣僚とも戦時經濟體制を承認す。

十七日 前日の空襲に引續き我〇〇海軍航空部隊は〇〇機を以て蚌埠及び淮陰等長江北方の空軍根據地を爆撃し、蚌埠に於て三機、及び大型格納庫一棟を爆破し、火災を起さしめた。陰阜では敵機一、倉庫一棟を粉砕す。更に他の一隊〇〇機は惡天候中に南方の海寧飛行場を爆撃し、敵大型爆撃機四、及び大型格納庫二棟を爆撃した。第三隊〇〇機は陸戦隊に協力して江灣鎮及浦東方面の敵砲兵陣地を爆撃し、その他上海戦線各所に徹底的爆撃を敢行空中戦で敵戦闘機二機を撃墜した。支那機は午前十時過四機虹口上空へ、十一時半には六機編隊で我陸戦隊本部上空に飛來した。我地上部隊は一齊に猛射を浴せ、一機は新公園附近に墜落、落下傘で降下した飛行將校を捕虜とした。午後二時半にはノースロップ型三機、戦闘機七機、カーチス十二機の編隊で虹口上空に飛來したが、地上射撃と我空軍協力して撃退す。地上では北停車場附近の戦線が最も激戦で、午前五時頃、先づ敵の迫撃砲が虹口方面を砲撃したに始まり、我軍これに應戦し、十時頃最も猛烈を極めた。又浦東方面からも虹口を砲撃し挾撃を企て、來たが、之にも反撃を加へ十一時これを沈黙せしめた。我軍は空からも敵砲兵陣地を爆撃した。午後三時頃には北停車場の敵陣地からの砲撃が邦人避難地點に落下したため邦人十八名の死傷が生じた。北支に於ては河北省に侵入した支那中央軍が平津包圍陣を強化し平津進撃の體制を整へて居り、山東方面にも中央軍が増派された。〇〇飛行場附近塘沽小站附近で遭遇戦を行ひ、又空軍は張北附近で敵の集團部隊を爆撃潰走せしめた。南口附近でも午前七時中央軍第三、第四師の部隊と遭遇し撃

川第三艦隊司令官は「抗日據點となる民間飛行場、同飛行場にある軍用機は勿論、軍用に轉じ得べき民間機に對し必要と認むる處置を講ずる」ため、附近一般民の立退を求むる旨の警告を發し、我空軍は夫々目的地向ひ出動を開始した。第三艦隊は旗艦〇〇及江上艦船並びに虹口上空を警戒すると共に浦東方面を爆撃し敵を制壓した。前日に引續き午前再び南京空襲を行ひ、更に午後他の一隊は奧地基地爆撃を敢行、午前十一時及午後零時半頃句容（南京、鎮江間）及揚州を襲ひ、句容飛行場では待機中のファイアット新鋭機十三台を爆破し、更に二十機の敵戦闘機と交戦しその十一機を撃墜した。更に同夜、〇〇海軍航空隊〇〇機は夜陰に乗じ南昌飛行場を急襲し大打撃を加へて無事歸還し、激烈なこの空襲戦を終つた。支那空軍は午前七時四十分五分約二十機が陸戦隊本部上空に飛來し爆弾を投下、更に十一時半には輕爆機七機飛來、〇〇及び陸戦隊方面に爆弾數發を投下した。その内一個は總領事館警察バルコニーに落下、虹口附近と併せて邦人四名即死した。敵の一機は我地上部隊の猛射に遭ひ火焔をあげて墜落す。〇水陸の戦線は夜半間斷なく續き午前二時頃から江灣、閘北の敵と砲戦を交へ、午前五時過、敵は日本人女學校方面に肉迫し來り白兵戦を演じ、陸戦隊本部附近にも集弾を見たが我方損害なし。對岸浦東側より敵は我〇〇艦の砲撃を始めたので午前九時半頃我軍艦〇〇から砲撃を加へた。午前九時頃戦線の最前線八字橋南方で二個旅の大敵と大激戦を展開三時間にわたる大白兵戦を演じ、敵を撃退せしめたが、貴志部隊長は壯烈な戦死を遂げた。夜に入り八時過敵は再び全線に亘つて攻撃を開始し我軍も亦猛烈に反撃を加へ大激戦となり、午後十時過には浦東より敵の虹口砲撃に對して我軍からも一齊に砲撃を開始し、砲聲殷

退、又他の部隊は亂泉附近を占領した。

十八日 この日も海軍航空部隊は華々しい活躍を見せて、一日の爆撃個所十二ヶ所に及び、完全に上海附近上空を制壓し、その〇〇部隊は敵陣地及び敵空軍根據地に對し終日果敢な爆撃を加へ、何れも多大の損害を與へたが、その主要な爆撃個所は次の通りである。

楊家宅、江灣鎮、大場鎮、遠東競馬場、楊樹浦東部、北停車場附近、商務印書館附近及び市政府附近の各敵陣地、南通及び南翔飛行場、昆山鐵橋、無錫常州間鐵道

この爆撃中に我機中には、機體に十數發の敵弾を受けて歸還したのもあるが被害なし。更に我が〇〇機は午後南京郊外軍用飛行場を襲撃して、同地に集結中のファイアット機二十一台を破壊した。地上の敵軍は早朝から虹口クリークの境界を越えて、我北部部隊に抗戦して來たため我陸戦隊はこれに對抗してよく戦線を維持した。午後に入つて新鋭部隊の増援を得たため守備線は強化され、士氣愈あがる。夜に入つて九時半頃敵の一機は月明を利し上海上空に現れ、燒夷弾を投下し、狄思威路、陸軍武官室附近、陸戦隊本部附近及び租界内の英陸軍警戒中の北部電話局附近に落下し火災を起した。午後二時上海を出帆避難民千四百名を滿載した長崎丸が吳淞附近航行中支那正規兵の小銃射撃を受けた。英政府では十八日の閣議の結果、日支兩國に對して和平勸告を行ひ、兩軍の上海撤退を勸告する方針に決し、米佛兩國に對し既にその協力方を要請した。北支に於ては午後三時〇〇飛行場を出發した我空軍は惡天候中に南口鎮上空に向つて飛翔し、德勝口、清水、延慶縣城を結ぶ一帯の山岳地帯の敵の大部隊に爆撃を敢行し

十九日◇十八日來蘇州、上海間の崑山鐵橋、無錫常州間の鐵道等を爆破したが、十九日には朝來開北、江灣、吳淞方面を偵察爆撃、又嘉興市街附近の敵兵及飛行場襲撃眞茹暨南大學附近及鐵道線路の密集部隊を爆撃した。午後には第四回目の南京空襲を敢行南京火藥廠を爆破し、邀撃の敵のノースロップ機一台を撃墜したが、午後八時頃には南京參謀本部及軍官學校を爆撃し構内各所に大火災を起さしめ、我軍は損害なく夜間飛行で全機無事歸還した。この四回にわたる空襲で南京は極度の恐怖状態を現出している。◇陸上では十八日夜軍艦〇〇が入港して有力な増援部隊が來着したため、十九日は午前零時から二時迄の間に敵兵數百名が東華紡附近に襲來して租界侵入を企てたに對し、早速この新銳の増援部隊が出勤して猛烈な反撃を加へて激戦約二時間で撃退した。更に増援部隊到着の結果士氣揚り租界東部から黃浦江に浴うて滬江大學方面へ進撃し、午前九時半には同方面にある招商局埠頭を占據した。◇ソ聯領地内某所で組立中の戦闘機九機が十九日中に組立完成し、近くブリヤート人の飛行士十數名とともに上海に到着する旨の情報が入った。◇北支に於ては依然南口が激戦地帯で、南口の西南方の地點で激戦が行はれたが、十九日未明にも山砲の掩護射撃の下に拂曉の山岳戦が行はれた。敵の中央軍は十里にわたる山岳部に戦線を張り、堅固な陣地を構築して居る。

二十日◇空襲部隊は相變らず壯絶な急襲を続ける。午前九時には廣徳飛行場を襲ひ、大格納庫を爆破、離陸準備中の敵機四機は側杖を食つて顛覆し、續く空中戦では敵のカーチス三型戦闘機五機を邀撃し四機を撃墜した。更に一隊は九江飛行場を爆撃、大型兵舎一棟を完全に爆破した。我軍に損害なし。又一方上海附近の空襲では南市の支那造船

所である江南機器局を完全に爆破。南停車場、兵器廠へも爆弾投下した。北部戦線にも同様爆撃を加へた。敵機も午前八時虹口方面へ六機を現し爆弾を投下したが被害はなかつた。夕方にも三機現れ軍艦〇〇へ無敵な爆弾を投下した。◇十九日夜、東部戦線の敵が楊樹浦方面の租界内に侵入し機關銃で我軍を攻撃して來たため、深夜の市街戦が演じられ、敵の裝甲車まで出勤したが二十日拂曉退却した。この戦闘中北停車場附近からの敵の砲撃で虹口地帯の邦人二名が傷いた。この戦闘で逃げ遅れた殘敵が便衣隊と共に諸所で抵抗するため朝から殘敵掃蕩作業に多忙であつた。◇夕刻、米艦艦オーガスタ號後甲板に高射砲弾が落下し水兵一名即死し負傷者十八名を出す事件が発生した。支那側の砲撃であると見られる。◇北支に於ては十九日夜半から長辛店南方六里の地點で涿縣方面から北上した有力な中央軍が突然攻撃して來たため直に應戦し戦闘は二十日朝に友んだ。良郷にある六百の敵は午後二時我飛行機偵察に驚き大房山方面に潰走し、我軍は豪雨について追撃した。◇二十日の定例閣議の結果軍需工業動員法が愈發動に決したが、立法方法は一本立ての強力な委任立法の形式をとらず細則的な立法をとることとなつた。

二十一日◇海軍航空部隊は午前六時半頃、揚州及徐州、午前八時寬橋の各飛行場を襲撃し、徐州では格納庫一、兵舎二棟、庫外飛行機十機を爆破、揚州では地上の敵機三機を爆破、空中戦で戦闘機一機を撃墜我軍の犠牲一機、寬橋では飛行機製造廠を爆破、連日の爆撃で同飛行場の施設は潰滅に歸した。◇敵機は朝、ノースロップ機六機一開機四機の空襲があつたが、戦闘機二機は我が水上〇〇機〇臺により眞茹方面で撃墜され我方には損害なし。午前八時半頃虹口上空に敵の爆撃機

一機現はれ、爆弾二個を投下し、邦人十名の死傷者を生じた。◇上海の陸上戦線の敵は二、三日來我軍の爆撃に依り萎縮し動搖を生じた模様で、書間は我空軍の爆撃を怖れて大なる活動を見ず、わづかに夜陰に乗じて我守備線の一部に襲撃を企てる程度で、午前零時から二時迄の間に八字橋及び北四川路アイシス活動官眞館附近で敵襲を撃退したり、東部方面では敵のタンク數台を我が〇〇車出勤して撃退した外、深夜から今晩へかけて四時間にわたり眞茹方面の敵砲兵陣地から虹口方面への攻撃に對しては〇砲を以て沈黙せしめ我が方は何等損害なし。◇二十一日夜にも四川路方面に襲撃あり、夜半に至るまで再三襲撃したが撃退し、楊樹浦方面西部に戦車を先頭に襲撃、明方まで激戦展開し、敵戦車二台を破壊し敵を潰走せしむ。◇北支に於ては支那軍が土肥原泰徳協定を破り強大な兵力を察哈爾省内に侵入し滿洲國に大なる脅威を與へつつあるため關東軍は二十日午後初めて飛行隊に出勤を命じ張家口を空襲、兵營並びに無線電信所を覆滅したが、更に二十一日には待機中の〇〇隊〇〇機が張家口の第四十三師司令部や省政府を爆撃し同地區に集結せる有力部隊に爆撃を加へて凱旋、他の一隊は同地東北地區敵陣空襲、更に他隊は懷來を空襲して湯恩伯の第十三師司令部や兵舎などを爆撃いづれも無事歸還した。◇同方面地上戦線は張家口北方長城を越えて内蒙に侵入して居た約三千人の支那軍に對して二十日夜半から攻撃を開始した關東軍〇〇兵團は敵に多大の損害を與へて二十一日午前十時完全に長城線を占領す。◇平綏沿線では依然南口鎮附近山嶽地帯の敵が頑強に抵抗を續け、二十日夜から一日拂曉にかけて城壁西南角の望樓を目指して決死隊が夜襲を敢行し、さすがの堅城も次第に我が軍によつて攻め落されて行つた。◇平漢沿線で

は良郷附近で北上軍を攻撃中の我軍は二十一日良郷西高地を占據し、津浦沿線では同夜獨流鎮南方三キロの七里堡を占據した。◇二十日夕のオーガスタ號上に彈丸落下した事件について我海軍當局は明かに支那側砲彈なる旨非公式に聲明を發した。◇青島方面は情勢益々險惡化し、稅警團の不法進出のため邦人訪は閉鎖の止むなきに至り、在留邦人中二千名は二十一日歸國の途についた。◇二十二日◇海軍機は南支に於て相不變縱横に活躍、一隊は江陰方面を空襲し黃山南麓の工場を爆破し、この攻撃で我一機は敵砲火の犠牲となる。他の一機は眞茹獅子林砲臺及嘉定に於ける敵の裝甲自動車群を爆撃し大損害を與へ、更に他の一機〇〇機は數回に亘り大場鎮及び江灣鎮にある敵の砲兵陣地、その他上海方面の敵戦線背後の據點、密集部隊を爆撃した。上海上空では午後三時過、我海軍機三機は寶山上空で敵戦闘機(カーチス・ホーク三型)九機と壯烈な空中戦を交へその五機を撃墜した。更に午後八時に至つて月明を和して六度南京空襲一時間半に亘つて光華門軍用飛行場及中華門外の兵器廠を爆撃し多大の損害を與へて無事歸還した。◇上海戦線では十九日來一の攻撃主力が東部戦線に集中され、二十一日夜も激戦が行はれたが、二十二日早朝には同方面の西部楊樹浦塘山路で交戦敵の戦車三を捕獲し敵は死體三百數十を遺棄したが、二十二日夜に入り敵は最後の攻撃を以て猛烈に砲火を租界に集中し、楊樹浦西部戦線突破を企てたが、我軍よく撃退、午後十一時頃からは東部滙山公園の北方地區にある第三十六師が猛撃して來たが初陣の土師部隊が之を租界外に撃退、開北方面では開北、北四川路北部戦線の敵が猛烈な砲火を切り夜襲して來たり、我軍は敵の一個中隊を全滅せしめたが、我軍の積極的攻撃は翌朝に及んだ

◆北支に於ては平綏戦線が最も激烈で、我空軍は地上部隊と呼應し宣化、懷來、新保安、延慶等平綏沿線の各地軍事重要機關を爆撃し敵軍の後方を擾亂し、午後三時には敵の要地八行山脈最高地一、三九〇メートルの南口八達嶺の中央部を爆撃、大損害を與へた。◆地上部隊は二十一日午前十一時二十分張北の南方長城線を越え、二十二日午前七時萬全(張家口西北十五キロ、交通要衝)に進出し南口方面で山嶽戦を續けた我が〇〇部隊は居庸關附近の長城の一角及びその東北方三キロの標高一、一五〇米の高地を、〇〇部隊は居庸關西方約十キロ附近の長城線の最高線標高一、三九〇米の高地を奪取し、〇〇部隊は午前四時鎮邊城東方五キロ標高一、二二〇米の高地及びその南方三キロ半を占領した。又〇〇部隊は夕刻鎮邊城に進出し、その西方及び後方地区を占領した。◆津浦沿線でも〇〇方面の猛撃を開始し、激戦は夜に入る、平漢沿線方面では良郷西北方の坨里村西方口頭鎮で二百名の敵に全滅的損害を與へた。我が空軍は午前この方面の敵陣地に爆撃を加へた。新開口北側高地も小林部隊の攻撃により午後五時占領した。◆冀察政權、河北省政府の没落のあとを受けて、中國大亞細亞協會が打倒國民政府、共產黨排除をモットーに成立、午後宣言を發した。總裁は齋變元、副總裁は高凌霄の兩氏に決定。

二十三日◆二十日夜半の南京空襲は前後二回に亘り午前二時に至つた。一方上海附近では海軍機四機が午前九時半寶山上空——高度三千乃至五千米の高空で三段配備の敵戦闘機(カーチスホーク及びボーイング)約二十七機と遭遇し、壯烈な空中戦三十分の後敵九機を撃墜、他の一機に損傷を與へて潰走せしめ我軍は損害なし。一方我〇〇部隊の上陸擁護のため〇〇方面に爆撃を敢行、その他、大場鎮、江南機器局

新公園北方の上海鐵道線路附近、浦東の敵有力部隊に夫々爆撃を加へた。◆我陸軍は愈々上海に到着、海軍と緊密なる協力の下に早朝某方面の上陸に成功し、午後我〇〇艦隊は陸海協同の實を發揮する旨の重大聲明を發した。◆上海戦線では依然として北四川路方面で衝突があつた外、豫想した敵の反撃はなかつた。◆北支に於ては良郷方面では朝來西方の北東營附近で激戦展開、一方居庸關の一部は午前六時我軍によつて陥落した。津浦沿線では豪雨中を赤柴部隊が苦闘の後、三十日八師の主力部隊約三千を潰走せしめ、敵は靜海方面へ退却した。◆蒙古軍政府最高首領部德王は察哈爾盟、錫林郭勒外四旗に對し不法侵入した中央軍及び共產軍撃破のため八月十日から軍事行動を起したが二十三日夜は日本軍と協力し潰走の敵を追撃す。◆二十三日夜ハル米國事務長官は聲明書を發して日支紛争に對する米國政府の立場を明かにし、九ヶ國條約、ケロッグ不戰條約を引用し平和解決を希望した。

◆福州に於て日本人一齊檢舉を行ひ、台灣籍民男女四十六名は暴行を加へられた上、全部銃殺さる。

二十四日◆我が陸軍部隊上陸第一夜は敵全線に亘る猛烈な反撃が豫想されたに拘らず、概して敵は攻勢に出ず午前一時四十五分、敵飛行機の上陸偵察は我が高射砲の一齊射撃によつて退却、北部戦線では我が陸軍部隊に對し彭浦鎮から砲撃を敢行したが、我が砲火により全く沈黙し、東部戦線は小衝突のみで我が軍攻勢裡に夜を明したが、午前八時半頃から浦東側の敵陣から我が〇〇艦隊が迫撃砲による猛射撃を浴せて來たので應戦し、午前九時半〇〇艦の主砲で敵陣を粉碎、我が空軍も出動し盛に敵陣を爆撃した。一方我が上陸部隊は某重要地點を占據して開北及び楊樹浦方面の敵背後を脅威する體勢に出たため、支那

軍は目下同方面に續々援軍を輸送して、我が軍の進出を阻止したため二十四日來隨所に壯烈な白兵戦が展開された。他の北部並びに西部戦線は一般に平穩であつた。◆陸上部隊に呼應して上海附近では我海軍機は崑山、嘉定、太倉方面を爆撃し裝甲車數十臺裝甲列車一臺を爆撃し、更に再び崑山鐵橋を爆破を試み完全に破壊す。一方では陸軍に協力して永安紡績並びに吳淞鎮を爆撃し多大の損害を與へた。◆更に海軍〇〇航空隊は新たに浙江の寧波、安徽の首都安慶の飛行場を爆撃して多大の損害を與へ、午後九時半頃には又も南京城外飛行場を爆撃し多数飛行機を爆破、炎焼せしめた。その際空中戦の結果我一機に負傷者一名を生じたが全機無事歸還した。◆平綏戦線の空陸共同攻撃は着々奏功し、大恒山脈の峻嶮を利用して五箇師を總動員し北平北方の我軍を猛攻した中央軍も遂に長城線から潰走し、追撃中の千田、奈良兩部隊の主力が二十四日早朝居庸關南門を占據、更に午後北門を占據して完全に居庸關を確保し、連日來の豪雨のための悪路をついて更に追撃を行つた。一方坂田部隊は松樹鎮を占領した後、二十三日長城の最高望樓一、三九〇高地を占領したが、この部隊の左翼から十日に行動を起した永野、山田及び栗飯原部隊は百嶺口、鎮邊城を占領した後二十四日長城線を占領し愈々懷來平野へ向つて追撃を開始した。◆張北攻撃の目的を以て前進した支那軍三個師は張北の西北約三千里の地點にある大益代山を中心とする蒙古軍に對し攻撃して來たので蒙古軍は敵の兩翼を包圍して二十四日拂曉から攻撃を開始し、又我が空軍も参加し猛撃を加へた爲、支那軍は死體二千を遺棄して潰走。◆關東軍諸部隊は午前七時孔家庄(萬全南方約四里)に入り、確實に平綏線を分斷し、その他各隊は續々張家口西南高地を占據して察哈爾省侵入の支那各軍の後方

を遮斷した。萬全縣も〇〇部隊により拂曉に占領された張北保安隊を以て城内の殘兵を掃蕩す。◆我が空軍はこの地上部隊の活動に呼應して荒天中を懷來方面及び大同を爆撃、大同驛城内兵營は完全に粉碎された。◆津浦沿線では夜來の豪雨と泥濘中を赤柴部隊は〇〇隊と協力して午前十一時靜海縣城を占領した。獨流鎮附近では午前八時大部隊の敵の反撃があつたが撃滅した。この戦場で共產軍の一部が津浦線方面にも侵入してゐることが判明した。

二十五日◆長谷川第〇艦隊司令長官は午後四時宣言を發し、二十五日午後六時以後大體揚子江河口の北方より廣東省汕頭附近に至る支那沿海に於て支那船に限り公私船とも交通を遮斷する旨を通達した。第三國船舶の航行の自由は妨害せざること勿論である。◆上海戦線では陸軍隊北部戦線方面はなほ對峙中だが、東部安田部隊は〇〇方面と呼應進撃を開始し正午頃柴北部隊は楊家宅一帶の敵を撃退して同地を占據した。陸軍部隊は全線に亘り進撃し、これを密接な關係にある我陸軍隊右翼部隊は朝來行動を開始す。◆楊樹浦東部方面にて戦闘開始以來頑強な攻撃を續行し大敵主力部隊は〇〇方面における我敵前上陸により同方面に移動した模様、前日に引續き北部、東部兩戦線は小康状態にある。◆我空軍は陸上と協力して敵の地上部隊の爆撃掃射を行ひ、正午には江南機器廠を爆撃したが午後三時頃上海上空警戒中敵のマルチン型重爆機三機襲來したため交戦して内二機を撃墜し他の一機に損害を與へそれが虹橋飛行場に不時着するや追及して銃撃を加へ灰燼に歸せしめた。敵のマルチン機四機は更に午後五時頃陸軍隊本部に襲撃したが我砲撃により一機撃墜吳淞鎮方面にも同時刻に敵のノースロット九機襲來、我〇〇部隊に掃射を浴せたが一機を撃墜す、午後八時にも

マルチン爆撃機二機現れ、敵は逆襲を企圖せる模様である。◆平漢線方面で早朝良郷附近坨里村方面で空陸一體の總攻撃が行はれ、附近の要害を占據、空軍は第一回滿水河、第二回平頂山に爆撃を行ひ、地上部隊も平頂山目指して激戦を行ふ。◆平綏線戦線では二十四日長城線の一角を越えて懷來平野に進出した我が長野、山田、相原の三部隊はこの朝も引續き攻撃續行、懷來方面の敵陣地を猛撃す。空軍も地上部隊と協力して午前五時より行動開始し、岡田部隊は蔚縣廣靈の敵を爆撃し、中富部隊は花稍、新保安、懷來、保安に集中の敵、及び陽原附近を退却中の敵を爆撃、柴田部隊は平綏線に沿ひ山西省内へ退却中の敵部隊を爆撃した後、平漢線沿線の○○部隊と協力して坨里北方高地に猛撃を加へた。このため察哈爾省内に侵入した約五ヶ師の敵は士氣沮喪し、退却を始めたものもある。◆去る十四日以来我海軍航空部隊の中支方面に於ける空襲の成果は二十五日迄の分を綜合すれば(海軍省副官談)

【支那軍の損害】
飛行機——地上爆撃約一一〇機 撃墜約六六機 計約一七六機
格納庫——約二五棟、外に火藥庫、兵舎、列車砲、戦車、鐵橋等を破壊

【我軍の犠牲】 飛行機十六機 行衛不明も含む
二十六日◆中支沿岸に於ける支那船舶の交通遮断に關し、外務省は航行遮断は自衛的措置であり、帝國海軍は第三國の平和通商を尊重するものなる旨聲明を發表し、海軍でも副官談の形式で同宣言が他く迄國際正義に立脚せる自衛的手段の範圍を出づることなき旨を明かにした。◆上海では我陸戦隊進出の結果、租界も漸く安全になつたため復

二十七日◆敵前上陸以來五日を迎へた上陸部隊は二十六日夜はじめて平靜な一夜を送つたが、二十七日拂曉敵は我鷹森部隊の最左翼及び倉永部隊の最右翼に向つて猛撃を始め激戦展開されたが、我海軍、空軍の爆撃に敵は沈黙し、我右翼部隊は水田中に激烈な白兵戦を演じた後敵の第二線を突破し○○を占據し、敵の主力部隊も同時に西方に向け後退を開始した。今朝來○○部隊は股行鎮の敵を砲撃して午前十時同地を占據し、後續部隊も朝來上陸を開始す。○○部隊は敵左翼部隊を逐次東方に壓迫して二十七日夜半には既に○○を完全に確保した。◆我空軍は地上部隊と呼應し上海一帶の爆撃を行ひ、京滬鐵路、抗角鐵路一帶の支那軍増援部隊を爆撃、正午には開北より大場鎮に通ずる滬大自動車路一帶の敵部隊を爆撃、午後二時より三時まで南翔、眞茹方面に集結中の敵後援部隊を爆撃、いづれも大損害を與へた。◆我海軍○○航空隊は第九次南京空襲を行ひ、警備司令部、兵工廠、新造中の飛行場その他軍事上の要點を爆撃した。南京はこの數次の空襲に怯えきつて、國民政府内部の動搖が著しく、政府官吏中地位を棄て、逃亡する者續出すること傳へられる。◆北支に於ては長城線突破の我が軍は懷來平地に進出して敗走の敵を壓倒し二十七日には確實に懷來を占據し、大庭、山田、長野、栗飯原各部隊の主力の入城を見、我が手に收めた。一方關東軍○○部隊は午前十一時張家口に入城、麥倉、奈良部隊は夕刻、康莊、延慶に入城した。我が空軍は大回及び蔚縣方面に潰走の敵を爆撃、下花園にあつた湯恩伯總指揮の作戦本部は完全に破壊された。◆平漢沿線に於ては午前九時には良郷西方の三九五高地を占據、午後五時には揚子崗北方三八二高地の敵陣地を占領した。この高地は敵の最大要地であつたが奪取戦では空陸の作戦が理想的に進

歸をはかるものが多くなつたが、長谷川司令長官は租界内の治安尙十分ならずとして支那軍の復歸進入を禁じ、外人にも自發的に復歸見合せを勧告することとなり、其旨布告を發した。◆海軍航空部隊は午前三時半頃南昌飛行場を空襲し、約五十發の命中弾で飛行場を破壊し上海附近では南翔、崑山、閔行方面の敵前に軍需輸送中の敵の列車數十台を爆撃した。◆英大使ヒューゲツセン氏は財政顧問、武官等一行と二台の自動車で午後二時頃南京から上海に向ふ途中、上海から五十キロ南方の地方で飛行機の爆撃に遇ひ、大使は貫通銃創を負つた。生命には別條なきも武官は日本飛行機により狙撃された旨報告して居るの

で英國政府も事件を重大視し、我海軍でも事件の真相調査を現地の管下各部隊に命じた。◆午前八時五十分我が○及び○の二艦は揚子江通州附近で支那軍艦隊日(五〇〇トン)が砲撃を加へて来たため直ちに應戦し、數分間で之を撃沈した。◆長城の天輪居庸關の一部は先に占據したが、午前十時、千田部隊は敵の夜襲を退けて上關を占領し、一宮部隊は敵を猛追して午後一時半遂に八達嶺を占據し、山頂高く日章旗を掲げた。居庸關を逃れ、八達嶺を棄てた敵は午前三時から九時迄の間に算を亂して敗走、同地占領により同方面山嶽地帯に蟠居する二個師の大軍も八達嶺西方の保安方面へ逃走し、我が竹田部隊外各部隊は綏東平野に進出し敵軍を追掃し、察哈爾省内の中央軍は大部分潰滅した。◆この地上部隊に協力して我が空軍は悪天候にも拘、南北戦線に出動し、島田岡田兩部隊及び中富部隊は馬廠兵營を爆撃、中富部隊の一部は王口鎮に陣地構築中の敵を爆撃した。一方栗山、柴田兩部隊は北部戦線の敵及察哈爾省から西方方面へ敗走する敵を爆撃して地上部隊と協力した。

抄した。◆各地に轉戦し大いに武勳を樹てつつある蒙古軍徳王並に李守信大將に對して畏くも閑院參謀總長官殿下から關東軍司令官を通じお賞めの御言葉を賜つた。

二十八日◆上海上陸部隊の精銳は二十六日から二十八日拂曉へかけて約四十時間に亘る激戦に於て敵の左翼點である羅店鎮を完全に占據。◆我海軍航空隊では午後上海市の南停車場一帶、及び龍華飛行場を爆撃、北停車場爆撃以後、唯一の軍用停車場となつてゐた南停車場は完全にその機能を喪失した。◆北支に於ては昨日三八二高地占領で有利な戦況を齎した平漢沿線では、桑峪村方面から敵の右翼をついた羽島部隊は廿八日朝來琉璃河北岸の花石片一帶の敵を攻撃し同地を占領した。平綏線方面では我神田部隊は門頭溝の西約二里王平村附近まで約二ヶ旅の支那軍を壓迫す。又懷來に入城したわが○○部隊主力は更に前進を續け、一部は午後五時半沙城(懷來西方約六里)に入城。敵は蔚縣方面に潰走、一方長谷川部隊は夕刻部磊莊の支那陣地を占領した。津浦線方面では沼田部隊が天津南方八キロの三間房を占領後、二十八日朝來その南方の小王莊附近で馬廠、滅河の運河を挟んで南岸の敵と渡り合ひ、空軍は立花隊久保木隊の全力を擧げて、王口鎮兵營、太沽馬廠間の小王莊の爆撃を行ひ多大の効果を擧げた。◆形勢不穩となつた廈門では、支那便衣隊が帝國總領事館を包圍するに至つたため二十八日所在帝國官憲は在留邦人殘留員全部の引揚げを決し、海軍部隊警戒裡に邦人全部引揚げを了つた。

二十九日◆上海北部戦線では二十八日夜半から八字橋、水田路方面の敵の新手を加へた有力部隊(中央軍第三師の模様)が我軍を攻撃した爲、こゝ二三日来膠着状態の同方面戦線には激戦展開され六時間にわ

たり、二十九日午前四時遂に敵を撃退したが、この戦闘に於て倉永部隊長は第一線指揮中敵弾のため壯烈な戦死を遂げた。◇我航空部隊の大部は友隊協力して上海戦線の敵陣地及び後方據点を浴く爆撃し、一部は廣徳飛行場を襲撃し低高度の爆撃を敢行し、兵舎附屬工場並びに大型飛行機一機を爆破し、ガソリン格納庫に火災を起さしめた。その際、我が一機は低高度爆撃敢行のため敵弾を受け自らガソリン庫に激突して壯烈な最後を遂げた。◇午前十一時上海を出帆傷病兵をのせて歸國の途に就いた我が病院船〇〇丸は病院船なること明かにする標識を持つに不拘、午後二時頃吳淞港外で吳淞砲台方面から砲撃され、三名の負傷者を出し、支那側の非人道的な行爲は内外各方面から問題視された。◇平綏戦線に於ては沙城に入城した我が〇〇部隊は二十九日夜新保安に進出、他方關東軍の〇〇部隊も嘗て湯恩伯の司令部所在地たる下花園に達し、我が兩軍の連絡成り南口より張家口に至る平綏線は完全に我が有に歸した。◇津浦戦線では、赤柴部隊は午後零時半豫定より早く靜海南方十二キロの陳官屯を完全に占領、敵は裝甲自動車先頭に潰走、我軍は更に同地南方の呂官屯を中心とする東西の線に進出、馬廠方面にある三十八師の残兵を壓迫す。◇平漢戦線では午後三時半三八二高地の右突角を占領し引續き羽鳥部隊は七〇〇高地の殘敵を掃蕩す。◇我空軍は秋空を快翔して桃花堡、西河營、蔚縣の諸路上を退却する敵を爆撃し、更に蔚縣南方西柳林を爆撃、他の一隊は保定の西方涿源爆撃、集結中の敵騎兵部隊を潰滅せしめた。◇平綏線方面でも我空軍は再度大同を一齊に急襲、劃期的長距離爆撃を敢行した。◇國民政府外交部は午後五時、去る八月廿一日付を以て支那とソ聯邦間に締結を見たソ支不可侵條約の内容を發表した。◇ドッツ英代理大使は午

後二時廣田外相を訪問、ヒューゲッセン英大使の遭難事件に對し本國政府の通牒を手交した。
三十日◇上海戦線における支那軍は二十九日正午頃から夜半にかけ大部隊の入替を行ひ、宋希濂の二十六師を引込めて六十一師(師長楊步飛)に入替へ八十七師(師長王敬久)八十八師(師長孫元良)兩師の一部と新十師の十一師(師長張興碩)を前線に配置した。従つて二十九日から三十日にかけては敵は殆ど砲撃を行はず。◇三十日拂曉、我空軍は江灣鎮、廟行鎮及び大場鎮を爆撃、軍艦〇〇は市政府方面の敵に猛撃を浴せたが敵の反撃なく、我軍は午前八時増援隊の到着を見、午後四時迄に全部上陸を完了した。◇我〇〇海軍航空部隊の〇〇は午後八時頃、津浦線と隴海線の交叉する軍事輸送の重要地點たる徐州を空襲し、軍需品を満載した貨車群を爆撃粉砕した。◇吳淞港外假泉中のダラー汽船ブレジデント・フーヴァ號に對し、午後五時頃支那軍飛行機一機が爆弾を投下し、船體には直徑二十五呎の大穴が開き、船客、乗組員七名負傷し内一名は後死亡した。◇我軍艦〇〇並びに英艦艦カンドーランド號は現場に急行し、一方、我海軍機二機は五時半頃揚子江のライト・シップ附近でフーヴァ號を爆撃した支那空軍のカーチス・ホーク機三機を認めこれを追撃、その一機を撃墜した。南京政府は夜聲明を發し、全責任を負ひ十分なる辨償を爲すべき旨を明かにした。
◇北支、平綏戦線に於ては〇〇部隊が萬全西南方部嘉莊を占領し、空軍は平綏戦線の敗殘兵を追撃し、中官部隊は河北省の涿源、固田部隊は察哈爾省の蔚縣、西河營に集合中の敵を爆撃した。三十日には平綏線は柴溝堡以東を確保するに至つた。◇二十九日巴圖魯子占領した滿洲國〇〇部隊は赤城にある高桂滋軍の第八十四師を撃滅すべく前進し

三十日皇軍部隊と協力して赤城を占領、獨石口、赤城、永寧の熱河省境を確保した。◇津浦沿線では先日來奮闘中の赤柴部隊が午後四時半呂官屯を占領し、敵二十九軍に大損害を與へた。◇南京政府は國際聯盟理事會に對し「日本の支那侵略に對する抗議」なる覺書提出した。
三十一日◇我〇〇海軍航空隊は大舉南支方面における敵の主要航空根據地に對して空襲を敢行、廣東方面は白雲飛行場、天河飛行場を爆撃、福建省の漳州飛行場、廣東省の韶關飛行機製造廠を爆破し、福建省では建甌火藥庫を爆撃せしめた。◇上海戦線に於ては三十日の増援部隊到着を待つて、三十一日拂曉より積極的行動を開始し、江上よりする砲撃、空中よりの爆撃の緊密な協力下に午前十時鷹森部隊の主力をもつて敵の猛射中を吳淞鎮北側地區に上陸強行し、又一部隊を以て吳淞クリーク鐵橋方面からこれに呼應して、攻撃戦五十分の後、吳淞鎮並びにその北方地區を占領し、更に敗走の敵を追撃して、夕刻には酒塘クリーク以東一帯を我軍の手中に收めた。◇我空軍は南支を襲つた外廣徳飛行場を空襲し、大型爆撃機外數台を爆撃し、又閩北の砲兵陣地に對し、終夜その上空に照明彈を投じて威嚇し、中山路附近の敵を爆撃した。◇北支に於ては津浦沿線の前日に引續く追撃戦の結果中井部隊は王口鎮を占據し、一方〇〇部隊は雨中唐官屯の敵陣地に猛撃を與ふ。我空軍も津浦線方面攻撃に重點を置き鳥田、中富、岡田三部隊は滄州を爆撃し大打撃を與へ、王口鎮、小王莊附近でも地上部隊と協力攻撃を行つた。◇南京政府は國防會議の結果、白崇禧を全軍總指揮に任じ張治中を上海地區總司令とした。◇察哈爾方面で關東軍は三十一日迄にダムダム彈約二萬發を推收した。
九月一日◇吳淞鎮を確保した鷹森部隊及倉永部隊の一部は一日正午か

ら果敢な前進を行ひ敵の退路を絶ち自兵戦を演じ、敵軍の投降者續出す。◇一方遼東部隊は月浦鎮、獅子林砲台附近の敵を攻撃し、午後三時頃、獅子林砲台を攻略して南進し敵は南北部隊の中間地區に追ひ詰められた。◇空軍は陸軍及び江上艦隊の戦闘に協力して吳淞、太倉、常熟、劉河鎮方面の陣地を爆撃し、夕刻には敵の作戦基地たる眞茹無電台附近一帯及び、敵の後方連絡線、滬杭線、松江附近の鐵道を爆破す。陸戦隊は閩北内にある殘敵に對し巨砲の威力を發揮し、我軍艦〇〇の飛行機も同方面並びに南停車場の爆撃を行ふ。◇この日午前十一時我陸軍〇〇部隊は上海〇〇埠頭に上陸開始、歩武堂々共同租界市中を行進し、在留邦人歡呼してこれを迎へた。◇前察哈爾主席劉汝明は我が軍の進撃に抗し得ず身を以て山西方面に逃亡したが張家口一圓の地盤に未練を感じて、一日降伏特使を我指揮官の下に派して和平降伏を申出たが我方は之を拒絶した。
二日◇二日間にわたる我軍の猛攻撃により吳淞砲台も遂に陥落し午前九時半棚橋部隊長が手兵を率ゐて乗込み砲台上に日章旗を翻した。◇江上の我艦隊は陸軍の戦闘に協力して吳淞方面の敵を制壓したが、午前七時頃楊家宅東方端の敵陣地に對し、猛射を浴せ、航空隊は晝より夜へかけ江灣鎮、大場鎮方面の敵陣地へ爆撃を加へ、夜に入つては敵の後方に照明彈を投じて敵の企圖を攪亂し爆撃を加へた。◇一方永津部隊の一部は羅店鎮の殘敵を追撃し、午後三時頃羅店鎮西方約一里の地點を確保す。羅店鎮上空では空中戦が行はれた。◇陸戦隊は拂曉閩北方面からの敵の砲撃に對し、同地區内に敵密集部隊を發見し巨砲を以て痛撃しこれを潰滅せしめた。◇尙空軍は午後三時四十分、國民政府が軍用及對歐米遊宣傳に使用中の眞茹無電台に對し、第二次爆撃を敢行

し、無電台建物四台中三棟を倒壊、一棟を全く破壊した。◆平綏線方面では進撃中の長谷川部隊は一日懷安鎮及び永嘉堡(山西省)の敵を撃退して完全に同地を占據した。◆二日の臨時議會に於て今回の主變は今後「支那事變」とすることに正式決定した。

三日◆數日來や、平靜状態をつけた上海戦線では、午前浦東側からの敵の猛射により又激戦が開始された。即ち午前十時我が哨戒艦の監視を冒して共同租界から浦東に渡らうとするジャンクを制止しようとした處、突如射撃して來たので、之に應射、轉覆せしめた處、これを救はうとしてか數百の便衣隊の正規軍(五十五師を主力とするもの)が浦東側の江岸に現れて我が艦船、總領事館方面に對して機關銃を猛射、更に米艦オーガスタ號、佛艦ラモット・ビケ號等の蔭にかくれて迫撃砲を以て射撃して來たため、我方も艦砲を以て應戦午後三時漸く制壓したが、敵は午後五時四十分再び我領事館方面に向けて砲撃を開始、共同租界方面は盲目的敵弾に被害多く、我が總領事館において四名の重傷者を出し、虹口地區内には重傷者續出、遠く南京路鼓馬場に落下した一弾では外人十六名も負傷した。この非戦闘員住居地域に對する暴虐行爲に對し、我が空軍は極度に憤激し、空軍は浦東の敵砲兵陣地向つて盛んに爆撃し、浦東側には火災起り、我陸戦隊と共に上海上陸、陸軍部隊は始めて參加協力砲門を開いて猛攻撃を續けた戦間夜に入つても續き、我が空軍は敵陣地に夜襲を試みた。◆一方驅逐艦〇隻は午後一時厦門港内に進入して白石砲台、飛行場湖里山、大盤角砲台に猛烈な攻撃を加へた。◆北支では平綏線列車の運行により十河大泉兩部隊が同列車で〇〇方面に勇躍出動した。◆今回の支那事變對策を樹てるべき第七十二臨時議會は三日召集された。

して砲火力を最高度に發揚して攻撃し、偶々淺間部隊が北方から寶山西方地區に進出したのと、鷹森部隊左翼方面に天谷部隊の南方より、砲撃前進を開始したことにより、正午頃金家宅附近の敵地を、突破して寶山城に日章旗を懸すことが出來、これにより淺間部隊と天谷部隊との連絡を完成するに到つた。鷹森部隊の決死挺身隊四十餘名は午後七時頃から敵の物資彈藥の補給根據地である金家宅彈藥庫(金家宅四方一キロ)攻略のため機銃隊掩護の下に突撃し激戦二時間餘にして午後九時これを占據した。◆一方三日吳淞砲台に上陸した安達部隊は五日午前十一時前進開始、寶山縣城西方の淺間部隊と夕刻に到つて聯絡なり、揚子江上流地方に上陸の我〇〇部隊と吳淞上陸の〇〇部隊は完全に聯絡、永津部隊も羅店鎮附近で寶山方面から前進した五、六百の敵を邀撃してこれを全滅し、揚子江沿岸羅店鎮、吳淞鎮を結ぶ江岸一帯は我軍の占據するところとなり、敵は第二線陣地に後退した。◆早朝眞茹方面を偵察中の我海軍航空隊は北新滙附近で敵の大密集部隊の移動中なのを發見、爆撃掃射を行ひ、敵の死傷は數千に上る見込み、午後には上海東部戦線の敵陣地向け爆撃を敢行、大打撃を與へた。◆北支に於ては連日攻撃を續行する津浦戦線では中井、赤柴兩部隊が唐官屯占據の餘勢をかつて、大張屯、小張屯、只官屯、後屯、前屯、國莊、燒窟盆等の敵の立てこもる各部落を撃破して夕刻には馬廠を完全に確保し、馬廠の一部をも占據した。◆平綏戦線に於ては察哈爾、山西省境の長城を越えて山西省に進出した〇〇有力部隊は山西省に入り天鎮縣城の東千二百五十高地を占據し午後七時には田家灣、李兒口新平堡を結ぶ線に進撃した。◆香港の日貨排斥が強化され邦人事業も閉鎖の已むなきに至つたので、五日には基隆へ向け三百人の婦女が引揚げ

四日◆前日の厦門攻撃に引續き四日午前十一時我が海軍〇〇艦〇隻は航空部隊と相呼應して、汕頭南方汕尾及媽宮に對して攻撃を開始し、更に午後一時から兵力増加し、敵に多大の損害を與へた。◆上海戦線では海軍航空隊の徹底的爆撃の快報が行はれた。まづ前日の浦東、閩北方面の敵に對し、四日早朝まで爆撃を實施し、浦東の金家巷鎮附近及び閩北、北停車場附近の敵には大動搖の色が見え更に我が空軍は午後二時頃南翔附近で迷彩せる裝甲列車數十台を認めこれを爆撃し、又支那軍が安全地帯として閩北方面の作戰據點に利用中の英米警備區域隣接地區にある砲兵陣地に對して、租界上空飛行を避けて急降下爆撃を敢行した。◆上海北部戦線に於ては吳淞砲台を占據後寶山城に向て前進中の鷹森部隊は、三日朝寶山城を隔てた七百メートルの揚行鎮に通ずる道路の並木附近までせまり、獅子林砲台占據後南下した淺間部隊と協力して四日一舉に寶山城攻撃の態勢を執つた。◆北支に於ては津浦戦線では赤柴部隊が唐官屯、馬廠附近の敵陣地を攻撃、飛行隊も降雨中を協力爆撃を行つた結果、午後四時唐官屯(天津南方七十三キロ)を占據。

五日◆去る八月廿五日の宣言による支那船航行遮斷區域を全支の沿岸に擴大、五日午後六時以後實施する旨我海軍當局並に外務省から公表された。大體山東、江蘇の省境を境界として以北は吉田〇艦隊司令長官、以南は長谷川長官によつて分擔され、その内青島、香港、澳門を除外したもので、勿論第三國の平和的通商は尊重するものである。◆上海北部戦線では四日午後四時から〇〇部隊の密接なる協力の下に金家宅、曹家濱附近の敵に對し攻撃中の鷹森部隊は頑強な敵の抵抗のため激戦夜に入り、五日朝同部隊は寶山城南側並に金家宅附近の敵に對

た。六日◆支那沿岸航行遮斷のため廣東珠江入口赤灣を警備中の我が〇〇艦に對し、六日午前赤灣砲台及び安寶縣から砲火を浴せため、我が艦もこれと應戦し、東砲台は火災を起した。寶安縣城に對しても砲撃を加へ、各所に火災を起した。これに協力して我が海軍航空隊は赤灣砲台寶安縣城に爆撃を行ひ、更に海軍機〇機は汕頭バイアス灣、厦門を爆撃した。◆虬江碼頭を確保。上海東部戦線では陸軍石井部隊の一部及び砲兵部隊の一部が共同租界に上陸して、五日夜滬江大學附近に攻撃を準備し、六日午前六時頃から攻撃を開始し、陸海軍の砲兵射撃及び海軍航空隊の爆撃と相俟つて頑強なる敵を排除しつ、午前十一時界濱港クリークの線に進出、更にこの攻撃を容易ならしめるため、石井部隊の一部は午前六時頃から陸海軍協力の下に虬江碼頭に敵前上陸を敢行し、陸戦隊の一部は軍工路西側の地區から楊家宅の線に進出、江上の我が軍艦からも掩護射撃を續行、正午には飯田部隊が虬江碼頭の敵を追拂つて完全にこれを占據した。◆この日午後五時上海上空に初めて我陸軍機〇〇機が姿を現し、敵陣地上空に長時間に亘る初陣の偵察飛行を行つた。◆北支に於ては、津浦線馬廠攻撃第三日の戦間が續き、我が軍は馬廠河鐵橋附近の陣地に據る敵を攻撃、この日早朝赤柴部隊は馬廠河と運河の三角地帯にある靜官屯を占據した。◆五日來河北察哈爾省境の大安山山溪の敵を攻撃中の神田、岡本兩部隊は午後四時敵の要害たる千君台(北平西方約五十キロ)高地を完全に占據した。七日◆泗塘クリーク突破。上海北部戦線寶山城占據の鷹森部隊は泗塘クリークの線を越えて前進し、午後には金家宅の線に進出、これに連撃して石井部隊は沈家上老楊宅の線に、川並部隊は吳淞クリーク南方地

區から大齊灣、蘆上濱の線に進出した。◆寶山縣城北地區で敗殘の敵を全滅せしめた天谷部隊は午前九時朱家宅で羅店鎮北方地區から長驅南下した。淺間部隊長と故國出發約三週間振りに劇的會見を行ひ、直ちに一隊となつて進撃し、夕刻月浦鎮東方王家宅附近に進出した。◆東部戦線の飯田部隊は界濱港クリークの線を越えて前進江碼頭に上陸した中村部隊と合して、朝來軍工路に沿ふ地區の敵陣地を攻撃した。◆我が○海軍航空隊の三機は蘇州附近、太湖上空で敵のカーチスホーク戦闘機七機と遭遇、空中戦に於て四機を撃墜し、更に逃げる一機を撃墜した。又杭州及び廣徳をも空襲し杭州笕橋飛行場では數度にわたる我が爆撃を逃れて居た一部工廠建物を爆破した後、更に嘉興飛行場を襲ひ多大の損害を與へた。◆北支戦線では馬廠攻略第四日を迎へ、久し振りの快晴に赤柴、中井兩部隊は馬廠兵營、人和鎮を指呼の間に望み猛撃をつづけ、光井部隊は敵兵營の内部に猛烈な砲撃を行つた。◆平緩戦線では天鎮の山西軍を撃破した我が部隊は拂曉より空軍の爆撃、及び砲兵陣地の砲撃掩護の下に陽高、大同方面に逃走する支那軍に對し一齊に追撃を開始した。◆我が軍艦が香港東南方凡そ五十哩の地點にある東沙島を占據して兵員を上陸せしめたとの報が香港から傳へられた。同所には英國の無電台、氣象台があり、軍事上の重要地點で英當局は極めて成行を重大視して居ると傳へられる。

八日◆上海東部戦線では軍工路附近の激戦は昨夜から朝に續き、海砲の砲撃、空軍協力の下に左翼は午前十一時界濱港クリークに接近する第一、第二トーチカ陣地を突破し軍工路西方約一軒の沈家行鎮を占據した。中部戦線では突角陣地涇港地區の我が陸隊は早曉から其美路北端市政府一帯を猛撃した。◆北部戦線では朝來月浦鎮附近の敵を攻撃中の天谷部隊は正午頃月浦鎮東方約三百メートルの線に進出し、羅森部隊及び石井部隊は朝から攻撃を再開、酒塘クリーク西方約二キロメートルの廟家宅、金家宅、沈家宅の線に進出、川並部隊は一部隊を以て南方に進出、正午頃沈家宅、李家宅の線に進出した。◆閩北方面では七日夜半から敵の夜襲があり激戦六時間の後午前四時これを撃退した。◆我が海軍機の活躍に伍して午後五時半には待望の陸軍機○機が羅店鎮前面に集結中の敵を爆撃した。◆臨時議會閉會。第七十二臨時議會は八日を以て終了二十億二千二百萬圓の臨時軍事費及び戰時立法十一法案は全部成立を見た。

は、激戦三時間の後周家宅にある敵大部隊を撃滅、午後二時同所を確保した。◆北支津浦戦線では、この日流河鎮占據により意氣軒昂の沼田、長野兩部隊は赤柴部隊と聯携して馬廠陣地に猛攻撃を浴せたが一方岡田、島谷兩部隊及び島田部隊の空の精銳は、これ等地上部隊と呼應して午前午後二回に亘つて敵陣地を空爆、大打撃を受けた敵は總崩れの形となり漸次南方に向けて潰走を始めた。◆平緩戦線の長谷川部隊は午後五時半陽高縣城に堂々入城し、殘敵掃蕩を開始した。

九日◆馬廠遂に陥落。北支津浦戦線では、昨夜來浮腫となつた馬廠の敵に對し午前零時半を期して全線に亘る夜襲を執行したが、早曉にはさしも敵が難攻不落を恃んだ堅壘も攻略七日我が赤柴、中井兩部隊によつて遂に陥落、續いて赤柴部隊は空軍協力の下に逃げる敵を追つて南進又南進午後三時半には早くも青縣城を奪取した。◆平緩戦線の○部隊は早曉より空軍と協力して、大激戦の後午後一時過聚樂堡を占據した。この戰間に於て我方は大生棧城大佐以下三十數名の戦死傷者を出した。◆一方○部隊は夕刻察哈爾南部の要衝たる蔚縣城を占據、堂々入城した。◆支那共產軍は、國民革命第八路軍に改編され、愈々北支戦線に進出を開始したとの情報あり。◆南支方面では、我が軍艦○隻は再度赤灣を砲撃し、反撃の態勢にあつた敵に多大の損害を與へた。又○艦載機○機は紅海灣媽宮兵舎を爆撃した。

の脅威を、完全に封殺することが出来た。◆海軍飛行隊○機は南支珠江の要害虎門砲台を爆撃、砲壘を粉砕悠々引揚げた。◆支那聯盟に提訴。聯盟の支那主席代表顧維鈞は聯盟事務總長ジョセフ・アヴノール氏に宛て、南京政府は聯盟規約第十、第十一、第十七條を援用日支問題に聯盟に提訴する旨の通告を發した。

十四日◆江灣包圍戰開始。上海戦線では、東部戦線の敵が江灣鎮附近に集結したため、今や上海戦の中心は江灣に移つた観がある。敵は吳淞方面より進撃して来た部隊によつて北から、市政府方面から追撃して来た陸軍及び陸戦隊によつて東方から、又陸戦隊の北部隊によつて南方から各々攻撃を受け、三方包圍の形となつた。又この日我が戦車隊の活動は目覚しく、各部隊と協力して敵陣を縦横無盡に踏みこじつた。◆永定河敵前渡河。平漢線良郷西方高地から東方寶店鎮、長安城を経て固安の東方に至る永定河右岸、蜿蜒二十里の陣地に蟠踞してゐた敵は、我が軍の攻撃のため長安城より永定河下流に至る線から退却を開始したので、我が石黒、坂西、森田各部隊はすかさず正午永定河を渡河して追撃に移つた。◆一方○○部隊も之に連繫して、固安東南方に於て決然永定河を渡河、河岸の堅固なる敵陣地を撃滅し、悪路を冒して敗残兵の抵抗を排除しつゝ進撃を續けた。◆島田、島谷兩部隊の○○機、中富、岡田兩部隊の○○機の精銳は一路保定、正定の空を掠めて石家莊に向ひ、同地の平漢、正太兩鐵路の驛一帯を始め附近の機關車、倉庫、軍需品集積場等に對し集中爆撃を敢行したが、これは北支に於て我が空軍が試みた最も大規模な爆撃であつた。◆軍艦○○及び○○驅逐隊は、南支珠江の江口虎門要塞に近迫し、砲臺下にあつた敵巡洋艦二隻と川鼻島及び大角頭砲臺を攻撃したが、敵艦は共に大損

害を受けて擱座、川鼻島砲臺も交戦約三十分の後沈黙した。この間敵兩艦及び砲臺からの射撃が近距離に落下したが、我方に損害はなかつた。◆米武器輸送嚴禁。ルーズヴェルト大統領は、米政府所有船に對し日支向武器輸送を嚴禁し、一般民間船舶に對しても殆ど禁止的警告を發した。これは中立維持法の發動とは別であるが事實上同法發動の第一歩と見做される。

十五日◆兩軍司令官發表。寺内壽一陸軍大將は北支陸軍派遣部隊の最高指揮官として、松井石根陸軍大將は上海陸軍派遣部隊の最高指揮官として夫々現地に到着、指揮を執りつゝある旨陸軍省よりの發表があつた。◆房山に日章旗。昨日永定河の敵前渡河を敢行進撃中の石黒、坂西、森田各部隊は午前七時固安城を抜き、拒馬河左岸に迫り月明を利用して渡河を敢行した。◆固安東南方地區の○○部隊は敗残兵の執拗なる抵抗を排除しつゝ牛駝鎮に迫つた。◆敵左翼平漢線琉璃河一帯に對しても我が○○部隊の攻撃が開始されたが、拂曉支那軍が最も堅固な陣地と特んだ天險房山は陥落滑子崗南側高地及び田各庄附近の陣地も夜襲の結果我が手に歸した。◆尙空軍も地上部隊と呼應して、全線總攻撃を敢行し、牛駝鎮、永清縣城、容城縣城、霸縣城、白溝河鎮涿州縣城、定興等を空爆、河北の敵を空から蹂躪した。◆平綏線の山西軍を追つて昨日口泉鎮一帯を占據した我が長谷川快速部隊は、更に南進を續け、早晩には懷仁縣城及び同城西方にある山西軍兵營を完全に占據、尙も敵を追撃中。◆我飛行機○○機は、山西の長城線を越え長驅山西省の首都、閻錫山の常住地である太原上空に現れ、午前と午後に亘り兵工廠その他數ヶ所に爆撃を敢行、市内は極度の混亂に陥つた。◆又別隊は河南省の洛陽飛行場を空爆したが、その際敵戰機八

機が立ち向つてきたので、こゝに北支最初の空中戦が展開され、大格闘の末敵機は敗退した。我が方には損害はなかつた。最近廣東軍飛行機は汕頭以西の海岸線で頻りに我艦船を狙ひ、我封鎖に挑戦するに至つたので、我空軍は十五日夜十時四十分突如○○機編隊廣東飛行場を襲撃、無事基地へ引返した。◆揚子江下流に皇軍の精銳が上陸して四週間、江南三角地帯は平和境に生れ變りつゝあるが、殊に寶山縣城を中心とする突端地域の更生は素晴しく、同地の住民五百名は中南支初めての治安維持會を自發的組織し、十五日住民は我が軍に對し感謝狀を提出した。◆上海戦勃發以來一ヶ月、皇軍によつて撃滅された敵軍は既に五個師五萬を下らずと見られて居るが、蔣介石は戦局の不利を非常に苦慮し、嘉定、南翔の線で、我軍の追撃を阻止しようとの作戦のもとに、北支戦線の有力部隊をも南下せしめて廿五萬の大軍を上海戦線に集中、馮玉祥をその總司令として戦線に派遣してゐることが殆ど確實となつた。◆從來支那側の宣傳機關は、常に支那側が戦勝を博し日本軍が敗退せる如く逆宣傳してゐたが數日來南京、長沙、開封などのラヂオ放送は不思議にも從來までのデマ放送を一擲し、各戦線に於ける支那軍の敗北狀況を知らせ、所詮支那側は全面的に敗退の外ないとの豫測までも放送して、危局深刻化を暴露してゐる。◆支那事變に關し南京政府が國際聯盟に提訴したに對し、我が外務省は情報部長談の形式で帝國政府の態度を表明し、支那側の根據なき主張を反駁した。

右岸の據點を占め終つて、涿州城目指して進撃中。◆早朝空の精銳○○機は平漢線の敵本陣保定城に對し大爆撃を敢行したが、午後九時頃には島田部隊が再度同地を襲撃、我が陸軍空襲部隊創始以來の劃期的夜間空爆に成果を収めた。◆又この日我が空軍は保定に向け潰走中の敵の退路を斷つために、高碑店停車場及び南側の易縣へ通ずる支線分岐點の轉轍地を目標に連續爆撃を行ひ、これを完全に破壊した。◆南口戦を経て察哈爾に進撃、蔚縣、陽原等を攻略し、更に山西省内に進撃して廣靈を占據した我が快速部隊原部隊は、降雪のあるやうな寒氣と、粗悪なる給養をも克服しつゝ早くも渾源に達した。◆一方陽原、蔚縣を経て峻峻の山道を南下し來つた山田部隊は、察哈爾省境を突破して涿源を陥れ、保定の心臟部を早くも二十里近くに望む態勢を取ら至つた。◆上海戦線羅店鎮方面の○○部隊和知兩部隊は朝來兩を冒して行動を開始、激戦十二時間の後敵の堅壘馬橋を奪取、更に巽家宅、奚家宅を相次いで確保、二時間後の午後八時過には月浦鎮と羅店鎮を結ぶ地點まで記録的な猛進を遂げた。他の戦線にはさしたる變化はなかつた。◆我が○○驅逐隊の陸戦隊は友軍飛行隊と協力し黎明を破つて海州灣の重要地點車牛山島に上陸し、苦もなく同島を占據した。同島の燈臺は我が軍の海上封鎖宣言以來光を消してゐたため洋上の航行に非常に不便を來してゐたが、我が海軍の占據によつて再び點火されるに至つた。◆南支の海南島唯一の港口は夕刻我が驅逐艦○○隻の猛撃により初めて砲火の洗禮を受け、警備司令部、兵營、無電臺等多大の損害を受けた。◆我が海軍航空部隊は昨夜の廣東空襲に引續き又も夜間空爆を敢行し、同所飛行場を襲ひ兵舎を爆破し、大型格納庫三棟に火災を起さしめた。尙他の○○機は揚陽及び潮州を空襲し、

其の軍事施設に多大の損害を與へた。

十七日 平漢線の戦況は極めて有利に進展、拒馬河の敵前渡河を完了して涿州に迫りつゝあつた石黒、坂西兩部隊は早朝涿州の南方松林店驛に雪崩の如く進出、逃げる敵を西方に急追した。一方森田部隊は更にその南方北三家へ先廻りして敵の退路を斷ち、平漢線を南下しつゝ馬頭鎮を占據した。産山部隊は敵を西南方に壓しつゝ涿州に肉迫して来た。北方房山附近の歩・砲兵からなる部隊は早朝石樓村を扼し、これ又南進を續けてゐる。かくして涿州附近に取り残された孫連仲の約三箇師及び中央直系の約二箇師は我が軍の包圍圈内に壓縮せられて進退谷に至つた。陸軍機は曉闇を衝いて三度保定を襲ひ、敵の雨の如き對空射撃の中を潜つて完全に爆撃を実施した。中央長城線を越えて北方に進撃中の千田部隊は、大同北方五十キロ、綏遠省の重要地點豊鎮の敵を撃滅した。上海戦線江灣包圍の、松本部隊は豪雨を衝いて松滬鐵道沿線の吳巷を夜襲、同陣地を占據した。陸海空軍は雨の中を各地に亘つて空爆したが、敵の本陣嘉定を急襲、堅固な敵陣に徹底的損害を與へた。我が水上機は、午後四時頃敵のカーチスホーク戦闘機と空中戦闘の後これを撃退した。

十八日 涿州に凱歌揚る。滿洲事變六周年に當るこの日、涿州平原に於ける包圍攻撃は著るしく進展し、涿州東北方より進出して来た我が遠山部隊は遂にこの日午前涿州を陥れ、一番乗りの凱歌を揚げた。昨日松林店を陥れ平漢線を遮斷した石黒、坂西兩部隊は更に西進して涿州の近く迄達したが、敗退の敵の一部は涿州の西北の高地に新陣地を作りつゝある。正面中央の一部隊は敵の遺棄した裝甲列車に打乗り南下、長驅高碑店に突入し鐵路の要衝を扼した左翼部隊は依然泥濘濕地

を冒し殘敵を驅逐しつゝ牛駝鎮の西方辛橋の附近より拒馬河を渡り涿州近くに進出して来た。島田部隊の精銳は、敵兵を滿載して保定から望都方面に向け退却中の敵四個列車を空爆之を粉碎した。この夜敵機は數回に亘つて上海の虹口、楊樹浦上空に現れ、照明彈を投下して夜襲を試みたが、我が猛烈なる砲撃に遭ひ一機は射落された。

十九日 我が和田隊長の率ゐる海軍航空隊空襲部隊は、午前十時前後數十機の大集團を以て第十一回目の南京大空爆を敢行、高橋大尉及自相大尉指揮の部隊は猛烈なる敵の防禦砲火を冒して飛行場格納庫、庫外飛行機、兵工廠其の他の軍事施設を爆破し、多大の損害を與へた。又山下大尉の指揮する部隊は、敵のカーチスホーク及びブレダ戦闘機二十數機と壯烈なる空中戦を交へ、南京上空に於て二十一機を、句容上空に於て他の、五機を撃墜せしめ、世界戦史上記録的勝利を克ち得た。この空襲で我が方は三機を失つた。午前の空爆に依つて混亂中の南京に對し我海軍航空隊は、午後五時再度午前と同じ陣容を以て爆撃を敢行、憲兵司令部其の他の軍事施設に大損害を與へ、又向つて来た敵のボーイング三機カーチス三機、計六機を撃墜した。北支の陸軍機の活躍も亦目覺しく、拂曉太原より大同の我軍襲撃のため飛來した敵機九機を懷仁上空に於て遮撃し、内三機を撃墜する六機を追うて太原上空に至つたが、敵は新手の精銳を以て遮撃して来たので、こゝに彼我入り亂れての大空中戦となり又復、敵輕爆機二機を射落し更に折柄太原飛行場を離陸せんとする敵ボーイング戦闘機二機をも撃破した。この戦闘で我が方は一機を失つた。南京避難を勧告。長谷川第三艦隊司令長官は十九日付を以て各國外交機關に對し、我方は支那軍作戦の本營南京爆撃を敢行するにつき、廿一日正午迄に第三國の

國民は避難されるやう、又その艦船も南京江岸の下關から上流に避泊するやうにとの勧告の通知を發し、同時に支那非戦闘員にも避難するやう警告を發した。津浦線方面の戦局は今曉から俄然活潑に展開、野田部隊は大城附近の敵に對し總攻撃を開始した。午前十時半川村部隊は蒙古高原の要衝たる興和の敵を撃破、同地を完全に掌中に收めた。昨夕刻來執拗にも上海虹口、楊樹浦方面に夜襲を繰り返して来た敵機のうち一機は午前十一時頃楊樹浦に焼夷彈を投下したが、幸ひ我が適切な防衛によつて被害を局限することが出来た。これは十七、八の兩日羅店鎮方面の戦闘で我が淺間部隊に對し敵が使用した毒性毒ガスと共に、國際法の固く禁止せる野蠻行爲である。

二十日 南京制空權確保、我が海軍航空隊は、午前十一時半及び午後一時半の二回に亘り再び大舉南京を空襲、痛烈なる大爆撃を敢行し國民政府、參謀本我、大校場飛行場、砲臺、無線電信部を爆破し、午後の空爆で我に手向つて来た敵戦闘機四機を撃墜した。我が方は搭乗員一名戦死した外、一機は爆撃後消息不明になつた。夕刻には蘇州を空爆し、驛附近の軍事輸送施設及び軍需品倉庫を大破した。尙艦隊所屬飛行機も大舉徐州及び連雲港を襲ひ、徐州では停車場構内軍用貨車、機關庫を爆破し、連雲港では軍需品倉庫、重油槽等に火災を起さしめた。昨日第一回南京大空襲參加後消息を斷つてゐた三機のうち二機は揚子江に不時着して一機は〇〇艦に救助、他の一機は支那傳馬船に乘移り悠々揚子江を下りつゝあるとの情報が入つた。江灣總攻撃開始。上海戦線羅店鎮附近の我が〇〇部隊は昨夕來攻勢に轉じ、同日夕吳家巷、沈家村の線に進出したが本日は朝から張家堂、蘇村、秦宅の敵陣地に猛攻中である。江灣鎮方面の安藤部隊も前夜から俄然

猛攻に移り、莊家巷、陸家巷、唐家宅と次々に抜いて、復旦大學に肉薄した。又空軍は嘉定の敵重砲陣地を爆撃して痛手を與へた。北支平漢線の敵を猛攻中の我が部隊は早朝一隊は易縣城に、一隊は固城鎮に夫々入城、更に南方へ南方へと進撃を續け、徐水を抜いて遂に保定へ北方二里半の灣河頭に迫つた。陸軍機も敵の退路を絶ち、後方擾亂を企圖して石家莊及び正定北方の鐵橋を爆破した。平地泉方面の綏遠軍は、十七日豐鎮を占據して平綏線を北上中の千田、板倉部隊及び昨日興和を陥れた川村部隊、更に察哈爾の要地商都から支那兵を驅逐して昨日綏遠に入つた〇〇〇と協力する内蒙軍によつて三方遠巻きにされて来たが、大同、懷仁を経て西北へ長驅長城縣に達した田中部隊によつて太原方面への退路殺虎口を夕刻完全に封鎖されて了つた。本年度陸軍特別大演習は支那事變のため御取止めと決定陸軍省からその旨發表があつた。

(以上大朝記事に據る)

二十一日 大册河渡河、平漢線方面では夜半より〇〇部隊の諸部隊前進を開始し、昨年初頭以降支那が銳意構築した大册河右岸の強固なる保定前線陣地攻撃に移つた。この邊は大行山脈の麓一帯から黃村、漕河、安新にわたる敵陣地はトーチカを築き戦車壕を掘り堅固を極めたものである。折しも二十年來の豪雨で大册河の流れは更に我が軍を阻まんとするかの如くであつた。敵陣地より降り注ぐ機關銃火を潜つて遂に強行渡河は完成した。滄州攻撃開始。津浦線方面、馬廠興濟を抜いた、赤柴、沼田、長野(義)の各部隊は重田砲兵隊の協力の下に滄州攻撃を開始す。上海方面では本日より總攻撃を始む。千田部隊は舊平地泉(平地泉南方四キロ)を占領した。聯盟より招請狀、アウノール聯盟事務總長の聯盟二十三ヶ國諮問委員會招請狀帝國政府へ来る。

◆陸海軍機の空襲。拂曉陸軍機は保定を空襲壯烈なる第五回爆撃を決定した。海軍機は廣東を再度大空襲、十一機を撃墜地上の敵機七機を爆撃、市内外軍用機關に投爆す。◆我軍艦○隻は海南島海口に對し三十分に亘つて兵營黨部、公安局その他軍事施設重要機關を砲撃した。二十二日◆平漢線方面。坂西、石黒、森田、の諸部隊は午前中大册河南岸の陣地を突破、保定西北寄りの滿城北方面に進出す。◆津浦線方面。赤柴部隊が合庄、沼田、長野兩部隊が馬落坡を破り滄州まで五軒に迫つた。續いて野田部隊は、八里庄、助川部隊は五里化、赤柴部隊は西花園を占據、青木部隊は大城を突破し、陸軍機は兗州、濟寧徐州等を空襲し、又山西の首都太原を爆撃、敵機七機を撃墜した。◆平津治安維持會成立北支後方守備は一層固くなる。◆上海方面。揚子江下流に我が新銳部隊が上陸、我が兵力は益々充實し、大場鎮を爆撃し羅店鎮南方蘇涇クリーク東岸を占領した。◆南京空襲。長谷川長官の我が空襲の宣言後、最初の空襲はこの日早朝より三回にわたり敢行。敵機四臺を撃墜、停車場、中央黨部、軍官學校、その他重要機關を粉砕したが、外國公館には被害なく、更に揚子江の要害江陰砲臺を爆撃し、同所附近にあつた敵艦二隻に大損害を與へた。◆廣東空襲。海軍機の廣東空襲は大いに威力を加へ、午前三時、同八時半、午後二時、同二時半の四回にわたり廣東を爆撃し、軍、政、經、等各機關の活動を停止せしめた。◆支那共產黨代表周恩來、コミンテルン代表レビンが國民政府承認の下に南京で、會見の結果遂に相互援助條約に關する密約が成立した。これによりて露國は支那に對し軍事的援助をなし支那また露國の支那における一切の活動を承認し、日本の對支進出に對し共同防衛を決したものである。◆米國政府はグルー駐日大使を通

六〇

じて、二十日長谷川司令長官の發した南京避難勸告及び日本の南京空襲に對して異議の申し入れを行つた。二十三日◆平漢線方面。朝、坂西、石黒、森田の諸部隊は早くも保定西北方十六軒の滿城を陥れ破竹の勢ひで南下した。岡本(鎮)、神田部隊は昨夜より今日にかけて、保定眞北の地點で大册河を渡り、正面トチカ陣地に肉薄した。潰亂状態に陥りたる支那軍は、遂に南方石家莊陣地に向つて潰走し始めた。かくて我軍は涿州會戰後僅に四日にして大册河岸の堅壘を突破し、本日夕刻には東北西の三方より、保定城を包圍するに至つた。即ち岡本(鎮)、神田、岡本(保)長谷川、安田の諸部隊は東北方より城壁に迫り、石黒、坂西、森田、遠山、の各部隊は西方より迂回して、またもや平漢線による敵の退路を遮斷した。◆津浦線方面。右翼の野田、助川、片桐、青木等各部隊は馬廠より保定へ通ずる自動車道路上の要地大城を占領した。この方面の支那軍は舊東北軍を改編した、百八、百五、三十九の各師及び第二十九軍の殘兵百三十二師の約五萬で、目下南方に向け潰走中である。又助川、野田、兩部隊は張濱馬西端に進出し、午後空陸呼應して滄州に肉迫した。又赤柴、長野、沼田の各部隊も夕陽を浴びて正面より滄州城に突進した。◆平綏線方面。千田、一宮部隊は平地泉の綏遠軍を包圍した。又先に右玉、殺虎口を陥れた長谷川部隊は涼城を陥れ、更に西北方綏遠省城に向け前進してゐる。◆上海方面。和知部隊は頑強なる抵抗を續けてゐる敵に向つて、攻撃を開始し、沈家灣、高家宅、李家宅の線に進出した。又工兵の敵陣爆破に奏功して劉河鎮、劉家行鎮間の滬太自動車路を占領した。兇惡な支那軍はこの方面で、ホスゲンらしき毒ガス彈を發射し、皇軍を悩ましたが幸にして被害僅少であつた。◆海軍機活

躍。我海軍航空隊は午後三時から一時間再び江陰を空襲、敵巡洋艦平海(二、五〇〇トン)を爆撃擱坐せしめ寧海外二艦に火災を起させた。又海軍機は昨日に繼いで更に四回の廣東空襲を敢行した。◆この日支那共產黨は國共合作を表明、抗日の背景を擴大せんとした。秩父宮同妃兩殿下はエンプレス、オブ、ブリテン號にてケベックに御到着遊ばされた。◆ヒューゲッセン事件圓滿解決。八月二十六日起りし駐支英國大使ヒューゲッセン氏負傷事件は英國政府より、我政府に對して、嚴重抗議あり、去る九月六日對英中間回答が發せられ、二十一日には廣田外相より在京英國大使グレイキ氏宛、公文を以て最後の回答がなされ、本日午前零時その全文が發表され兩國間の不幸なる出來事は、大團圓を告げるに至つた。◆海軍機の空襲成績。事變開始以來の海軍機爆撃成績は本日海軍省より發表された。左の通りである。(一)九月十九日以來同二十二日に至る南京および廣東方面空襲において支那軍飛行機に與へたる損害は下表の通りなり。

南京(擊墜)	四〇	〇二	四二
爆破	〇〇	〇〇	〇〇
廣東(擊墜)	一六	七三	一九
爆破	一〇	七	一七
計	六六	一二	七八

(二)八月十四日以來九月二十二日にいたるまでの期間においてわが海軍が支那空軍に與へたる實質的損害は左表の通りなり。

飛行機	確實	稍不確實	計
擊墜	一五二	五	一五七
爆破	一二〇	七	一二七

計 二七二 一二 二八四

格納庫爆破約四十八

(三)今次變動發以來九月二十二日に至る期間におけるわが海軍機の損失は卅一機なり。

二十四日◆平綏線方面。平綏線を北上した、千田部隊は半永久堡壘に據り頑強なる抵抗をなす敵を排除しつゝ、午前九時五分南門より、柏倉部隊は同二十分内蒙軍と共に北門より、平地泉に入城し、日章旗を城頭高く懸した。平地泉一番乗りの岩根部隊は休む間もなく、敗走する敵を急追し、平地泉より鐵路に沿ひ西進、午後八時には八蘇木に達し、内蒙騎兵部隊は大土城子西方に進出、陶林進撃の烏參謀麾下の蒙古軍と相呼應して西進を續けた。かくて涼城より西北方に進む長谷川部隊と共に半圓を描く、日蒙軍は昨年内蒙軍を破つて抗敵英雄と崇められた、傳作義麾下の綏遠軍五萬を刻々と壓迫してゐる。◆平漢線方面。岡本、安田、長谷川各部隊は正面より、石黒、坂西、森田、遠山各部隊は西南方より完全に保定を包圍し、空軍の爆撃と相呼應し、敵が二ヶ年の日子を費して、築き上げたさしも堅牢を誇つた、保定陣地も、午前十時激戦の末、完全に我が手に落ち、日章旗は城壁高く掲げられた。同日午後一時我が主力は威風堂々保定城に入城し完全にこれを占領した。永定河左岸より行動を起して僅か十一日目のことである。しかもこの會戰において敵に與へた損害は、一萬七、八千を下らない。蓋し稀なる激戦といへよう。◆津浦線方面。我が軍の猛撃の前には敵の堅壘も遂に崩れ、夕陽西に没せんとする、午後六時二十分長野部隊等の奮戦によつて遂に滄州はわが手に歸した。長野部隊は友軍赤柴、沼田部隊と共に、前面に張りめぐらされた、掩蓋壕水壕、ト

チカを踏み越え、乗り越え、滄州縣城に突入、縣城高く日章旗を
 續した。かくてこの日北支の三要衝に日章旗が揚り、北支戦局は斷然
 日本の完勝となつた。殊に平漢、津浦兩戦線に於ては泥濘出水極度の
 困難を冒し、懸軍長驅して遂に保定を陥れ滄州を抜いた。この兩地の
 占領は北支戦線に於ける、南方進撃の據點を確保したものであり、且
 つ山東、山西方面に對する戰略的影響は極めて重大なるものとして注
 目されねばならぬ。この夜北平天津では盛大なる北支戦線大勝利の
 祝賀會が開かれた。上海方面。空軍と協力全面にわたり、攻勢前進
 を開始し、羅店鎮より劉行鎮に通ずる道路東側クリークの線に據る頑
 強なる敵陣地を突破し、和知部隊と連撃し李家宅、陶定宅、蘇陣宅の
 線に進出した。又〇〇部隊は總攻撃を以て揚家宅を占領した。一方劉
 行鎮東側敵陣地を攻撃中なる田上、石井、兩部隊も對壕作業により敵
 陣地に肉薄中である。武漢空爆。海軍機は午後數十機をもつて、い
 はゆる武漢三鎮の漢口武昌、漢陽、を南北兩方面から空襲し、兵器廠
 製鐵廠を大破し、敵戦闘機二機を撃墜し三市を大混亂に陥らしめた。
 また南昌をも空襲し、新舊兩飛行場、飛行機を爆破數箇所到大火災を
 起させ、全機無事歸還した。

二十五日 保定入城式。保定清苑城晴れの入城式は本日午後二時四十
 分囀鳴たる喇叭の響き、はためく日章旗のもとに我が〇〇部隊長によ
 つていと壯嚴に行はれ、豪華戰勝繪巻を展開された。海軍機の爆
 撃。海軍機は江陰鎮江の兩要塞を空爆し、南京を空襲、敵機と大空中
 戦を演じた。午前、午後の二回廣東市西郊の軍事施設を爆撃した。
 伏見中佐宮殿下の御負傷。午後四時頃、第三驅逐隊司令伏見宮博義王
 殿下には、上海黃浦江上にて、浦東側敵陣地攻撃の際、敵弾のため畏

くも、御左掌に御負傷あそばされた。しかも殿下におかせられては、
 御自分の御負傷は顧みさせられず、部下に對して深く御同情を賜ひた
 るのみならず、其夜に入りても轡橋にて終夜御指揮遊ばされた。この
 由を洩れ承りたる國民は等しく恐懼感激した。兩獨裁王の會見。獨
 逸訪問の伊國首相ムソリーニ氏は、ミュンヘンの總統邸で、ヒットラ
 ー獨逸總統と第一次會見、約一時間に亘り要談した。又この日ヒット
 ラー總統は、プリンス、カール宮にムソリーニ首相を訪問、同首相に
 ドイツ黨大十字章と金製ナチス黨最高章を贈呈した。聯盟への回答。
 去る二十一日、アヴノール聯盟事務總長の聯盟二十三ヶ國諮問委員會
 招請狀に對し、我廣田外相より今次事變の解決に關しては、「日支間
 の問題は日支兩國間において現實に即せる、公正妥當なる解決方法を
 發見し得べしとの確信を堅持するものにして遺憾ながら諮問委員會の
 招請を受諾するを得ず」といふ意の回答を、この日夕刻發せられた。
 又内閣情報部の官制が公布された。

二十六日 平漢戦線。午前十時頃木村前線部隊は保定より敗走せる敵
 を追撃して平漢線鐵路により新樂驛に突入し附近の敵を撃退し、裝甲
 車一、機關車一、貨車百輛、トラック五を鹵獲した。津浦戦線。津
 浦線右翼部隊の進出、目ざましくその先鋒部隊は南趙扶鎮より西南に
 矛を轉じて、遂に河間東南五里の沙河橋にあつて、中央部平原に激戦
 を展開してゐる。一方空軍も獻縣阜城等の主陣地に猛爆を加へ敵を潰
 亂しつゝある。この日天津では滄州、保定陥落祝賀會を午後二時よ
 り大和ホテルにて行はれた。本日我海軍航空隊は〇〇機編隊で出動
 し浙贛鐵道(南昌、杭州間)を空爆し、その要地たる金華、衢縣、上饒
 餘江の各停車場を爆撃し、悠々歸還し我方に損傷なし。上海戦線で

は懸森部隊は王反宅を確保し更に前進中、一方永津部隊も敵を南方に
 壓迫す、ために敵は續々平家橋、劉行鎮の正面に向つて潰走しつゝあ
 る。武田部隊は永津部隊に協力。星部隊は懸森部隊に協力しつゝ、前進
 中、從つて劉行鎮の陥落も目前に迫つてゐる。本日午前十一時頃海軍
 航空隊は開北方面の敵陣地に對して猛烈な爆撃を敢行し敵に多大の損
 害を與へた。零時半と三時半の二回に亘り我海軍航空隊は廣東を空
 襲し、軍官學校その他の軍事機關に爆撃を加へて歸還した。

二十七日 平漢戦線。平漢線方面で連日連戦連敗しつゝある支那軍の
 總指揮は劉時で、その率あるところは第二師・第十七師・第二十八師と
 判明した。目下我が軍は猛攻中である。津浦戦線。午前十一時頃我
 が精銳は轡を並べて追撃し、一氣に馮家口を占領した。一方沙河橋南
 方では助川・大野の部隊辛莊、南各營も奪取した。この日、午前・

午後との二回に陸軍航空隊〇〇機は、德州河間を爆撃し、無事に〇〇根
 地に歸還した。午前十一時三〇分、南郷・江草兩大尉の指揮する〇
 〇機は、毒京を空襲し、軍需工場たる硫酸工場を爆撃した。午後二時
 津浦線終點浦口驛を爆撃した。又その一部は開北各地區の敵陣地に反
 復爆撃しつゝある。早曉三回にわたり海軍航空隊は廣東を空襲し、
 引續き粵漢鐵路の要所を爆撃して悠々歸還した。午後一時二〇分から
 四時十五分にかけて再び三回にわたり廣東市街軍事要地及び粵漢鐵路に
 痛烈な爆撃を敢行、琶江口兵工廠・廣東軍官學校連江口附近の鐵橋及
 び從化虎門飛行場を爆撃した。午後一時四五分、南京・浦口停車場
 を爆撃し、數十輛の貨車を爆破、尙一部は劉行鎮方面の敵陣地を爆破
 せり。

二十八日 平漢戦線。平漢線方面の先頭部隊は本日午前五時新樂南方

二軒沙河附近にある敵約一個連を撃破しさらに幅三百米、深き二米の
 沙河の強行河渡を決行、これを追撃して正午頃新樂毒方八軒の均點に
 達した。平緩戦線。後藤前線部隊は午前一時四八分猛烈な山岳戦に
 より、茹越口敵陣地を戦破し太原平野を一目に見下す大行山脈の一端
 内・長城線高く日章旗を飄した。津浦戦線。滄州毒方へ進撃中のわが
 津浦線方面の赤柴、沼田、長野各部隊は敗走の敵を掃蕩しつゝ、南進し
 てゐる。田上部隊の最前線は二十八日夕刻攻撃前進し狄涇クリーク
 を突破して劉行鎮の北端を占領し、江南の秋空高く日章旗を掲げた。
 石井部隊は田上部隊と聯繫し北沙宅、趙家宅の線に進出、顧家宅及び
 その西側陣地に對し激戦中である。細見部隊はその戦車隊をもつて劉
 行鎮より羅店鎮に通づる本道を強行通過し、羅店鎮方面の〇〇部隊と
 完全に聯絡をとつた。この他高橋、佐藤、永津、安達、和知の各部隊
 もそれ〴〵南方及び西方に進出し敵を攻撃中である。わが海軍航空
 隊は午前勇躍〇〇機離海線方面、徐州を爆撃し、軍需倉庫軍用列車、
 停車場を撃破した。又和田航空部隊は毒京附近の敵飛行場を爆破し
 た。海軍航空隊は從化飛行場、琶江工廠および粵漢鐵路を爆破せ
 り。

二十九日 平漢戦線。平漢線を南下した我〇〇部隊は二九日新樂驛南
 方の東長壽に進出、正定を早くも一六軒の近くに望むに至つた。本
 日寺内大將は保定を視察し前線の將兵を激勵した。津浦戦線。南進
 中の我が赤柴、沼田、長野各部隊は泊頭を占領し東光縣の敵陣を攻略
 中である。山西戦線。天下三關の一、雁門嶺の天險を後藤部隊は二
 日夜飲まず食はずで兩飛する敵弾をあびつゝトーチカ陣地をはじめ
 地域十餘里にわたつて群立するこの山陵の堅陣百數十個を撃破し敵の

大部隊を包圍殲滅した。◆中支戦況。拂曉わが右翼憲森部隊は張家堰を抜きさらに前方の敵の據點たる無名部落を占領、また馬路塘クリクならびに嘉定街道を距て、高橋部隊と密接なる聯繫を保つてゐる。和知部隊右翼は二十九日午前十一時に進撃を開始、午後二時八百米前方の敵要地楊家宅を完全に占領した。又石井、武田、中島の三部隊は緊密に聯繫し午後一時大舉劉行鎮の有力な衛星陣地たる同トーチカを完全に攻略した。海軍陸戦隊の中部戦線の佐野、土師兩部隊は終日北四川路西方にて激戦し、土師部隊は靶子路々上を戦車を先頭に突撃し、敵陣〇〇學校を占領した。

三十日◆平漢戦線。午前六時半頃、突如西北方より敵の飛行機一機保定を空爆、爆弾數個を落し一弾は保定驛に落下したが、わが高射砲の射撃で忽ち南方に姿を晦した。◆津浦戦線。桑田部隊は篠つく雷雨と泥濘を冒して正午ごろ連鎮を占領、人馬憩ふ暇もなく疾風の如く南方の德州へと進撃してゐる。◆山西戦線。粟飯原、大場兩部隊は三十日正午大營鎮を占領せり。又後藤、猪鹿倉兩部隊は西方に退却する敵を追撃し午後四時五十分代州の前面平城の一角を占據し大激戦のち午後九時十六分代州縣城を占領した。この兩部隊の血みどろの山岳戦に山靈は泣き岳神も眼を掩うたであらう。◆正午ごろから降りだした小雨の中に陸戦隊の土師部隊は老靶子路より前進し午後三時ごろ虹江起および老靶子路間の赫可克而路東側へ全面的に進出した。他方佐野部隊は北四川路北方より進撃中、小西〇隊の白標の決死隊の突撃により廣東路と虬江路との突角地點で、北四川路まで五十米の敵機關銃集地を撃破しこれを占領した。土師部隊は又午後二時半靶子路より進撃、敢然敵の本據上海印刷所を包圍し猛烈なる戦闘を展開中である。佐藤

昌東方五十餘里の機關庫爆破。▲廣東方面。天河飛行場爆破黃浦にて砲艦一隻撃沈、巡洋艦一隻大破▲蚌阜停車場及び倉庫を爆破。▲南昌飛行場を爆破。

二日◆津浦戦線。皇軍德州城に迫る、疾風の追撃。津浦線上決河の勢で南進、山東省内桑園鎮を抜いて一日夕刻德州の北四キロの地點に追つた我先鋒部隊は同夜德州縣城に向つて攻撃を續け、二日朝來德州上空に雄姿を現はした我空軍の爆撃と相呼應して猛撃を展開し、次第に城壁に迫りつゝある。◆平綏戦線。要衝、百靈廟占領。内蒙軍は二日午後四時百靈廟を占據した。なほ同軍は餘勢を驅つて綏遠に進撃中である。◆上海戦線。上海印刷所を占領。二日午後六時赫可克而路より敵右翼の堅壘たる上海印刷所を包圍攻撃中の陸戦隊土師部隊は突撃肉弾戦をもつてこれを確保した。北四川路全面に蟠居し二ヶ月餘にわたる抵抗を續けた敵は二日午後四時全面的に剛北方面に後退を開始した。◆廣東戦線。海空より廣東爆撃。わが海軍航空部隊は二日朝虎門砲台、黃浦港、廣東を空襲、また虎門砲台附近水路にあるわが軍艦〇〇隻は砲口を揃へて同砲台に猛射を浴せた。

三日◆津浦戦線。德州城遂に陥落、更に敵を急追。午前十一時わが軍〇〇部隊は德州を占領入城した。——午前十時過ぎ德州城の城壁に向つて一齊に攻撃を開始し、更に一部は城壁外を迂回して德州南方に出で敵の退路を遮断した。敵は全く袋の鼠となり大混亂を呈す、これに乗じ先鋒沼田部隊は猛然城内に突入しつひに午前十一時德州を占領日章旗を掲げた。◆山西戦線。山西の制空。皇軍は本三日をもつて遂に山西省に於ける敵航空兵力及び航空施設を完全に壊滅せしめた。即ち十月一、二日の兩日太原飛行場を連續攻撃敵飛行機ならびに格納庫

、高橋兩部隊は午後三時、羅店鎮戦線右翼より西方前面五軒を横斷する南北クリクに沿うて蟠居する敵大軍に對して總攻撃を開始し、秋富部隊は永汗橋、高宅、何宅を占領、寺川部隊はこれと呼應しつゝ、馮宅、吳居村に進出。高橋部隊は劉家村、楊宅および陶家宅の線に進出中である。和知部隊は三十日朝來前日の攻撃を續行し、陸家宅、杜家宅の敵陣地を奪取しさらに西方陣地に對し攻撃中である。

十月一日◆津浦戦線。皇軍遂に山東へ進出、桑園鎮を占領。津浦線方面の敵を急追して、南進中のわが〇〇部隊は、一日早朝よりさらに疾風迅雷のごとき急進攻撃を敢行、遂に山東省に雪崩れ込み午前十時三十分德州北方五里の桑園鎮を占領した。◆一日午前十時勇躍〇〇根據地を飛出したわが〇〇機は一氣に德州の上空に飛來し德州驛に停車中の軍用列車三十輛及び南方へ向け進行中の列車を爆撃し、さらに機首を西方に轉じて湖水と化した德州の西方で敵の小型軍用船四、五十隻に猛烈な爆撃を加へて全部爆沈して歸還した。◆上海戦線。待望の劉行鎮一番乗り。待望の劉行鎮の完全占領は遂に成つた。幅三十メートル満々たる水を湛へる秋涇クリクを前に二重三重のトーチカ陣地を頼んで頑強に抵抗しつゞけた敵は數百の死體を遺棄して、上海街道を西南へ敗走猛攻十九日奮戦は輝やく實を結んだ、わが田上部隊は實に劉行鎮一番乗の勝名乗り、秋空高く日章旗を掲げた。◆嘉定、南翔へ爆撃を敢行。◆我が海軍航空隊は一日午前八時より終日にわたり上海各戦線の敵陣に對し猛烈と空爆を敢行。◆海軍機の戦果。敵艦を撃沈、大破。海軍航空隊は更に陸軍の戦闘に協力し、嘉定、劉家行、江灣、大場鎮方面の敵陣地を爆撃せる外左の空襲を決行した。——江陰方面、德勝軍艦を撃沈、永綏軍艦を大破、擱坐せしむ。◆浙贛鐵道、廣信(南

を破壊、さらに本三日再び残存せる敵機ならびに格納庫その他軍事施設を破壊し去り、山西省内敵機を見ず制空權は完全に我手に歸す。◆上海戦線。兩行鎮へ六百メートル！大場鎮を距る北方約四キロの線に於て皇軍各部隊相會しここに未曾有の大旋回作戰に成功、完全なる連撃とるや息つく暇もなく大場鎮一帶の頑強なる敵に對し一齊に總攻撃を開始した、吳淞クリクを突破すれば過ぐる上海事變の激戦地兩行鎮まで僅かに六百メートルを残すのみとなつた。◆敵の三艦を爆破。江陰上流附近にて逸仙型巡洋艦を爆撃擱坐せしめ、勇勝型砲艦一隻及び湖鵬型水雷艇一隻を大破した。

四日◆平漢戦線。先鋒部隊正定に迫る。平漢、津浦兩線間に於ける我が軍の猛追撃のため獻縣より南に向つて續々退却中であつたが、これ等退却の敵は東鹿に集結し、四日午前七時半より我空軍部隊は折からの密雲を衝いて東鹿上空に達し三百メートルまで低下して爆弾投下、猛烈な爆撃にあつた敵の大軍は忽ち東西南三方面に向つて潰亂した、その損害甚大。◆津浦戦線。前面殆んど敵影なし。我が軍の占領した德州城内には逃げ遅れた少數の敵敗殘兵が居り目下わが軍がこれを掃蕩中、敵主力は德州西南方約八十五キロの臨清方面に退却してゐるものゝ如くである。◆上海戦線。遂に楊家村を確保和知部隊は四日午後一時一週間にわたつて頑強に抵抗しつゞけてゐた楊家村の敵大部隊に殲滅的打撃を與へ同部落を確保すると同時に南方吳家宅をも占領、前面の敵を追撃中である。また永津部隊は午後二時頃萬年橋の敵陣地を陥れた。◆上海開戦以來の壯舉、爆彈又爆彈。四日拂曉から上海戦線は開戦以來五十三日目、最初の陸海空軍總立ちの大攻撃の日を迎へた。曉闇を衝いて陸海軍機各種〇〇餘機は「時こそ來れ」と微笑む

全裝備の爆彈嘉定前方、廟行鎮、大場鎮など各陸軍部隊前面の敵塹壕司令部、後方連絡機關をはじめ江陰、南翔、崑山、嘉興南支北方の爆撃に向つた。陸戦隊本部屋上から、西、北の空をのぞめばわが荒鷲の群は満天を掩ふばかり、呼應する地上の砲聲、何たる壯觀ぞ！ 前面全線の敵はたゞ空を仰いでなすことを知らず。

五日◇平漢戦線。蒼空の追撃戦。五日正午ごろ敵四機は保定爆撃の重大目的をも果さず、早くも洛陽根據地に向つて遁走せんと機首を南方に轉じたので、わが○○機は逸早くこれを追ひこゝに端なくも秋の蒼空に壯烈なる一大追撃戦を展開、わが○○機は長驅洛陽の空にいたつて同四機及び地上に配備中の敵爆撃機に猛烈なる爆撃を敢行、これを完全に爆破、悠々と無事○○根據地に歸還した。◇津浦戦線。黄河涯

に進出。津浦線のわが沼田、長野、赤柴、中井各部隊は三日德州攻略後引續き南方に潰走する敵を追撃、四日すでに德州南方二里の黄河涯に進出した。◇上海戦線。大場鎮、廟行鎮、閘北の敵陣地を爆撃。海軍航空隊はその大部を擧げて陸軍の作戦に協力、五日終日反復して大場鎮南翔方面および蘆漢濱吳淞クリーク前面の敵を爆撃、これに大打撃を與へたり、また一部は閘北新民路方面の敵砲兵陣地に徹底的空爆を敢行、なほ廟行鎮に爆弾を浴せ多大の損害を與へた。◇壯烈な三義里の白兵戦。上海北四川路は五日朝來再び激烈な市街戦を展開したが正午を期して三義里部落の敵の據點たる三階建支那家屋に突撃を敢行したが我佐野部隊は僅か十數分にして敵を撃退同所を占領した。

(以上本校地歴科編輯)

大伴家持

……大伴の遠つ神祖の其の名をば大久米主と負ひ持ちて仕へし官、海行かば水漬く屍山行かば草生す屍大君の方にこそ死なめ願慮はせじと異立て丈夫の清き其の名を……

文部造人麿

(萬葉集卷二十)

今奉部與會布

今日よりは顧みなくておほきみの醜の御楯と出立つわれは (萬葉集卷二十)

三、戦線美談

その一、陸軍の部

(1) 爆弾を背負ひ猛進！
城壁攀ちて突撃路を開く

二十九日早朝南雲、鯉登兩部隊は高粱畑を利用して南苑の支那兵營を南より西北にかけて包围を開始し、午前八時三十分西北角に到着するや、敵の猛烈な十字砲火を浴び早くも激戦となつた。

敵は二十尺にも達する城壁に據つて、地上を進む我軍を狙つて釣瓶撃ちに放つたので、城壁近く迫つた我軍もこゝに阻まれて非常に苦戦に陥つた、一刻も速かにこの城壁を破壊して突撃路をつくらねばならぬ、だが敵の十字火は息もつがせぬ猛烈さだ。

この時原隊のうちから敢然とこの重大任務を身をもつて敢行しようとした二人の將校があつた。伊藤、千葉兩部隊長だ見れば兩氏は爆弾を身につけたまゝ十字火にさらされつゝ、城壁外の塹壕に勇躍飛込んだ、これを見た敵は小銃ピストルを兩氏目がけて一齊に亂射したが決死の兩勇士は面も振らず阿修羅の如く塹壕を越え切立つたやうな城壁を登りはじめた。

立ち騒ぐ敵、狂瀾の如き銃火だが、兩勇士はやもりの如く城壁にしがみついて攀ち登つて行く。砲火轟く中にさすがのわが將士も息を呑んだ、見る間に兩勇士は城壁に爆薬を装置點火した途端、おゝ兩勇士は相ついで城壁からどうとばかり倒れ落ちた。敵の集中火にたうとうやられたのだ。しかしその時轟然たる音響ともにも城壁は一瞬にして爆破された。この兩勇士によつて突撃路は開かれたのだ。機を逸せず茂木部隊はこゝから一舉に敵兵營に突撃して遂にこれを占領したのであつた。

(大朝、八・三)

(2) 「キミガヨハ、チ……」まで歌つて
あゝ崇高な戦死！谷一等兵

砲火と地雷を貫く
先陣、笠原隊長の最期

世界戦史を飾る○○敵前上陸の花と散つた。○○部隊笠原隊長の戦死は眞に壯烈限りなきものであつた。二十三日未明我が海の精銳が白樺の決死隊を組織してまづ○○方面に上陸したのち、陸軍○○部隊長の悲壯なる命令を受けたのが陸の勇士笠原隊長だつた。陸兵としての上陸第一歩榮譽に輝く笠原隊長は幾萬の敵が執拗に抵抗する敵前に自ら軍刀を抜き拂つて突入した。敵は目前に塹壕を敷いて小銃の雨を降らせる。手榴弾を浴びせる、すこし前進すれば眞暗闇の中に地

雷が火を吹いて炸裂する。わが兵が仆れる仆れる、戦友の屍を越えて、突撃また突撃死を物ともせぬわが笠原〇隊長のその時の顔、その時の眼、たゞ軍刀を砲火の光りにきらめかしながら進め、進めの號令で突進してゐた。敵の一弾は笠原〇隊長の胸に命中して護國の鬼と消え、その壯絶なる奮戦には〇〇部隊長以下涙をしばつたのであつた。こんな美談はゼ・ブルーゼの敵前上陸にも勝る今回の壯舉に數限りなく算へられ、同じく〇〇部隊の一等兵谷正宗（二十二年）の最期もまた美はしいものであつた。彼は〇〇に死を覺悟のうへ上陸をしたのち間もなく左大腿部に貫通銃創を受けた。流れる血汐に怨みを呑んで二十四日夕、病院船で上海に送られ篠崎病院に收容されたが軍醫の執刀も如何せん、時すでにおそかつた。谷一等兵は血に塗れたベッドに戰場を幻に描きながら突如「キミガヨハチ」までを歌つた。たしかに歌つて彼は息を引きとつてしまつた。その崇高な瞬間、軍醫も看護婦もたゞ肅然として谷一等兵の最期を靜かに見送つたのであつたが、國を思ふ忠勇義烈の魂は武人の鑑と讃へられてゐる。

（大朝、八・二五）

口利けぬ最期の言葉

天皇陛下萬歳

(3)

指先で大地に書き終るや

従容戦死の堀金大尉

精神には部隊長はじめ並ぶる一同もいたく感動したが、この忠烈な話が全軍に傳はるや武人の龜鑑として將士の士氣はいやが上にも揚つてゐる。

（大朝、八・二七）

(4)

凄絶、斬りも斬つたり

亂麻を斷つ七十人！

羅店鎮正面、夜襲の二勇士

〇〇附近に上陸した〇〇部隊は先づ羅店鎮の敵を撃滅して自後の作戦を容易ならしめんとし永津、和知兩部隊をならべて廿七日から攻撃を開始した。同夜和知部隊は夜襲によつて韓宅附近を攻略すべく、楊家宅附近から南進を開始し隆家村東側地區を通行せんとする時、急に右側方面より有力な敵の攻撃を受けたので、和知部隊長は全部隊に右側攻撃前進を命じ自ら陣頭に立つて斬込んだので、その傍にゐた將兵は期せずして部隊長を傷つけまいと左右に蟄集し一發の彈丸をもうつことなく敵陣に斬込み、あたるを幸ひ羅倒し突倒した。恒岡部隊長のごときは部下とともに傳家の寶刀を振翳して斬りまくり卅餘人の敵を斬倒し、一准尉はまた部下と奮戦約四十人まで數へて斬り敵は全く怖氣づき、悉く羅店鎮の南方に算を亂して退却した。翌廿八日朝隆家村附近に遺棄されてあつた敵の死體は五、六百であつたが、悉く斬傷突傷であつた。廿八日〇〇部隊は羅店鎮を占領するや部隊長は羅店鎮東北側

敵前上陸第一歩、大和魂の精華〇〇部隊が廿三日敵前上陸を開始したのは午前四時半、全將士は勇猛果敢に奮進し雨霞と飛び来る銃砲彈のなかを物ともせずわが戦史に特筆すべき迅速な上陸をなし、夕間近づく頃には同部隊が戦線の中央〇〇に早くも上陸、〇〇部隊長は、陣頭に立ち三軍を叱咤し息つくひまもなく前進命令を發した折から西方より突如敵の重爆撃機が部隊上空に飛來、二千メートルの高度から爆彈を投下し逃げ去つた。この一弾が不幸にも部隊長の立つてゐた數間先に物凄いな音響もろとも落下したが部隊長は幸ひ微傷だに負はず、土煙りを浴びながら顔色も變へず悠然と敵狀を視察してゐた。この爆撃によつてわが方は下坂參謀、堀金大尉ほか數名名譽の戦死を遂げたが、中にも堀金大尉は全身數ヶ所に爆彈の破片を受け瀕死の重傷で、これを見た部隊長は、つか／＼と同氏の仆れてゐる傍らに歩みより「堀金しつかり」とはげまし重傷で助からぬのを知るや「何かいひ遺すことはないか」と部下を思ふ眞情を籠めて尋ねたところ、既に同氏は口がきけず部隊長の言葉がかすかに聞えるやにつこり微笑み、傷ついて自由のきかぬ右手に力をこめ大地に指先で「天皇陛下萬歳」を書き終るや従容として息を引取つた。御國のため天皇陛下に捧げたこの一身、いまはの際に陛下の萬歳を奉唱することが出來ぬのを残念に思ひ、忠義の赤誠を指先に現はし壯烈な死戦を遂げたのだ。鬼神も哭くこの日本武人の

附近の家屋に陣取つたが、東南方周家宅、朱家宅附近の敵砲兵隊から盛んに砲撃を受け、その家屋も數彈が命中し屋根の半分は吹飛ばされる有様であつたが、部隊長は泰然として微動だもせず、悠々刀を杖つきつゝ煙草をくゆらせて戦鬪の指揮を續けた。上陸以來和知部隊長の豪膽ぶりは部下一同の敬服するところで、彈丸雨飛のなかでも姿勢を低くかへるでなし、器物を利用して身をかくすことすらなく凜然刀を握つて部下の士氣を鼓舞し、部下は部隊長の姿を仰ぎ見て勇氣百倍するといふ有様であつた。一方和知部隊と共に羅店鎮攻撃の第一線に起つた永津部隊の勇戦奮闘も和知部隊におとらぬ勇烈さで、永津部隊長の豪膽なる指揮ぶりとこれを中心とする鐵の將兵の團結力によつて、十數倍にも餘る當面の敵を撃破して、廿八日晝頃には羅店鎮西側一帯を占據した。

（大毎、九・二）

(5)

夕日の丸々を鉢巻に
敢然、敵中へ斬り死

羅店鎮の花ともいふべき永津部隊に屬する藤田能一曹長以下十七名「日の丸決死隊」の壯烈無比な奮戦狀況が二日〇〇部隊に達し、全軍の將士を感動せしめた。羅店鎮攻撃が最高潮に達した去月廿九日午前三時過ぎ、最前線に立つて奮戦してゐた藤田曹長は〇〇部隊との聯絡のため一部隊の兵士を連

れ、前線より〇〇にある〇〇部隊に向ふ途中、羅店鎮北東方五百米のクリクに差かかった時暗夜の中を静々と行進して来る三隊からなる六百に餘る部隊を認め、友軍だと思ひながら近づき「日本軍の何部隊か」と呼びかけたところ、相手は支那語で何やらべら／＼しやべり、動揺し始めたので、はじめて敵と覺つたが、その時すでに敵との距離は二十米に迫つてをり、退く餘地なく進退全く谷の窮地に陥つた。そこで藤田曹長はこの上は斬り死するまでだと悲壯な決意をなし、突差に鐵兜をかなぐり捨て、携へてゐた日の丸の國旗をもつてがつしと鉢巻をなし、愛刀備前長船二尺八寸を眞向に振舞し「日本刀の切れ味を知れ！」と怒號し、三列に並んでゐる敵に斬り込んだ。兵士達は我遅れじとんでに曹長にみならひ日の丸の國旗で鉢巻すると同時に銃剣を連ねてどつとばかりに喊聲あげて目に餘る敵に向ひ突撃した。この間僅かに數分敵は射撃する用意もなく小勢とあなどり青龍刀を閃かし斬りかゝつてきたが、決死の部隊には敵し兼ね、たち／＼と退き始めたので、一隊は無我夢中に荒狂ひ、敵の第一隊を切抜けるやさらに續く第二隊に突入、これまた散々蹴散し、つづいて第三隊に肉薄、當るを幸ひ突き伏せ、薙ぎ倒し、十町におよぶ敵軍の中を傍若無人に蹂躪し突破した。敵はこの魔神のごとき勇士達に怖れをなし、四分五裂となつて羅店鎮内に敗走した。この肉弾戦に藤田曹長はじめ竹田益伍長、細川義

則、久保盛重上等兵、矢野修一、山崎音一、富田勇、小木會民雄一等兵の八勇士は枕を並べて羅店鎮の花と散り、四名は負傷奇蹟的にも残り、五名は微傷も負はずに部隊に歸り永津部隊長にこの旨報告した。隊長は夜の白むのを待つて現場に駆けつけたところ、敵の死體は累々と横はつてをり、その數百名に上り、藤田曹長ほか七名は何れも全身數ヶ所を斬られ壯烈な戦死を遂げてゐた。附近に遺棄されてゐた敵の書類からこの敵の部隊は敵司令部でわが軍に包圍され逃げ道を塞がれたので暗夜に紛れてこつそり落ちのびる途中であつたことがわかつた。

(大朝、九・四)

(6) 突撃路上に敵地雷!

間一髪、身を以て爆破

房山を死守する支那軍は十二日夜半突如一個團密集部隊をもつて我が軍最前線〇〇を逆襲し、我が尖兵池谷部隊を包圍し、迫撃砲、機關銃の掃射を浴びせかけた。肌寒き初秋の星空の下に徹宵敵情勢を偵察中の池谷隊長は「すはよき敵ござんなれ」と傳家の寶刀をキラリと抜き放ち大聲に「最後の一兵となるまでこの地を死守せよ」と部下を激勵、少數の兵力をもつて數百倍の敵に應戦多勢をたのんで我が軍目がけて殺到する敵兵を間近に引寄せ、勇猛果敢に小銃、機關銃の狙ひを定めて射つて／＼射ちまくり、見る／＼うちに數百名を將棋

倒しに薙ぎ倒した。しかし敵は名にし負ふ中央軍、その上迫撃砲八門、機關銃十三門を有する優勢部隊である。池谷隊長の命を受けた傳令は敵重圍の中を突破し急を鈴木部隊に報ずるや、鈴木部隊は森本部隊の協力を得て夜陰を衝いて戰場に到着、直ちに左右兩側から敵を包圍し激戦四時間敵に大打撃を與へ、十三日午前五時四十分開古莊および西墳の兩敵陣地を占領した。この戦闘において敵は戰場に死體二百を遺棄し房山方面に潰走したが我が軍は〇隊長森本昌次郎(福岡縣)准尉池田延夫(鳥取縣)軍曹圓治昌勝(岡山縣)以下六名戦死、負傷十八名を出したが、我が騎兵一名は我が軍の突撃路上に敵地雷を發見、決死軍馬もろとも地雷線上に突入り身をもつて地雷を爆破せしめ、友軍の突撃路を開いたが悲壯同騎兵は肉弾となり天空に飛散し壯烈な戦死を遂げた。この勇壯なる行爲こそ過ぐる上海戦の肉弾三勇士にも劣らぬ武勳といふべく北支戦線の花と謳はれてゐる。

(大朝、九・一五)

譽の「死の戦車」

(7) 忠魂宛ら生ける如く

握る血染のハンドル

楊行鎮を陥れたわが田上、石井兩部隊はさらに破竹の勢ひで西進鷹森部隊の援軍と合して敵主力の據點劉家行を猛撃中で劉家行の陥落は今や目睫に迫つてゐる、この攻撃に協力す

るわが〇兵の威力および戦車隊の活躍はすばらしいものがあ

り、楊行鎮占領後一舉に二キロ以上〇兵部隊が進撃し得たのも、わが〇砲を散々敵陣におち込んだためとも讃へられてゐる。この方面で捕へられた敵の捕虜が日本軍の何が一番恐ろしいかとの問に對し「恐ろしいものは第一大砲、第二飛行機、第三機銃、第四小銃です」と答へたことより見てもわかる。十五日前線を訪へば、岡戸部隊長は吳淞砲臺の掩護射撃中、敵弾のため重傷を負うたが「これしきの負傷に引きさがれるものか」と轉戦また轉戦、いつも砲撃戦の陣頭にあつて「ぶちこめ／＼」と指揮してゐる。野末部隊長もこれに劣らず元氣もので敵の機關銃弾の飛來する〇〇宅の觀測所の屋上に鐵兜も被らず立つて大聲で「オーイ、新聞記者もここに登れ、敵がよく見えるぞ」と敵の眞正面で悠々煙草を吹かしてゐる。「敵の彈丸が少しやつて來ないと張合がないわい、ピシヤリと二つ三つ毆らせておいてガンと致命的打撃を與へるんだ」と叫ぶ、敵は千メートルも離れてゐない。直目の前の部落にゐる。眼鏡に敵陣がクローズ・アップされる。後方から出入りする兵も手に取るやうだ。「撃てツ」と命令が下ると〇門の〇砲が／＼に秋空を震はせてブツ飛ばす、敵壕の後方部落にドカン／＼と土煙が揚がり、敵は木ツ葉微塵にフツ飛ぶ。また楊行鎮陥落前吳家宅附近の戦闘で戦車隊〇隊が堂々隊伍をと／＼へて進撃中、敵陣から〇〇砲をもつて砲撃

一番、岡林准尉の指揮する〇〇名目がけて撃ち込んで来た。藤田部隊長の號令で敵の野砲に向つて撃つとつゞく戦車全部が期せずして敵前〇〇方面めがけて一斉砲撃、これをぶつつぶして悠々三百五メートル引揚げた。そこまで来ると岡林准尉の戦車がびたりと止まつてしまつた。敵の砲撃によつて藤野清人上等兵は戦死、甲斐大作一等兵は重傷、岡林准尉と上村一等兵が代つて砲撃してゐたが藤野上等兵は戦車のハンドルをしっかりと握りしめ味方陣地に引揚げるまで操縦席を離れず遂にそのまゝ絶命したのである。見ればエンジンも撃たれ、どうしてもエンジンがかゝらない、そこまでどうして動いて来たのかわからない。藤田部隊長以下一同は「死んだ藤野の靈が操縦したのだ」といままなほ信じ切つてゐる。

(大毎、九・一六)

(8) 奇蹟生還の四勇士 金櫃守つて敵陣に十八日!

〇〇部隊が揚子江下流に上陸し一氣に敵陣を衝いた先月廿八日劉家宅の激戦で、戦傷をうけた四勇士が、敵の眞只中にとり残されながら大行李を死守すること十八日間、僅かに生命をつなぎ尊き使命を全うし、去る十四日友軍の手に救助されたといふ一死奉公の奇蹟的生還談がある。

この四勇士は和知部隊の山下友信上等兵(高知縣出身)戸

鍛治利春一等兵(高知縣出身)宮里藤平一等兵(高知縣出身)清水二三男一等兵(大阪府出身)で廿八日拂曉の激戦に奮戦するうち四名とも負傷、田の中に昏倒したが互に我に返つた時には友軍は遠く移動した四名のみが取残され、五十メートル離れたクリークの西側には敵大部隊が集結してゐた。三日目の夜山上下等兵と宮里一等兵が食を求めて附近を捜すうち恒岡部隊の清水主計が敵弾を受け、名譽の戦死を遂げながら右手でしっかりと抱いてゐる大行李を發見、中を調べると、なんとこれは恒岡部隊の大行李數萬圓を納めた金櫃であつた。重大任務を自覺した四名はあたりに名譽の戦死を遂げた戦友のあとを捜しては生米、乾パンをかじり僅かに飢を凌ぎつゝ大行李を守り、遂に十七日目の十四日朝友軍を發見、夜に入るを待ち漸く友軍に辿りついて無事救出され直に衛生部に收容されたのであつた。四勇士は病床でこもこも語る。

金櫃を發見した時は全く驚きました。テントや外套で上から包みこれを死守することに決心しました。自分ながらよく生きられたと思ひます。十八日間ほしかつたのは水でした。

(大朝、九・二七)

(9) これぞ武人の情 敵將の屍から出て来た手紙 本人に代つて鄭重に郵送

なかつた。ところが十二日夜西本部隊長が收容されて間もなく隣室で一步兵が出血のため危篤だとき、最後の激励の言葉をかけてやらうと訪問するとそれが實は愛弟一夫君であつた。そして兄中尉が涙とともに囁いた「後のことは心配するな、傷が癒るのを待つて兄が必ずお前の讐討ちをしてやるぞ」この一言がやつと分り、微に肯いたまゝ、瞑目した。西本中尉を十七日野戦病院に見舞ふと、素晴らしい元氣で「有難う、私は急になくなつて来ました、あれの靈が僕の回復を祈つてくれるに相違ない、あと二、三日したら戦線に立てるでせう。今度はやりませうよ」と語つた。(大朝、九・一九)

(11) 分捕り機關銃で 逆襲の敵を全滅

敵の新銃武器で敵自身が全滅したといふ皮肉な事件が、戦線の話となつてゐる。去る五日羅店鎮戦線石橋における戦闘は永津部隊得意の砲戰術によつて小癩にも我が方を衝かんとして殺到した敵第五十一師三百六團第一營は、劉大隊長以下全滅せしめられた。その際營旗一旒、連旗三旒、チェッコ製輕金屬機關銃二十臺を彈丸三萬發とともに鹵獲した。ところが越えて七日小癩にも第一營の復讐を企てた第二營は第一營と全然同様の線を逆襲し來つた。その時部隊長「どれ、これを一つ使つて見ろ」といふので直ちに敵の輕機をもつて出

去る十六日羅店鎮西方馬橋方面で、敵は猛烈な反撃を企てわが和知部隊はこれと激戦を交へ、敵は多數の死體を遺棄して潰走して行つた。敵が遺棄したうちにあつた將校の死體のカバンから故郷へ宛てた信書が發見された。遺留品として和知部隊長の下に届けられたが、部隊長はこれを見て「前線で奮戦する勇士に對して故郷の同胞の思ひは敵も味方も同じことだ、この手紙は必ず宛て先に送り届けてやれよ」と命じた。同部隊ではそのまゝ丁寧にこれを保存し郵送の機會を待つてゐた。十七日記者が同部隊を訪れた時、部隊長は早速この手紙を記者に渡し郵送方を依頼した。わが日本軍の床しい「武人の情」ではないか。この敵將校は第十四師歩兵第四十二旅第八十四團排長張良歩兵中尉で、一通は漢口の兄に宛てられ、他の一通は漢陽の女性に宛てられたもので張中尉が受けた一弾は、この手紙をも貫通してゐた。(大毎、九・一九)

(10) 隣室で臨終の兵を 見舞へば意外わが弟

羅店鎮戦線にて奮戦しつゝある西本益吉部隊長は、十二日夜名譽の戦傷で野戦病院に收容されたが、その隣室に實弟の和知部隊の西本一夫一等兵が同じく去る十日の激戦で負傷、重體のまま收容されてゐた。この兄弟は部隊が違ひ、出征の時期が異つた、め兄弟同士で同一戦線にゐたことも全く知ら

動、激戦約三時間にして第二營を粉碎、敵は徐連長以下の死體三百を残して敗走した。永津部隊長は十七日左の如く語つた。

「非常に工合がよいので、引續き使つてゐる。我が軍のそれに比較すると勿論威力は足らぬが、それでも支那兵をやつつけるには十分だ。第一軽くてひよいと片手で持つて走れるのが都合がよい。日本の兵隊なら何もこれを地上に据ゑなくても腰にあて、十分に撃ちこなせる。分捕つた弾が三萬發もあるからまだ當分役に立つと思ふ。有難いことぢやワツハハ」

(大朝、九・一九)

敵前卅米の濁流に

(12) 人梯子の突撃路

決死！工兵三十勇士

去る十四日我が石井部隊が楊行鎮西南から頑強に抵抗を續けてゐる敵の堅壘目掛けて進撃するに當り、工兵柳澤部隊長の指揮する決死の敵前渡河作業班三十勇士が、敵前三十メートルの濁水、肩を没するクリークに竹梯子を作つて身を浸すこと一時間餘、敵彈雨飛の中を自ら人の梯子を作り、怡土部隊長の指揮する歩兵突撃隊〇〇名を見事渡河せしめたことが判明し、〇〇部隊長以下全將士を感激せしめてゐる。怡土部隊はその日午後五時までに大家宅の敵陣地を占領すべく、これ

よりさき午後二時半を期して攻撃準備に移つた。これに協力を命ぜられたのは工兵柳澤部隊長である。大家宅の前方には幅廿五メートルのクリークが横たはつてゐる。折柄水が最も浅い干潮時だ、まさに絶好の機會である。柳澤部隊長の命令一下、渡河作業班の三十勇士はおの／＼十五名づつ二班に分れて、二つの長竹梯子を擔いで敵前に躍り出した。クリーク對岸の敵は異様なかたちをしたこの竹梯子を爆破材料と勘違ひしたものでらしい、大狼狽で一時第一線陣から後退した。そこをすかさず渡河班の勇士は二手に分れ左右後方からさんぶとクリークの濁水に飛込んだ。敵は渡河班の擔つて來たものが橋梁材であることが分ると再び前進、機關銃の猛射を浴びせかけ手榴彈を投げつける、干潮時のクリークでも意外に深く水は頭まで没する。梯子はクリークの幅よりも三、四尺短く兩岸に達しない、「おい人梯子だ」全員が期せずして一齊に答へる。決死の勇士はクリークの此方の岸から彼方の岸まで二メートルおきに列び、横倒しにした竹梯子を肩で支へて、忽ち人柱の梯子がかけられた。敵前三十メートル敵陣は雨霰と降る。手榴彈が飛ぶ、勇士達は水中から頭ばかり出してゐる。幸ひ鐵兜で彈丸はちよつとも中らない。手榴彈も水に落ちるので破裂しない。この時どつと喊聲をあげて怡土部隊長の指揮する歩兵突撃隊が人梯子を渡り始めた。人梯子だけに多人數が一時に渡れない。四、五メートルおきに餘り急がず

渡らなければならぬ。だから歩兵突撃隊の全員〇〇名を渡すに約一時間もかゝつたが、渡河作業班の勇士達はこの間水浸りとなつて頑張り通し歩兵突撃隊の最後の一人まで完全に任務を果したのだ。この間敵の猛射によつて怡土部隊に多數戦傷者を出したが、渡河作業班三十勇士は奇蹟的に一名も負傷しなかつた。

(大朝、九・二〇)

噫、大生部隊長

(13) 「敵陣まだ落ちぬか」

去る十一日平緩線聚樂堡の激戦で第一線將兵を指揮中壯烈な最期をとげた大生壇城部隊長の奮戦振りを聞くべく、十七日〇〇に同部隊を訪問した。「まづ英靈にと別室に導かれる、眞白い布で蔽はれた遺骨は、故部隊長が所持してゐた日章旗をバックとして、在りし日の雄姿を偲ばせる寫眞の前に安置され、傍には血潮生々しい拳銃の皮袋、水筒、軍刀、鐵兜、双眼鏡などが飾られ、紅紫色とり／＼の野菊の花やバイナツブルの罐詰、支那菓子、葡萄酒等が供へられ、戦陣とはいへ部下將兵の心づくしで簡素ながら丁寧に安置されてゐる。哈察爾方面作戦軍は急遽出動の命に接したので僧侶の從軍者はゐない。記者(三原特派員)は部隊幹部の諒解を得て身にしてゐた「六字の名號」を、せめて部隊が出動するまでその靈前に安置することとし、心しづかに經文を誦して護國の英

靈を弔うた。(三原君は西本願寺派寺院の出身)大生部隊長の奮戦は〇〇部隊が聚樂堡の敵陣を攻撃したときのことだ、十一日正午部隊は聚樂堡東南方八キロの高地附近の敵を攻撃部隊長はよりよく第一線歩兵に協力せんとし、急遽陣地返還を命じ地獄山附近の敵前一千メートルの地點に陣地突入を敢行させた。そして雨霰と小銃、機關銃、迫撃砲、山砲彈の飛來するなかで自から第一線將兵を督勵してゐたが、突如部隊長の足もとに敵の野砲彈が炸裂し、この破片が左眼から頭部に入り、瀕死の重傷を負うてその場にばつたり倒れた。そのときそばにゐた竹林中尉宮本曹長が「部隊長殿！」とかけもどつたが「おれは後には退かぬぞ、まだ敵陣は落ちぬか」と叫びやがて息を引きとつた。最期まで部隊を思ひ指揮に心をくばり從容として死についた態度は全部隊將兵に非常な感銘を與へた。

(大毎、九・二二)

烈々、勇士の遺書

(14) 笑つて爆破行白襪隊の面々

天佑の生還に嬉し泣き

既報、山内部隊の決死爆破隊が爆彈を抱いて羅店の敵陣へ飛び込み、障壁を粉碎し突撃路を開き、死を賭した爆破作業に一人の犠牲者も出さなかつたのは、世界戦史上珍しいことで全く天佑神助であらう。隊長丹茂少尉以下廿勇士は爆破に

赴く時は顔色一つ變へずに出かけたが、この大事業を敢行した喜びにいづれもこみ上げて泣きやまず「皆の心が一致したのと神へ祈願したので叶つたのです」と丹少尉は涙ながらに語つた。なほこの決死隊が出發する前、この世の名残りに父母へ、家族へ、それ／＼遺書を認めたが、如何に皇軍將士が一死報國の赤誠に燃えてゐるかがわかるるとともに、笑つて死地に赴く勇士の心が頼もしい。左の數通はいづれも奇蹟の生還をした勇士達の遺書の一部である。

自分等の任務は白壁の家を爆破して歩兵の突撃路を作るのです。坑道を掘ること三日三晩、掘り続けたが、それでも總攻撃の間に合はぬので決死隊に加はつた。これが最後です。一死報國。お父様、お母様、御機嫌よく。

一等兵 小林 福太郎

堅固な敵陣地を工兵の花であるところの爆弾抱いて破壊するの名譽ある重大任務につきました。軍人の精神を發揮しました父上の日ごろの教訓を發揮するのはこの時と勇んで行く。今度は死あるのみ。死をもつて盡さねば成功出来ず死は故郷へ歸るやうな安らかさです。父上安心して下さい。ではもうお別れです。皆様末ながくお暮し下されますやう祈ります。では急ぐまゝに。

一等兵 大石 龜太郎

弟よ元氣か。兄は名譽ある任務に服す。光榮この上なし。

一死報國このときにあり。お前は兄の分とともに親に孝行を盡してくれ、兄の最後の頼みなり。兄は笑つて前進する。

一等兵 角田 一夫

村長様。私はたゞいま死を期して突撃路の開設に行きます。村の人達によろしく。

一等兵 柴田 勝明

敵陣近くにゐるので長く書けません。母上、父上様、いま第一線で歩兵と協力して攻撃します。重大任務を、死して果す覺悟です。

一等兵 白川 松夫

(大毎、九・二五)

(15) 保定城占據の花
昭和の玄武門破り

二十四日の保定城攻略は、わが近代戦史に燦然と輝く壯絶なものであつたが、この弾雨を潜つて北門の一番乗りを敢行し友軍のために突撃路を切り開いた勇壯なる「昭和の玄武門破り」の三勇士があつた。安部部隊が敵の堅固なる壘壕を乗り越えていよいよ城壁に迫つた時、城内突入の決死斥候に選ばれた石田實軍曹、後藤秋義上等兵足刈幸作(電文階級不明)の三勇士は武装を軽くし、いづれも白鉢巻に鐵兜姿のいでた

弟の骨負うて仇討

(16) 一番乗りに輝く山口上等兵兄弟
相ついで花と散る

この日、助川部隊の山口幸雄上等兵は午後十一時刻各莊地區の突撃戦に一番乗りをやり、敵兵四名を倒してさらに突進せんと壘壕に躍り込まんとした利那、胸部貫通銃創を受けて即死した。

助川部隊には、同上等兵の實兄山口勝上等兵も活躍してをり、これを聞いた兄の勝上等兵は特に助川部隊長の許しを得て血腥い陣中で戦友に手傳はれ「幸雄よ、よくやつてくれた死んだ親父も満足するぞ、仇は取つてやるぞ」と弟の骨を自分の背囊に収めるや、そこ／＼に第一線に進撃したのであつた。ところが幸雄上等兵が戦死してから三日目の廿六日の沙河橋攻撃に勝上等兵は弟の遺骨を背中に負うたまま、突撃部隊に加はつて、これまた四名の敵を刺して花々しく戦死した。兄弟二人で八名の敵を倒したわけで、勝上等兵は「天皇陛下萬歳」「幸雄よ、仇を取つたぞ」と叫んで息を引取つた、助川部隊長も野戦病院でこの報告を聞いて、さすがに目をうるませながら「俺も出て行くぞ、部下の仇はとつてやる」と傷ついた身體を起して軍醫を弱らせてゐる。(大毎、九・二七)

ちで勇躍し、高さ十五メートル殆んど直角の大城壁に向つて肉薄した。堅城に據る敵兵は三勇士の頭上から機關銃、手榴弾を浴せる。後藤上等兵はまづ細綱一本を打ちかけ躍りかゝつて僅かに十分間にして、見事攀ち登つて城壁の頂上に立つた。その利那、敵兵二名が銃口を向けてまさに引金を引かんとしたトタンに同上等兵は素早く鐵兜を抜いで投げつけ、敵兵がひるむ間に傍らに倒れてゐた負傷兵の銃を奪つて立ち塞がつた。これを目撃した城内の保安隊員約六十名がこちらに殺到して來たと見る間に、同上等兵の後ろにつゞいて城壁を攀ち登つて來た石田、足刈兩勇士とともに保安隊員を大喝威嚇するや突差に殺到した保安隊員も、この剛膽さに度膽を抜かれて一齊に手を舉げて立ち止まつた。その際に軍のごとき三勇士は身を躍らせて城内に飛び降り、北門を押開けて「オ、イ突撃路を開いたぞ」と絶叫した。この時すでに城壁に殺到してゐた友軍の部隊は突撃の大喊聲とともに潮の如く城内に突入して敵兵を蹴散らし間もなく一角に日章旗を翻へしたのである。この三勇士の剛膽沈勇は保定攻城の花として讃へられてゐる。更に奇しくも同日は安部部隊長の誕生日に當り部下と、もに支那酒で祝杯をあげ、しかもこの三勇士の殊勳を何よりのお祝ひだと雀躍して喜んだ。(大朝、九・二七)

城壁に決死繩梯子

釜付中尉の手記

保定城頭、東天を拜し涙の萬歳

(17)

保定一番乗りの殊勳をたてた。爆破決死隊長釜付中尉は戦ひの疲れを休めるひまもなく、自から鉛筆をとつて血戦手記を綴り廿六日午後一時本記者(五島特派員)にそれを託した。以下は釜付中尉の手記である。

廿三日夜、軍から私の部隊に對し保定城の西北角の城壁を爆破、歩兵の突撃路を開けとの命令下り私は直に決死隊を組織した。そして爆薬筒を準備しつゝ偵察のため下士官とともに自分も斥候に出たが、敵の猛射でどうしても近寄れず困つたが、勇氣を出し月明を利用して第一地形を偵察し終り、廿四日拂曉長谷川部隊の吉岡決死隊とともにいよいよ前進を初めて敵の猛射を浴びつゝ鐵道線路まで出て最後の訣別をした。妻子のある兵は第二線に、獨身の兵を第一線に立てて敵の猛撃を冒して前進、午前七時ごろ敵前三百メートル、はつきり城壁の見える地點まで達した。自分と兵と二人で爆薬を背負つて外濠を通り抜け、水が胸まである濠を泳ぎ城壁に辿りつき〇〇〇キロの爆薬背囊を負つたまゝ城壁の裾に穴をあけ、爆薬を二個所に装填し、もし爆破がうまく行かぬばさらにわが身もろとも突入し點火すべく決意し、先づ最初の爆薬に點

火したところ轟然たる爆音とともに、城壁の一部が破壊された。しかしさすがは名にし負ふ不拔の堅城だけあつて、爆破だけでは突撃路にならない。この上は肉弾をもつて突撃路を開かんものと部下の兵が携へて來た木の梯子で、私が眞先に城壁の中途まで登り、腰につけた繩梯子を砲弾で破壊された城壁の上にひっかけ私が先頭でよち登り頂上に立つた。これにつづいて待ち構へた歩兵機關銃隊が續々繩梯子をかけて登り城壁の上から逃げ行く敵を猛射し、遂に城壁西北角高く日の丸を掲げ、附近を全く占領したのは午前九時廿五分だつた。城壁の頂上に立つて部下の兵とともに遙か東天を伏し拜み萬歳を三唱したとき自分たちは皆涙をぼろ／＼こぼしてゐた。自分たちは永定河上流に架橋して岡本(鎮)部隊の主力を渡河させるため非常な苦心をしたが、總てはこの保定を目ざして死物狂ひの努力であつた。その保定に自分たち決死隊はいま一番乗りした。これで歡呼の嵐に壯途を送られた郷土銃後の國民に對し面目が立つわけである。(大毎、九・二八)

實彈射撃の経験もなく

敵兵仆し兵器分捕り

(18)

前線進出の特務兵の大偉勳

今回の上海戦はその戦闘様式において、またその戦闘内容においてわが國戰史上においてかつて見ぬ特異な事實がいろ

／＼と生れて來てゐるが、そのうちでも空前絶後といふも過言でなからうといはれるのは、〇〇特務兵の第一線進出の大殊勳である。

敵前上陸後の陸軍部隊が敵陣地を撃滅しつゝ前進するにつれ、最近わが栗岩部隊の特務兵達はゆとりが出来たが、後方のみにあきたらず、第一戦参加を熱望した軍としてもこれら勇士の懇望に感激し、一方餘剩兵力を無爲にすごさせるのもどうかとあつて遂に意を決し、極めて冒險的試みと思ひながらここに〇〇特務兵を敵前僅か三百メートルの最前線にまで進出せしむることになつたものである。先づ第一回は去る十二日から二週間山田、幸田兩部隊を第一線に送り數倍の敵と對峙させた。ところが部隊員は初めての敵前塹壕生活にもかかはらず、その意氣はあたるべからざるものがあり、一部のごときは任務について數日後には見事な射撃で數百メートルを前進し、その夜敵の逆襲を完全にしりぞけて三十餘名の敵の遺棄死體を收容するとともに多數の兵器を鹵獲し、味方は僅かに八名の死傷者を出したのみであつた。さらに幸田部隊は同日新しく某方面に出動したが、このときには栗岩部隊の全將兵が出動を志望してゆづらず、その人選には栗岩部隊長も大困りし漸く決定を見た。この日負袋の輕装で喜色を滿面に漂よはせて出陣する勇士達は、いづれも片手を高くあげて「行つてくるぞ」とほこらしげに楊柳の並樹をぬつて進發し

た。勇敢な部下達が棉畑の向ふに見えなくなるまでヂツと見送つてゐた栗岩部隊長は、

「實にえがたい試練を見事克服し、我國戰史に空前かつ千古に誇るべき一頁をかざつてくれたのだ。何しろ實彈射撃の経験もない兵が、初めて持った鐵砲で直ちに敵兵を射殺し立派に攻撃前進し突撃までやつてのけるのだ。大和魂の發露といふか、人の氣力ほど恐ろしいものはない。愛國の一念あれば、およそ不可能といふことはありえないのだ。」と語りつゝ部隊長の眼に露が光つた。(大朝、九・二九)

あゝ特務決死隊

四勇士挺身斬り込み

(19)

飲料水が極度に不足であるわが最前線の將兵を救ふため、勇壯無比の安達部隊の特務決死隊——長尾上等兵はか特務兵三名は彈雨の前線勇士へ命の水輸送の重任を果すこと三たび遂に敵地に迷ひ込んでしまつた。銃なき丸腰の特務兵は長尾上等兵のたゞ一挺の銃で、よく重圍の敵陣に奮戦したが、衆寡敵せずもはやこれまでと劍をぬいて敵壕に突撃して獅子奮迅長尾上等兵、松下特務兵は十四人の敵を斬り斃して遂に壯烈な戦死を遂げた。

月浦鎮を攻略後長驅羅店鎮前線に進出した。安達部隊は重疊たる敵陣を疾風迅雷の勢ひで撃破し、去る十七日には羅店鎮南方地區小顧宅の敵陣に迫つたが、この時前線の各部隊は

後方との聯絡が敵の猛撃のため意の如くならず、飲料水缺乏の苦境に陥つた。各部隊とも敵の猛射に應戦する一方、兵士らが雨霰と降り來たる彈丸の中を腹這ひながら飲み水捜しに出かけ、クリークの水を水筒に入れ、これを綱に括りつけ釣瓶式で部隊に水を送るなど四苦八苦、辛うじて渴を醫してゐた。十八、十九と日が経つにつれクリークの水も濁つて飲まれなくなり、全將士は殘暑に照りつけられ日射病で倒れるかとおそれられるに至つた。大行李部隊ではこの危険を冒してなんとかして飲料水を前線に送らうとしたが、砲彈の火の中とて全く手の施しやうもなく、思案に暮れてゐた折柄、さる十九日晝すぎ同部隊の騎兵上等兵長尾勇君は「私がやります」と決然と部隊長に申し出ると、もに、部下の特務兵に向つて「命の惜くない者は俺につづけ」と決死隊を募つたところ三名の特務兵が「行きませう」と元氣に應じたので、飲料水タンクを積んだトラック二臺を行けるところまで運轉し、それよりリヤカーにこれを積み換へ、雨とふりそぐ敵彈の中を物ともせず前線に辿りつき、これを配給したので渴いてゐた前線部隊將兵は九死に一生を得た思ひで涙を流して感謝し、「この水で命がなくなるとは」と勇氣百倍し攻撃をつづけた。この四勇士は水がなくなればトラックのところまで歸り前線に給水すること三回各部隊を廻り、四回目にまたも敵彈を冒して前線に出かけたが途中道をあやまり、さまよふうちにわが前線を

八〇

突破して敵陣の中に出た。「あゝしまつた」と思ひついた時にはすでにおそく、敵の機銃は四勇士めがけて一齊に火をはき敵陣の十字火の中におちいつた。これと見るや長尾上等兵は三特務兵を指揮し勇敢にもリヤカーを楯に小銃で應戦したが四方敵、しかも味方は僅か四名その上三名の特務兵は銃なく丸腰だ、長尾上等兵のみがたゞ一挺の小銃で奮戦したが、そのうち彈丸を打ちつくし進退全く谷つたので、この上は潔く敵陣に突撃して斬り死するまでだと長尾上等兵は銃をすて、劍を引き抜けば三名の特務兵も「共に死にませう」と劍を抜いて突進した。

(大朝、九・三〇)

その二、海軍の部

十六夜の月落ちて

涙は光る大激戦の跡

(1) 戦友六名悉く倒れた孤壘で

大敵を退けた神戸出身の兒玉水兵

二十二日未明、上海の市街戦で神戸出身の勇士が壯烈極まる大激戦を演じた快報——神戸下山手通八丁目の一等水兵兒玉徹藏君(二十五年)をめぐる戦友二等兵曹前友範一、一等水兵池田薫治、二等水兵富永有男君ら七勇士の忠烈悲壯な戦

場ニュースである。憎むべき大敵の猛襲に戦友六名は倒れわが陣營手薄と見るや四十メートル、三十メートルと肉薄して來る支那軍を眼前に見ながら悠々と壞れた機關銃を懷中電燈の光で修理し、たゞひとり踏み留まつて襲來する敵の大軍を撃退した鋭敏、豪膽、沈勇無比のわが一等水兵兒玉徹藏君の花々しい活躍ぶりを神戸下山手通八丁目の實家にもたらすと國防婦人會の人々、近所の人たちが押し寄せ名譽の家族實父米楠氏(五十三年)母きぬさん(四十六年)妹ふき子さんを取り圍んで日の丸の旗を振りながら、萬歳々々の爆發だ。父君は嬉しさのあまり眼頭を熱くしながら、

「息子は親孝行で向ふ意氣の強い方です。數日前私から死ぬばかりが御奉公ではない。最後まで踏み留まつて敵を撃退するのが眞の忠義だといふやうな手紙を送りましたが、こんどの戦ひでは思ふ存分働いて憎い支那兵を蹴散らしてくれこんな嬉しいことはありません」

と喜びに浸つてゐたが、母親きぬさんも日支衝突以來毎夜缺かさず妹を伴つて湊川神社へ參拜、皇軍の武運長久と息子が立派な働きをするやう祈願をこめてゐたこともわかり、この親にして、この子ありと町内一帯を擧げてこの感激の話題に浸つてゐる。

二十二日午前三時四十分、十六夜月の殘光淡く最前線〇〇一帯に晝隠れて夜出沒する蝙蝠のごとき敵大部隊との間に悽

八一

慘な激戦が展開された。迫撃砲の轟き機關銃の唸り、風を截る砲銃の響き、そして手榴彈の激しい炸裂、濛々たる砲煙は死の街を包んで戦は今や酣だ。新手の衆を恃んで來襲する敵大部隊の猛襲にさすがの精銳を誇るわが佐野部隊の鐵壁の陣もいかんせんもはや危しと見えた。もとより皇國のため身命を捧げた將士ここを必死の捨身の戦法と全線にわたつて火を吐く砲煙は果敢なる一斉反撃、怯えた敵が一瞬沈黙したとも見えた。間もなく午前四時十五分影全く落ちまだ明けきらぬ闇を衝いて虬江路守備軍を手薄と見たか、〇ヶ中隊餘の敵主力は前線突破を企て北停車場附近の砲兵陣地から撃ち出す迫撃砲、焼夷彈の掩護の下に砲煙を潜り機關銃、小銃を亂射しつゝ潮のやうに襲撃し來つた。喊聲が起る、銃弾が闇を衝いて斷續、風を截つて飛ぶ、〇〇の要害を守るは僅かに前友二等兵曹をはじめ池田、兒玉、中山各一等水兵、山田富永二等水兵西田三等水兵の七名、吼え狂ふ小銃陣の中に勇敢にもこれを邀へ撃たんとするのだ。敵の襲撃はますます激しく鐵路を乗越えて彼我の距離百五十メートル、四時二十五分すでに距離百メートル餘、折柄敵砲兵陣地から飛來した焼夷彈が轟然と炸裂して左右に四散した「あッやられた」と叫んでまづ先頭の前友二等兵曹が倒れた、間髪を入れずまた一彈池田一等水兵、山田二等水兵、西田三等水兵が悲痛な聲を擧げてまた倒れた。嗚呼憎むべき敵彈、四時三十三分またも續け打ちの

三弾がこんどは土囊の上に炸裂中山一等水兵、富永二等水兵がまたやられたのだ、そのみか三門の機關銃も破壊しわが方からの銃聲は瞬間止んだ。敵は素早くこれを見てとつたか前進また前進、五十メートル前方の線を越えたやうだ。この時だ奇蹟的にも微傷だに負はなかつた兒玉一等水兵は晝間故障を生じ傍らに置いてあつた機關銃に手がかかつた。さうだこれを修理して「武運の神よこの機關銃を速かに修理させ給へ」と心に念じ懐中電燈を點じて彈丸雨飛の下の修理工作、嗚呼五秒、十秒敵は迫りに迫る。四十メートル三十メートルまさにわが陣營突破と見た折、つひに機關銃の修理は成つた沈黙した陣地から機關銃が火蓋を切つた。敵兵はバタ／＼倒れて行く、この不意打に驚愕狼狽した敵は、後退しはじめたのだ。兒玉一等水兵は戦友の仇とばかり射ちに撃つた。握り締めた機關銃も焼けよとばかり撃ちまくつた。敵は後退した後退午前四時五十分完全に撃退した。生命線〇〇の要害は奇蹟的な兒玉一等水兵たゞ一人の奮戦によつて確保された。急を知り宮崎〇隊長以下戦友がかけてつた際、隊長を迎へてすつくと立つた兒玉一等水兵の雄々しい姿が、朝霧の中にはつきりと浮び出た「よくやつた貴様のお蔭だ」としつかと手を握つて兒玉水兵に感謝する宮崎〇隊長は次の言葉もなく涙が溢れてゐた。夜は白々と明けてゆく。(大毎、八・二二)

(2) 重傷屈せず敵陣へ
機銃を粉碎引揚ぐ

北四川路一帯の敵は廿一朝四時四十分、九江路および北四川路アインス劇場前方約二百メートルの地點より再び大砲、機關銃でわれに猛射を加へて來たので、同地警備の宮崎部隊は自ら先頭に立つて彈丸雨飛の中に勇戦奮闘したが、なかにも十六日、十九日の激戦で鬼兵曹長の勇名をとどろかした濱脇〇隊長は、身に數ヶ所の重傷を負ひながら奮然と立つて敵陣に近づき、遂に機關銃二門をやつつけて悠々引き揚げるなどの奮戦ぶり、敵は遂に五時廿分多大の打撃を受けて全く沈黙した。(大毎、八・二二)

(3) 部隊長は傷きて倒れながら
「俺にかまはず進め！」

陸戦隊須賀部隊長は、廿一日午後四時ごろ楊樹浦工部局監獄西横にあつて土囊陣地を構築中の部下を督勵、自らは附近の屋上に設けられた味方の機銃座で指揮するうち敵弾はわが射手に命中、その場に仆れたため、須賀部隊長は自ら機銃をとつて射撃中、再び飛び來る敵弾のために顔面に重傷を負ひ鮮血にまみれながらも「敵陣を撃ち碎け、俺にかまふな」と絶叫しつゝ後方に收容された。一方同部隊の吉田隊長は公平

路附近の陣地において奮戦中、廿二日午前二時ごろ敵と組み打ちの肉弾戦に移つた時、吉田部隊長は敵手榴彈のため右大腿部に重傷をうけバツタリその場に仆れたが、萩野三等兵曹が抱起さうとすれば「俺にかまはず進め、進め！」と號令折柄これも應援にかけつた竹下部隊、高橋〇砲隊、相澤〇隊に吉田〇隊生残りの勇士らを率ゐ松本登二等兵曹らの〇〇を得て勇躍突進僅かに二百メートルに迫つた敵兵目がけて〇砲五十發を撃ちこんだが敵も頑強に抵抗、わが方にも死傷者を出した。負傷者中には苦しい息の下から「陣地に機銃が残つてゐる。申しわけない、取返してくれ」と最後まで武器の行方を案ずる者があるので戦友の赤心に打たれた勇士達は、さらに勇を鼓して三度敵に突進、敵の先鋒を蹴散らし蹴散らし霧らに突込み、なほ第一線陣地に残つてゐる味方の將兵を收容機銃諸とも第二陣に部隊を集結したが、この戦闘に敵の死傷は約三百、いづれも現場に遺棄戦火に焼かれてゐる。味方も堅田部隊の川口辰志一等水兵ほか數名は名譽の戦死、その他約五十名の負傷者を出し、生残つた勇士達も全身戦塵にまみれて眞黒、まざ／＼と物凄い激戦の様が偲ばれるが、全員士氣ます／＼旺盛、負傷兵も鮮血に染つて「生命の洗濯が出來ましたよ」とニコリと笑ふ。さすがに日本兵ならでは見られぬ勇氣凛々たる英雄の姿である。(大毎、八・二四)

(4) 凄絶、急を告げるゝ血達磨ゝ
決死第二陣を地雷火から救ふ
敵前上陸の花

二十三日拂曉月の落ちるのをまつて敢行された〇〇〇附近における凄絶極まる陸軍部隊の敵前上陸は、歐洲大戰中イギリス艦隊によつて行はれたゼー・ブルゼの明鎖戦と共に世界戦史上にうちたてられた大金字塔だ。これは戦死傷八十餘名の決戦中に端なくも綴られた「第二の勇敢な水兵物語」である。
わが陸上部隊の上陸に先だち〇〇部隊長の率ゐる海の精銳七十餘名の白樺隊の勇士たちは、廿三日午前二時半小舟三隻に分乗して敵陣數メートル前方の棧橋に漕ぎ寄せた。上陸數歩ベタ一面に敷設された地雷火の爆發と共に鐵板、土囊などもつて構築された敵の壘壕から一齊に迫撃砲、機銃の射撃が起り、わが決死隊は十歩いつては仆れ、十間進んでは仆れるといふ有様だつた。しかし風のやうに大地にシガみつきながら進撃を敢行してゐる最中、第二陣の〇〇部隊長の下に重傷を負つて血達磨のやうになつた一水兵が、ヨロめきながら走つて來た。トップを進む〇〇部隊長からの傳令兵町田二等水兵であつた。「隊長殿はやられましたか」と呼吸もたえだえに呼ぶのである。〇〇部隊長は彈雨のなかに彼を抱いて、

「俺は生きてゐるぞ、安心しろ」と血だらけの耳に唇をあて、叫ぶと町田水兵はなほ苦しい息の下から「この線から進んではいけない危険です。同僚八名地雷火にやられました」といふや第二陣への尊き使命を果たした安堵からか、急にガツクリ首をたれてしまった。〇〇部隊長はヒシと彼をかき抱いて「ありがたう。御禮をいふぞ」と抱いたまゝ、彼の手にする手榴弾をとらうとすると、急にカツと眼を開き「これは自分のです。もう一度行きます」と絶叫したまゝ、人事不省に陥つた。彼は地雷火のために重傷を負ひ下士官集會所のベッドに横たはつてゐる。〇〇部隊長は二十三日夕〇〇隊本部において「これは町田の尊い血だ」と軍服の襟にベツトリと凝結した血痕を示しながら左のごとく語つた。

「何しろ敵前上陸の露拂ひをやつてのけたのだ。〇〇部隊だけで即死二十五、重傷六十二を出したのだ。みんな尊い犠牲だが、この町田の殊勳は潮死の重傷で血を浴びながら第二陣を地雷火線から救つたのだ。僕はこの激戦で悲しい一つの發見をした。それは平素から可愛がつてゐたやつ、これならきつとやると心から信頼してゐる部下に限つて、思はず一番困難な仕事にあたらせるといふ不思議な心理だ。かうして、今日の戦死者名簿を見ながら一人々々が實に惜しい男ばかりなのが一層泣かせる。これは悲しい親心だ。君、分るか。」

と涙を拭つた。

(大毎、八・二五)

(5) 胸に迫撃砲、顔へは小銃六發
一寸手當して又勇躍第一線へ

對峙すでに廿餘日、連日連夜逆襲する十數倍の敵を斥け、斷乎として租界線を確保、一步も近づけぬ元氣旺盛のわが陸戦隊、敵の小銃、機關銃の盲射ちも、鰐の面に水ほどにも思つてゐないが、中でも〇〇隊の一等水兵仲武君の心臓は鐵兜を被つてゐる。同君が最初弾丸と組打ちしたのは八月十七日、敵の砲弾は遽に正確になつてきたが、同君は雨霰と降り來る敵陣中に勇敢にも電話線修理に出たと思ふと間もなく、敵の迫撃砲が物凄いうなりをあげて同君の足元に炸裂した。同君は頭から土砂を浴びてひっくり返つた。てつきりやられた、と思つたが近寄つて見ると、同君は酒々として立ち上りニコリ笑つてゐたが、心臓のところを女の乳房のようにポツコリ膨れてゐるので、〇隊長があわて、彼を治療所に連れて行くやうに部下に命じた。僅か數分にして同君は歸つて來て復命したが、言葉が振つてゐる「沃度丁幾を塗つてきました。胸のポケットにこんなものが入つてゐました」と出したものは、伸一等水兵の心臓の強さに顔負けした、迫撃砲の斷片であつた。第二回目は八月廿五日中部戦線楊樹浦の激戦の時だ。文字通り彈丸雨飛の中を阿修羅の如く突進また突進の眞只中、

部隊長が不圖同君を見ると顔面一ぱいに鮮血で血塗磨だ。氣にかゝるが突撃中何とも出來ず、戦ひすんでから彼を軍醫のところへ手當をしに行かせたが、これも僅か一日で歸隊「彈丸は六發當つてゐましたが、皆顔の皮を少しかすつたばかりで、軍醫殿はお前の面の皮が厚いからだ、と笑はれました」と顔一ぱい繻帯を巻いてゐながら、意氣揚々相變らず第一線で勇敢に活躍してゐる。

(大毎、九・三)

〇〇敵前上陸戦闘手記

月明の敵壘へ體當り屍山血河に凱歌揚る

(6) 義烈白禱決死隊

竹下白禱隊長

昭和十二年八月廿三日！この日こそ將來決して忘れることの出來ない日となつた。誰でも一度死線を越えた後に、困難であつたとか、痛快であつたとかいふたゞ單なる感情の表現をもつてはつきぬ深刻なる感情のショックを受ける。このショックは善かれ悪かれ一朝一夕で消散するものでない。しかも期待に反して困難なる作業に逢着したる場合は特に然りである。我々は陸軍の上陸援護のため敵前上陸を命ぜられた時には、總員決死の覺悟をもつて起つた。白禱といふことは一つは夜間同士討を防止するといふほかに、日露戰爭當時、敵陣に乗込むには白禱を使用してゐる故事になつた。この

壯途につかんとする氣持は、丁度上杉謙信が川中島の夜戦で肅々と川を渡つたあの氣分と相通するものがある。

今度の敵前上陸でこの氣分の三昧に徹底した。一度生死を離れて難事決行しなければ、この氣分がよくわからないと思ふ。綺麗な月である。黄浦江といふ河は日本の川とは違つて實に悠々たる流れである。それだけ水の音など少しもしない。たゞ汽船が下航するスクリーンの音のみである。江の兩岸に敵はゐる。今晚はしんとして音もない。關北方面でとき／＼撃出す敵陣は閃光を放つて唸るやうに遠くから聞えてくる。また後は寂として靜かなものだ。關北方面は一帶の火災で赤々と天空をこがしてゐる。汽船は舷燈も出さずにゐるが、彼方をすかして見れば點々と前方に續いてゐる。目的地は近くにある。船長より目的地點まであと三キロメートル、二千メートルと刻々に知らせて來る。この乗船中の氣分は凄壯といふ言葉で表はすのであらう。自分は「風蕭々として易水寒し、壯士一度去つてまた還らず」といふ詩を心の内に吟じた。生か死か、成功か、失敗か、一生の大賭博といふところであらう。死これ天命か、敵陣地に斬り込む氣分は一口にいへば柳生流にある。「斬結ぶ太刀の下こそ地獄なれ、身を棄ててこそ浮ぶ潮もあれ」といふ氣持であると覺悟の臍をきめてゐた。と角日本人は支那人といふと、日清戰爭以來「チャンコロ」とか「チャンチャンボウズ」などと初めから弱虫扱ひしてゐる

が、近代の中支の正規軍はよく訓練されて、非常に夜戦をよくやる。これは前期の上海事變當時よりは一進歩である。もう一つ、彼等は手榴弾をよく活用し、この惨害たるや非常なものである。

午前二時過ぎになると前方にある〇〇艦が先づ火蓋を切つた。後方で見ると火災を起すもの、または大きな穴を開けられるもの、火花を上げて天空に飛散するもの、見物にはもつて来いだ。われ／＼はあれだけ大砲を撃込んだから敵もをれまい。上陸も容易に行くぞといふ気分になつた。汽船はいよ／＼近づいた。敵は一發も撃たない。岸壁に近づき纜索(ロープ)を取り初めると轟然撃出した。見れば棧橋近く海岸線より三米乃至四米近くの所にう／＼してゐる。その内バツ／＼、パチ／＼といふ機銃の音がする。これはゐるぞ！油断ならぬと思つた。船を横着けにするにも遠くて駄目だ。纜索を取る者は水中に飛び込んだ、この纜索を取るものは敵には撃たれ放題、危険の上もない。棧橋はないし、道板をかけて一斉に海中に飛び込んだ。「〇〇〇隊」といふ〇〇長の聲が夜空にひびく、「早く占領地域を擴大せよ」といふ指揮官の聲も銃聲にて十分にきゝとれないらしい。敵の地雷火は棧橋附近の海岸に一斉に敷かれてゐた。それは踏むと炸裂するのではなくて針金を張つておいて、これにかゝると紐を引いて爆發するようになってゐるものである。第〇〇隊の第

〇〇隊は頑強なる敵の塹壕に直面した。〇〇長柴田中尉、元氣旺盛な海軍士官で、〇〇隊を率ゐて敵陣に斬り込んだ。ところが敵もさるもの敵陣から手榴弾を食はされ、忽ち戦死重傷者を出したが、彼はひるまず第一陣地を占領した。時に彼も顔面足部に重傷を負つて立ち上ることが出来ないが、第〇〇隊は一心同體、よく占領陣地を固守した。一方第〇〇隊の第〇〇隊は敵の側面屋上から射撃したので、敵は堪へ切れず後退してしまつた。一寸面白いことは第〇〇隊第〇〇隊が上陸するや否や、海岸にある竹垣を破つて突入したところが、敵は竹垣のすぐ内側に塹壕を掘つて射撃出来るように竹垣の下の方を所々穴をあけてをる。この塹壕の上のぼつてしまつた。〇〇長は横にこの塹壕をば薙拂つて行つた。敵は面食つて逃げ出した後で調べると、この塹壕の後方には地雷がずらりとならんでゐた。岡部部隊長は關兼光の名刀で廿名までは斬つたが、後は覚えがないといふほど痛快な場面であつた。もう一つ面白い話は、第〇〇隊の並木〇〇隊長が揚陸後敵の左翼を包圍しようと思つたうち、近くで機銃の音がする。よく見ると自分の股下で敵の機銃が盛んに撃つてゐる。自分は敵の機銃の上に乗つてゐたのだ。「畜生」といふので手榴弾を穴からぶち込んで敵を廿数名一舉に仆した。支那人は塹壕に長い間へばりついてゐて、我々が塹壕を通り過ぎた後より撃つ奴がゐる。度胸がよいといふのか、馬鹿といふのか、も

ちろん晝間ならば一ツツ風つぶしにやつて行くが、夜間の敵陣突入には時々かういふボケツトを残すことがある。かくて敵の双の下をくゞつた體當り式戦法は、見事功を奏して約一時間後完全に所定の地域を確保した。

すつかり明るくなつた。右翼および前方の敵は退却して沈黙してしまつたが、左方はまだ頑強に射撃をしてゐる。左翼に面してゐる造船所(三階建)の屋上に登つて逃げる敵を第〇〇隊が〇銃と〇〇砲で撃ちまくる。このころは戦争もすでにけりがついて陸軍の部隊が進出して来たころなので、左翼の第〇〇のみ戦闘し、他の部隊は全部この屋上に登つて觀戰してゐた。高いところから敵の密集部隊の頭上に炸裂する弾丸や、〇〇で下に向つて撃ち下すのを見てゐると今までの苦勞もふつ飛んだ。そのうちビュンと一弾敵の狙撃兵から撃たれた、皆は思はず首を縮めた。幸ひ弾丸は當らなかつた。遠くから見ると敵兵が約二個中隊ばかり列をなして田んぼや畦道を退却して行く、そのうちにこの敵が「廻れ右」して来た。をかしいなと思つてゐると騎馬兵が盛んに追立てゝゐる。これは督戰隊といふ支那獨特の軍隊で、味方の逃げるのを後方に待ち構へてゐて撃つのである。敵兵は右往左往してゐたが、結局今度は横の方に逃げてしまつた。これこそ將棋でなくとも逃げ手は幾らでもあるものだと思つた。かくして豫期以上の大成功裏に陸軍部隊と交代し、わが陸戰隊の大なる

存在を示して意氣揚々と引揚げた。古來敵前上陸といふものは困難なる作業である。しかし誠忠に燃ゆる帝國軍人が屍山血河の覺悟をもつてせば如何なることも出来ないことはないと思つた。日清、日露の戰役において海軍先輩が示した遺訓はわれ／＼現在の海軍を指導してゐると思つた。

(7) 噫、血達磨水兵
泣いて觀測鏡を放さず

細谷水兵の乗つた驅逐艦〇〇は去る八月廿七日、まだそのころ敵兵が頑強に布陣してゐた黃浦江吳淞砲臺線を強航通過せんとするや、これを認めた敵兵は同艦めがけて猛撃し來つた。このとき細谷水兵は觀測鏡係として距離測定中であつたが、瞬間艦橋に飛び來つた一弾は同水兵の腹部を引裂いた。「チャンキー(支那兵)の奴、やりやがつたな、何ツ」と獨言、倒れるかと思つると半身鮮血に染まり、艦橋の床を血の海にしなながらも、彼は妙な腰つきで、また觀測鏡に取りついてゐるではないか「ひどくやられた！」傍のものは驚いて彼を抱へようとするが、どうしてもこの血達磨は觀測鏡にしがみついていつかな離れない。戰友の眼はうるんだ「細谷、放せ！」「職務であります、私の……」寄つてたかつて手を放させようとするれば彼は泣くのである。やうやく治療所にかつぎ込み

病院船に移したが、その夜細谷水兵はさながらなほも観測鏡を握るがごとく、双手を固く握つたまゝ不歸の客となつてしまつた。細谷水兵は鳥取縣氣高郡寶木村大字寶木の出身、郷里には嚴父善藏氏、母そでさんがある。(大毎、九・二〇)

その三、空軍の部

(1) 南京爆撃に花々しき殊勳 傷つきながら悠々歸隊す

無敵空軍として、今次の爆撃戦にその名を轟はれるわが海軍航空部隊は十六日朝の南京空爆においても勇猛無比の三勇士を生んだ。大杉忠一大尉、小野兵曹長、尾崎三等航空兵曹搭乗のわが飛行機は、敵機五機と壮烈な空中戦を演じ、見事に敵機三機を射落し、一機を不時着させた。しかも愛機は敵弾五十八發を受け、尾崎三等航空兵曹は腹部に貫通銃創の重傷、小野兵曹長は背部に輕傷を負うたが、悠々根據地に引揚げたことが十七日朝原隊に入電があつた。(大毎八・一八)

(2) 旭に黒光る爆彈 敵列車に忽ち黒煙 (森本部隊長の手記)

飽くなき支那兵といへども、彼らもまた戦場に斃れた一戰士、瞬時を彼らのために祈りを捧げんと空より黙禱……旭光は夜露にぬれた機を照らし銀翼まぶしく光を放つてゐる。フト目を下に移せば南口、馬家庄市街の四周は敵の塹壕で二重三重に取り巻かれてゐる。その中で敗殘兵がぎつしりつまつて銃を上に向けてゐるのが手にとるやうに見える。機をめぐけて射撃をやつてゐるのだらう。過ぐる日爆撃せし西苑兵營が黒く破壊された巨體を死んだやうに横たへてゐる。ガタツ、ガタツ、時折機は大きくゆれる。今日は氣流が悪い。

○月〇日 チリ／＼／＼／電話器の電鈴が激しく鳴る……

「分道城、下花園間には敵の裝甲列車運行中にして分道城および江榆林驛には列車群集結しあり……全員緊張まもなく出動の命令下る「平綏線における敵裝甲列車を爆撃し敵の輸送を妨害すべし」……よーッ！けふこそ面白いぞ……獲物は移動目標だ。……日ごろ鍛へた腕前を發揮するには絶好のチャンスだ。山また山……嶺また嶺の山嶽地帯も何のその……目指すは一路平綏鐵道だ。……敵列車だ……偏流右三度……機首はグツと右方に修正された……前方をみれば真白い入道雲が一面掩ひかぶさつてゐる。地平線も見えなければ、山も川も村落も何一つとして見えない。……高度計は急にグン／＼と上昇を示し始めた。二千……二千五百……將に三千メートルに達せんとしてゐる……真白い眞綿を重ねたやうな雲

○月〇日 全員起床ツ、廊下で大きく叫ぶ不寢番の聲。腕時計はまさに午前一時三十分を指してゐる。顔を洗ふ暇もない。闇の飛行場が急に明るくなつた。照明班がスベリーで照明を始めたのだ。「○○隊は南口鎮東南側附近に集結せる敵を爆撃すべし」諒とした隊長の命令、エンヂンの排氣が眞つ赤な火を吐いてゐる。東方より少しづつ白み始めて來た。氣象班より各地の天氣通報がひつきりなしに通報されてくる。出發勢揃ひは終つた。爆音高く勇躍スタート、未だ明け切らぬ拂曉の上空は寒い。僚機とみればいづれも力いつぱい鷹翼を張り切つてわれらの無敵艦隊を誇つてゐる。やうやく夜は明け放れて朝日が遙か東の空よりさし始めて來たと思ふ間もなく、はや目標上空を將に爆撃コースに入らんとしてゐる。

○機より「投下用意」の信號だ。見れば同隊の初弾がコックリ落ちた。間髪をいれずグツと投下電鍵を握り締める。點檢窓に顔をすり寄せれば、落ちるわ／＼バラ／＼と黒光りをした彈丸が一直下に落ちてゆく。ゴクリ固唾を呑みこんだ。ムツクリ時ならぬ入道雲のやうな黒煙が敵部隊の集結してゐる停車場の眞つ只中に續いて一發、二發、三發、見る／＼うち南口鎮の驛舎も列車も敵部隊も黒煙の中に巻きこまれてしまつた。命中ツ、傳聲管を口にあて、叫んだ。「承知……」操縦者○○部隊長のニコリほほ笑んだ顔がガラスをとほして見える。我が飛行機は敵の上空高くグルリ一旋回した。慘虐

が一面張りつめてゐる……「バアツ」と機上から身を投げ出し「フアリ」と受けてくれさうな雲だ。間もなく雲の切れ間から黒絲を引いたやうな平綏鐵道が見えはじめた……いよ／＼來たぞ！ 全身の神経はキツと緊張する。居たぞ……蟻の行列のやうに見える……敵の列車だ……○機の機首がグツと下向になつたと思へばだん／＼目標が大きく見えはじめた敵だ……裝甲列車だ……と思ふ間もなく進行してゐた列車はピタリ停止した。無蓋列車から飛び降りる敵兵が黒豆をこぼしたやうにみえる。スーッスーッ／＼と煙草の煙のやうに銃口から吐き出される硝煙が見える……機をめぐけて盛んに射撃してくる。小癩とは思ふが上出來の對敵行動だ敵ながらやりをる。まだか／＼信號を一心にみつめる。出た……攻撃信號だ……敵も喰ふか喰はれるかの瀬戸際だ。猛烈な對空射撃を浴せてくる。撃てば撃て氣の行くまで撃つがよし。いつかみた映畫「翼」の劇中に自分を見出す。偏流無し無修正に……返事とともに「グーッ」と大きく機首が下向になつたかと思へばスーと自分の身體が宙に浮くやうな氣がした途端、ピュッ／＼／＼と機翼をかすめる敵銃弾の音、投下ツ……痛烈な黒光りの巨彈は一彈二彈と放たれた。そのまゝ機は敵列車の上を東方にサーツと離脱した。命中……萬歳……敵列車の眞ん中にムクリ／＼黒煙が舞ひあがつてゐる。爆彈にハネ飛ばされた敵列車が横腹をみせてゐるのもあればフォームの上

行つた。この物凄しい矢野機の曲藝に、他の敵機は最早立ち向ふ勇氣もなく傷つける矢野機に後を見せて逃出した。大きな下駄のようなプロットを失つた矢野機は自らもバランスを失ひつゝも巧妙に操縦をつゞけて黄浦江に不時着、わが〇〇艦〇に救助された。

この一戦で撃墜した敵機はノースロップ爆撃機二、カーチス・ホーク戦闘機三、ボーイング戦闘機一、計六機、わが部隊の損害はプロットを失つた矢野機を黄浦江の水底に沈めたのみであつた。
(大毎、八・二四)

(5) 炎の愛機、爆弾抱いて
敵格納庫を肉弾爆撃

二十九日午後、海軍〇〇空襲部隊〇〇機は廣徳飛行場爆撃の目的をもつて勇躍進發し、上敷領大尉は自ら〇機を従へて空襲部隊の陣頭に立つて進み、敵軍の防禦砲火を冒して果敢なる急降下爆撃を決行したが、このとき不幸、敵機が愛機が命中して火を發するに至つたので、さらば最後の戦と爆弾を抱き炎々と燃える焔の愛機もろともに一團の肉弾となつて、敵飛行場の格納庫目掛けて轟進し、轟然たる一大爆音とともに壯烈悲壯の戦死をとげたものである。
(大朝、九・一)

(6) 南苑爆撃を敢行して傷つき
基地に還つて機上に息絶ゆ

〇基地を出發、猛烈な颯風を冒して猛鷲の如く支那大陸を轟進途中〇湖上空で敵戦闘機隊と遭遇し、交戦約卅分にして敵の一機を撃墜し他の一機を不時着せしめ殘敵を驅逐して目的の南京上空に達し、午後〇時高度五百メートルで大校場飛行場に爆撃を加へ、格納庫一棟を徹底的に爆破し、さらに地上の敵機數機を木葉微塵に破壊して最初の偉勳を奏した。

この日は雲低く垂れ、低空飛行を決定するのやむなき状態にあつたので、地上からの猛烈な防禦砲火を浴び、しかも敵戦闘機十數機の包圍攻撃をうけたので、壯烈な空中戦を演じ敵の二機を撃墜したが、このとき渡邊兵曹長は頭部に敵弾をうけつゝも苦痛を忍んで、生けるがごとく機上の配置についたまゝ、悲壯なる死の凱旋をしたのであつた。

また大田一等航空兵曹もこの日、〇〇機の搭乗員として大校場飛行場兵舎を粉砕し、ついで格納庫前にならんでゐた敵の敵機を爆撃したが、敵戦闘機隊の執拗な攻撃をうけて、これに應戦敵機を撃退、さらに午後〇時敵カーチス型戦闘機四機の攻撃をうけ猛烈に應戦し、その一機を撃墜した。このとき大田兵曹は続けざまに頭部に一發、肩部に二發の敵弾をうけたので勇猛無比の同兵曹も銃座についたまゝ、打伏し、生けるがごとく沈黙の凱旋をしたのである。愛機は實に四十二の敵弾痕があり、如何にこの日の空中戦闘が激烈であつたかと窺はれ、荒鷲の勇士たちに強い感激を與へた。なほその赫

北支の空に活躍するわが陸空軍二勇士の壯烈無比の戦死公報が十日原隊に届き、將士の襟を正さしめてゐる。去る七月廿八日鹽田部隊〇機は折柄の悪天候を衝いて南苑空爆を行ひ、亂射亂撃の敵弾をもともせず次々と急降下爆撃を敢行し、敵陣地から濛々と上る黒煙に凱歌を奏して歸還の途についたが、この時小杉慶造軍曹(二二)操縦、行本信雄軍曹(二四)が射手となつて同乗の一機は、ダイウイングの際受けた廿數發の敵弾により兩勇士とも重傷を負ひ、噴出す血潮は操縦席を染め萬事休すと見られたが、齒を食ひしばつた兩勇士はお互に勵まし合ひながら、爆弾を敵地にことごとく投下しフラフラする愛機を操縦して僚機に連れながら基地に向つて飛行をつゞけ辛くも基地飛行場に着陸した。先着の僚機將兵は「お、無事で歸つたか」と喜び勇んで駆けつけて見ると無事任務を果して氣がゆるんだものか、小杉軍曹は操縦桿をしつかり握り、行本軍曹は機關銃にしがみついたまゝ、壯烈な戦死をとげてゐた。僚機將兵達は思はず聲を呑んだ。〇〇部隊長も駆けつけひとしく兩勇士の英靈に手を合せたといふ。
(大毎、九・二一)

(7) 群る敵機撃墜
つばさ死の凱旋

渡邊航空兵曹長は〇〇機〇〇長として、八月十五日午前〇

々たる功により渡邊勇兵曹長は海軍特務少尉に、大田武夫兵曹は航空兵曹長に特進した。
(大毎、九・一四)

(8) 果敢の宙返り横轉
敵五機を撃落す
五十嵐大尉らの武勳

戦ひ勝つて、しかも武勳を誇らぬわが海軍〇〇航空部隊の勇士たちは十四日朝〇〇を視察に上陸したが、これによつて事變發生以來の飛行場、兵器火藥廠の爆撃、或は戦闘機卅餘機の撃墜など赫々たる戦歴が初めて明かにされ、上海居留民も、今さらながら海軍將兵の床しい口堅さを激賞してゐる。

この日、記者は小雨降る中を海軍の〇〇にこれら空の勇士達を訪問し、岡村少佐、五十嵐大尉から九月七日の太湖上空における戦闘の概要を聞いた。この日、五十嵐大尉の指揮するわが〇〇機、〇機を五十嵐大尉、高橋、半田の兩兵曹が、それぞれ操縦し〇〇機〇機を掩護しながら午前六時〇〇を出發し廣徳飛行場爆撃に向ひ、目的を十分に達して歸途につき太湖上空に差しかゝるや、同八時半ごろわが航空隊の歸途を待ち構へてゐた敵戦闘機は、突如攻撃を開始して來た。そこでわが〇〇機〇機は敵機九機を相手に二千メートル乃至三千メートルの上空で花々しい空中戦を敢行、まづ五十嵐大尉は敵一番機に狙ひを定めて機關銃を浴びせようとしたが、敵機

は後に迫つて離れようとせぬ。こゝで五十嵐大尉は敵の後方に出ようとして宙返りを行つたが、敵機は飽くまで後にくつゝいて来るので四、五回宙返りを繰返へして、とうど機が宙返りの頂上に達した時に得意の横轉をやつて位置を替へ逆に敵機の後に廻つた刹那、機關銃を浴びせたら見事機關部に命中、太湖湖上に墜落して行つた。この時敵の二番機は上から迫つて来たので、五十嵐大尉は機を下から突上げる態勢にして射ち二番機も完全に射ち落し、さらに三番機に對し後方十六メートルくらゐのところより、機關銃を射ち、遂にこれを不時着せしめてしまつた。

五十嵐大尉は敵一番機との空中戦で宙返りを演じた時に、體を座席に縛りつけておくバンドが切れたので、體は浮腰となり、眼鏡は額の上まで上つてしまつたが、沈着よく敵機三機に致命傷を與へた。一方高橋、半田の兩兵曹も五十嵐大尉に劣らぬ奮戦を續け、半田二等兵曹は敵を三百メートルの低空に追ひ詰めてこれを撃墜し、高橋二等兵曹も地上すれすれのところで敵機を落し、五十嵐、半田、高橋の三機は敵機九機を相手に完全に五機を射落し、残り四機をさらに追撃しようとしたが、残念なことには三機とも彈藥を使い果してしまつたので餘儀なく、〇〇機を掩護しながら無事本隊に歸還した。(大毎、九・一五)

(9) 氣を吐く少年航空兵 敵陣に四日間、生還す 豪膽よく重圍を突破

中富部隊の名コンビと謳はれてゐた少年航空兵出身白濱幸吉、永江正の兩君は、去る十四日永定河の渡河作戦に際し友軍の掩護爆撃に出動中、不幸にも敵彈のため墜落名譽の戦死を遂げたものと信ぜられてゐたところ、突如十七日夕刻に至り兩君とも沈着な行動の結果、奇蹟的にも生還したことが判明したので、〇〇の飛行部隊基地は喜びに包まれてゐる。

永定河附近陣地の爆撃當日午後五時〇〇を離陸した兩君は縦横に敵陣地上空を飛行して決死の低空爆撃を敢行中、敵彈の亂射を浴びたために、機は遂に操縦の自由を失つた上、自らも傷を負つて永清の南方、南關鎮附近の高梁畑に不時着してしまつた。永清、南關鎮附近は當時まだ敵が幾重にも堅固な陣地を構へてゐた時とて見渡すかぎり中央軍に埋まつてゐた。脱出は到底不可能と見た兩君は敵陣に倒れるよりも寧ろ少年航空兵の名譽のため自決するにしかずと重要書類を焼いた上一たん自刃を覺悟したが、さらに逃れ得るだけ逃れて敵情を友軍へ報告することを考へ、磁石をたよりに北へ敵陣を突破することに決心した。かくて晝は高粱畑や溝の中等に身を潜めつゝ傷ける身を互に援け合ひながら、敵の目をかすめ

ること四日間、奇蹟的にも南四大部落に差しかゝつた際わが〇〇部隊の日章旗を認め飲まず食はずの身を救はれたことが判明した。本部では兩君とも負傷し、ほとんど歩行し得ずとの報に直に現場に人を派遣して〇〇の營舎に收容したが少年航空兵の身にもかゝはらず不撓不屈、遂に敵陣を脱出して凱旋した兩人の行動は千軍萬馬の勇士達を驚嘆させてゐる。(大毎、九・一八)

(10) 機上、死の撮影 陸軍上陸作戦に尊き功績

陸海空軍の一糸亂れぬ協力作戦によつて、上海戦線におけるわが軍の進撃はすばらしいものがあるが、一航空兵曹の活躍が陸軍の上陸作戦に特筆すべき功績を現し、松井最高指揮官および長谷川第三艦隊司令長官をいたく感激させてゐる。

美談の主は軍艦〇〇乗組員赤松航空兵曹で、同君は去る七日市原航空兵操縦、新道中尉とともに同乗し月浦鎮、楊江鎮方面の敵陣空中撮影を終り、さらに嘉定上空より敵陣地を撮影中敵高角砲の一弾は不幸同兵曹の頭部に命中、そのとき撮つた空中寫眞を最後の形見として、壯烈な戦死をとげた。新道中尉はこの寫眞を持ちかへり早速現像すると極めて鮮明に月浦鎮、楊江鎮一帶の敵陣地が寫し出されてゐるので、これを基本として精密なる攻撃作戦がたてられ、一舉に右陣地陥

落となり陸軍其後の作戦上重要據點を作つたわけで、同地攻撃部隊の將兵は兵曹の犠牲の賜に涙を流し感激した。松井最高指揮官も赤松兵曹の貴い犠牲に感泣して、長谷川司令長官のもとに同兵曹の戦死を痛惜し陸軍作戦に盡瘁されたる功績を深く多とするとの電報を寄せた。同兵曹は寫眞に、無電にづばぬけた手腕をもつてゐた前途有爲の軍人として、陸海兩軍から痛惜されてゐる。(大毎、九・二三)

(11) 墜ち行く愛機から 機關銃を抱いて脱出 單身、敵艦に躍り込む

十九日夜、最初の南京大空爆から遂に歸還しなかつた三機のうち早くも當局に入つた情報によれば、うち一機は揚子江に不時着、ジャンクに乗り移つて長江を下江、生還を期しつゝありとのことに一縷の望みを抱いたわが海軍〇〇航空隊では全力を擧げての捜査を行つたが、遂に発見さるゝに至らなかつたものである。

二十二日午前當局に蒐集された情報および支那紙の報ずるところが、この冒険談とびたりと一致してゐる。すなはち岡島大尉の操縦する〇〇機は十九日午後揚子江を東から西に向つて飛行中、高射砲陣の発見するところとなり、砲彈の集中下に遂に一彈を被り、常熟、江陰間の三圩港附近江上に墜

落、この時既に身に敵弾を受けてゐた岡島大尉は沈勇剛膽にも落ち行く機から機銃を取りはずし、これをしつかと胸に抱いて落下傘によつて脱出、長江に飛び込んだ。あだかもこの附近に渡舟一艘あり、直にこの舟の中に躍り込んで胸に抱く機銃を船頭に擬しつゝ、通州附近を走らせ、無事生還の大冒険を敢行しようとしたのであつた。てうどその時長江は落潮の際、また風は初秋の順風がジャンクの帆を吹いて、快速長江を下江して行つたといはれる。この大冒険を乗せて江上を疾走する支那船は遂に附近の江邊に散在する敵兵の發見するところとなり、同大尉必死の生還行も遂に江陰附近に碇泊する敵艦に阻まれてしまつた。死あるのみである。生還期し難しと大和男子の最後の覺悟を決めた岡島大尉は單身敵艦に躍り込み遂に壯烈な戦死をとげてしまつた。この壯烈な岡島大尉の物語りは帝國海軍の誇りとして早くも部内に傳へられ生還一刻も早かれと念じてゐた戦友達は、深き哀悼のうちに「よくぞやつてくれた。岡島！」と感歎の聲が全上海戦線に漲つてゐる。

洋々たる長江をめぐる新戦場の秋深く、「風蕭々」として壯士一度行つて還らず」あゝ岡島威大尉の弔合戦にわが空軍○基地は、今や轟々たる爆音全支の空を震撼させんとしてゐる。(大朝、九・二三)

還らぬ空襲機 岡島大尉の絶筆

十九日の南京大空襲に征つて歸らず、墜ちゆく愛機から機銃を抱き落下傘で果敢にも單身で敵艦に躍り込み、壯烈な戦死を遂げたといふ軍艦○飛行長岡島威大尉の最期については二十日海軍省にもその戦死を確認する公電があり「大尉は寡勢を率ゐてよく敵五機を撃墜したものの、わが部隊が凱旋した時指揮機たる岡島機の姿は見えず、僚機の捜査も空しくなつた」旨を傳へていよゝゝ感激を新にしてゐるが、二十二日午後岡島大尉のクラス・メイト日本電力電機部送電課員植木健一氏は本社を訪ひ岡島大尉から同氏に送られた葉書を披露した。この葉書こそ右歴史的大空襲の前日たる十八日書かれたもので、あるひは同大尉の絶筆でないかとみられ、文中意氣軒昂、豪膽烈々の文字で綴られてゐる。この貴重な報せは葉書二枚に裕々迫らぬペン字で記されてゐる。(以下原文のまゝ)

「再三手紙有難く拜見、折角の會合も遂にお流れにて残念です。極めて急に出勤しましたゝめ御迷惑をかけ失禮しました。○月○日以来當方面にきてゐます。最初のうちは支那空軍も相當に手應へありしも昨今はまつたく封ぜられて今のところ相手とならず。毎日陸戦に協力して爆撃の壯快味

を満喫してをります。この前の事變と異り支那兵はなか／＼頭強にて外國直輸入の新式兵器の威力も相當なものです。(一部略)陸軍も着々戦況が進捗してゐるやうです。そろ／＼われ／＼海軍は用がなくなりさうです。しかし飛行機は大分働く餘地あり。十四日事變突發の當日小官第一回爆撃に出發、○飛行場を攻撃して歸艦、第二回の組が敵艦に遭遇これを撃墜し、小生は艦上よりこれをみてをりましたので相當に溜飲を下げました。その後毎日小生も飛びをるも遺憾ながら敵機に會はず切齒扼腕してをります。當地に母校同窓の今井正剛氏朝日新聞特派員としてきて小生留守中來られたとか、ではこのくらゐで失禮」(大朝、九・二二)

(12) 不時着、漂流の戦友を 敵前で見事救出

廿五日午前十一時南京を空襲した田中隊の一機(大木、山口兩一等航空兵搭乗)は敵が卑怯にも列國の大公使館、領事館などの傍に新しく露國から輸入した高角砲を据ゑて猛射する、その敵弾を潜つて急降下、外國公館に被害を與へまいと正確無比の投爆を行ふ際、敵の高角砲弾のため機關部を損傷されて歸途江陰附近まで來た時、飛行困難となり江陰砲臺直前に不時着の止むなきに至つた。これを見た兩岸の敵はわが不時着機を目掛けて一齊射撃を浴せたが、大木、山口兩一等

航空兵は折よくそこへ流れて來た筏に飛び移つて漂流中、この有様を見たわが軍艦○の水上機は敵の十字火にさらされた戦友を救出すべく、勇敢にも敵の彈雨を潜つて砲臺前に着水、僚機來ると勇躍した大木、山口兩航空兵は相次いで筏を離れ河中に飛び込み、一齊射撃の敵弾で前後左右に水柱の立つ濁流を泳ぎ大木一等航空兵は漸く僚機に救はれたが、山口一等航空兵は僚機の翼に手をかけ匍ひ上らうとした刹那、敵弾に頭部を貫通され僚機を血しぶきに染め濁流に吞まれて、壯烈な最期を遂げた。軍艦○の水上機はなほも山口一等航空兵の死體捜索を行はんとしたが、何しろ敵彈雨飛の中長江の濁流深く没し去つた、戦友の姿に心を残し機上から合掌默禱すること數秒、敵の銃砲火を浴びながら不時着機を敵に渡すまいとガソリン・タンクめがけて拳銃を射ち込み、火を放ち燃え上る僚機に手を振つて訣別、あまりの大膽さに呆つ氣にとられて見てゐる敵陣の前から見事に離水、無事に原隊に歸還したが、○艦載水上機の勇敢なる行動は近代科學戰に日本武士道の精華を盛込んだ戰場美談として語り傳へられてゐる。(大毎、九・二六)

(13) 火達磨の荒鷲! 凄烈、敵列車へ體當り 津浦戦線花と散つた五勇士

二十三日河北平野の東部戦線、津浦線の敵に對するわが軍の攻撃また猛烈を極め、急追また急追空に陸に息つく間もなき進撃を續けたが、この日津浦線上を敗走する敵の列車爆撃の命を受けた〇〇根據地の島谷部隊は、その精銳を擧げて勇躍敵の要地滄州より遙か南方に出動、泊頭鎮附近において敵兵滿載の列車を發見し、濃霧密雲を潛りつゝこれに接近し今しも爆撃を敢行すべく目標の列車に向つて突進、我空軍が近づくと見るや、恐怖狼狽のうちにも附近陣地より高射砲、高射機關銃をもつて盛んに射撃し來り、澁谷熊吉部隊長、土生明男曹長、番匠吉乘軍曹、小林、高倉兩上等兵の搭乗せる一機は猛風の中に二回、三回敵の上空に進入して最も確なる命中を期するために四回目の進入を企てた利那、不幸にも敵高射機關銃の焼夷弾が同機に命中、忽ち火を發して施す術もなく、これを見た僚機はひとしく氣遣ひながら、その行方を見まもるうち空の五勇士らは今はこれまでと覺悟してか、最初のうちは何とか危地を脱すべく努力を拂ひつゝあつたのを突如止めて敵列車の方面に機首を向けたと思つた瞬間、一千二百メートルの上空から猛然敵列車目がけて打ち込んで行つた。爆弾を抱いたまゝ機も人もまた一個の爆弾となつて突入したので、上空では早くも黒煙に包まれつゝも全く神技のごく目標は過たず、見事に列車に體當りも同然に命中したのである。機が抱いてゐた全爆弾は敵の中で機も人も一しよに一

瞬に炸裂して敵兵の死傷算なく、味方が打つた弾が日本の飛行機に命中したと喜んだのも全く東の間、おそるべき爆弾となつて己が頭上に降つて來たのだ。このわが空の勇士の勇敢無比の突撃に全く膽を奪はれて、暫らく茫然としてたゞ肉弾五勇士の鬼神も泣く、天晴れの勇猛に驚きの眼をみはつてゐるのであつた。
(大朝、九二一八)

その四、軍屬其他の部

(1) 交戦の寫眞を撮影した利那 無念、死の集中射撃

岡部特派員は川岸部隊に従軍、最初よりもつとも熱心迅速に新聞報道の任にあたつたが、南苑の戦闘においては全く軍人に劣らぬ勇敢さを發揮し、遂に壯烈な戦死を遂げたのであつた。

南苑攻撃は今次の事變はもとより滿洲事變以來はじめて見る激戦であつた。二十八日午前五時半飛行機の爆撃について川岸部隊はいよゝゝ總攻撃に移つた。岡部記者は第一線狀況の進展とともに部隊本部と第一線の間を再三往復して、原稿をしたゝめ特に寫眞撮影については第一線部隊のさらに前線

に出動して皇軍の活躍狀況をカメラに収めるべく、活躍を續けたが、南苑の第三十八師の防戦は敵ながら天晴れであつた。

兩軍の戦火の猛烈さは想像のほかであつた。敵は二丈餘の城壁と五尺餘の塹壕によつて猛射を逞しうした。岡部記者は正午前さらに突撃戦の狀況を視察すべく、川岸部隊囑託寫眞班松尾幸助氏(四十二年)とゝもに敵彈雨飛の前線突破を試みた、敵の攻撃はいよゝゝ激しい、わが〇〇隊は城壁の爆破を試みるが城内からの猛射撃に幾人かの兵士達は倒れて行く、將士達はさらに劍を抜いて城壁に突き刺し刀の柄を梯として城壁を登つた。岡部記者はその第一線の銃丸飛ぶなかをカメラと鉛筆を兩手に數枚の寫眞を寫し、終つて身を翻へし後方へ歸らうとした利那、岡部記者はドツと體を投出すやうにブツ倒れた。俯伏せに戦場に横たはつた岡部記者はそのまま身動きもしなかつた。續いて岡部記者の身を案じて駆け寄らうとした松尾氏もぶつ倒れた、城壁上の支那軍から集中射撃をうけたのだ。

瞬間の出來事であつた。岡部記者は頭部首管銃創が致命傷で即死、ほかに胸部、腹部などにも數弾を浴びてをり、松尾囑託も瀕死の重傷であつた。川岸部隊の決死の總攻撃は午後一時に至つて漸く功を奏した。

およそ今までの「支那軍」といふ概念に反して最後まで頑

強に第一線を守り、わが突撃によつて潰えた第三十八師が敗退したのち、岡部記者戦死の報は忽ち全戦線に傳はつた川岸部隊長自ら特別の計ひで、死體は直ちに收容された。いつの間握つたか腰にした拳銃にしつかり手をかけてゐる岡部記者の戦死はまさに鬼神を泣かしめるものがあつた。
(大朝、八・一)

(2) 勇敢、もの言はぬ戦士

めざましい皇軍奮闘のかけにあつて、兵士とともに立派な働きを見せてゐる「ものをいはぬ戦士」がある。軍用鳩の大てがら、軍用犬の奮戦ぶりである。今度の戦闘のように前線と後方との連絡のむづかしい時、これら無言の勇士は人間以上に重大使命を帯びて奮戦する。

軍用鳩

〇〇部隊に配屬されてゐる鳩班の如きは、實に山、北平間を十五分間で飛翔し、有線電信切斷、無線連絡不十分の際、戦死者名と敵狀報告の任務を完全に果して、作戦上偉大な殊勳をたてること四回、廣安門入城戦の際にも信書筒を脚にくつつけて四キロの上空を僅か二分で北平に急報し入城部隊の危難を告げてゐる。北部戦線の山嶽戦では、特に鳩班の活躍めざましく、山また山、稜線にとゞろく銃砲聲を

縫つて、わが軍の活躍に決死の翼を擴げ確實敏捷に使命を果してゐる。南口右翼の高地では一羽が敵弾に、一羽が害鳥のため名譽の戦死を遂げた。また左翼高地では害鳥に翼を破られ信書筒を赤く血に染めて後方陣地に到着任務を果すや、間もなく絶命した。さすがに猛き兵士達も涙を流して埋葬、小さな木の枝をけづつて、萬年筆で「鳩の墓」と淋しく記した墓標を山の中腹に建ててゐる。鳩は砲聲には驚かぬが、山間で一番大敵の害鳥が多いのでその苦戦は非常なものである。毎分千メートル乃至二千メートルを飛び五百メートルから八百メートルの上空を飛翔してゐるが、味方の激戦を知らずべく、一路本陣へ飛び行く鳩の姿は小戦闘機のごとく頼もしく思はれるさうである。軍用鳩の夫婦愛、親子愛はまた一しほ戦地で産卵した時は雄が朝八時、雌が夕刻六時必ず卵を温めて孵卵する。だから陣中時間がわからぬ時は鳩舎をのぞいて正確に時間がわかるといふ。

軍用犬

軍用犬の奮闘もまたすばらしい。あの驚くべき嗅覚で、敵味方をかき分け立派に歩哨の手傳ひまでやつてのける。峻険な山道、山嶺の縦走には、人間以上の能力を發揮し、○隊の軍用犬は夜襲連続で晝間手薄になつたのにつけ込み、敵が逆襲したのを逸早く發見し、盛んに吠え立てて味方に急を知らせたり、山中深く立籠もつた時など食料が缺乏するが、こんな時には人間と違つて辛抱出來な

い。子供のやうに食物をねだつて係員を閉口させる。だが山で迷つた犬はどこをどうかきわけるのか、きつと隊の前進地に辿りつき、兵隊さんの大歓迎を受けてゐる。平緩線後來の鳩舎の前では鳩と戯れてゐる犬もあり、次に展開する戦闘を心待ちに無言のうちに勇み立つ鳩と犬、この可憐にも勇ましく戦士の上に武運強かれ！
(大毎、九・四)

(3) 昭和の辨慶

○部隊に従軍、津浦線夏家屯の白兵戦に法衣の袖をまくし上げて、敵塹壕に躍り込み剣つき銃をとつて敵兵を撫で斬つて敗走せしめた上、數珠を爪繰つて敵の死體に懇ろな合掌回向をしたといふ武藏坊辨慶そのけの豪快僧灘上惠教師(三十一年)は、大阪府豊能郡庄内村字洲到止、灘上丑之助氏の長男で大阪市私立上宮中學出身の豫備工兵少尉だ。教祖日蓮の不退轉の熱情を承けついでやうな豪放磊落の潤達振りで、幼少の頃からいつもニコ／＼してゐるので「我さん」の綽名があり、中學時代に先生から叱責されたことがあつたが相變らずニコついてゐたので「先生を馬鹿にするカツ」と烈火のごとく怒號させたくらゐ何事にも動ぜぬ不敵の面魂を持つてゐた。

中學卒業後宗教家を志して僧籍に入り日蓮宗本山身延山祖山學院高等部を経て、昨春大正大學研究科を修了するやた

ゞちに渡滿して滿蒙開教のため活躍、事變勃發とともに皇軍慰問と布教のため本山から北支に特派され傷病兵を見舞つたり慰靈祭に參列するなど最前線に軍從中だつたものでこのほど家族や友人にあて

「まことに男子の本懐にて法國のため不惜身命の覺悟に御座候、願ふところは舉國一致もつて皇運を扶翼し奉らんのみ」と烈々たる文字をつらねた便りを寄越してゐる。

なほ同師は山梨縣西八代郡榮村源立寺の住職だつたが、近く義士列傳中の萱野三平墳墓のある前記庄内村庄本の名利新福寺の住職となるはずで

嚴父丑之助氏(六十一年)は大阪市電氣局高速鐵道部係長だつた人、日露役をはじめ再三出征した勇士だけに快報に、

「出發の時お父さんに負けぬだけ働いてきますといつて出たがやつぱりやりましたわい、やりよつた！」
(大朝、九・八)

(4) 「學生兵隊」消息絶つ

上海戦線の異彩

高野山中學出身で拓殖大學三年生島田清太郎君(二四)は支那語を學び、將來支那に活躍の境地を求めんと志してゐたが、今度の事變に際し、従軍の特別許可を得て永津部隊に軍屬として従ひ、敵前上陸以來兵士たちに伍して常に第一線へ

出動を希望し元氣のよいところを見せてゐたが、去る七日以來消息を絶ち、十三日に至るも所在判明せず絶望と見られてゐる。同君は日本刀を背負ひ、制服制帽で戦線に參加し、永津部隊特異の存在とされ、兵隊たちからも「兵隊學生」と呼ばれてなつかしがられ、戦ひのひまには兵士達から頼まれるまゝに國への消息の代書を一手に引受け、また通譯の仕事もやり、支那を論じ支那事變を語り、重寶がられ、永津部隊長も弟のように可愛がつてゐた。昨年夏休みには北支方面を遍歴し、本年は上海をめぐる支那通にならうと志してゐた壯途半ばにあつたもので、敵兵が部隊の後方に伏勢してゐるとの情報に三名の兵士と共に進んで、敵情調査に赴いたまゝ消息を絶つたもので、永津部隊長も「島田君はなか／＼の勉強家で、常に第一線に連れて行くとねだり兵と變るところなき働き振りを見せ、勇ましい學生であつた」と同君の行動を激賞してゐた。
(大毎、九・一四)

(5) 軍犬の殊勳

同部隊軍犬班林鶴吉一等兵が愛育する軍犬武律號(シエバード)は去月廿七日主人とともに羅店鎮戦線最前線に出動し得意の電線架設作業に従軍中、林鶴吉一等兵は不幸敵弾が命中、壯烈な戦死をとげた。武律號は林一等兵の肩章をくはへて歸還、中山通信班長に主人の死を知らせたのであつた。戦

場に主を失つた武律號をあらはれ、それから中山通信班長が愛育し、その後も戦線について傳令に電線架設に活躍してゐたが、去る十七日夕刻中山通信班長に伴はれ和知、永津兩部隊間の電線架設作業に従事した。ところが武律號が背負うた電線は永津部隊のそれと後數十メートルといふところで、つきてしまつた。やむなく中山通信班長は電線をとりに引返すこととなり武律號に電線の突端をくはへさせて堤防上に監視を命じ、一同數十メートルを引返したが、見事武律號は主人の命の通りちやんと電線をくはへて坐つてゐるいちらしにまた引返して、自分の身につけてゐた高知市別格官警社の山ノ内神社の護符をとつて武律號の首にまきつけ「お前は神様が護つてくださる。俺が来るまで死んでもこの電線をはなすな」と人に物いふごとくいひ聞かせて〇〇に歸り、午後十時半電線をもつて現場に引返すと武律號は健気にちやんと電線をくはへて監視の任を果してゐた。しかも彼の坐つてゐた數十メートル附近に支那の迫撃砲弾が落下してをり、武律號はそのため左足に痛ましい傷を負うてゐた。中山通信班長は「武律は俺の身代りになつて負傷したのだ」と感激、直に和知部隊長に報告したのであつた。二十二日和知部隊長を訪へば「武律號の殊勳を是非一筆頼むぞ」と彼ともにかメラにをさまつた。

(大朝、九・二三)

(6) 戦線を驅ける 彌陀のお使者

上海に戦の火蓋が切られるや、佛教各宗派から多数の従軍僧が派遣された。従軍僧は殆ど最高司令部に屬して危険な前線の方へは出て行かなかつたが、今度の上海戦線では従軍新聞記者と同じく敵陣地近い第一線まで危険を冒して飛出して行き弾丸雨飛のうちで壯絶、讀經して殉國の英靈を弔ひ、勇士の遺骨を背負うて歸り、あるひは煙草をわけて慰問したり、故郷への手紙などあづかつて歸る、そのめざましい勇敢な活躍振りは士氣を鼓舞し感謝の的となつてゐる。二十三日彼岸のお中日を迎へ、この武裝の僧侶達は多忙である。事變起るや出動命令をうけた〇〇部隊に従軍布教師として正式に許可をうけ御用船便乗、敵前上陸など將士と辛苦をともし一ヶ月振りて戦線をはなれ、二十二日午前上海に出て来た香川縣仁尾町覺城院住職眞言宗従軍布教師森諦圓師は鐵兜を冠り、カーキ色の洋服の胸に袈裟をかけ腰に軍刀をさし皮の長靴をはいたままの服裝で語る。

〇〇を出發して二日目に船中で軍馬二頭が死亡しましたので引導を渡し水葬にしたのが従軍第一の仕事でした。〇〇に敵前上陸部隊について上陸した直後、支那兵の戦死者に讀經し今日三日我軍の勇士の靈前に初めて讀經しました。

(7) 紅顔三少年の首途

保定占領の爆發的な捷報に歡呼の聲が沸き上つてゐるとき「では行つてまゐります」と大阪府警察部藤原警務課長の前に三人直立不動で立つた少年があつた。「いよ／＼行くか君のため、國のためしつかりやつてくれ、武運長久を祈る」と激勵の課長の言葉もいと謹嚴にあたり空気をふるはし襟を正さしめるものがあつた。

この三少年こそ選ばれて戦雲棚引く、我が北支駐屯軍司令部に赴く警察部の給士、情報課詰矢野繁山、警務課詰重本正雄、新聞記者室詰浦野文雄の三君で、いづれも紅顔同年の十八歳ばかり。

過日北支駐屯軍司令部から第四師團司令部を通じて府警察部に身許確實で身體強健、頭腦明晰な優秀少年の斡旋方を依頼してきたので警察部で志望者を厳選の上推薦したが、その多数の中から「これなら軍の給仕に出来る」と選りすぐられた三人である。

近日川口中佐引率のもとに出發の豫定であるが、このほゝ、まじき出征者の中にはからずも多感な少年の懐く認められた愛國の赤誠が矢野少年の机上に置き忘れた日記の一節から皆の知るところとなり「さすがに日本少年である」と荒木警察部長以下一同を感心させ、前例のない饒別に壯途を賑はすこ

讀經中にも敵弾は身邊をかすめるやうに飛んで来るのでした。五日には敵前上陸戦に倒れた勇士の合同葬を営みました。すつと殆ど袍を枕に寝る露營つゞきです。

また西本願寺の従軍布教師脇坂了教師は上海別院輪番伊藤普行師ら八名の僧侶とも鐵兜を冠りピストルをもつて事變發生以來〇〇附として活躍してゐる青年僧侶であつて、初従軍の感想を語る。

十七日午前九時ごろのことでした。羅店鎮附近で激戦の最中、私は羅店鎮西側の第一線に従軍してゐましたが、このとき敵軍との距離は僅か五十メートルにすぎず、敵兵の姿がはつきり見えるのです。私の傍から敵陣めがけて飛び込んで行つたわが勇士が、敵陣から猛烈に射ち出す機關銃弾のため忽ち數名倒れました。敵兵の死體もころがつてゐます。それがとうど彼我兩軍陣地の中間で二、三十メートルといふところですよ。私は行きたくとも嵐のやうにふつてくる敵弾のなかのこゝろ近づけません。やむをえずわが陣地の銃眼から勇士の姿を望んで禮拜讀經しました。あゝときの氣持は何ともいへません。勇士の遺骨を背中のリュクサツクに入れて前線を退くとき敵兵の狙撃をうけ數十メートルの間這ふやうにして歸つて来たこともあります。今までのところ私達従軍布教師には幸にも犠牲者は出てゐません。

(大朝、九・二四)

と、なつた。

矢野少年の日記の一節(原文)

八月二十六日 血書して一圓五十錢添へて堺聯隊區司令部の
小使さんに頼む。

八月二十七日 午後三時半府廳四階屋上西角鳩舎のかけにて
左手の小指を切り滴る血にて日章旗を造り上部に必勝と血
書して同日午後四時半第四師團司令部に無名にて送る。

九月四日 本校の小使さんの一人息子石上等兵が北支事變
で名譽の戦死をされる。今無名で送金。

矢野少年は高津夜間中學の一年生で、郷里は和歌山縣那賀郡
調月村、大正區泉尾鶴町二丁目七五の叔父矢野理さん方から
通つてゐるが、お父さんも日露戦役に従軍遼陽の戦に奮戦し
た勇士で、絶えず父親にはげまされこの春海軍の練習生や少
年航空兵に血書して志願したが、眼で不合格となつたのをひ
どく残念がつてゐた。

日記には以上のほか僅かな給金の中から小遣錢を儉約して
慰問袋や、國防獻金などに無名で金を贈つたことがしばしば
書き綴られてをり、こんどの北支行きも血書で志願し漸く希
望を達したものである。

また重本少年は關大第二商業在學、浦野少年は日新商業二年
生で「あちらではしつかり支那語を勉強してお國のために盡
します」と健氣に勇み立つてゐる。(大朝、九・二五)

(8) 凜然、〃白衣の天使〃

A 三つと、五つになる二愛兒を残して出征する若き母
性——尼崎市潮江高田會社員映氏妻古河はるさん

(三十二年)は、二十二日夕餉もすんで長男信夫君(八年)と
長女なほさん(三年)を就寝させたところへ「召集」の電報を
受け取つた。しかしさすがは訓練を受けた女性だけに泰然自
若、その夜のうち出征後の對策を講じ、翌二十四日は二兒を
伴つて同支部へ「家庭的には何ら支障ありませんから、ぜひ
行かせて下さい」とわざ／＼念を押しに來る熱意、そしてそ
の足で實兄の湊東區馬場町竹下武彦氏方に至り、そこにゐる
實母わかさん(六十年)に二兒を預け、二十四日には平然同支
部の身體検査場にのぞんでゐる。

この事情を知つた同支部では佐藤主事、木村救護係員が懇
々とはるさんに「いくらも代りがあるから思ひ止まつては」
と勸告したが、同女は「折角のチャンスです。この際御奉
公せねば一生できませんから……」とテコでも動かぬ堅い
決意だ——

記者が横から

「代りがあるんだつたら母として生きられては？」

と感想を叩くと、同女は凜然と

「幸ひ子供が元氣で、あまり手がかゝらぬので母に委ねるこ

と、しました。下の子供には事情をいつてもわからないが

上の子供には「お母さんは、これからいくさにくちから温
和しくして待つてゐるのだよ」といひ聞かせていま別れて
まゐりました。私も弟二人が軍人で、うち一人はいま北支
にいつてをりますので弟たちの手前もあり、またいまだん
だん大きくなりつゝある子供に對しても、かうすることが
むしろ大きな母性愛だと思ひます——女々しいことはでき
ません」

なほ竹下方を訪れると二兒は祖母わかさんにあやされて無心
に遊んでゐたが、上の坊やは鐵兜の軍帽をかぶつて「母ちや
んは戦に行つたんだ」と元氣、日ごろのはるさんの訓育のよ
さがしのばれた。

B

いま一人は花嫁衣裳をかなぐりすて、白衣にかへた
情熱の天使だ。二十九回卒業生の加藤朝子さん(二
十八年)で彼女は京都市中京區西の京伯樂町花園看護婦會の
一員として働いてゐたが、本年四月兵庫縣警察部耕地整理課
員高橋昭帶氏との間に縁談がまとまり來る十月三日の結婚式
が迫つたので、その晴れの日を指折りかぞへて楽しんでゐた
折柄「召集狀」を受取つた。早速同女は注文中の嫁入衣裳、
道具の調整を一切中止させ、媒介者の許に駆けつけ夫たるべ
き高橋氏と相談した所「一旦婚約した以上一年、二年、いや
僕は永久に待つてゐます」との言葉に勇躍身體検査場に駆け

つけたものである。

「嫁すべき人の家は一人も軍籍がないので非常によろこび大
いにたゝかつて來てくれと勵ましてくれました——。私は
粉骨碎身働いて御奉公することを誓ひました」
(大朝、九・二五)

四、應召美談

(1) 重患、かつぎ込み應召
街頭に咲いた義侠の花

號外の鈴の音が窓硝子をゆすぶるたびに、ラヂオニュース
がほのかに洩れて來ることに、まるで心臓を抉られるやうな
悲痛な呻き聲をあげてベッドにむつくり跳ね起きて「残念で
す」と齒がみする重症患者、場所は堺市材木町堺市立市民病
院のうす暗い治療室で患者は中年のイガグリ頭、そしてそ
の枕頭には治療室に不釣合な大東のダリアが絢爛とうなだ
れてゐる。

「彼」と「ダリア」と「それをめぐる人達」の登場するこの
物語りこそ「いざ鎌倉」の秋を最も力強く彩る至純至高の銃
後の佳篇だ——明日をも知れぬこの重患は北海道雨量郡幌

加田村からはるばる來堺した應召兵の吉田敏光君(三十年)で床しいダリアの贈主は堺市兵事課の乾輔保氏(四十一年)だ。一面識もなかつた吉田君を劇務の中に、朝な夕な缺かさず見舞ふ乾書記、頭のさがる軍國朗話はどうして生れたか。

重大公務の招電で勇躍北海道の出稼先から家をたゞんで歸堺した吉田君は、永い汽車旅のため持病の心臓脚氣を昂じさせ、懐しい堺の土を踏むと同時に昏倒した。深夜の堺東驛前の街路で行きずりの乾氏が抱き起し、應召勇士と知つて附近の錦西小學校へかつき込み、親身の看護につとめたが、同氏的美舉に感動した同市錦西郷軍分會の役員たちも駆け集り「入隊におくれるか、残念」と悶え泣く吉田君を圍んで凝議のすゑ「折角北の果から馳せ参じたこの勇士だ。奉公がかなはぬまでもせめて憧れの營門をくゞらせてやれ」と一決し、町内の有志と協力して原隊入りの當日トラック一臺を工面し、天涯孤獨の氣の毒な吉田君を歡呼の聲で送り出し、花々しく營門をくゞらせてやつた。

しかし重症の身とて報國の赤誠も空しく移遷ときまり、堺市民の溫情に泣きながら、ベチヤンコの財布を押へてトボくと大阪市内へ迷ひ出た。その夜飢餓と絶望にうちひしがれてまたも天王寺西門前に昏倒した吉田君は、直に天王寺施療病院に收容されたが、うはごとくに「残念! ありがたう、堺の人たち: 兵事課:」と繰返すので、同院から堺市役所へ照會

したところ、これを知つた乾氏は「あの大和魂のかたまりのやうな勇士を見殺しにはいきぬ」と自ら引き取りに行き、前記市民病院で手厚く介抱してゐるもので、病院の看護婦たちも

「あんまり親身に世話なさるので、乾さんの親戚かと思つてみました。残念ですと吉田さんが泣けば、乾さんも手を握り合つて早く全快しろ、そしてきつと命を御國に捧げてくれと涙ぐんで慰めてをられます」

ひとしくもらひ泣いてゐる。(大朝、八・一九)

(2) まづ花嫁を離縁して
母の湯棺で晴の出陣

傳家の日本刀を揮つて敵陣に躍り込み、支那兵五名を袈裟掛けにし、あつぱれ高田部隊の弔ひ合戦をなし遂げ、つひに大安山北方〇〇山地において敵の一弾に二十九歳を一期として壯烈な最期を遂げた藤田部隊長の實家を長崎市竹ノ久保町に訪へば、實母なつさん(五十五年)は燈明ゆらぐ佛前に禮拜し終つて次のやうな涙ぐましい思ひ出のかずくを語つたが、この物語のなかには「決死の我身に妻は心残りだ」と結婚後僅か三ヶ月の新妻を離縁し、驟然煩惱の絆を斷切つて戦地に出發した同部隊長の「大和男子」の面目躍如たる一篇の感激篇が織込まれてゐる。

「あの子は少尉の時分〇〇聯隊から熱河征伐に向ひましたが歸郷後〇〇十分に働くことができず残念だ」と毎日のやうに申してゐました。それから半年ほどして、再び渡滿し昨年六月歸つてきましたので、本年五月郷里佐賀縣神埼郡城田村の樋口とし子(十九年)といふのを嫁にもらひ仲好く暮してゐましたところ、八月一日今回の出發となりました。本人は非常に喜びまして〇〇こんどこそ十分働くことができるのだ」と日本刀の手入れに餘念がありませんでした。それから間もなく薫が〇〇自分は死ぬ覺悟で行くから、いまのうちに妻を自由の身にさして置いてやりたい」といつてきかないのです。そこで、とし子の親許に本人の心持を傳へたところ〇〇薫さんの死は覺悟で差上げたのだが、本人の意思を無駄にしては……とよく諒解せられ、こゝに離縁といふことになつたのです。二十七日私から〇〇思ふ存分御國のためにお働き、母はいつもお前の傍で見えてゐます」と手紙を認めて出したのですが、恐らくあの子は見えてゐないでせう。薫はほんとうに小さい時から親孝行者で、出征の朝〇〇生きて還らぬつもりだから湯棺して下さい」といふので私が身體を拭いてやりますと、〇〇お母さんに湯棺をしてもらつたのだ。これで自分はいつ死んでも満足です」と嬉しいことをいつてくれました。たつたいま戦死の電報がありました

りましたが、これで本人も本望でせう」

なほ藤田部隊長は佐賀縣神埼郡神埼町生れで五歳のとき長崎市に移り海星中學を経て陸軍士官學校に入り直ちに〇〇聯隊に入隊、今日に至つたもので、遺族は嚴父幸内氏(五十六年)母まつさん(五十五年)と海星中學二年在學の令弟徳彦君(十六年)の三人である。(大朝、八・三二)

(3) 囚衣にも大和魂

囚人もまた大和男子たるに變りはない。奇しくも司法保護會の記念日に當る〇日、浦上刑務支所に入所服役中の一囚人が職員一同から贈られた軍服をはじめ身支度品に感謝しながら、假釋放の恩典を受けて勇躍至誠奉公を固く誓つて、軍務公用に服した。

話題の主は福岡縣八女郡生れ秋雲男〇〇假名〇〇で、本年四月七日業務上横領罪で入所したが、前非を悔いて孜孜として忠實に服役してゐたところ、今回軍務公用の召集を受けたものである。行友教誨師は語る。

「本人は成績頗るよく、中央においても假釋放を直ちに許可してくれました。前科ものであつても御國につくす眞心に變りはありません。職員一同感激してシャツから軍服にいたるまで本人に贈り、しつかりやれと激励したのに對し、死する覺悟でやりますと元氣一ばいに出發しました」

(大朝、九・一五)

五、出征家族美談

(1) 非常時の新妻

五日午後一時半ごろ大阪府三島郡吹田町土井一、〇七七日本電力自動車運轉手福尾菊治氏妻久子さん(二〇)が自宅臺所でガス自殺を企て苦悶してゐるのを近所の人々が發見、附近の柴部醫師を迎へて手當を加へた結果、漸く一命をとりとめたが、押入れから發見された夫菊治氏あての遺書には便箋に鉛筆で、

「私は死んでゆきますから、あなたは心おきなく御國のために働いて下さい」

と身をもつて夫を勵ます言葉が記されてあつた。

同夫婦は昨年暮結婚したばかりで、全く水入らずの二人暮らし、近隣でも評判の睦じい仲であつたが、菊治氏はさる二日重大公用を帯びて出發し、タツタ一人後に残された久子さんは、この日夫菊治氏および義姉あてに遺書を認め、家の軒先に日章旗を掲げ、居間には夫の寫眞を飾り紺の金紗の晴衣を着て薄化粧をし、午後一時ごろ臺所のガス管をくはへて自殺をはかつたもので、この久子さんの天晴な覺悟に檢證の吹田署員、柴部醫師はじめ、駈けつけた近所の人々はいづれも感

動させられた。

吹田署警察柴部醫師は感激して語る

全く非常時に相應しい軍國美談だと感激してゐる次第です私が駈けつけた時にはかなりの重體でしたが、その苦しい息の中から「手帳!」「手帳!」と何度も繰返し叫ぶので、何のことかと不思議に思つてゐましたが、後で事情を聞くと、主人の菊治君が出發の際手帳を家に置忘れたのを驛頭で氣がつき、後から送つてくれと頼まれ、そのままになつてゐるのを死線に彷徨してゐる刹那まで氣にかけてゐたことがわかりスツカリ感動させられました。(大毎、八・六)

(2) この子! この父!

北支の戦地に花々しい戦死をとげた大阪府泉南郡佐野町高松町向井榮吉一等兵(二十二年)方を訪ふと、父親の善吉さん(五十七年)は、

「先月中旬倅から「生還を期せずたゞ一死報國のみ……」といふ便りが來たきりです。あれが入營して間もなく、母のふさ(六十二年)は病死しましたが、軍務の重任につく前に萬一病母に異常があつても知らしてくるな、といひのこして入營したものです。我子ながらこの立派な精神にすつか

り感心した程で、かけがへのない一人息子ですが、一家一門の名譽の死です、倅も亡き母の許でいまは幸福に過してゐるでせう」

と決然と語つたが、お父さんは榮吉君の決意に動かされ、母の死を涙の中におしくしてゐたが、町役場から所屬〇隊へ通知したので部隊長は部下をあつめ、生きた軍人精神と題し聲涙をしぼり善吉、榮吉父子の美行を訓示したところ、同君の戦友たちは財布の底をはたいて香奠をかき集めてなぐさめたが郷里の佐野町でも模範青年だつた榮吉君の孝行ばなしや善吉さんの愛兒おもひをたゞへる涙の美談でもちきつてゐる。

(大朝、八・八)

(3) 健氣、一家のク大黒柱々に代る 少年少女の求職群

一家の大黒柱ともいふべき夫、兄、息子が勇躍軍務公用者として出かけたが「後は私が引受けました!」といたいけな少年が、年老いた父が、か弱い妹が不在中のたつきを求めめるため雄々しく職業紹介所の窓口で「求職カード」を續々さし出してゐる。

十六日午後一時、斷髪の美少女、京都府熊野郡海部村橋君枝さん(十七年)「假名」は伯父さんにつれられて大阪市立中

央職業紹介所少年部を訪れた。君枝さんの父は四十九歳で軍務公用となり、あとに母と弟二人と姉一人が残つたが

「姉が教員をしてゐるのでわたしたしもこの家でじつとしてゐるのではお國に對してすみませんわ」と健氣に語つてゐた。

また住吉區阿部野筋八丁目木村信一君(十五年)「假名」は二人の兄が軍務公用者となつたので、年老いた父や姉妹三人を養ふため「僕をどこへでもいゝから紹介して下さい」と身長四尺五寸にも満たない小さい體で感激に頬を紅らめてカードを記入した。

また大正區鶴町二丁目の御橋妙子さん(二十三年)「假名」の兄さんが軍務公用で、病身の嫂と二人きりになつたので、同紹介所婦人部を訪れて「兄の辛勞を思ふと働くぐらゐなんでもありませんわ、不在になつた夫を勵ますために自殺するやうな敗北主義はよくないと思ひます。むしろ後顧の憂のないやうに積極的に難局を切り抜けます」と元氣いつばいで語つてゐた。

このほか婦人部へ軍務公用者の妻や妹が、また一般部でも軍務公用者の父や弟が求職を申込んでゐるが、そのうち還曆をすませた老人で別荘番や下男を志望してゐるものが五名もあつた。

市内各職業紹介所とも、この種の求職申込を受付けてゐるが、一方これに對して約千名の求人申込があり、職業紹介所

側では求職者の希望に従つて積極的に求人開拓に乗出すはすである。
(大朝、八・一七)

(4) 大和魂の精華

皇軍一度起てば全國隨所に花と咲く軍國美談——東洋平和のため正義の旗の翻るところ、或は妻子を残し或はたゞ一人の老婆に勤まされ、敢然家を捨て、戰場を離れ銃をとつて征途についた兵士。残された家族は隣人相集うて扶ける固き銃後の護り。これぞ眞にわが國が世界に誇る大和魂の精華なのだ。

香川縣學務課長から新設の文部省教學局企畫部思想課長に榮轉の辭令を貰つたばかりの豫備將校劍木享弘氏(三八)にも召集令が下つた。氏は福岡縣田川郡大任村の出身。召集令狀が同氏宅に通達された時、折悪しく母堂ためさん(六五)は病氣のため高松市多田羅病院に入院、明日をも知れぬ危篤状態、また夫人昌子さん(二九)も臨月の身重であつたが、劍木氏は即座に軍装をと、のへたゞ一言昌子夫人に「體を大切にしてくれ。僕に代つてお母さんの看護をたのむぞ」といひ残し雄々しくもそのまゝ出發した。見送りの佐藤香川縣知事以下の人々もさすがに氏の心中を思ひやつて、特に後事を心配せぬやう力強く激勵したのであつた。

長崎市浪ノ平二七岡村万三郎さん(六〇)妻つせさん(五〇)の老夫婦は、今度の事變で長男の正君(三〇)三男の竹一君(二七)はいづれも出征させ、また四男の現某艦乗組一等水兵忠君(一四)と男ばかり四人の子供のうち三人を戦地に送り「三人の子供がお國のためお役に立つことは何よりの満足です」と朝夕神佛に子供のための戦功を祈つてゐるが、子供の時眼に負傷して兵役を免ぜられた次男忠一君(二九)は附近で洋服商を営み、兄弟出征後の老父母を護つて健氣に働いてゐる。

樺太泊居警察署勤務巡查後藤茂君(二九)は今次事變で過般召集通知電報を受けたが、汽車ではどうしても指定の時日までに入隊に間に合はないので、豫て非常召集の用意にと奉公袋に秘めてゐた虎の子の百圓で、空からの應召を決意し船で小樽に行き、直に札幌に向ひ定期旅客機で羽田へ飛び、さらに特急列車で目的地へと海空陸のレレーぶりも見事に、遙か樺太からスピード應召の記録を作つた。在郷兵としてその平素の心掛と臨機の處置に軍當局を感激させた。

廣島縣佐伯郡大柿町大字柿浦出海勳氏(三二)は吳海軍工廠に働く身であるが、過般召集令狀を受取つた時、折悪しく實父政太郎氏(五五)が敗血症で明日をも知れぬ病床にあつたの

で、家人は相談して勳氏の出發を秘めてゐたが、政太郎氏はたゞならぬ空氣から名譽の出征を知り「御國のために出征する目出度い勳のことをかくすとは何事か」と憤慨し、枕元に冷酒を取寄せて瀕死の病軀をかへりみず、勳氏と生別の杯を擧げて「わしの事などは一家の私事だ。皇國のためよることで死んで来い。女々しいことは決してするな、父はお前が立派な勳功を樹ててくれるのを心待ちしてゐる」と聲涙ともに下る激勵を與へ、病み疲れた老軀を勳氏の力を借りて床の上に正坐し、遙かに宮城に向つて遙拜し天皇陛下萬歳を三唱そのまゝ崩れるように倒れ、昏睡状態となり全く危篤に陥つた。勳氏はこの死を賭した父の激勵に絶ち切れぬ恩愛の絆を皇國のために斷つて、勇躍應召したのであつた。

(大毎、八・一九)

(5) 感激綴る母の手紙

〇〇海軍航空隊附山内達雄海軍中尉(二七)は去る十五日、長驅渡洋爆撃の壯舉に参加し〇〇空襲決行の歸運行方不明となつた。その悲報が長崎市新中川町六一の母堂ヤス刀自(五八)に齎らさるゝや、ヤス刀自は愛兒の戦死尊しと感謝感激し左の如き手紙を海軍省人事局に寄せ、母としての衷情を披瀝した。「この母にして、この子あり」言々句々讀むものをして感泣措く能はざらしむるものがある。(原文のまゝ)

(前略) 〇〇海軍航空隊附山内達雄中尉儀 〇〇空襲において歿せる旨の御通知、壹岐郡石田村長殿より現住所宛御轉送を得、まさに拜承仕候。あの子が光輝ある帝國海軍航空士官として御奉公仕候事を得、決死もつて護國の鬼と化し搖ぎなき祖國の御ために身命を捧げまつることを得候事、尊く感謝に堪へず候。謹みてかの子既往の事、深く厚く御禮甲上げ奉り候。

あの子は幼少の時より、直く正しく清き心の持主にて、武勇を好める性質なれば、必ずや天に受くる大任あるものと信じ候て、父は賤しき己が子なりと思はず御國の御子なりとして育くみ養育致し來りたる子に有之候。昭和九年祖國非常時に心を澄し候て海軍旗のもとにはせ參り候時すでにこの最期を明かに決意仕りをりたるものに有之候。

天皇陛下萬歳、大日本帝國萬歳、大日本帝國海軍萬歳
戦死せる子達雄に代り母ヤス謹みてとなへ奉る
あゝ、老いゆく母
月の明るきをながめては泣かんとするか
花の香はしきをめでゝは惱まんとするか
あらず
首をあげて空ゆく飛行機を見よ
あれよ、あの機、達雄永しへに生きて在るよ
私なほ男兒三人有之育て見守りつゝ御國の御ためにはげま

しめんと致候。達雄最後といへども帝國軍人としての面目はけがさぬ性格に有之候故御心安く思召し下さいませ。

達雄母ヤス謹みて上

海軍省人事局御中

山内中尉は本籍長崎縣壹岐郡石田村大字筒城西隅二八三、昭和三年四月神戸高等商船學校航海科に入學、同十一年六月少尉となつた。母の許には弟三人、妹一人がゐる。

倅の御禮ごゝろに

壯烈なる空中戦で名譽の戦死をとげた。長崎市新中川町出身海軍中尉山内達雄氏の母堂ヤス刀自(五十八年)は二十二日深更、愛息達雄氏の訃報に接するや眉一つ動かすことなく直に筆をとり萬物寂として寢靜まる深夜に海軍省人事局あてに「今までのお禮を申上げるつもりで……」と一書を流麗に書き綴つたが、まさに日本武人の母の龜鑑として海軍省へ異常なる感激を興へた。二十五日ヤス刀自を訪れ、右の旨を報ずると謙讓な態度で物靜かに語る。

「單に率直に今まで倅が御厄介になつたお禮を申上げたに過ぎないのでございます。母子の情のみからいたしますと死をえらぶべきでせうが、大なる忠義の死、この大なることに母子の情をくゞりつけていさゝかも嘆ずることもなく、

お禮を申述べて、かつまた三人の男子をお國に捧げたい心をお傳へしたに過ぎなかつたのでございます」

(大朝、八・二六)

智德兼備！教育家の妻

既報に去る十六日〇〇方面で壯烈なる空中戦を演じ、名譽の戦死をとげた長崎市新中川町出身海軍中尉山内達雄氏の訃報に接しても常に變らぬ靜かさで、海軍省人事局宛一書を認め非常時日本の母として、多大な感銘と感激とを興へた達雄氏母堂ヤス刀自(五十八年)は長崎縣壹岐郡武生水町の名門故吉永源治氏の長女として生れた。吉永家は三百年來代々同村郷社國津意加美神社の社掌として仕へてゐる村内切つての名門の家柄で、父源治氏の嚴格な訓育と母千登さんの溢れる慈愛によつて育てられ、明治三十七年ヤスさんの二十五歳のとき今は亡き夫君山内久太郎氏の許に嫁いだのである。

山内家は壹岐郡石田村の一農家にすぎなかつたが、ヤスさんの父源治氏は久太郎氏の人格を見込みヤスさんを山内家に嫁がせたのであつた。山内家は代々貧乏な暮しであつたが、みな正しい麗はしい心の持主で、村民から厚く信頼されてゐた。當時村一ばんの廣大な家屋敷を持つた家から、村一ばんの貧乏人である久太郎氏に嫁いだことが評判になつたが、ヤスさんは世評に耳を傾けず貞淑に仕へた。

導に心を一にして勉學にいそしんでゐる。

次男正久君(二十二年)は東大理科一年、三男禎吉君(二十二年)は熊本の高理科一年、四男敏夫君(十七年)は長崎中學にそれ／＼在學中で長女智恵子さん(二十四年)は長崎男子師範附屬小學校に奉職してゐる。(大朝、八・二七)

(6) 倅よ安心せいゝと老いの行商

堺市南旅籠町西二丁高田庄太郎氏の一人息子安田賢知二等兵(二十二年)は二十八日午前七時五十分北支長城線水魁附近の戦闘で名譽の戦死を遂げた旨、二十九日實家へ電報があつた。安田二等兵は町内でも評判の孝行息子で麻袋の職をして兩親と祖母を養つてゐた同家の大黒柱であつた。

今年正月息子が入營するや父親庄太郎さんは息子を心配させまいと菓子を行商をはじめ、母いちさん(六十二年)が車のあと押しをしてせつせと働き附近で感激の話題となつてゐた。庄太郎さんは涙かくして雄々しく語る。

「護國の神となつたことは、息子はもとより私にとつてもこの上ない名譽であります。息子は私らの身を案じてよく手紙をくれましたが、私はその都度、兩親のことは心配せず一死報國の覺悟で働けと勵ましてやりました。今こそ立派に男子の本懐を遂げたのです。」(大朝、八・三〇)

山内氏は明治三十六年から壹岐郡勝本小學校に訓導として奉職し、約十年間勤続。大正元年九月長崎縣視學となり、時の縣知事渡邊氏は山内氏の人物を認め郡長に推薦しようとしたが、初等教育に従事することが、自分の天職であるといつて辭退し縣視學を約十二年間勤めた。ち長崎市内の磨屋、伊良林、北大浦の各小學校長を歴任、昭和七年三月停年勇退、昭和九年はじめ病を得て他界した。この智德兼備の教育家の妻ヤスさんは夫に劣らぬ勝れた人格の持主で、夫に對してはよき内助者として、また子供らに對してはやさしき母であつた。ヤス刀自に子女の教育方針を聴くと、

「世の中のお爲に子供らの能力に應じて社會進化の中に練り交せて勉勵して行くやうにしなければならぬと考へてをります。果して子供たちが私の理想を實現させてくれるかどうかはわかりませぬ」

と語り、更に語をついで

「長女の智恵子を小學校の訓導にしてゐるのは、職業婦人の立場だとか今日の生活のためだとかではなく、將來人の妻となり母となつて小さな一家に非常時のあつた場合に他人や親戚にたよらず、子供の教育をなし、一家を起し、貞節を守り日本女性の本分を全うするやうとの見地からで、いはゆる職業婦人といふ意味からではありませんね」と語つた。かくて四人の子らは賢母の報國の一念に燃えた指

(7) ヲ父は戦死したゾ!

南苑總攻撃に自ら部隊の先頭に立つて奮戦、また奮戦遂に七月二十七日行宮の城外で腹部に敵弾を受けて重傷を負ひ病院車に收容されて後送中、看護兵の手をかり息たえ／＼に熱涙あふるゝ遺書を認めて遂に絶命した原田愛中佐(四十六年)の遺骨は光子未亡人(三十八年)遺兒久美子さん(十二年)美恵子さん(九年)廣實君(五年)らにかゝへられて、二日下關入港の關釜聯絡船で沈黙の凱旋をしたが、夫人が持ち歸つたその遺書には、夫人に宛てたもの、

三人の子供をよく育て御國のために役に立つ立派な人間にしてくれ。

愛兒に宛てたもの、

廣實よ、お父さんは戦死したぞ。お母さんやお姉さんのいふことをよく聞いて立派な日本男子となり、お父さんの遺志を繼いで御國のために盡してくれ(一)父の辛酸をつぶさに思へ(二)母の慈愛に感謝せよ(三)健康は人生幸福のもと(四)成功の要訣は努力

久美子よ千人針有難う。美恵子と、もに弟を可愛がり立派な人間にしてやり三人仲良く成人せよ(一)優しく生きよ、

女のたしなみ(一)心を靜かにしとやかにあれ(二)お前達のお母さんは賢母ぞや

と記され最期を飾る武人の人情味にみち／＼た文面は人情部隊長の名を思はしめるものがある。なほ中佐の遺骨は同夜十一時十分下關發列車で郷里鳥取市寺町の義兄生駒義博氏邸に向つたが、下關驛頭で光子未亡人は「夫の教へを守つてどんな苦勞をしましても三人の子供を立派に育てます」と健氣に語つた。

(大朝、九・三)

(8) 寺原少佐未亡人の手記

寺原大尉名譽の戦死、この報を耳に致しましたのは生ある限り忘れようとして忘れられぬ八月廿三日正午すぎでございました。八月一日武裝姿もいと勇ましく、誰よりも元氣よく征途につきまして早や廿三日目にして、この報に接しませうとは。出立の翌朝も夫の武運長久を招魂社に祈り、一時たりとも心に念じぬときとはなかつた。今、此處に夫の戦死。あゝ、しかし立派な／＼殊勳の最期、私は武人の妻として心から泣いてお祝ひ申すのでございました。有難うございました。有難うございました。よくこそかくも立派に戦死して下さりました。「寺原山」と名づくまで、常々一にも天皇陛下二にも天皇陛下の主人でございましたから、今この若きなほ將來

ある身を、大君様のおんため捧げ奉りましたること、さぞや満足のことと存じます。實に夫の本懐と存じます。

かへりみれば三年餘前、結婚當時與へられた訓辭の長き紙上の第一項として

一、皇國の干城として幼少のころより君國のため捧げ奉れる一身にとりて、苟も君のため、國のための御大事とあらば粉骨碎身奉公の誠をつくし、潔く屍を戰場に曝し、錦旗の下に斃るゝの決心に御座候、之生を我が國に辱うせるものの天職に御座候

とございますのを幾度か手にしては、今さらのごとく確固たる夫の精神肝に銘じひし／＼と胸打たるゝのでございます。かねて覺悟の事として、九通の遺書と頭髮、爪までも残しおき遺書は、俺が戦死したらこれを開いて呉れと出立前夜私に手渡して呉れました。

あゝその殉忠の精神の發露たる一字一句、出征を前にして一糸亂れぬ筆跡に、この度の戦死、わが夫ながら天晴れよくぞやつて下さいました、と泣いて賞でるのでございます。また一方死に至るまでの苦しさを思へば想像になほあまりありて、ともに身を傷つけし感が致すのでございます。

思ひませば三年餘の間、一度叱ることもなく、たゞ絶大な愛と理解ある教訓との下に過ぎてしまひまして幸福この一言につきる年月でございました。

實にこの間、至らぬ私をば強く、やさしく手とりて僅少なれど大君様への御奉公の一端をつくさせて呉れましたこと女の私にとりましては、身にあまる光榮と存じ、唯々夫ならばこそと感謝感激の至りでございます。

かねてより子供なき場合、かゝる時は殉死と夫に常々誓ひをりました私でございしますが、今は夫の目に入れても痛くなかつた一子敬介がをります。まだ二年に満たぬ敬介の無心の遊び、また母の眠れぬ夜半に夢みてか、父ちゃん父ちゃんとはつきり呼ぶ子の聲に、いつの日に物心つきて亡き父の戦死を知れるやと思ひませば、斷腸の思ひが致しまして思はず總身の力もぬけ去る感が致しますが、平素の夫の教訓と遺書にもはつきりと見える妻への信頼を思ひまた新たなる力の湧き出る氣持でございます。

この上は唯如何なる苦難とも戦ひて、この名譽ある壯烈なる夫の死を無にせぬ様、敬介の養育に懸命になる覺悟でございします。

一子敬介をしてあくまで殉忠の大義に徹せしめ、父の意志のまゝの立派な人間となし、やがて陛下に捧げ奉りて、夫を満足さすべく、ある時は父となり、ある時は母となりて、強く／＼生き行く決心でございします。夫のみ靈も常に私ども母子のそばにありて永久に守護して下さる事と存じます。

夫のみ靈よ、願くはこの母に強き強きひるまぬ力與へられ

よ、そして敬介を立派に成育致しましたる曉は、再び夫の膝下にかしづく日を楽しみに致してをります。最後に陛下の御高恩を謝し奉り、この上とも皆々様の御指導御鞭撻下さらん事をお願い申し上げ、御同情下さいました方々に御紙を通じてよろしくお傳へ下さいまし。かしこ 故寺原少佐妻千鶴子 (大毎、九・一一)

(9) 生活と闘ふ一等兵の妻

夫が北支に勇躍してゐるのに、妻たるものがどうして安閑としてゐられよう。夫に負けずにわれ／＼も艱苦の中を突進しよう……との決意から世間の同情を一切退けて、健氣に闘ひつゝある「陸軍一等兵の妻」があり、銃後の緊張はかくあるべきだと關係者を感激させてゐる――

軍務公用者――兵庫區塚本通四丁目三菱倉庫專屬仲仕石井一夫さん妻光枝さん(二十八年)は夫の勤め先の友好會の制度で月約三十圓の扶養料をもらふ以外に収入なく、一時に比べると三分一以下の月収になつたので、町會では救済策を講ずべく同家を訪れたところ、當年とつて六十四になる父親と本年生れの乳呑兒を抱く光枝さんは、
「御好意は有難いですが、主人の身を思ふとどんな艱苦も堪へしのげるはずですから」と救済の手を斥けたので、町會では同家のもやうをそれとな

涙ぐましくも雄々しい物語りである。

藤田農一郎君は東京プレス工業所の倉庫係で、妻千代野さん(三十二年)長女房枝さん(五年)長男彦ちゃん(四年)次男定男ちゃん(三年)と五人暮らし、家庭では優しい父の農一郎君ではあるが、劍道三段、銃劍術二段の猛者、そのうへ水戸にゐたころは縣對抗青年團相撲大會に大關を張つてゐたといふ偉丈夫、滿洲事變には留守隊勤務で、大いに髀肉の歎を啣つてゐたが、六年前、前記の工場につとめてからは職工八十餘名を指揮して工場部長よろしく「軍人藤田」のあだなまである。應召前日郷里茨城縣眞壁郡谷具村字上谷具の兄巖さんから「ハハキトク」と電報が來、つゞいて三時間後には「ハ、シス ウレヘズ オウシヨウシテ オクニノタメニツクセ」との電報――これを受取つた農一郎君は應召見送りに來てゐた親戚六人のうち弟と姪を残し、全部母の葬儀に歸國させ「俺はこゝから一步も退かず、出征する」と翌日應召したのであつた。妻千代野さんは健氣に語る。
「主人は男が戦の役に立たねば、日本男子としての生甲斐がないと口癖のやうに申してをりました。こんど出勤してどんなに本望でせう。首途に母の死を知つた時御國のお役に立つことこそ、佛に對する一番の供養だと翌日勇んで出發いたしました」

く見守るだけにしてゐたが、このほど慰安のため同家を訪問したところ、ラヂオがとまつてゐたので、そのわけをきくと「ラヂオは生活の必需品でないので、節約しました」との話町會役員は夫の動靜を知る上に、ラヂオこそこの際最も必需品だからと光枝さんを説得し、放送局神戸出張所へ無料手續の申請を行つた。かくするうち帝國信榮會社員が同家へ家賃を集金に行つたところ、待つてゐましたとばかり、通帳に挟んだまゝの家賃を支拂つたので、集金人は却つて氣持悪くなり最寄り方面委員に事情を聞くと、母子三人が月収三十圓足らずで暮してゐる「健氣一本槍」の前記事情が分り、これまた感激し家主に報告、家主はまたこの事實に感泣して早速同家を訪問し「ちつとも知らなかつたので」と挨拶した。(大朝、九・二五)

(10) 佛に誓ふ戦功々の供養

軍國の秋に絢爛と咲く應召美談の花として、〇〇隊では次の二つの佳話を侍從武官府を通じて上聞に達せられたき旨願ひ出ると、ともに十四日夜これを公表した。應召の前日故郷の母の死の知らせに「もう歸郷の時間もない。御國のためにこのまゝ、應召すると」勇躍入隊した東京向島區寺島町藤田農一郎君と「柩とともに歸れ、しからずんば柩に乗つて歸れ」のスパルタ賢母にも似たる應召兵鏑木徳三郎君の母きくさんの



本所區既橋、鏑木徳三郎君は應召の翌日、父親倉藏さん

(五十七年)の急死を通知された。脚氣の倉藏さんが息子の晴れの入隊見送りに歩きすぎて、腦溢血を起したのだ。しかも母親きくさん(五十四年)は出征の息子にこれを知らせまいと涙かくして葬儀の用意、見かねた町會の人々が隊を訪れ上官を通じて、その旨を知らせたのである。徳三郎君は上官のすゝめで歸宅すると、これを知つた母親はさすがに自らは立ちかねたものゝ、親戚の人を玄關口に立ちはだからせ
「お前の體は天皇陛下に捧げ奉つたもの、私事のために公事をゆるがせにはできない。直ぐさま歸隊して軍務に精勵せよ、お前が赫々の武勳を樹て白骨となつて凱旋したら、その時こそ母はよろこんでお前と對面しよう」と凜然たる言葉を傳へさせた。徳三郎さんはやむなく歸隊しようとしたが、並みゐる在郷軍人らの計らひで僅かに焼香だけ許され、直ぐさま歸隊、上官の前に
「外泊休暇を與へるとの有難い御言葉でしたが、それは母の意に副ひません。どうかつづいて勤務させて下さい」と秋霜の銃後の母の言葉を語るのであつた。(大朝、九・一五)

(11) 黒髪添へて烈々妹の手紙

秋雨蕭々と降る二十三日午後一時、〇〇病院の手術臺に血

に染まつた一水兵が刻々と呼吸を弱めつゝあつた。

この時慌しく入つてきた一兵曹長が手術臺にかけ寄るなり「オイ吉田、間に合つたぞ。お前の妹さんからたつた今手紙がついたばかりだ。聞えるか読んでやるぞ」「ハイ」かすかにうなづいた。

「たゞ一人の兄さん。あなたが戦線にたゝれてから丸〇〇〇、その間私は毎日武運長久を祈つてゐます。兄さんは日本の水兵として立派な、お手柄を立てられることゝ信じてをります。親のない私ら弟妹たちのことを思はれ、若しも職務を怠つてはと、それだけを心配してをります。兄さんも帝國軍人を兄に持つ、あなたの妹です。私の事は決して心配下さいますな、女の私が戦場に立つことは許されな

いが、心はつねに御國に命を捧げた兄とともに戦場にをります。これは私の贈り物としての黒髪です。妹とともにあると思ひ下されて二人前のお手柄をたてゝ下さいまし」水兵は最後の力を絞つて血潮に染つた手に手紙と黒髪を握りしめ、ほのかに微笑みつゝ絶命したのであつた。この水兵こそけふ(二十三日)午前十一時ごろ北四川路永寶里附近の斥候として敢然偵察中、敵の射撃をうけた陸戦隊吉田忠友二等水兵であつた。同水兵は大阪の出身である。上官齋藤兵曹長は「吉田は支那語が上手な上に豪膽、今日斥候を出す時自分から望んで出て行つた」と暗然と語つた。(大朝、九・二五)

(12) この母この子

戦地にゐる息子、健氣にも病床の父と長男を抱へて生活苦と闘ふ母、互に相勵まし合ひつゝ、非常時國難を乗りきる母子の情は絶對的のものである。第一線から汗の浸み通つた書状とともに俵給の一部を割いて文字通り血の滲む送金がこの勇士から母親のもとに届けられた――

葦合區國香通五丁目四ノ一筒見正三男一等兵は事變勃發以來北支に南支に目覺ましい活躍を續けてゐるが、實家には數年來老病のため病床に臥したきりの嚴父熊五郎氏(五五)とこれまた病弱に憫む長男正一君(二五)があり、一家の支柱正三男君が入隊以來實母ふじのさん(五三)と末弟正幸君(一八)の細腕で生計を立ててゐたが、正三男君は至つて親孝行で名譽の特別射撃賞の賞状をかたみにと送つて出發して、以來硝煙の激戦地から寸暇を惜しんでは父母を激勵しつゝ俵給を割いて、なにか父親の口に合ふものをと二度三度送金してきたが、ふじのさんも負けず家のことは心配するな、立派に御奉公せよと息子を激勵、麗しい感激の花を咲かせてゐる以下數日前一圓の朝鮮紙幣二枚を同封し、東庄から母親の下に届いた書翰である。

食物はなんばきび一本、さつまいも一個ですが、銃後の皆様のことを思へば力強く配備の銃を握つてゐます。歩哨線

六、銃後美談

(1) 義勇團の活躍

敵軍包圍の危地に立ちつゝ、意氣軒昂たるわが駐屯部隊の輝く戦史の蔭には、同じ愛國の血に燃えて、死生を共にせんとする男子、婦人の混成義勇團の涙ぐましい活躍が秘められてゐる。

八日午前一時半豐臺領事館警察派出所には、支那軍不法發砲、事態重大化の警報が傳へられた。三時二分には居留民引揚げ準備の命令が下された。だが兵數僅かの駐屯部隊を残してどうして引揚げられようか。死なばもろともだと非常召集をうけて民團本部に武装集結した義勇團員十五名について、百六名の居留民中、老人、子供を除いたおよそ足腰の立つ日本人はすべて臨時義勇團員を志願して馳せ参じた。男子四十八名、婦人四十七名の銃後部隊が見事に組織された。醫者の竹之内先生は救護班をひきうけた。寫眞屋の金青年は道案内役にとび出す。雜貨屋さんも洗濯屋さんも宿屋や料理屋の御亭主も家財商賣そのので、カーキ服に身を固めて馳せつけた。

婦人部隊は安達、穂積、中島の三將校夫人をはじめとし民

に立つとき身は國家に捧げ生死は運命の致すところと覺悟はしてゐるものの、父母様のことか思ひ出されてくるのをどうすることも出来ません。命令一下我らは〇旗のもとに花と散る覺悟。そして靖國神社の一柱となることを光榮と存じてゐますから、何卒私のことは御心配なく……これは些少ですが父上様の煙草代にして下さい。両親もなく親戚の居所も判明せず、満期の上は二人揃つて歸りますとお願ひした戦友岸田志郎君は廊坊の戦ひで敵弾のため右腕に負傷致しました。(後略)

また末弟正幸君へも

幸ちゃんその後元氣かい。父さんも元氣か。もし父さんに元氣がなかつたら、俺のことは心配するなと勵ましてくれと元氣一杯な便りが寄せられた。母堂ふじのさんは語る。

子供一人が増えたと思つて喜ぶから必ず連れて歸れといつた岸田さんが負傷されたといつてきました。岸田さんの回復を祈つて伴とともに再び奮闘してくれるやう念じてゐます。お恥しい次第ですのに國婦第二分會第六班長大島松榮さんがほんとに親身もおよばぬ御世話をして下さいますので伴もいつも手紙で感謝してゐます。この機に心から御禮申し上げてゐるとお傳へ下さいませ。(大毎、九・二七)

團員の細君、娘さん、その他あらゆる階級の女性たちまで、健氣にもふるひ立つた。吉田領事館派遣所長が總指揮官となり、傳令、警備、巡察、便衣保線、救護の各班が編成された。不氣味な銃聲の斷續が夜明けとともに俄然激烈となつて物凄い砲聲が空気を震はせる。

駐屯部隊は炊事部員まで全部第一線に出動し盡すといふありさま、第二線のない酷烈な戦闘が続けられてゐるのである。一人つきりの義勇隊巡察員が偵邏に出かける。スパイのため切斷された電話線を調査修理するのは便衣保線隊員の仕事だ。夜が更ける。雜貨屋の阿部君、宿屋の久野君、洗濯屋の南君の三君が水杯を交はしたうへで高梁畑をもぐつて三里も離れた部落に潜伏斥候に出かけてゆく。炊事當番の缺乏で腹ペコの戦闘部隊へ握り飯をおくるのは婦人班の役目だ。甲乙二班に分けて毎日午前二時から起き出て部隊本部の大釜で飯をたき總がかりで握る。この眞心のこもつた梅干入りの握り飯が同じ義勇隊員の乗りこんだトラツクで弾丸のとぶ戦野を第一線に運びこまれた。

「日本人は米の飯を食はんと元氣が出んよ、義勇隊のお蔭だと牟田口部隊長以下非常な感謝ぶりだ。九日、十日連日連夜にわたつて不眠不休の血のじむやうな苦闘が続けられた。町の支那人たちが續々避難して行くのに「あくまで頑張らう」

と不屈の日本魂が危機に臨んだ民團の胸に脈々と湧き立つのだつた。十七日支那家屋の義勇團本部を訪ふと、臨時團員らはやつとひきあげて、武装の本團員が圓テーブルを圍んで待機してゐる。吉田總指揮長は力強い口調で「どんな事態にならうとわれ／＼は奮闘しますよ」と固い決意のほどを洩らすのだつた。

(大朝、七・一八)

[2] 學生鳥人敢然起つ

北支の風雲を望んで學生鳥人の雄々しい奮起——今次の事變起るや愛國の熱情赤誠の現はれは津々浦々に澎湃として渦を巻き、日本國民の頼母しい姿を示してゐるが、このとき航空報國の意氣昂く、若き日の心身を鍛へ航空技術の練磨に勵んでゐる日本學生航空聯盟の關東、關西支部の操縦部員中すでに二等操縦士免狀所有の腕前をもつ十四名の錚々たる學生鳥人はつひに起つて陸軍大臣に對し「北支事變從軍願」を提出して、わが國最初の空の義勇軍たらんことを申出た。

同聯盟は祖國の有事に資せんとする大理想のもとに關東、關西の各大學、専門學校航空研究會の一致團結によつて去る昭和五年四月その結成をみてより滿七年餘、逐年飛躍的發展をつゞけて熱心な全若人は、全く學業の餘暇を一刻をも惜しみつゝ飛行機の操縦、航空各技術の研究に専念し、毎年卒業生を實社會に送り出しながら、現在操縦部員百二十七名、技

術部員二百八十九名、グライダー部員二百九十六名を數へ、研究部員を加へるときは優に千名を突破する状況にあり、すでに陸軍から現役將校を派遣されて、極めて嚴格なる規律のもとにその指導を受け、空軍第二線として精進を續けてゐる折柄、今次事變勃發するや有志學生は時局多端のとき坐視するに忍びずとして奮起を決議し、霧ヶ峰高原におけるグライダーの合宿練習に参加してゐた操縦部員も急遽東京に馳せ参

じ、二等操縦士資格所有學生十四名の從軍希望を述べて、その手續方を聯盟本部に申出るとともに、これら學生は十八日直に羽田飛行場に合宿して、いつにても從軍し得べく猛練習を開始した。聯盟ではこの學生の全く自發的な愛國の熱情迸る申出を大いに喜び、早速陸軍航空本部を通じて陸軍大臣に手續きをとつたものである。純情學生鳥人のこの雄々しき奮起こそは全世界に航空日本の意氣を顯示するはもろん、わが日本の非常時の空に咲く祖國愛の華となるであらう。

(大朝、七・一九)

[3] 獻金花吹雪

三宅坂に渦巻く獻納美談の花吹雪——ダンサー連から、紙芝居屋さんから、吉原の／＼籠の鳥々たちから等々十九日も感激の獻金は陸軍省へ殺到せんばかり相次いだ、この朝八

時半、赤坂區青山の花屋渡邊長吉母きくさん(九九)は姪の石塚かねさんに附添はれ、杖にすがつて恤兵部を訪ひ「お國のためにつくす兵隊さんたちを慰めて下さい」と五圓を差出した。きくさんは耳も眼もしつかりしてなか／＼の元氣。

「私は天保十年の生れで、上野の戦さも知つてゐますよ。ずつと近衛第四聯隊の近くにゐるので、兵隊さんが大好きですね。この暑さに大變だらうと十七日にお小遣を五圓俸に頼んで區役所に届けさせたのですが、やつぱり自分で來なけりや氣がすまないんで、死んでも行くんだといつてやつて來たんですよ」

と語つたが、このお婆さん、俸が五人あつたのを三人に先だたれ、孫が九人で曾孫はちよつと數がわからないといふ恵まれた長壽者だ。恤兵部の係官を相手に「まづいものを食つてポロを着て働く。これが長生きの秘訣です。長生きしてまた獻金に來ますよ」と氣焰をあげて引揚げた。(大朝、七・二〇)

[4] 滿鐵二十三勇士

滿洲事變に燦然たる滿鐵魂を發揮し、輝かしい幾多の功績をあげた滿鐵前線鐵道従業員らは、今次の北支事變にも逸早く馳せ参じ、丸腰の挺身部隊として部隊輸送、鐵道修理、驛統制などすべての鐵道關係業務を一手に引受け、戦線の各驛にむかつて猛進をつゞけてゐる。その獻身的な活躍ぶりは、

わが忠勇無雙の皇軍將兵に劣らぬものがあり北支在留全邦人より武裝せざる皇軍との感謝の讃辭が浴せられてゐる。記者は二十九日未明よりの、天津東站襲撃事件の際東站において銃後の守りも固く、武器なき奮戦を敢行した二十三勇士小藤數、坂口彌一郎、秋元將美三助役以下、常爲熊、小林錄郎、村田靜生、永田四男、今泉春三、折本利郎、加藤喜三郎、白井俊夫、土田正弘、林重雄、正岡直行、津川末則坂本一夫、福島末男、山口澄義、高向武司、花田肇、萬福正義、中熊文明、劉福祥

の諸君を五日旭街の満鐵第二宿泊所に訪問した。車座になつた二十三勇士が銃を磨きながら、生々しい東站奮戦談をしてくれた、その眞新らしい小銃は東站事件以來萬一の場合の備へとして渡されたものであらう。

「東站内には少數の將兵が警備してゐるだけだが、すでにモウ高地、建物によつて展開應戦してゐる輸送班の無電が敵の射撃の的だ、重要電報をもつて飛び出した輸送班の大岸君の身が氣になる。刻々敵機關銃の音が大きく近く鳴り、迫撃砲がダーン／＼と唸り出した。電話も切斷されて、驛の周囲は全く包圍されたらしく、日本租界との聯絡は杜絶してしまつた。二十三人の非戦闘員はいつの間にか、傳家の寶刀や支那軍より鹵獲した青龍刀、小刀などあらゆる武器をとり、なかには手ばやく敵前百メートルのわが最前線へ向ふものもあ

弾丸の搬出作業に成功したのだ。二十三名は「それッ」とばかり持てるだけの弾丸を手に前線の將兵に必死で運搬した。夜がほの／＼と明け初めるころになつても援軍はまだ來ぬ。敵は驛前廣場から驛待合所に抜け物凄い銃列を布いてゐる。午前八時徹夜の激務に全員の腹はベコ／＼だ。輸送班が東站構内に死線を越えて引揚げて來た。午前十時半勇壯なる爆音と、もにわが飛行機が飛んで來た。この飛行機で聯絡せねば状況を友軍に知らず方法はない。一同は自分自分の白シャツを引き破つて空陸聯絡を計り、報告書の吊揚げをさせようと何度も苦心した末、漸くこれに成功、かうして漸次勢力を盛り返したが、土囊不足のため攻撃はか／＼しく行かぬ兵士の苦戦を、目のあたりに見た二十三勇士は土囊の製作を考へ「東站から二キロの地點に修理班がゐるはずだ、あそこへ行けばシャベルでもなんでも揃つてゐるぞ」と一人が叫ぶと同時に、それツとばかり鐵道線路を走つた。ビュン／＼敵弾は容赦なく飛んで來る。四、五名の兵が護衛のためついて來てくれた。それ／＼シャベルを肩にかけ驅足で引き返した。鐵のやうなコンクリートのたゞきをがむしやりに掘りかへしドン／＼土囊を前線に運んだ。敵兵は手榴彈をひつさけて肉迫して來る。萬一の事態に備へて一同は將校と協力して重要書類を二つのトランクに納め、將兵の全滅後はあくまでわれ／＼の手で守り、最後には焼き拂つて敵陣に乗りこみ、一人

る。フランス租界當局の妨害から救援軍唯一の通路である萬國橋が交通不能になつたことだ。大兵と應戦するわが將兵の彈丸は次第に缺乏して來る。この時、必死の無電聯絡で東站内に彈丸ありとの報が傳へられた。「貨車のどれにか積載されてゐる」と誠に漠然たる報告だ。その方向は敵の猛射撃で一步も近よれない。この時「僕が行くぞ」と坂口助役が悲壯な決意を示して、徐々に貨車のある第二フォームにニヂリよつて行つた。パン／＼彈丸の十字火を浴びながらヤツと連結されてある貨車に近より、封印をベンチでコジ開けた。眞暗闇の貨車の中を手さぐりで探したが、それらしいものはない。降車して隣の貨車に移つてゆく、かうして次から次へ彈丸を探し求めて行くうち、ヤツと見つけ出された。一箱、二箱、死力をつくして漸く構内に運びこみ、全員の腕力でコジ開けると情ないことに小銃彈丸ではない。砲彈だ、「しまつた」と坂口助役が悲壯に叫ぶと同時に「俺が行く」と四、五名の決死挺身隊がたゞちに第三フォームの貨車にむかつて飛び出した。坂口助役が先頭だ、ダンダダンと敵の射撃は猛烈だ、しかし身に寸鐵をも帯びぬ勇士らは反撃ならず、たゞ切齒扼腕、ひと時も早く味方の將兵に彈丸を供給しようと思進んだ。漸く彈丸のある貨車を見つけ出し扉を開けようとする利那「ドカーン！」頭上で迫撃砲が炸裂した。「あッ」と坂口助役が叫んだ。背部に彈片が中つたのだ。しかし傷は淺く

でも支那兵を斬つて討死せんと悲痛な決意を固めた。と思ふ間もなく友軍の飛行機の爆撃が開始された。轟然たる爆音物凄くも心地よく胸元を震はせる「ア、敵の銃火は沈黙したのだ」とほつと安堵の胸を撫で下ろした時、誰から歌ひ出すともなく東より光は來る、光をのせて、東亞の土に……と嚴肅勇壯なる滿鐵社歌の合唱だ。みんなが抱き合つて嬉しさに泣いた。午後五時、非戦闘員日本租界引揚げの命令によつて一同は凱旋將軍の意氣込みで未明來の戦闘に重傷を負つた人々を護りながら、十五時間死守奮闘の東站を出發した。」(大朝、八・七)

[5] 日本軍に従軍の嘆願續出

長江筋邦人居留民も引揚げ、上海もわが陸戦隊員の殺害などの報道で、北支事變は相當擴大するだらうとの印象を與へてゐる折柄、スペイン内亂を買つて出たほどのイタリヤの間では早くも日本軍従軍の義勇兵志願者が現はれ、ローマの帝國大使館をはじめ各地の領事館に續々義勇兵採用嘆願書が舞込んで來てゐる。その一、二の例を拾つてみると――。

【その一】ナポリ在住の某豫備航空將校——エチオピア戦争でも空軍決死隊に参加して各地に轉戦したほどの古つは者だが、北支の風雲急を告げるとジツとしてをられず、ぜひ日ごろ憧れてゐる日本軍に従軍したいと早速ナポリのカボマザ

名譽領事に宛て従軍嘆願書を提出した。

【その二】コセンザ縣の片田舎アイエタに住むジュゼツベ・イサツカ君——本職は料理番だが傳統の熱血は次のやうなしか爪らしいが、たど／＼しい従軍願を帝國大使館に送らしためたといふわけ……「下記名は光榮ある日本軍隊の驥尾に付し義勇兵として直ちに日本帝國に向け出發したき所存にこれあり、召集の日の一日も早きを鶴首致居候」帝國大使館では一々丁寧に断り状を書いてゐるが、イタリ朝野が寄せるかろした行爲に深甚の謝意を表してゐる。(大朝、八・一一)

〔6〕 昭和の召集令

日露戦役の出征美談として熱涙をしばらせる浪曲「召集令」そのまゝに「應召兵と巡査の美談」がある。

大阪府泉北郡大津町字千原ガラス玉職人澤田政雄君(二十七年)の一家は、貧しい暮しのなかで妻すみさん(二十八)が臨月で長女つや子(六年)長男明(三年)の二幼兒を抱へ、その日の糧もまゝならぬありさまであつた。すみさんが赤ん坊を産んだ直後に政雄君は召集の通知をうけた。ところがその日稼ぎの政雄君の貧しい家では職一本立てるでなく、晴れの旅立ちを祝ふ赤飯を炊くすべもない。たゞ一人の働き手を失ふ妻すみさんは「よし餓死してもよい。夫を賑々しく送り出したい」と決心し、産後間もない體に鞭うつて近隣の情を求め

るべく決心し、翌朝、表戸をガラリと開けると意外！軒下に白米二俵が重ねられ、お祝の寸志です。無事任務遂行を祈ります。と無名の一書が添へてあつた。一家はこの匿名の篤志を熱涙で受け政雄君は晴れ／＼と出發していつた。かくて幾日……去る十日大津署へ政雄君から手紙が届いたが、右の事實を書き連ねた上「私は感謝の心でいつぱいです。ぜひともお名前を知りたいので警察の手で調べて下さい」とあり池上同署長は大いに感激し、奥野區長と、にも調査したところ十八日になつて、この奇特な人は同署上條駐在所巡査上野盛行氏(三十五年)とわかり、署長は美談の主が部下と知つて「これは愉快だ」と大喜びだ。

六疊一と間の陋屋で、すみさんは感涙にむせびつゝ語る。

「白米二俵をいたゞきどんなに感謝してゐるかわかりません。出産と出征の二つの喜びを迎へながらも赤飯も炊けなかつたあの時の氣持、夫もさぞ辛かつたでせう。親切な御恵みをうけて一家は全く天にものぼる喜びでいつぱいでした。どなたの御同情かと蔭で拜んでゐましたが、いつも親切にたづねて下さる上野巡査と知り勿體ないこと、拜んでゐます。夫もどんなに感謝してゐることです。」

奇特な上野巡査は謙遜して語る。

「應召の家族に嘆きをさせることは軍務にもさはることです。甚だ僭越な行爲でしたが、受持部内でもあり澤田さんを御

祝ひする意味から贈つたもので、名前が分つて恐縮してゐます。(大朝、八・二〇)

〔7〕 出征勇士を送る外人工場主

戦線における皇軍の奮戦と相俟つて銃後の全國民は今や一丸となつて堅固に護り幾多の美談を生んでゐる。中に「出征兵と外人工場主」のエピソードが傳へ聞く者を感激させてゐる。感激の外人は東京大森區堤方町一四七合資會社ヤンソン製作所經營者A・J・ヤンソン氏(五十四年)で、同工場の雇人品川區大井森前町五、五〇九岡崎三之助君が應召するや同君が臨時工であるのにも拘らず、東京機械鐵工組合の規約を應用して出征後も給料を支拂ふこととし、多額の饒別に激勵の言葉を與へ、更に入隊日には百名の職工に工場を休ませ、自ら先頭に立つて驛頭に岡崎君の首途を祝した。その情深い處置によつて、岡崎君は妻子六人を残しながら後顧の憂ひなく、勇躍出征することが出来たが、この第一の出征者を送つてからヤンソン氏は深く感銘し、今後出征する勇士を出来るだけ賑やかに送りたいと同工場職工長松原貞幸氏(四十二年)と協議の結果、工場員のプラスチックを組織、數百圓を投じて樂器を購入、横濱藤田青年團の音楽部長田畑重一氏(五十年)を教師に委嘱して九月初めから猛練習せしめてゐる。

ヤンソン氏はエストニヤ國の生れ、十八歳の時アメリカに

渡り歐洲大戦の末期から支那、ソヴェート、ドイツと歩き廻つたが安住の地を求められず、遂に日本を第二の故郷と定め工場を設立したもので、日本婦人を娶り今では三男一女の父である。(大朝、九・一四)

〔8〕 出征勇士を乗せた俵

大阪東成區南中濱町二丁目星野覺一郎さんに命令下り區役所吏員が令状を持つて駆けつけたところ、丁度一家が留守、間もなく妻女ていさんが歸つて来てこの由を聞き、大變だと附近の日吉橋から子供の手をひいて圓タクに乗込み、夫の外出先北區梅ヶ枝町へ駆けつけた。

防空演習で自動車が必要々々で呼びとめられるが、運轉手君は「軍務急報の圓タクです」と勢ひよく説明、防護團員や交通巡査の歡呼をあげながら管制下の街を突進、やつと本人を見つけて出し、さらに同人を乗せて區役所へ急いだ。かくて令状を無事受取つた。運轉手君はその儘「出征勇士をのせた俵です、料金なんか一文だつていりませんよ」と朗らかに引揚げたが、星野氏夫婦始め係員一同この急報運轉手の眞心に感激、自動車番號大六六七五九を手懸りに調査の結果、大阪此花區中江町一〇七川尻方大タク運轉手森則夫君(二十九年)と判明、第四師團司令部へ報告され、また感激しきりだつた。(大朝、九・一四)

〔9〕

商賣そつちのけの無料輸送

四十一歳の働きざかり、體は丈夫だが悲しいことに兵籍がない。第一線で御奉公がかなはねばせめて銃後の赤誠を示さうと、大阪此花區四貫島梅香町土砂商三好善太郎さんはかね／＼念願してゐた矢先に支那事變の勃發だ。時こそ來れといふので直ぐさま商賣に使ふトラツク二臺を動員、在郷軍人分會や軍友會と連絡をとつて名譽の出征軍人の輸送に絶対無料の奉仕をはじめ町内だけにとゞまらず、三好さんが出征旗の出てる家を見つけると早速飛込んで「トラツクの御用ならこちらへ」と引受け、果ては出征軍人の家族が歸國するときには姫路、和歌山あたりまでも進出「大事なお客さんだ。間違ひがあつてはならぬ」と必ずトラツクの助手臺に頑張るといふ有様、けふまでこの奉仕トラツクに感謝を捧げたものは一千人以上だ。

したがつて肝腎のお金儲けの商賣はまるでそつちのけで、二臺のトラツクで間に合はぬとすぐタクシーまで雇つて出征軍人やその家族、知人らを輸送し、いやが上にも歡送の行を盛んにし、おまけに出征軍人にはお祝ひとして十圓づつを贈呈、殊にも同家に入入りしてゐた此花區千鳥橋土砂採集業小牧清一君(三十二年)が出征ときまるや「家のことは心配すな」と激勵、残された小牧君の長男清三ちゃん(三年)には毎

故郷へ引揚げるこゝなつた。この氣の毒な家族の現状を知つた家主である西區南堀江下通一ノ八醫師上島英親氏(六三)は「自分の借家から二人の出征軍人を出すといふことは非常な名譽である。どうかそのまゝ遠慮なく何時までも居住してゐて貰ひたい。勿論家賃は凱旋翌月まで一錢もいらぬ。なほ失禮ながら幾らかでも援助をさして頂きたい」と、家賃は全免、山口家には毎月白米一俵、村松家には二斗を贈るといふ一札まで入れて約束し、すぐ白米を送り届けて來た。兩家では恐縮しながら今さらながらの上島氏の親切に感泣し、嬉し涙に咽んでゐる。山口方を訪ふと留守居の美乃江さんは妹の村松正壹氏妻繁子さんとも／＼語る。

ほんとうに上島さんのご親切には涙を滾して喜んでゐます。昨日も出征した主人から初めての便りがありましたので、それを見せがてらお禮に行きました。この御恩返しはどうしたらよからうかと今も話し合つてゐたところですよ。と感謝の涙にくれてゐた。また、上島氏は語る。

こんなときにはお互ひですから慰藉なんかは出来るだけの範圍であげなければなりません。國家のために出征されたのであるから盡すのが當り前です。(大毎、九・二七)

月三十五圓づつ凱旋するまで贈るといふ證文を手渡して「身代り月給」まで支給して小牧君の後顧の憂ひを絶つてゐる。この徹底した至誠奉公の精神は今や砲煙彈雨の支那戦線で活躍してゐる勇士たちから感謝の手紙となつて三好さんの家に殺到し、四貫島軍友會では感謝狀を贈つた。十三日三好さんを訪ふと謙遜しながら語る。

「褒めてもらふやうなことはありまへん。銃後の國民として當り前のことです、運轉手の宇都宮君が私の氣持にピッタリと合せてくれましたので、幸ひ事故もなく過しました。今夜も秣の輸送をやります」(大朝、九・一四)

〔10〕 銃後の家庭に伸べる愛の手

住吉區南田邊西之町六ノ二九、府立堺農學校體操教師山口陸次氏と一軒おいて隣の三和銀行櫻川支店員村松正壹氏はともに徳島縣出身で、しかも兩妻女は姉妹である。ところが先日相前後して召集令が下り、山口氏は歩兵准尉として松村氏は主計少尉として出征、村松氏は妻女繁子さん(二八)一人が留守居してゐるが、山口氏は妻女美乃江さん(三六)との間に十三歳を頭に四人の子供がある。その上學校から給與されてゐた俸給は停止され、陸軍から貰つてゐた恩給は豫備が現役になつたので中止となり、急に生活戦線上に異狀を來たし

七、出征職員・卒業生よりの陣中便り、その他

【その一】

謹啓 秋冷の節先生皆々様御機嫌如何に候哉御伺申上候。北支も午前二時頃より五時にかけて寒氣を増し、眠れざること屢に候も幸に御蔭様にて頑健にて軍務に精勵仕居、不日平漢線上血腥き保定に向け出勤の豫定に御座候。自尊心なき不潔極まる統制のとれざる彼等民衆が一國家を構成するとなすの愚を痛感すると共に、到るところひるがへる日章旗と吾に叩頭する彼等を見るにつけ 天皇陛下の御稜威と皇國の隆盛に涙ぐむことに候。向寒の節何卒御加餐御專一に御願申上候。乍末筆生徒諸君によりしく御鳳聲の程御願申上候 不一

○月○○日

北支派遣桑原部隊氣付米澤隊

磯 尾 哲 夫

賀須井校長殿

謹啓その後先生御壯健にて生徒愈々緊張、その本分に邁進のこと、存じ上げます。私事も御蔭様にて頗る健康にて毎日精

と呑氣なところを出してゐます。
水は洋々と流れてをりますが、赤く濁つてゐます。
正午頃、上陸らしく、上陸準備をはじめました。

○月○日

岩 佐 修 理

神戸三中御一同様

勵仕居りますから何卒御安神下さい。目下は石家にて、近く鐵道部隊と共に○太線に沿うて○原に攻撃行動を取るべく決しました。頗る難戦にて空爆も効果がないのですけれど、皇軍の意氣益々旺盛であります。一昨日の總攻撃は猛烈を極めたものらしく當基地よりの飛行機の發着頗る頻繁を極めました。北支も一段と寒さを加へますが、吾々一同の軍規頗る嚴。この點も御安神下さい。

草々

北支派遣桑原部隊氣付

高崎部隊氣付米澤(修)隊

磯 尾 哲 夫

賀須井千先生

【その 11】

拜啓 度重なる盛んな御見送りをして戴き、有難うございました。

航海は至つて静か、随つて元氣はいよゝゝ加はるばかりです軍艦のすらりと並んだ揚子江を廻り、黃浦江入口に停つてゐます。

空の白んだ頃、すばらしい飛行機のようなが聞えて來ました本船の對空射撃部隊が「敵か味方かどうして見分けるのか」

した。

明日渡河の目的を以て再び第一線に向ひます。今度こそは心行くばかりの戦をしようと思つて居ります。

身體は愈々元氣です。

最前線の壕の中で聞く、朝早く最初のかすかな友軍の飛行機のようなり、重爆のものすごさ、射ち合ふ機銃の音、そして又或る時は戦争の呑氣さ、それを親しく御話し致したいと思ひます。

草々

三十日午後八時

岩 佐 修 理

神戸三中御一同様

【その 11】

御無沙汰して居ります。申し譯ありません。

先生には其後お變り御座いませんか。本日は御鄭重なる御見舞をいただき有難う存じました。お蔭で經過極めて良好、あと一月もせば全快するものと存じます。傷は腹と腕とですが腕の方はもう殆ど治りました。ソ聯を目前に控へて近日大討伐も實施されます。正規軍と云つてもよい程、この頃の匪は裝備が充實されて居りますので、中々掃蕩されません。今迄、已に數回戦闘しましたが、この間が一番激戦でした。簡單ですが、當時の状況を母校へ送つてくれるやう同期

拜啓 廿三日に聯隊砲中隊に配屬され最激戦であつた陳家行へ單身参り物凄さに身を縮めました。その後聯隊本部と行動を共にしやゝ後方に居りましたが、第一線よりも砲弾に見舞はれる事絶間なく、頭の下げ通しでありましたが、その後慣れて音により遠近を判断し得るの餘裕を得ました。廿七日第一大隊に配屬され、聯隊砲小隊長として最初の戦を致しました。三方よりの猛烈な射撃を喰ひ、部下三名の負傷者を出してしまひました。翌日は全くの追撃戦で、昇る日を背にうけて二里を二時間で突發。軍の念願である蘇州河に廿八日午前八時半に着。大隊長以下各隊長、蘇州河占領の乾盃をビールで舉げました。うまかつたです。

昨日より師團豫備となり、眞茹無電臺に露營して居ります。本月初めて齒をみがき、酸い香のするシャツの洗濯を致しま

生中山兄に頼んでおきました。

先は御禮まで

○月○日

滿洲國三江省勃利線勃利野戰郵便局氣付

刀翎熊谷部隊岸口隊

岸 口 武 彦

土屋直人先生

侍史

【その 12】

鼓隊員諸君。

其の後長らく御無沙汰致しまして申し譯ありません。元氣にて御勉勵の事と拜察致します。

僕も相變らず壯健にて攻撃を續けてゐます。

去る九日夜始めて戦闘を致しました。滿洲の匪賊討伐と異つて、相當な難戦でした。

師團馬廠攻撃の最も重要な地點であつて、この夜襲の成不成は直に師團の行動に關する事大なるを以て、最も慎重に決死を誓つて攻撃をしました。

幸にして○○○占據出來るや、

明けて十日一氣に流河鎮、馬廠を攻略し、今度は愈々滄州攻撃の準備に急がしく、○○師團及び○○師團の到着をまつ

てみます。

滄州附近には馬廠附近より水が多く、道路は胸部にも達する位らしく、或は結氷期まで攻撃をまつ様になるかも知れません。

支那土民は殆ど避難してゐます。

忙しい時には目の廻る位で、暇の時には又安閑としてゐます。北支の空も瑠璃色にちぎれ雲が浮んでゐます。地には高粱の穂に、全く秋と云ふ感じが深くなりました。

諸君も益々御勉勵下さい。

匆々

奥田惣右衛門

鼓隊員一同様

【その五】

亡父の遺刀ヶ長船ヶで

敵塹壕を血塗る

躍り込んで難倒す敵兵數名

吉元少尉の武動物語り

不慮の災厄に死んだ實父の遺刀とともに神戸健兒の意氣をぶち撒いた一勇士の武動物語が、二十日午後元町いつたいに話題をつくつた。元町六丁目井上紙店の長男光雄君(二七)のもとへ赤柴部隊の吉元主税少尉から軍事郵便が届けられた。

が、同君は三中時代から同級で五年間皆勤、寒稽古皆出席、模範生として評判高く、井上君とは親友以上の間柄、それに七月末には二人打揃つて靖國神社に参拜、第一線に起つ日の武運を祈りあつた友人だけに高鳴る胸を押へて開封したところ、何と第一頁には十月七日の人相と頭書して、髯生え放題の容貌を漫畫で書いてゐる。しかも同君は九月末滄州の激戦で名譽の戦傷を傳へてゐるのに、この餘裕とすつかり驚いてしまつたが、さらに花々しい武動物語が認められてあつた。それによると、吉元君の帯刀は備前長船の業物、これがまた實父金左衛門氏が生前友人から貰ひ受けたものだが、父君は昨年タクシーに刎ねられて死亡、それから吉元家の受難時代がはじまり、餘裕のない家計をつゞける有様、この最中出征した主税君の手には父が愛用した「長船」がしつかと握りしめられてゐた。戦況便りには、

「敵兵と遭遇、それといふので突入、敵の奴大慌てだ。狭い壕内でゴツタ返すやつを上からやるんだ。自分も二名は頭負つてゐたの上から弾もろとも斬り下げた」

とあり、このたよりは忽ち元町の知人から知人へ渡り大評判これを三中出身の四回生諸君は、僕たちの誇りだと大喜びで入江通七丁目にさゝやかな家をもつた吉元家を訪問、お目出度うを述べたが、軍服に六つも弾痕が残つてをりながら

不思議と腹部一ヶ所に負傷、今は再び第一線で奮戦してゐるが、同君のこの武運も亡父の守りだと同級生一同佛前へ床しい祈りをさゝげた。(大朝、一〇・二一)

拜啓 晩秋の候益々御健勝之段奉賀候。

陳者其後永らく御無沙汰のみ仕り誠に申譯も無之次第、何卒御海容の程願上候。

北支事變起るや、召集令狀來り勇躍渡支、支那膺懲の聖戦に参加してより正に三ヶ月餘。此の間泥濘膝を没する難行軍並に飢渴に耐へ、頑敵と戦ふ事數知らず。

此の間の詳報は最早新聞紙上に御承知の事と存じ上げ候。小生滄州攻撃の際負傷の件、新聞に出て御心配相掛け誠に恐縮の至りに御座候。ほんの輕傷にて敵を急追中、いつの間にやら治り居り候。

此の間約十日間。

然る所、去る十月三十一日夜不幸にも再び右手を負傷、四針縫合なし一週間位にて治す豫定にて、其の儘小隊の指揮を三日間とり居れど、何たる不幸ぞや傷口化膿なし、發熱四十度により、終に入院の已むなきに至りたるは、かへすくも残念至極にて何とも申譯もなき有様となり申候。一日も早く治し再び第一線に立ち此の不名譽を取戻さんものと大いに氣合

を入れ居れども、思ふ様に肉もらず、切齒扼腕とは此の事に候一日も早く第一線に立ち、思ふ存分暴れ廻り、皆様の御期待に副ふ事を期し居り候。毎日の平々凡々たる病院生活なれば別に御通知申上ぐべき事も無之候。留守宅の方色々御世話様に相成り候由、誠に難有く厚く御禮申上候。

尙同期生にて奮戦し居る友も有之事と思ひ候も未だ聞き及ばず候。同期生に會はれし節は何卒よろしく御傳言の程を、尙諸先生方にも何分ともよろしく御願申上候。

何分にも左手にてコツ／＼書く事故亂筆の段、平に御寛容の程を。

最後に先生の御健康を御祈り申上候

右御禮旁々御一報まで申述候

赤柴部隊藤田隊 步兵少尉 吉元主税

桐山純景先生

侍史

【その六】

拜啓 御無沙汰で申譯ありません。久し振りに恩師の御便り戰場にて拜受、無量の懐しきを感じました。先生の

御壯健な御姿が想ひ出されます。私も恥しい程の負傷をしましたが、今は完全に癒り再び第一線に立つてゐます。元氣益々旺盛奮闘してゐます。學生時代は種々御世話様になりました。御恩は必ず戦場にて御返し致します。

數日後に迫る〇〇の攻撃には思ふ存分暴れる覺悟です、御壯健を遙か戦場より御祈り申します。

十一月六日

左様なら

上海派遣軍山室部隊氣附

和知部隊河原隊

井 上 恒 喜

佐々木先生

侍史

【その七】

拜啓 寒さいよ、厳しき候となりましたが先生はじめ各位には如何お過ごし遊ばしますか、御伺ひ申し上げます。

さて先づ出征の際、神戸驛頭にて鄭重なる御見送をいたゞきましたことを深謝すると共に、無沙汰に打過ぎましたるをお詫び申し上げます。

腰に軍刀、いでたち勇ましく出征致しましてより、去る七月二十四日無事宇品港出帆故國を離れました。波静かなれども霧深き瀬戸内海を通り、夕刻關門海峡を過ぎ、將に停泊中

ん。

南苑に到着せる頃は、戦闘の跡未だ歴然と残り凄惨そのもの、状況でした。唯敵のだらしない敗走ぶりは一笑に附する價値あり。その後保定攻撃には〇〇部隊附となり、大いにやりました。或るときは敵の夜襲をくひ、或るときは畠の中にゴロ寝に一夜を明かし、毎日、芋を喰つて戦闘をつゞけました。此の時は、糧食の補給など殆んどなく、司令官以下芋を喰ふ始末です。

おかしい話ですが、用を足す安全な場所もなく、高粱畑の中で敵の流弾が、ピュン／＼来るなかでやつたこともありま

す。それでも、こんなとき一番の愉快なことは、一日一日と次々へ迅速に進撃して日章旗をたてることでした。

その外に愉快だったことは、敵の飛行機が空襲して来たときです。三機来て、我が軍直ちに應戦するや、地上より機關銃で一機落したときです。全く愉快でした。眞逆さまに地上に突入して、飛行士は息たえて居りました。あとの二機の中一機は友軍の飛行機と空中戦を餘儀なくされ、これもやられ一機だけ遠く太原方向に逃げてしまひました。

九月下旬保定に入城、全く愉快でした。

その後は、〇〇本部附となり、現在は石家莊に来て居ます敵も南京が危くなり、北支方面の敵は全く戦意なく、近頃は

の汽船より一齊のボー／＼といふ歡送笛をき、陸より旗をふる我が大日本國民諸兄の姿を見たときは、全く涙が出ました。

さあいよ、出征だ。異國の空に憎き排日分子をやつつけ

る秋ぞ到れりとの感を強くしました。

玄海灘は案外静かで一晝夜にて朝鮮に上陸、直ちに北上を開始しました。

事變當初のことゝて、各驛の歡送ぶりは大したものでした。特に半島の同胞が軍歌を唱ひながら、可愛い、手を振つて居た情景は未だに眼に残つて居ります。

最初は、私は部隊長として〇〇任務につき錦州(滿洲國)に居りました。滿洲國內は事變による影響殆んどなく、平靜にて其の動脈たる滿鐵の血脈の動きの活潑なるのみ眼に着きました。

私も三中時代にはすいぶん出鱈目もやり、遊んでばかり居りましたが、今になつて過去を振り返るとはづかしくてなりません。

でも國軍の積幹として、三中出身の身を以て今此に外征にきて居ることを思へば及ばずながら三中の名譽になりたい心で一杯です。

八月下旬、北京の南方南苑に到りました。途中敵敗殘兵のこしやくな仕業も随分ありましたが、大したことはありません。匪賊化して、後方部隊輜重兵站ばかりを、ねらつて居る様です。

まあ、私達が此處までやつて来て、後は國內の人々が努力して頂ければ、北支五省の明朗化は出来ることは確實です。出征以來常に感じるのは、日本軍の強みは銃後にあることです。多數の部下を以て、銃後の状況を調べてみるとよくわかります。

外國軍には、これがないのですね。但し獨國を除く。北支外人の状況は、ドイツ人は非常に親日にて從軍して輸送にあたつてくれる會社もあります。

北京では、イギリス人、フランス人が最も悪い様です。いろ／＼書きましたが、私の感想です。

三中校長先生はじめ各位にもよろしく御傳へねがひます。更に氣候寒冷なる折柄、先生はじめ家族御一同様の健康を祈り筆をおきます。

十一月二十五日

石家莊にて

山下 少 尉

佐々木先生

侍史

第四篇 時事論說其の他

一、時事論說

國民精神總動員と我等の覺悟

賛助員 近藤恭一郎

はしがき

この小篇に於て、私は國民精神總動員の意義を明かにし、その中に占める中等學校の任務を究明して、我等中等學校職員生徒の覺悟を述べる心積でゐたが、次から次へと種々の出來事に妨げられて、所期の目的を達し得ないため、國民精神總動員運動を管見して、私の責を塞ぐことにした。何分多忙の裡に書いたため不満の點を免れない。編輯者及讀者の御諒承を乞ふ。

國家總動員と國民精神總動員

(一)

現代の戰爭が、全國力を擧げての鬭争であり、従つて、國防の要諦は單に兵力の優秀、兵器の精銳を備ふるを以て足れりとせず、廣く國力全般の最高發揮にあるは言ふ迄もない。即ち、全國力の總動員である。

陸軍省の見解に従へば國家總動員とは「交戦に當り、軍事の要求を完全に充すと共に一般國民の生活を確保しつゝ、戰爭の遂行に向つて、國家の全能力を發揮するため、國家全體を平時の態勢から戰時の態勢に移動し、國家の利用し得る人的物的、有形、無形一切の資源を擧げて之を統制按配し、最も合理的經濟的に之を運用する」(陸軍省刊、昭和十二年版帝國及列國の陸軍)することである。

近衛内閣總理大臣が、「時局に對する國民の覺悟」と題する講演に於て、東洋平和の恒久的組織確立といふ今回の歴史的大事業は決して一政府一軍隊の力に依つて出来るものではないとして「全國民の全勢力を綜合蓄積し、國家の最高目的の前にこれを動員し、これを傾倒して始めて可能であると信ずるのであります。實に鉞劍を取る者も、鋤、鋏、算盤を取る

ものも、同じく國家的戰闘の一單位として單にその持場が異つてゐるに過ぎないのである。

若し、こゝに自分が一人居らなかつたならば國家の全勢力はそれだけ缺陷が生じて来る。若し又、自分が一時間だけ餘計に働いたならば、國家の持久力は、それだけ増すことになる。斯の如き自覺を以て全國民が國家總動員の内に織り込まれて来るならば吾々に課せられし時代の使命を遂行し發展的日本のために一新紀元を作ることとは決して困難でないと信するのであります(九月十一日於日比谷公會堂國民精神總動員大講演會)と道破されたる如く「軍の場に立つも立たぬも」老も、若きも、男女の區別なく、一物一草もその所を得てその職分を通じて、國家目的に總動員の協力邁進しなくてはならない。

茲に現代國防の意義と要諦とが存するのである。

而して、斯かる國家總動員も國民的自覺の上に進展し、且つ徹底的に戰果を收める迄、堅忍持久する精神力の旺盛に俟つべきは言ふまでもない。

故に、國民精神總動員運動とは單なる銃後の運動ではない。斯かる國家總動員の根幹となり、戰局を常に有利に導き必勝の戰果を收めんとする精神力の總動員である。

我が陸軍に於ては、國家總動員の包括すべき範圍を精神動員、人員動員、産業動員、金融動員、交通動員等に分類して

はゐるが、所謂、國力戰に迄發展し來れる現代の戰爭に於ては、國民の戰意如何が屢々勝敗の數を定めるに至るのであるとして、全國民の思想的金城湯池の形成を提唱し、精神動員を特に重視してゐるのである。

斯の如く、今回行はれつゝある國民精神總動員運動は現下の戰局に對處すべき國家總動員の根幹をなす官民、軍民共に一體となつての一大國民運動であり、舉國一致、盡忠報國、堅忍不拔の精神を振作して、現下の時局に對處すると共に、今後遭遇するであらう所の凡ゆる困難を克服して愈々皇運を扶翼し奉ることを本旨とするものである。

(二)

現下、澎湃として九千萬同胞を支配しつゝある國民精神總動員運動の基調となり、指導原理となるものは嚴として萬邦に秀づる我が國體に他ならない。

舉國一致といひ、盡忠報國といふも君民一家、君臣一體の我が國體に於てのみ眞の意義を見出すのである。又、今回の戰爭が伊太利新聞によつて「防共のための聖戰である」と言はれるのも我が國體擁護に出發するものである。

一切は國體に淵源し、國體に歸一して始めて眞價を有つものである。

近衛首相が「凡そ難局を打開し、國運の隆昌を圖るの道は我が尊嚴なる國體に基いて盡忠報國の精神を振ひ起し、之を

國民の日常の業務生活の間に實踐するに在ると思ふのであります。今般、國民精神の總動員を行はうとする所以も亦茲に存するのであります(週報第四十號所載)と言はれ、安井前文相が「我國は古來幾度か難局に遭遇したのでございませうが、決して之に屈することなく、その都度國民は一致協力致して之に當り、上御一人の御稜威の下に盡忠報國の誠を竭して今日の隆昌を致したのであります。この全國民の心の一つに結ばれる學國一心の山つて來るところ、實に萬邦無比なる我が國體に淵源するものであることを思ひます時、私共は日本臣民たるの有難さを今更ながら深く感ずるのであります(九月十一日、於日比谷國民精神總動員大講演會講演)と説かれ、亦、文部省が「忠誠奉公の道に」於て「今や文字通り非常時局に直面し、茲に國民精神總動員を實施せんとするのであるが、我々國民は先づ第一に、尊嚴にして萬邦無比なる我が國體の本義を益々闡明し、日本精神を發揚しなければならぬ(週報第四十八號所載)」と明示されてゐる如く、此の難局に對處する國民の覺悟は一に以て、我が國體に恪循するものでなくてはならない。

従つて、國民精神總動員運動の指導原理が、我が國體の本義に發することは論を俟たないし、國體を基調とせざる精神運動が骨抜きであることも亦論を俟たない。而して、現下國體觀念の明徴を倍々必要とするは言ふまで

もないが、之を單に抽象論的言辭や、觀念論的學說に止めてはならない。實踐體系に移して以て始めて効果を期待し得るのである。

即ち、國民精神總動員運動の實踐要項の隅々迄國體觀念が滲透、躍動してゐなくてはならない。附和雷同や、單なるおつとめ式義務觀念からの精神運動は全く無意義である。

内務省も「今回の國民精神總動員は單なる教化宣傳の運動ではない。吾々國民が、その日常生活の間に實踐に依つて奉公の赤誠を盡したいといふ趣旨に依るものである(週報第四十八號所載)」と此點を強調してゐるが、前掲近衛首相の垂訓にもある如く、國民精神總動員運動は國民が各自の職分を通じ日常の業務生活に實踐行程をとつて、始めて實を結ぶことを知るべきである。

言論に華を咲かせ、小田原評定に時間を空費してゐる時ではない。實行、又、實行である。

國民精神總動員運動の指導目標

(一)

國民精神總動員運動は我が國體に準據し、國民精神作興の詔書及第七十二帝國議會開院式勅語の御趣旨を奉戴するものであるが、我が國體に則り、詔書及勅語の御趣旨を奉戴せる

近衛内閣總理大臣の國民に對する告諭に於て、吾々は國民精神總動員運動の三つの指導目標を見出すのである。

三つの指導目標とは「學國一致」「盡忠報國」「堅忍持久」である。

學國一致

盡忠報國
堅忍持久

一旦緩急あれば、忽ち國論は統一され、義勇公に奉ずるは日本國民の特性であるが、と云つて拱手傍觀樂觀してゐる時機でないことは無論である。

戰爭に勝つて、銃後に敗れ、或は思想戰に敗れてはならない殊に長期戰となれば、現代戰が國力戰であるだけに、銃後の結束が亂れ、思はず不覺を招く惧れなしとしないのである。

恐らく、現代戰にはあらゆる方法で銃後擾亂の誘惑が行はれるものと豫想しなくてはならない。

故に、三千年の民族的傳統を誇る神國日本に於ても、今事變に際しては、彌が上にも國民的團結を強調し、打つて一丸となつて困苦缺乏に耐へ、軍の場に立つも立たぬも、國家目的の遂行に邁進、盡忠報國の赤誠を致さねばならないのである。

従つて、今回の國民精神總動員運動の三目標として、學國一致、盡忠報國、堅忍持久を選んだことは全く當を得たもの

と言へる。次に、此の三目標を通じて、時局に對處する我等の覺悟を述べる。

(一)

學國一致

第七十二帝國議會開院式の御勅語には「和協一心」と仰せられて、彌が上にも、九千萬同胞が、億兆一心、一絲亂れざる結束をもつて終始すべきことを訓されたものである。

即ち、日本國民が、眞に一律一體となつて、一感情、一操守の下に質實剛健なる士氣を固めて、決して精神的分裂を來さざる眞の結束を具現するにある。

戰爭に於ける必勝の秘訣が、天の時、地の利よりも「人の和」であることは人口に膾炙せる至言である。

我が不世出の聖德太子が、十七條憲法の第一條に「和ヲ以テ貴シトナス」と仰せられてゐることを以てしても、國家統治上、人の和が如何に大切であるかゞ明瞭であらう。

近衛首相が組閣直後の施政方針に於て、國內の摩擦緩和に努力することを聲明されたのも、支那事變勃發するや、政府は國內の總ゆる團體及各階層に向つて、支持と協力とを要望したることも、皆これ大事の前には勿論、政治的にも、人の和、國民諸和の必要を痛感したからである。

併し、斯かる眞の結束も、國民諸和も三千年の傳統的精神

と一民族的構成を有ち、一旦緩急あれば如何なる國內摩擦もケシ飛んで忽ち義勇公に奉ずる我が國に於ては敢へて強調の必要なしと樂觀的に構へてゐる者が、國民の一部に存在し、日本精神の宣揚や國民精神總動員運動に極めて消極的態度を示してゐるが、曩に述べたる如く現代の戦争が單に戰鬥員だけの戦争に非ずして、全國力を傾倒しての國民戦争である以上、層一層、國民的團結が強調され、國家目的の遂行に遺憾なからしむるは當然なことではなければならない。

殊に、現代戦に於ては、スパイの跳梁によつて、國民思想の攪亂が企圖されるが故に、三千年の傳統を誇る我が國に於ても、決して樂觀すべきではない。益々以て國民意識を強化深化して、浮沈を共にし、一律一體となつて呼吸する一人格的自覺に迄高めなくてはならない。

即ち、君民一家、君臣一體の我が國體の本義を體得すれば我々日本國民が一人格であり、内在的個人であることは自明の理であることを一層徹底せしめなくてはならない。

これと共に、國民精神を益々振作して九千萬同胞を一人格的態勢に移し、何物をも燒燼しつくさずんば已まざる祖國愛の焰と化せしめて、以て國家目的の遂行に資することも亦必要不可欠である。

萬寶山事件以來、半島人の國民的自覺は漸く本格的となり今事變に於て、半島人が日本國民意識、國民同胞の見地より

熱烈なる銃後の後援を送りつゝある現状を目しては文字通り舉國一致の顯現に感激せざるを得ない。

殊に、朝鮮の婦人達の間に出来た愛國金釵會運動の如き、或は幾日幾晩も停車場に詰め切りで、皇軍將兵の歡迎送に當つてゐる如きは内地婦人を瞠若たらしめるものではないか。

斯くの如く、今事變が勃發するや舉國一致の氣風は期せずして、一舉に起り、國民の決意は固く一意時艱の克服に當らんとする心構へが全國に澎湃として醸成されたことは我が日本本來の姿が御稜威のもとに體現したものと云はねばならない。

見よ、事變前、我が國內の混沌たる情勢に好機逸す可らずとなした支那も、某國等も一旦緩急あれば忽ち鐵の如く結束し、義勇公に奉ずる日本國民本來の姿に今更驚愕狼狽せることを。

之を要するに、日本全國民が國體に恪循し、己れを空しうして、國家の最高目的の前に打つて一丸となれば、前途何の恐るべきものもないのである。

(三)

盡忠報國

前掲、開院式の勅語に「朕ハ帝國臣民カ今日ノ時局ニ鑑ミ忠誠公ニ奉シ和協心ヲ一ニシ贊襄以テ所期ノ目的ヲ達成モムコトヲ望ム」と仰せられ、之に奉答すべき近衛首相が「凡そ

難局を打開し、國運の隆昌を圖るの道は我が尊嚴なる國體に基きて盡忠報國の精神を振起して……」と全國民に告諭されたのも、今事變に際し、時艱克服の道を吾々國民に明確に垂訓されたものに他ならない。

今回の支那事變は單に日支間の交戦ではない。その真相を熟視すれば英蘇を兩翼とする世界勢力と東洋を彼等の魔手から死守せんとする日本國民の自衛權の必然的發動である。

而して、皇軍の北支及中南支に於ける奮戦は支那をして容共抗日の迷夢から覺醒せしむる破邪顯正の戦であり、老獪なるジョン・ブルの支那植民化を防止して、眞の東洋平和を確立せんとする「聖戦」である。

従つて、今次事變は單なる支那軍閥相手の事變に終らず、國運を堵す長期世界的大戦争に發展するやも計り難き形勢に在る現状につき、吾等國民はチャンコロ相手などとタカを括つてゐてはならない。

我等日本國民は最悪の場合をも覺悟して、協心戮力一體となつて、國家目的に邁進し、然も終極の勝利を獲得するまでは斷じて退かざる忠誠奉公の意氣に燃えてゐなければならぬ。

斯かる國難突破に處する我等日本國民最高の道徳は「盡忠報國」の四字に盡きると言つても過言でない。

出征兵士が盡忠報國の權化であることは言ふ迄もない。

銃後の國民としては盡忠報國の日本精神に燃えて各人の能力職分に適應せる至誠奉公の働きをすればよいのである。

官公吏も、工場労働者も、農民も、店員も、學生も、老若男女公私の生活を問はず、それらの能力職分を通じて、最大限の赤誠を吐露し、國家總動員の趣旨に欣然協力すべきである。

生を大楠公殉節の地に享けつゝある吾々は、楠公精神を通じて、盡忠報國の赤誠を生活戦線に一層擴大強化し、各自の本分を國家目的の遂行に、最も有効適切に働きかけたいと思ふ。

吾々は新聞ラヂオを通じて、壯烈鬼神を泣かしの皇軍將兵の奮闘振りを生きた教訓として心に深く刻みつけ、益々以て盡忠報國の精神を強化すべきである。

(四)

堅忍持久

支那事變が、長期戦世界戦に迄發展するやも計り難き現状に於ては、國民精神總動員運動の三大目標中、堅忍持久は銃後國民の最も念慮すべき務であると思はれる。

征戦既に、五ヶ月寒暑と饑餓と惡路に惱されつゝ、頑敵征討に心血を注ぐ皇軍將兵の涙ぐましき奮戦振りは、銃後國民にとつて好固の活教訓であり、吾々は新聞、ラヂオ等を通じて

此の活教訓を心の糧とし、管見銃後國民の本分を盡すことに日夜力めてゐるのであるが、征戦が長期に亘り、對外關係が複雑し、國民生活が自由を失ひ、負擔を感じてくると、銃後國民の緊張が弛緩し、精神的結束が亂れ易いのである。殊に征地に遠きため直接の緊迫感を味ひ得ない銃後の國民は堅忍持久どころか兎角銃後國民の本分をすら忘れ易いのである。

我が國民性は、古來「熱し易く冷め易い」と言はれてゐる。今事變に於ても、征戦滿四ヶ月しかならぬため銃後國民の感激は日に新に、且つ非常な緊張振りを見せてゐるが、今後半歳、一年と続く場合を考へると寒心を覺えざるを得ない。

假令、如何なる事態に直面しやうとも、吾々は宜しく大國民の襟度を以て、冷靜、沈着、大局に着眼して、終局の戦果を收めるまでは如何なる困苦缺乏にも耐へ忍んで、文字通りの堅忍持久を続ける覺悟と實行力とがなくてはならない。

近衛首相が「今次の事變は其の由つて來る所遠く、事態の推移亦遽に豫斷を許さざるものあり、此の秋に當り國民齊しく時局の重大性に鑑み、益々堅忍不拔の志操を堅持して、今後に來るべき如何なる艱難にも堪へ、所期の目的を貫徹する爲、敢然邁進するの決意あるを要す」(内閣告諭)と國民に垂訓する所以も支那事變の前途と「熱し易く冷め易き」我が國民性を案ずるが故である。

日本聯合青年團理事長香坂昌康氏が、今事變に際し、全國

ることも判る。

支那との戦ではあるが、コミンテルンとジョン・ブルとを兩翼とする列強勢力との對戦であると解する時、今後の事態が如何に推移するかは、國民の最大關心を有つべきところであらう。従つて、長期戦、世界戦を覺悟して、質實剛健、困苦缺乏に堪へる心身の鍛錬が急務である。

②和戦兩時期に亘る國民の辛抱と努力が必要不可欠である。戦争は短期間に終つても、終らないでも帝國の期する處は遠大である。即ち、東亞の安定勢力を以て任ずる日本國民は眞に東亞の平和を確立して世界文化に貢獻せんとする雄大な目標に向つて勇往邁進しつゝあるが故に、之が爲には和戦兩時期に亘つて國民は永き戦争の艱難に耐へ、或は建設の大努力を拂はねばならない。こは我等東洋の盟主に課せられたる使命で、回避の餘地がない。

蓋し、艱難は伸び行くものに課せられた試練であり、試金石である。克くこれを打開し得るものは實に國民の一致團結と堅忍持久の強き精神力とにある。

之を要するに、長期戦となり、世界戦となると、何時如何なる事象が國の内外に起つて、國民を焦慮、當惑せしめ、國民的結束を打切られ、精神的弛緩を誘致されるかも計り難いから、之に對處する萬一の場合の心構へを充分に養つて置き且つ國民は草の根を嚙り、岩にしがみついても、堅忍不拔の

青年團員に與へたる訓示の中にも堅忍持久を強調してゐる。「堅忍持久」こそは今日一般を通じて最も強調を要する標語であることは何人も云ふ處である。今日の如き重大時局に直面しては何人も緊張するのである。

興奮熱狂は重大なる刺戟に對して自然に起る現象である。吾々は此の一次的の感情を越えて、眞に底力ある堅忍不拔の心構を更に／＼養つて行かねばならぬ。我が忠勇なる將兵の一死報國の大活動に依つて、毎日報ぜられる驚くべき戦勝の報は眞に吾々を狂喜せしめるのであるが、我等國民は決して之に酔つてはならない。

戦捷の快報に接する毎に、更に堅忍持久の覺悟を深くして行かねばならぬ。(文部時報第五八九號精神總動員瑣言)と。所謂、勝つて兜の緒を締めよ、である。

次に、國民一般に堅忍持久の覺悟を彌が上にも深からしめる爲には、

①時局重大性の認識と長期戦の覺悟を徹底せしめなくてはならない。

吾々は、弱敵支那と侮つてはならない。現時の支那軍は舊東北軍などと異つて、裝備も訓練も世界一流の軍隊に劣らぬ強敵であり。然も死力を盡して戦つてゐることは、征戦五ヶ月、全面的に敗退し、重要據點を殆ど占領されて居るにも拘はらず、期待した政變も起らず、猶健氣にも皇軍に抗してゐる爲には、

精神を以て最後迄戦ひ抜き終局の勝利を得なくてはならぬ。

戦争に勝つても、銃後に敗れざる覺悟こそ必要である。備へあれば、憂なしである。

結 語

國民精神總動員は國家總動員の基調であつて、現代戦の如き國家の全機能を擧げての國力戦に於ては缺くべからざる運動である。

戦時は勿論、平時に於て既に重要な役割を有つものである。殊に國家の安危が國內の自主的要件よりも、關係列國の軍備擴張と云ふ相對的要件によつて、より多く支配され勝ちな現代に於ては平時に於て、國民精神の剛健、國民意識の徹底及全體精神の旺盛等は日本精神の宣揚と共に國民訓練の核心をなすものである。

戦時動員は此の平時訓練の延長であり結實であらねばならない。

支那事變の勃發と共に國民精神總動員運動が擡頭して、宛も銃後國民の一大愛國運動たるの觀があるが、平時に於ては國民の基礎的訓練を、戦時に於ては銃後の國民を打つて一丸として、國家目的の遂行に戮力協心せしめる愛國運動でなければならぬ。

而して、此の運動の基調であり眼目となるものは云ふまでもなく、尊嚴にして、萬邦無比なる我が國體の精華を顯現し彌々日本精神を宣揚することであり、又、大正十二年に賜つた國民精神作興に關する詔書の御趣旨を奉戴して、之を實踐することに他ならないのである。

吾々は太原及大上海の陥落によつて、安心することなく、この運動の指導目標たる學國一致、盡忠報國及堅忍持久の實踐體系を通じて益々皇軍の武威を發揚するに遺憾なきを期し以て皇運を扶翼し奉らんことを期すべきである。

(國民精神作興詔書發見記念の日稿)

時局に處するもの

五年 大 曲 直 介

日滿支三國の融和提携と赤化東漸阻止とによつて、東亞の平和を維持せんとする我が帝國の根本方針を、支那は曲解し排日抗日の態度を持し、我が自重的態度に益々増長し、遂に七月七日蘆溝橋の日支衝突事件を起すに至つたのである。

東洋永遠の平和の爲遺憾となし、我が國は事件不擴大、現地解決の大方針のもとに和平解決のため、全幅の努力を傾注したのである。然るに支那側は驕慢不遜の態度に出で國民の抗日意識を煽動し、更に對日決戦の強化を圖り、不信行爲、

る事等を擧げ、之に反し日本は兵力少數戰鬥精神無く、日本空軍は劣等なること、資源缺乏しく財政沈滞し、民心動搖し、國內に危機があらはれること等を擧げてゐる。かゝる皮相な愚かな見解が支那の對日認識なのである。之を以て日本與し易しと侮り、抗日戦へと狂奔したのである。又國民政府は排日抗日を以て政策とし、これを以て政權維持の要素とし、國民教育の如きも、これを骨子としたのであるから、この觀念は相當深く國民の心に根ざしてゐる。

上海前線に於て支那女學生が、甲斐なく陣中に働いてゐると云ふが如き、支那國民の抗日意識の程度を窺ふ索引となるであらう。かくして歐米諸國に眩惑され、學國對日準備に懸命となつた支那は、日本の自重的態度を輕視し、北支から日本勢力の退場を積極的に求めるやうになつた。この空氣が日滿支關係の特殊地帯たる河北省の空氣を漸次に反目的となし、遂に二十九軍が對日第一線軍となり、日本軍に不法發砲し來つたのである。この事件が起るや、支那の空氣は馮玉祥、孫科等の主戰論者の領導する所となり、事件も支那全土に飛火したのである。我が皇軍が本格的に膺懲の劍を抜くや國民政府の期待は悉く裏切られ、國民政府の崩壊も目前に迫つてゐる。

豫期に反した敗北を食つて、支那は外國の干涉を誘致し、日本を牽制せんとした。則ち、國の内外に對して逆宣傳を行

不法射撃を度重ねる様になつた。こゝに皇軍は暴戻支那膺懲の爲、敢然として起つた。

王師一度起たば、進軍又進軍、朝に一砦を抜き、夕に一城を席捲し、完膚無き迄敵を潰滅せしめつゝある。「海ゆかば水つく屍、山ゆかば草むす屍、空ゆかば雲そむ屍、大君のへにこそ死なめ、顧みはせじ」の民族的金剛不壞の大信念が隨所に見られるではないか。わが海軍航空隊の壯烈なる肉彈戰を見よ、天嶮に惱みつゝ、飢渴と戦ひつゝ、長驅して敵軍を殲滅せしめる陸兵の冲天の意氣を見よ、皇軍の向ふ所、鎧袖一觸、秋の木の葉を散らしめる感があるではないか。見よ皇軍の進む所、疾風枯葉を捲くの概があるではないか。

今日の狀態に至らしめた國民政府の事に就いて考察して見たい。蔣介石が自己權力擴大強化を計らんが爲、過去十ヶ年間育て、來た日本敵視感情は、ひたむきに對日決戦要望と變じ、終には蔣權力の對日決戦を生ぬるしとなし、對日即戦を主張する強硬論派が西安事件の背景をなし、その事件解決後支那の對日戰準備は積極的になり、叛亂軍やその背後をなす共產黨が國民政府に合流してしまつた。而して此等共產黨は支那の兵力は優勢にして、戰鬥意識に燃えてゐること、支那は地理的、經濟的に有利で日本軍の背後を擾亂するに便なること、支那空軍は列國の援助を得て有力なること、列強は日本を助けず、支那に味方し、殊に露國は最も信頼し得る國な

ひ、又上海共同租界及フランス租界に爆彈を投じ、上海事變の兵火が第三國の居留民の生命財産の上にも激甚な影響を及ぼすと云ふ印象を與へようと企圖したのである。然るに列國の支那に對する同情は半減してしまつた。新支那の建設の美名に眩惑されてゐる一部歐米人も亦、今再び「支那とは何ぞや」と云ふ命題の再檢討をせざるを得なくなつた。通州に於けるあの鬼畜以上の暴虐殘酷、この事實を見ても、支那を近代國家と認め得るや、大いなる疑問が存するわけである。

次に日支事變に對する各國の態度はどうか。この問題は支那に權益を有する國が多だけにデリケートな問題である。先づ英國は、滿洲事變當時よりは、日本の眞意を解し、正論を吐いてゐるものも尠くない。一方何分支那に最も關心を有する英國のこと故、我に對し非友誼的な點も少くない。極端な日本誹謗を避けてゐるが、英大使負傷事件の事もあり、餘り香しくない状態である。佛蘭西は左翼派、右翼派の二つに分かれ、一は日本を侵略國として誹謗し、一は支那の共產化を攻撃し、南京政府の輕忽を戒めてゐる。ドイツは壓倒的に日本支持だ。昨年締結された日獨防共協定の義理合もあり、ソ聯に對する牽制方針も手傳つて、支那の共產化を痛撃してゐる。イタリーの輿論も日本支持に傾いてゐる。反共產主義を國是とするイタリーとしては當然のことである。然も支那とは經濟的關係も薄く、極東方面に何ら利權を有してゐない

ので、公平な立場に於て批評してゐる。ソ聯の我が國に對する態度は事毎に非友誼的なものがあり。殊に露支不可侵條約締結以來は對支援助も益々露骨となつてゐる。蔣介石が抗日と云ふ名目のもとに共產軍と握手した以上、支那に於けるコミンテルンの活動は愈々活潑となるにきまつてゐる。その結果、支那赤化と云ふ支那民衆のためにも、東洋平和の爲にも甚だ憂慮に堪へぬ事態に到達するであらう。所詮日支衝突の眞相は共產主義の排撃にあると云ふも、敢て過言ではなからう。最後にアメリカは如何と云ふに、事件にまき込まれるのを極力回避してゐる。滿洲事變におけるスチムソンの失敗に顧みて、一切不干渉的態度に終始してゐるが、國內の輿論は雜然たるものがある。經濟的にも、文化的にも、密接な關係を有してゐるから、支那援助に傾きたがる。支那の暴狀にあきれかへり「支那軍は自國人、外國人の見境もなく、爆彈や砲彈で人を殺傷する鬼畜である」と難じてゐるが、自國居留民の保護、權益の擁護には中々鋭敏である。以上の如くであるが、英、米二國の今後の動向には相當注意を拂はねばならぬ。

我等國民の覺悟は如何に。九月四日臨時議會開院式に當り賜はつた優渥なる 勅語は、今次の事變が東洋和平に對する我が非常の努力にも拘らず、支那の暴戾によつて惹起せられたるものである事を闡明し給ひ、帝國議會の和衷協賛を命ぜられると共に、時局に對する國民の覺悟を教へられたものでたゞたゞ恐懼感激措くところを知らないものである。國民は、聖旨を奉戴拜誦、愍慮の洪大を仰ぎ、舉國一體の念を強め、聖慮を安んじ奉らんことを期するばかりである。又同九日に近衛首相は聖旨を奉體し、内閣告諭を發表し、今次事變の勃發原因を明示すると共に「凡そ難局を打開し、國運の隆昌をはかるの道はわが尊嚴なる國體に基き盡忠報國の精神をますます振起して國民日常の業務生活の間に實踐するに在り」と國民の反省を促し、國民精神總動員を實施する所以を力説してをられる。

最後の榮冠の我が國民の頭を飾る事は、疑ひの餘地がないが、それは異常の努力の後にはじめて酬いられるのである。國力充實の爲に、國民に全能力を發揮せしむべく、種々の考案をめぐらすは今日の緊急事である。政府に於ても之が實施要綱を發表し、その實踐事項として(一)日本精神の發揚、社會風潮の一新(二)銃後後援の強化持續(三)非常時經濟政策への協力(四)資源の愛護。更に夫々細目を掲げ、目的達成の方法を講ずると共に、一方首相、内相、文相等閣僚が街頭に進

出して、その主旨の普及徹底を計つてゐる。我等國民は當局の指導勸説を俟つまでもなく、むしろ自發的に十分の反省と考慮を加へ、國力の充實を圖り、堅忍持久、前線將士に後顧の憂なからしめ、且つ又盡忠報國の精神を日常生活の間に具現せしめねばならぬ。

澎湃として充つる國民的熱誠の雰圍氣の中にある我等生徒は學生の自分に違ひ、將來大御業に翼賛し奉るべき基礎を作るは勿論、冷靜沈着に非常時局に處し、國民精神總動員に欣然參加しなければならぬ。(一一、九、一三)

黎明の亞細亞

五年 土 岐 良 平

七月八日、突如蘆溝橋の北方龍王廟附近に於ける我が軍の演習中、宋哲元麾下の支那軍の不法射撃に端を發した一事變も、支那側の度重なる不信態度により我が和平解決の手段もこゝに全く破られ、隱忍自重の我が皇軍も終に斷乎立つ事となつた。かくて恰も池中に投じた小石の波紋の擴まるが如く、果ては北支事變となり、剩へその餘火は、上海に迄移り第二回の上海事變を勃發し、終に支那事變となり、ひとり極東に止まらず、歐米諸國に至る迄、一大センセーションを捲き起すに到つた。我國にとつて、實にゆゝしき問題である。

今回の支那に就いて考へて見るに、獨裁王蔣介石は支那統一の爲め、各地に割據せる各軍閥を懐柔し、中央政府の支配下におかかんが爲め的手段として、排日運動をおこし、又人心を收攬し、排日氣分を起さしめる爲、頑是なき子供達に迄排日教育を施し、打倒日本をスローガンとして來たのである。歐米にたよりて空陸軍の近代化をはかり、稍々統制の兆が見え初めた時、早くも彼等は自力過信を來し、やがては、それが抗日となり、毎日となるに至つた。かくて上海附近に於ける日貨排斥となり、日支關係が面白からぬ状態となつて居た所、今回の事變が勃發したのである。此は支那自身がまいた種とはいへ、眞に支那にとつて不幸な事であるのみならず我が國の根本方針たる日支提携の上の東洋の安全平和確保といふ點に於ても、實に遺憾な事である。而して、自分は今政府の甘言にのせられ、輕率妄動する支那民衆に對し、又日本に對する認識を誤り、自ら墓穴を掘つてゐるが如き南京政府に對して、その愚かさをせめると共に、一抹の同情を感じ、且つ一日も早く支那に、その非なりしことをさとらしめたいものであると、考へざるを得ないのである。

一方今や皇軍は、度重なる支那の不法行爲に對し、斷乎膺懲の歩武を、北支並びに上海に進めて、連戦連勝の勢にある事は我々日本人にとつて、心から快哉を叫ばしめるものがある。かくの如く、我國は軍隊と軍隊との戦ひに於ては、勝利

を占めて居るが、然し近代の戦争に於ては、軍隊許りの戦ひでなく、所謂、國內擧げての眞の國力戦である。故に銃後の守りである我々一般國民は、その任務に於て今迄の戦争と異つて實に重大性を感じるのである。

今や、支那空軍は、我が精銳なる空軍の爲めに殆ど爆破せられ、空襲の危機は一たん免れたりとはいへ、その背後には幾多の眼が我が國にむけられ、若しも我が方に隙あらば此の事變に乗じて、何時戦を挑んで来るやわからない。又現に各國のスパイが多数我が國に入り込み、各地に跳梁して居る事は殆ど公然の秘密であり、殊に某國の如きは莫大なる金を費つて我が國情を探つて居るとき。

次に、我々國民は長期戦に對する覺悟が必要である。元來我が軍は即戦即決主義であるけれども、それがどう差支へあつて長びくやも未だ豫想を許さぬのである。しからば、何故に長期戦は我が國民に一段の覺悟を要求するのであらうか。考ふるに、元來我が國民は、未だこれと云ふ本格的な長期戦に出くわした事がない。それは過去に於ける日清、日露の兩役にしろ又日獨戦争、北清事變、滿洲事變等に於ても明瞭である。かの歐洲大戰に於て、獨逸が英、米、佛、露等の聯合軍を相手とし、約五ヶ年の長きにわたつて戦ひ、軍隊同志の戦ひに於ては殆んど勝利を得たにかゝらず、最後に於て敗れたのは國民が長期戦に堪へられず、國內の動搖を來したか

らである。如何に準備の相備はれる國にしても、長期戦となれば、後には物資の缺乏、従つて物價の騰貴を來し、財政上に於ても次第に行きつまり、又國民思想上に於ても面白くない現象がおこりがちである。故に、それに對してその國民たる者は、よく／＼の覺悟の必要な事は言を俟たないのである。元來日本人は昔から熱し易く冷め易しといふ特性を持つて居ると言はれて居るが、此の點に於て我々は大いに考ふべき點が多々ある様に思はれる。平和の時ですら、餘り樂であると言はれぬ日本の財政状態が、戦時状態に入つて國民の無自覺なる行動を取る場合に於ては、決して樂である筈がない。必ずや其處に難關が横はつて來るに相違ない。そこで我々はその事をよく考へ、自覺ある行動をとり戦勝に氣をおこらず、流言蜚語に迷はされず、理性を保ち、着々と自分に課せられた職務を遂行し、奢侈を慎み、一致協同して如何なる艱難に出合つても、微動だにせぬ鞏固なる意志を以てやつて行かなければならない。

さて國內の現状を考へて見るに、國民擧つて團結しその一致協力の實は美しくも亦涙ぐましいものがある。即ち街頭には婦人、男子等の千人針、千人力作成の姿が見受けられ、新聞紙上に於ては國防献金、航空機献金、出征軍人遺族に對する慰安金等の寄託者の氏名が多数掲載され、又防空演習等には、皆が眞面目に従事し、非常に成績が良好である。

かの召集令を受けた兵士が、喜び勇んで出征する姿、又此が見送りは盛大を極め、聊も後顧の憂なからしめんとする同胞愛、その至情を目撃する者誰か感涙を禁じえようぞ。我々は、はや此處に於て日本と支那との強弱の差が感ぜられる。然しながら此の熱狂が一時的のものであるとするならば、それは何の役にも立たないのである。そこで我々は、熱し易く冷め易しといふ通弊を打破し、事變の續く限り何時迄も現在の様な緊張した状態を續けなければならぬと思ふ。此の事は、我が國が最後の勝利を占むる上に於て、戦時状態にあつては、國民の念頭におくべき最も大切な事である。

今や世界の動きを見るに、歐洲の一角スペインに於ては、相變らず右翼對左翼の争ひが續けられ、それに關聯し獨逸、伊太利、英吉利、佛蘭西、ソヴィエト等のデリケートな國際間の動きが見受けられ、眞に噴火口上に居るが如き感あるを免れない。又本事變に就いても、英國、佛國、ソ聯等の諸國は未だ表面にこそ現はしてゐないが、其の内面に於ては、我が國に對して好感を持つてゐない事は確かであらう。それに反して獨逸、伊太利等右翼系統の國々が、比較的好意を持つて居てくれる事は面白き現象であると言はねばならぬ。一方太平洋を隔てた一大國米國は、今の所嚴正中立を守つて兩國間の成行を熟視して、下手をせぬ様にして居るあたり、米國の如何にもヤンキーらしき、かけひきの巧さがうかがはれ

る。かくの如き雰圍氣の中にあつて、我國の特に警戒すべきはソ聯の支那に對する動きであると思ふ。ソ聯は、さきにトハチエフスキー事件等あり、國力一時疲弊するかの如く思はれたるも、その後スターリンの獨裁の下に、その威を恢復しその魔手を南京政府に延ばし、終にソ支不可侵條約の締結に迄至らしめた事は、吾人の記憶に新事である。此のソ支不可侵條約に就いては、最早言ふ必要もないのであるが、その表の名目の何ら恐るべき事でないのに反し、その裏面には何物かあるに相違ないといふ事は、何人も認むる所であらうそれを裏書するものとして、南京政府に捕へられて居る支那人、ロシヤ人等、支那共產黨の中樞人物と目される者達が、續々無條件で開放され、又軍隊に於ても馮玉祥等の赤化勢力が次第に擴まり、人民戦線化せんとして居る事は赤化勢力を最も嫌悪する我國にとつて、最大の脅威たらざるを得ないのである。かく考へる時、我々は此の事變が並一通りのものでない事がうなづかれ、又考へ様によつては、最悪の場合に當面せぬとも、はかり知れぬし、我々はそれに備へる覺悟が必要であると思ふ。

しからば、此の重大な我國の非常時局にあつて、我々中學生のとるべき覺悟、態度はどうあるべきであらうか。先に自分は、各自に課せられた仕事を果すと云つたが、現在我々に課せられた一番大切な仕事は勉學である故に、我々は一時

雄々しく起てよ、日本第二國民!!
覺醒せよアジャ!!

(二二、九、二三)

國民精神總動員の秋にあたり

五年 佐野 輝夫

の興奮にうかれて、輕率な行爲をなす事なく、平時よりもむしろ一層勉強に精勵し、その傍身心の鍛錬に勵み、此の非常時局に於ける日本中堅國民となるに恥ぢない素質を作る様奮勵努力すべきであり、そして又我々の出來得る範圍で國の爲になる事は率先して之を行ひ、又惡き事は率先して矯正しその感化を一般民衆に迄及ぼす位に迄努め、かくする事によつて、我々は中學生としての銑後の守りを完うする事が出来るのである。

かくして、我國は國內に於ても統制がとれ、又軍隊に於てもその強力をほこり、此の充實した力で以て此の度下し賜つた勅語にもある通り、心の底迄曲つてゐる中華民國の反省を促さなければならぬ。是に於て、支那に自身の今迄非なりし事を悟らしめ、眞に日提携の必要なる事を痛感せしめ、東洋の空をして、又もとの太陽赫々と輝く青天白日の空にしなければならぬ。かくて西洋諸國から何らの束縛も受ける事無く、日本は東洋のリーダーとなり、獨り支那のみならず全東洋の國々を導き、全く白人の壓迫下にあつて沈滞せる全アジャ各國をして奮起せしめ、以て、眞にアジャに於ける王道樂土を建設しなければならぬ。かく日本の使命を考へる時その遠大なる事に、我等青年の意氣は高まり、血は躍る。此の使命に従ひ、之を果す者は、これ我々第二國民に外ならぬのである。

炎天泥濘の中をひたすら進軍を続け、到る處に日章旗ひるがへるといふ快勝振り。又一方上海方面に於ては我海軍の精銳が果敢なる敵前上陸を決行し、艦砲、空軍の援けの下に忽ちにして上海の大都市を沈黙せしめ、就中海軍航空隊の威力は、悪天をおかして渡洋長距離爆撃に大成功を収めた爆撃機に、或は俊敏輕快隼の如く秘術を盡して大量の敵機を撃墜した戦闘機に遺憾なく發揮せられたのである。此等の相次ぐ連勝は思ふに決して容易に生れたのではない。皆皇軍必死の力闘の結果だ。従つて、その犠牲も又甚大である。しばし尊き幾多の英靈に心からなる默禱を捧げよう。

しかしながら帝國の大方針は徹底的に打撃を與へ、以てその戦意を失はしむるにある。故に如何なる犠牲をも顧みぬ覺悟である。現在の状態では我が膺懲の威力は最高潮に達せんとし既に支那軍の一部は戦意を失つたかの如くである。かくして帝國の方針は着々と遂行されつゝあるのだ。

此の疾風迅雷の如き皇軍の大奮闘を報道戦線を通じて詳細手にとる如く目のあたり見るが如くに見、又聞いて居る我々國內にある者も一齊に緊張を漲らせ、ひたすら皇軍に感謝の念を捧げ、その武運の長久を念じて居るのである。此處二ヶ月は全く國民全體の心がびつたり一致し、國全體が非常時色に塗りつぶされて居る。街頭に千人針、千人力の影あり、獻金運動あり、出征の兵士に對しては、老若男女齊しく己を忘

こ、數年來にわたつて異常な空氣のたゞよつて居た東洋の一角に、蘆溝橋を中心とする日支兩軍の衝突が、突如として起り、全世界に大波紋を投げかけてより早二ヶ月半。當時帝國の執つた不擴大主義も、自らの實力を過信しあはよくば滿洲事變當時の如く諸外國の援助を受けて日滿兩國を屈服しようといふ笑止千萬ではあるが、斷乎たる決意を持つた支那軍の前には丸で捨てられた紙屑の如く全く無力に近いものであつた。あくまで日提携を念ずる我帝國は、事此處に至つては大鐵槌を加へても彼の眠りをさますさんのと、九月五日議會に於いて近衛首相の宣明された烈々の決意と共に、遂に皇軍は起つたのである。

爾來、眠れる獅子の起てるが如く、我が膺懲の師は北支戦線に進撃、また進撃、空よりは新鋭重爆撃機が大編隊陣を張つて銀翼燦と輝く所、空軍未曾有の大爆撃を續々決行し、日頃練磨の手腕を遺憾なく發揮し、既に敵空軍の威力を半減してしまひ、陸兵は空軍の援助の下に寄せ来る敵を撃夷しつゝ、

れ聲をかぎりの萬歳を連呼して、その勞に謝する有様、見る物聞く物、たゞ舉國一致の至誠あふれざるなき状態である。しかしながら、この緊張をともしれば破らんとするものがある。それは皇軍全勝の快味に酔ひしれた國民の心のゆるみである。熱し易く冷め易いのは、我等大和民族の通弊であつて、若し戦争が永びくならば次第に緊張のひも、とけて來るかも知れない。支那兵は決して弱くないのだ。しかし、それにも増して我が皇軍が強い爲等彼を叩きつぶし得るのであつて一寸一分の心のゆるみも許されないのだ。

故に現在の我等國民にとつて最も重要な事は戦局の進捗するに伴ひ、それだけ緊張の度を増す事である。熱誠の逆る所、冷め難い國民になる事である。殊にその活躍舞臺を數年後に持つ我等中學生はこの非常時を引き受けんとする幸福を思ひ、特に心を緊張させ且つ重大なる決意を抱いて居なければならぬ。

第二番目に重要な事は經濟問題である。未だこの事變の將來は豫測し難いが支那に對する第三國の干渉をも考慮し否最悪の場合をも考へて行く必要があらう。故に資源の素々豊富でない我が國は忽ちにしてその財政に苦しむに違ひないかくして歐洲大戦當時の獨逸の轍を踏まんか其の時こそ恐るべき結果を招くこと又明らかである。今や國內舉つて生活改善が叫ばれて來た。外國製品排撃、國産品使用、物的並に人

的の資源を護らなければならぬ。そして我等學生も鉛筆をインクをペンをノートを消しゴムを最後の一片迄使ひ、計算紙にも廣告の餘白カレンダーの裏等廢物の利用を考へ常に節儉を念頭に置いて無用の浪費を避け、出来ることならその貯金を國防或は軍用機納資金にあて、常時と異つた簡素な生活を送り、内に剛快果斷、物に動ぜず變に恐れざる精神力を鍊磨し、自己の職務により忠實であると同時に、何時でも銃を執り得る覺悟を持つて居ることが肝要である。

今や名實共に非常時來る。舉國一致の非常時來る。さうだ我々平和を愛する者相共に戰塵一日も早く鎮まらんことを祈らう。日支提携の一日も早く實現されん事を願はう。正義に双向ふ者はたとひ大國強國たりとも之を撃滅せん事を覺悟して、早、北支戦線に風冷く將士の意氣愈々天を衝かんとするに當り、再度其の勞に深甚の謝意を捧げ、併せて皇軍の萬々歳を高らかに唱へよう。

(二二、九、一三)

支那事變についての感想

四年 坊ヶ内 崇夫

今や我が皇軍の勇士は北支中南支の野に海に、さては空に忠勇を致しつゝあります。彼等は異國にあつて家を忘れ、

一心に君國の爲つゝ居ります。北支に於ける陸軍部隊の活動や中南支に於ける海軍部隊の活躍も目ざましいものであります。北支部隊は南へ南へと進み北支一帯の地に日章旗をかかげました。海軍部隊は全支那の制空權を手にしました。又海軍の航行制限も着々効果をあげてあります。これ 上一人の御稜威によることは申すも畏れ多い事でありすが、それと共に我が將兵の活躍の結果であります。こゝに思をいたします時、我々は皇軍將兵に對して深い敬意を表さねばならぬと思ひます。

一方ひるがへつて國內の有様を見まするに、國民各人は非常時の意義を理解して銃後の護りに万全を期して居ります。一日街頭に立つて皇軍兵士の爲、千人針や千人力をこふ人、それを一針縫ひ、一筆心よく書く人等、實に銃後の護りの力強さを信じさせます。又子供が御國の第一線に立つてみませんからと虎の子を献金する老婆、貧しい中よりさいて金を差出す人、小使を貯金したものを献金する中學生、いたいけな手紙をそへて献金する小學生等、國をあげての非常時氣分であります。以上の如く銃後の赤誠はそのつくる所を知らぬ有様であります。この後援あつてあの皇軍の活躍があると心強く感ぜられるのであります。

政府は國民精神總動員強調週間を作り、國民精神の強調をはかりました。放送局がこれに應じて國民朝禮の時間を作る

支那事變に對する感想

四年 増井 康夫

相刻する日支の運命、蒋介石政權以來十年、その間日支の關係は日々悪化深刻となり、日本における政治、經濟、社會の諸情勢の生む自然の欲求と支那の政治、經濟、社會が生む自然の欲求とが常に對蹠的に成長して來て、日支融和不可能なる諸條件を包藏し二國家が相對峙し來つたのである。

併して日支兩國の關係は、現在兩國の國情にては外交政治の諸手段にては改善出來ぬものであつた。蒋介石が、此の間の空氣を見てとり當然日支の戰雲は此數年間中にまきをこるものと想像し、彼の中華國に於ては、「抗日備戰」を政治、經濟、社會、軍事政策の中軸としたのであるから、この一戰は彼のしむける干戈であり、こゝに戰爭がまきおこつたのもむりからぬ事なのだ。

支那事變！彼のしむける干戈を軽くはすしてゐた日本も正義人道の爲、暴支膺懲の義兵をあげるのやむなきにいたつた。これは正しき正義人道の爲の止む得ざる業なのだ。宿命の國、日支、又もや戰とはなつたのだ。戰爭程非人道な物はない。多くの人馬の命を犠牲にして、これが非人道的でなくて何であらうか！支那が日本を誤つて見た。これが直接

や、各家庭、各團體は進んでこれに参加いたしました。嚙喰たる喇叭の音につゞいて國歌の吹奏、皇居の遙拜を終つた我々の心は緊張を覺へ今日の希望にもえるのでした。この時局下に於ける我々の生活はこのラヂオに始まるのであります。國民精神總動員強調週間第二期を終つて、我々は今や第三期にうつるのであります。我々はこれまでに得た緊張によつて第三期の仕事を行はねばなりません。

眼を轉じて各列強を見るに、列強の中には我に好意を持つてゐる國もあります。しかし、かならずしも列強が皆我に好意を持つてゐるとは斷言し得ないのであります。中にはみだりに事をかまへ、我に敵對せんとする國もあります。又我が聖戰の何物たるかを知らず我戰勝を好まぬ國もあります。戰場に、外交上に、支那の味方たらんとする國もあります。この四圍の有様の中にありまして、我々はいかなる國の反對をもおし切つて正義を念頭に既定方針を實行して行かねばなりません。戰爭は短時日のうちに終つても外交問題に於て長びく事を豫想し、一時的の興奮にかられる様な事があつてはなりません。あくまで大國民たるの襟度を持つて非常時に處さなければなりません。

最後に皇軍勇士の武運長久を祈り、その働に對して感謝し戦死傷者に對して敬意を表します。

原因であるとしても支那全土にあふれる抗日思想がいつかは爆發するのである。日支兩國間の實力の相違は日支間の戦争の結着を早めるかもしれない。しかし我々は日支關係ばかりをたゞ見まもるのみでよいのではない。

即ち、識者間、或は一般人に叫ばれつゝある日ソ、日英米の關係は如何に發展していくか。我々はこの世界の大事勢を洞察しなくてはならないのだ。

スターリン等の革命児が舊露國を倒し、現在の蘇聯をきづきあげて以來、コミンテルンが優秀をほこる組織、統制力をもつて全世界に蜘蛛の巣の如く張りめぐらされた各種の機關を通じて如何に巧妙且惡辣な赤化工作をなしてゐるかは、我々とても周知の事實だ。これに對する日、獨が防共協定の名の下にはコミンテルンを排斥し、一は日獨親善に拍車をかけたのは、去る年昭和十一年十一月二十五日の事だつた。こゝに日露二つの相いれざる國は、これも宿命として對峙してゐたのだ。

かゝる状態に於て日支間の争がおこりたる爲に、當然我々は赤の國ソ聯との一戦をも覺悟せねばならぬのだ。又日英のいきさつも我が國にとつて非常に重大事だ。駐支英大使ヒューゲツセン氏の遭難事件に對して日本政府の「中間回答」にてイギリス朝野には不満の色こく、最後の回答における彼等の不満も亦濃いものがあるらしい。米に於ても最初の紳士的

態度を變へ、今や我にたてつかんとさへしてゐる。我々は以上の事を考るとき、支那事變はその事變だけの性質のものでないといふことを特に深く感ずるのである。東洋平和のために、世界の列強を相手として戦はなければならぬかも知れない。併し如何に彼等強くとも充實せる軍備と大和魂を以てせば少しの恐れる所もないのだ。我々小國民はこの非常時に際し、自己の本分に邁進するのが、國につくす唯一の道だと思ふ。

時局所感

三年 疋田 信昭

筆を取る前に、在支皇軍將士の御苦勞を謝し、武運長久の黙禱を捧ぐ。

日本は支那と隣國の好、相互に相依り、相扶け、手を携へて東洋平和の基礎を固めんと努力したのである。然るに執拗狡猾なる彼は、侵略的な某國に操つられ、蔣介石の誤れる支那統一の施政と相俟つて自らを自覺せず、暴戻不信、抗日侮日挑動的な妄狀を示し、つひに正義公明なる我が皇軍をして斷乎膺懲の武力行使に出でしめたことは、共存共榮を念願とした我國の人々が等しく遺憾とするところである。

我が日本は支那全體を相手にしてはゐない。平和を攪亂し

平和を妨害する支那一部の者、即ち抗日をスローガンとする軍閥、財閥、學生……である。支那四億の善良なる人民を樂土に置かんとしてゐる。何と正義公明なる我が日本ではないか。日本は降魔の劍を振つてゐるのである。確乎たる正義による争である。實に人道上を行く快事である。つまるところは一にして二にあらず。正道を踏み「雖千萬人吾往矣」である。

我々學生は支那學生を見て、今一度考ふべきことがある。學生は學生の本分がある。決して政治運動に参加してはならない。又自己を認識せずして行動をすれば思はぬ方向へ踏み迷ふ様なことになる。吾々は日本人であると言ふ自覺が必要である。一時的變動のため動搖しても、表面にたゞならぬ荒波が立つても、決して徒らに動搖したり、狼狽したり、自己を見失ふ様なことがあつてはならぬ。況や獨斷の輕々しき妄動してはならぬ。行動を起す前に此れが「大日本國土之府」即ち神撫臺上の吾々がやるべきことか反省する必要があると思ふ。

今迄平和を得んが爲に、日本は過去數十年來幾多の尊き人命と物質とが犠牲に供せられて來た。それが皆正義の爲ではないか。我等祖先は如何にこの大道を實踐擁護するために万難を排して來たか「日露戦争」の四字は今なほ國民の頭腦に深刻に刻み込まれてゐるではないか。日本は多數の人命を亡

つた。日本人は皇國に殉ずることを易しとした。然し皇軍將士一人の死も國をあげて哀んでゐるのである。此の心情は日本人たるもの皆首肯し得るところである。かの日露戦争は、露國の侵略を防ぎ東洋平和の爲一戦を交へたのではないか、その結果支那の地より露國の魔手を驅逐こそしたが、支那の寸土と雖も日本は侵略したであらうか。否たゞ正道を踐んだことを喜びとただけである。支那は日本に對して恩こそあれ仇はないのである。「禽獸且知恩、況於人乎」とは誰が言つたのか。

眞意を疑へば猜疑に猜疑を生み、國際關係の親密にして圓滑なることは不可能である。正しく相手國を認識してこそ眞の平和が生れるのである。要するに胸襟を開き、肝膽相照して談ずるの態度が必要である。即ち精神的な國際親善に基きてこそ永久性があり、美しきがある。現に眼前に實例があるではないか、日本と滿洲國との關係である。物質的關係あるにせよ、東洋民族の精神が一脈相通じて、此の兩國間の親善の根元になつてゐると言つても過言ではあるまい。極東經營に腐心した歐米にしては夢の様で信ずることが出來ないところであらう。

東洋に於て國をなすもの多く、中には歴史の古いこと、人口の多いこと、天與の富を有すること、實に世界に誇るべきものがあるのに、文化國として世界列國に伍して遜色のない

なり、健全なる日本國民とならねばならぬ。

非常時事局に際して

三年 中 末 忠 男

のは我國のみである。故に我が國は東洋諸國の代表である。率先して東洋文化發達のためにつくさねばならぬ。我々青年は價値ある使命を持つ尊い身である。徒らに醉生夢死してはならない。世界には東洋と西洋しかない。しかもその一方の旗頭として東洋代表として、旗幟を鮮明にしてゐるのである。徒らに歐米を崇拜したり、模倣したりする必要はない。歐米を侮辱せよと言ふのではない。歐米と對等の位置をもてと言ふのである。我々は日本人である。深く此の點を考へねばならぬ。

最後に言ふ、我々は數年後に兵役を持つてゐる。日本男子の特權にして名譽ある義務である。徴兵検査に合格することは、青年に健康なるものが多い。健全なる精神を持つものが多しと言ふ國家隆昌の兆であり、國民元氣の源泉である。専ら中堅國士を以て任ずる三中生に虚弱なる者を出すことは、三中の恥辱であり、又不幸とするところである。健康に注意せられよ。健康なくして「七生報國の實」も到達し難いのである。

日本を双肩に擔ふべき諸君よ。我々が社會の一員として、即ち日本人としてふり當てられた役割は何か。學生である即ち青年である。傑人は言つた「一國の將來は、その國の青年を見れば分る」と、我々は自覺せねばならない。只管自重して身を修め、業に勵み、思想を堅く持し、將來國家の中堅と

滿洲事變以後支那の抗日侮日行爲は其の極を示して來た。が我は彼と相提携して東洋文化の發達と東洋平和の確立に力を竭くして來た。然るに、なんぞ七月七日北支の一隅曉月牙ゆる蘆溝橋畔に投ぜられた。戰雲は波瀾に波瀾を重ねて戰火と化し、遂に全支を蔽ふに至つた。事件不擴大、現地解決をモットーとして事態の收拾を計り、支那政府の反省を求め、彼我の外交調整と東洋平和を確固たる基礎にきづかんとした私の誠意も、彼の頑冥固陋なる挑日行爲によつて完全に踏みにじられた。

る。

外に於てはかくの如く神國の日本の威光を世界に輝やかしつゝあり、内においては内閣告諭發せられ、次いで銃後の全國民に敢然躬行を求め皇國曠古の學國運動國民精神總動員が近衛首相の獅子吼によつて宣言された。見よ、軍官民一致して堂々發展日本の新紀元を指標しつゝあるではないか。

銃後の赤誠飛んで街路に、涙ぐましく献金運動、千人針と化し第一線の武勇と相からんで、美しい軍國繪巻がくりひろげられてゐる。

さて我等學生の非常時現代に處する態度や如何。言はずもがな、己の本分を竭くし銃後の守りを果たすことである。見よ、かくも最大飛躍をなしつゝある日本の將來を背負つたつものは誰か？ 我等第二の國民を以て誰がある。しかし其の光榮ある重責を果たさんには、現代の自己の本分を竭くすより外はない。善學善遊我等學生の生活はこの四字に盡きる。

第一線に立つて支那軍懲の銃とる身も、内にあつて鉛筆とる身も、果たす務は異なれど、同じ御國の爲である。

恐れ多くも明治大帝も

國を想ふ心に二つはなかりけり

戰の庭に立つも立たぬも

と御詠み遊されてゐるではないか。

慷慨腕扼快を一時に取りて、大計を知らずといふが如く、一時の興奮に酔ふことなく、着々と堅實に自己の本分を全うしこの重責にたゆる基礎を作つて行くことこそ我々の最大の務である僕は思ふ。

或は炎熱に身をこがし、或は冷風に膚をさらして國防第一線に立つ忠勇なる將兵のことを思はゞ、どうして怠る事が出來やうか。まして我々は將來日本の中堅たらんと欲するものをやであるには勉學せざるべけんやである。

今や我が、大日本帝國は洋々たる大洋中に在り。行手は波瀾萬丈だ。心せよ、學徒よ死して惜まる、人とならんと。僕は絶叫する。

時 局 感 想

三年 田 中 和 夫

想起すれば、七月八日に蘆溝橋事變の勃發を見てより此處に二ヶ月有半。事變は次々に局面の發展を見せ、初めは平津地方のみであつたのが、華北一帯から更に上海、廣東方面迄も戰禍の中に曝されるに至つた。名稱も北支事變から支那事變と改稱されるに及んで、戦況は時々刻々我々の判断を許さぬ複雑なものとなつて來た。此の事變が一體どの程度迄發展するかは何人も判断のつかぬ重大性を帯びて來たのである。

然し豫想以上民國人の中には抗日意識が盛んであるから以後相當の場面迄展開することは、所詮免れがたいものと見なければならぬ。一體今回の事變は宣戦こそしてゐないが、純然たる大戦争であつて、その規模の大きいことは日露戦役に優るとも劣らぬものがある位である。しかるに我國民中には支那の弱いこと、或は事變なる名稱の爲に今回の事變を餘程輕視し、樂觀してゐる向もないではないが、かゝる者は今一度沈黙考して再認識する可き必要がある。たとひ支那は弱國にせよ、その背後には列強、或は世界と云ふものが存在してゐることを忘れてはならぬからである。

今や世界は事實上噴火口上にあると云へよう。何かあればそれをきっかけにすぐにも爆發せんとする状態に置かれてゐるのである。よく世間には日獨防共協定を信頼して満悦してゐる人があるが、我日本の敵となる可能性はソビエトロシアのみではないのである。故に日獨協定をあてにし過ぎてはいけない。世界大戦が勃發すれば、日本は所詮獨立自衛自ら立たねばならぬ覺悟はなくてはならぬ。進んで現在我が國に實際に同情を寄せてゐる國は、そも何國あるかと云ふにドイツ、イタリヤ位の二三ヶ國に過ぎず、甚だ心細いものがあるのである。往年伊エ戦役が勃發した際、我々は真相の如何をも知らずして、最初より専らエチオピアに同情し聲援した。今回の支那事變と、伊エ戦役とは前者は正義の戦であり、後

者は侵略の戦であり、もとより内容は判然としてゐるのであるが、しかも人間の本性として弱者を憐むのが自然であるから、第三國の意向は聞かずして大體明かである。此處に我邦として大なる危険が存在してゐると言へよう。重大なる時が來た。忠勇なる兵士達は進軍ラツパに勇躍出征した。そして晝夜を分たず、我が大君の御爲祖國の爲に一死報國の誠を見はし涙ぐましい奮戦を續けて居られる。民國政府の崩潰は目前に迫り前述の更に新しい局面は展開されんとしてゐる。誠に一大危機が孕んでゐる。

然し我が日本國民が九千万の大和魂をかゝげて躍進するときそのときこそ世界を敵としても尙屈することのない愉快なる實力の發動を見ることが出来るのである。

今や吾々は蹶起せねばならぬ重大の秋に直面してゐる。祖國は一齊に吾々が各自の職務に忠實にして銃後の守をいや固めんこと期待してゐる。此の時にあたり吾々は一層大きく眼を見開いて祖國の現實の姿を凝視する必要を痛切に感ずるのである。

日支事變に對する感想

二年 上 村 仁

七月十九日夜の蘆溝橋事變により、遂に堪忍袋の緒を切つ

た我が軍が、北支に上海に兵を送つてからはや三ヶ月。暑い／＼夏も過ぎ去つて、澄みきつた空も冷え／＼と感じられる秋になりました。此の間、我が將兵は陸に空に海に盲蛇的に向つて來る敵兵をどん／＼やつつけてゐます。南京大爆撃、吳淞占領、保定占領、居庸關の戦、石家莊、歸化城の占領等皇軍のめざましい働は數へあげたらきりありません。

此の戦の始つたのはいろいろ／＼な原因がありますが、支那人の排日、侮日、抗日の盛な事が主な理由の一つです。蔣介石の抗日教育は「日本は臺灣、遼東半島、朝鮮、滿洲を我が領土から奪つた。我々はそれを取返さなければならぬ」等と自分勝手な屁理窟をつけて、まだ黑白もわからない子供の頃から、日本が侵略國でもあるかのやうに教へて來たさうです。かうして教へられて來た人々が、大きくなつて盛に排日抗日を宣傳しては、無智な國民を無理にも排日にしむけてゐるのです。

最近第一線の支那軍に、未だ十四五歳の少年が混つてゐるさうです。そんな少年達は無茶な抗日教育に惑はされて戰場に來たのだらうと思ひます。私も支那人に生れてゐたならばきつと戦に出たに違ひありません。我々が此の戦争の最中に安心して勉強出来るのは、全く日本に生れたおかげです。天皇陛下の有難い御稜威のおかげです。

戦争はいつまで續くかわかりません。我が軍は支那が誤つ

た考をすてぬ限り戦を續けるでせう。が、若し支那が悪いと氣がついて降参をしたならば、戦はすぐに終るでせう。日本は支那と戦つてゐるのではありません。支那人の誤つてゐる思想、間違つた考を直す爲に、戦つてゐるのです。故に我が軍は支那の良民を殺したりするやうな事は決してしません。其の證據に我が國に居住する支那人は、少しの不安も知らず生活して居ます。

私は支那が一日も早く抗日を止めて、日本と手を握る様に願つてゐるのです。此の事は日本の爲ばかりではなく、支那自身の爲東洋平和の爲なのです。しかし、この様子ではそんな日はまだ遠い様です。

それにつけても我々はもつと緊張して、皇軍將士の苦勞をしのばなければなりません。一週たつた一度の日の丸辨當を目をつむつてたべたり、残したりする様ではとても駄目です。去る十三日から第二期國民精神總動員強調週間に入りましたが、其の中の仕事を喜んでしてゐる者が、果して幾人あるだらうかと私は思ふのです。

最近「銃後の守り」といふ言葉が、強く言はれるやうになり、我々の間にも出征兵士の見送り等に、熱心な者も少くありません。が「銃後の守り」といふのは獻金、見送り、慰問、神社参拜等だけではないのです。我々第二の國民が心を錬り體を鍛へて大人になつてから第一線に出て活躍出来る様にな

る事がずつと大切な事なのです。
で、我々は政府を信用し、他の事に心を動かさず自分の仕事に勵み、自分の道を正しく進んで行かねばならぬと私は思ひます。

時局所感

二年 奥西平治

蘆溝橋の不法射撃に端を發した支那事變も、もう三ヶ月の月日を経る事になつた。皇軍は到る所に敵を撃破し、破竹の勢で進んでゐる。日章旗の進む所、手向ふ敵のあらざるは常ながら、まさに無人の境を行くが如きその速さ、連戦連勝といふ語は全く皇軍の爲に作られたと思はれる位、たゞ驚嘆の至りである。支那の大平原に平和の旗風の打擦くのも遠くはなからう。

或る新聞記者が天津の驛で働いて居た苦力に「何が一番恐いか」と尋ねたところ、支那が勝つ事だと答へたさうな。此の一事でも、如何に支那民衆が國民政府に抑壓せられて居たか我々は十分それを察し得るのである。又皇軍の進む所、民衆はどこで手に入れたか日の丸を打振りつゝ之を歓迎し、若きは我が將兵にまじつて、或は道路の修繕に、或は架橋工事に夫々嬉々として働いてゐる。彼等は心から正義の軍隊と善

き指導とを待つてゐたのである。皇軍が東洋平和の爲、人類の幸福の爲にのみ降魔の劍をとつて居るといふ事實はこゝにも明かなのである、どこにやましい所があらうか。

日々新聞に報ぜられる皇軍將士の活躍は、銃後の我等をして眞に血湧き肉躍らせるものがある。海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍と、大和魂の香高く花と散りゆくを無上の光榮とする丈夫の粹だけに、或は北に或は南に、縦横無盡の活躍、まさに痛快無比といふべき所だ。後には督戦隊の眼が光り、前には精銳を誇る日本軍、逃げるに逃げられぬ支那軍とは、月と泥龜、天淵の差である。かくなる以上、勝敗はすでに時の問題のみと考へられよう。

しかし我々は、此の痛快な活躍の蔭には一億同胞の熱烈なる後援があることを忘れてはならぬ。いはゆる銃後の守りである。驛頭に、埠頭に、出征兵士を見送りて後に心を残すと固く誓へるその健氣さを見よ。町の辻に、橋のたもとに千人針の一针毎に、千人力の一字毎にこめられてゆく眞心の尊さを見よ。又大實業家も、小學生もその程々に随ひて献金する愛國の情を見よ。承る所によれば畏くも、皇后陛下始め各宮妃殿下は御自ら繻帯をお作り遊ばされ、傷病兵に賜はつたとか。かく上下一致すべて一丸となつて國難に殉ずる。これが我が國體の精華であり、勝利はこゝに輝くのだ。我等は之を官民相反目し合ふ支那と考へ合はず時、我が國體の有難さ

に思はず感泣させられるのである。

日本兵はたしかに強い。しかもその強さの中に、測り知れぬ奥床しさを持つてゐる。言ひ換へれば日本兵は文武兩道を辨へた眞の丈夫である。我々は此の事變に於て、ます／＼その感を深うした。戦友の死には言ふまでもなく、愛馬、愛犬の墓にはさゝやかながら一輪の花を供へる。戦の暇には筆を走らせて浮び出づる感興を歌にとゞめ、美しき山野を紙にをさめる。中にはコダツクさへ持つてゐる風流な部隊長もあるとか。實にみちもせに散る櫻を、箒の梅を偲ばしめるものがある。殊に日本軍が敦煌の千佛洞を保護するとの報道を聞いた時は、たまらなく嬉しかつた。日本軍が支那農民から絶大なる尊敬と信頼とをあつめてゐるのは、茲にもその一因が存してゐるのではなからうか。

ともかくも、皇軍は堤をきつた奔流の如く進軍し、黄河以南に暴戻なる支那軍を驅逐し、上海の平和は確實に維持してゐる。日本軍の壓倒的勝利に人心を抗日に煽動した支那學生までが、戦を嫌つて郷里に逃げかへるといふ有様だ。そこで自ら戦は終るべき所であるが、なか／＼終りさうもない所に此の事變の特色があり、重大性がある。こゝに於て我々は少し眼を列國の上にむけねばならぬ。

事變の當初より公平なる判断により、日本の行爲を正當なりと認めたのは獨逸であり、伊太利であつた。現在の世界に

於て、最も活氣に満ち霸氣に富む國は、日獨伊三國である。

此の三國の國民性は、一脈相通する所がある。我等は獨伊二國が、英米佛を前にして正を正なりと斷じたその義氣に兩國民の意氣を知るのである。

獨伊の態度に反し、成る可く事變を永引かせんとするのがソ聯であり、物質的に相當の援助を支那に與へてゐるのが英國であり、隙あらば乗じて甘い汁を吸はんとするのが米國だ。何れの國に於ても、自國の腹のみを肥やさんとのみ考へてゐる事は疑ふ餘地もない。ソ聯にしては戦を永引かせ、支那をば思ふがまゝに共產化し、日本の國力を幾分なりとも消耗せしめたいだらう。英國にとつては、相當に資本を入れた蔣政権を擁して支那において勢力を張らうといふのだらう。そんな野心一點ばりの國が、何を言はうと何をしよう、勿論日本の進むべき道には些かの變りもないが、油断は禁物だ。前門の虎、後門の狼、更に側門の龍とでも附加へたいのが現在の状態だ。我々はとざされた妖雲を突破り、更に次の妖雲を追散らすべく進まねばならぬのだ。

時局に關する感想

二年 武田元治

表通りの方でしきりにする軍樂の音。爆發するやうな歡聲。

所 感

一年 酒 井 秀 實

今日も出征される方があられるらしい。無論此處だけではない。日本全國毎日何百、或は何千といふ人々が、赤禱をかけて故郷を出て行かれるのだ。

時局の重大さは日一日と迫つて来る。随つてこの出征兵士の増加も當然といふべきであらう。しかし壯丁の去つた後指導者が少い爲に流言飛び、治安保てず、産業衰へ、引いては國運の衰退を招くことにならぬとも限らない。さればこそ國民總動員が高唱されるのであらうが、未來の國士たらんと欲し、中堅人物たらんと望む我等中學生は、その銃後の結束の中心の一角を成さねばならぬと信ずる。

然らば如何なる點で中心たらんとするかといふと、すべての點で心にやましい行動のないやう、立派にふるまつて居ればよいのである。即ち一心に勉めさへすればよいのだと思ふ。人の手本となればよいのである。故に今の我等としては學生の本分たる勉學修養を怠つてはならぬ。畏くも明治天皇は戊申詔書に「宜シク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ」と仰せられてゐるではないか。その本分を忠實に盡すこそ、大君への忠義なのである。

とにかく重大な時局の切迫は、我等に試金石を投げかけてゐる。我等は一舉手一投足にも細心の注意を拂つて、この非常時局を打破する事を考へねばならぬ。

七月七日夜、蘆溝橋の運命的な銃聲一發が導火線となつて起つた支那事變は、日本の誠意ある不擴大方針にも拘らず、戦線は遂に全面的なものとなつた。そして北支に、中南支に日夜壯烈な銃火を交へるに至りました。今や勇猛果敢な我が將兵は、空に陸に相呼應して千辛萬苦を打ち切りながら、東洋平和のため斷乎として支那軍膺懲の實を擧げてゐることは我が國民のひとしく感謝に堪へないところで、銃後にある國民も一度思ひを異境の戦場に馳せるとき、たとひ武器を執つて彈丸雨飛の中に身を曝さなくとも、報國の赤誠の油然として湧き上るのを覺えます。

日本軍は何故強いか——。出動將士が君の爲、國の爲に生死を念頭におかずして進むその意氣たるは勿論、この裏面には銃後の一般國民の熱誠溢るゝ營みが、どれほど皇軍の士氣を高めるかといふ事實を影にひそめてゐます。

日本は正々堂々と戦つてゐます。このことをよく承知してゐるのは獨伊の二國である。その他の國はあの支那にとつては奥の手といふべきデマのラヂオ放送を行つたり、喧傳したりする爲、排日的デモが行はれる。實に遺憾な事である。

それにも拘らず我が帝國は正義の道を全うする、諺に「誠は天に通ず」といふ語がある。あの弘安四年に起つた元寇の時もさうであつた。

この東洋から日本を除けば東洋の方はどうなるであらう。東洋の平和は確保できようか？ 然るに支那が手向つて来る様では支那は何時かは亡びて行くでせう。

新聞社説抄

【一】 國際正義と社會正義

一

時局重大の折柄、議會における近衛首相の施政方針演説は特に舉國注目の的であつた。僅かに八分間、もとよりその意を盡してはゐないが、日滿兩國を一體とする國防と經濟の綜合的計畫、行政機構と議會制度の改革、教學の根本を確立するための教育審議會の設置などを具體的のものとし、百般の政策の基本精神は、わが尊嚴なる國體の精髓に歸せしむるにあり、その精髓の發露は國際正義と社會正義とにあることを強調してゐるところを重要視しなければならぬと思ふ。

二

國際正義と社會正義とを並べること、何か西洋的に感ずるものは、昭和の年號御選定が書經堯典の百姓昭明、萬邦協

和に據られたことを思ひ、その意味が國民各々その所を得て御代を讃へ、萬國協和して瑞祥輝く姿であつて、それは洋の東西を問はず聖代の期するところでなければならぬことを知るであらう。近衛首相がこの二つの正義をかざして外は列國と俱に眞の世界平和の確立に力をいたし、ます／＼國威を宣揚するとともに内は大義名分を明かにし、國民をして各々その所を得せしめ、よつてもつて國運の堅實なる發展をはかるとすれば、基本精神として悪からうはずもなく、問題はそれがいかに具體化され、どこまで眞に「從來解決困難とされたものを順次に取上げて解決して行く」ことが出来るかにあるとしなければならぬ。

三

世界平和は、持てる國と持たざる國との不平等的對立によつて、常に脅かされてゐる。我が國が資源の開放を求め、移民の自由を求め、有無相通の立場に立つからである。社會的對立抗争の摩擦を根本から排除するには、矢張り同じ正義の立場に立たなければならぬ。近時我が國の非常時局を「いよ／＼興隆し、ます／＼發展するの實を擧ぐべき試練の過程」と見、國力の飛躍的發展に伴ふ革新的政策に、國民の發憤と忍耐と協力とを求むる以上は、それが社會正義に基礎を置かなければならぬことはもちろんである。

四

政治を力とし、正義は弱者の聲であるといふがことき強力が政治は、道義國家にあつてはならぬことである。我が國の立場が重大であればあるほど、國民の道義觀は正しく高く、清く大きく保たなければならない。殊に革新が高唱され強調される場合にあつては、それは當然に一部に犠牲を強ひることになるのであるから、革新政治にはまづ第一に國民道義の動員がなされなければならないのである。摩擦の緩和にしてもそれが利害の打算の上に立ち、利害の立場からの互讓妥協を策したのでは、その對立と抗争の根本を刺激するに過ぎぬ。政策が國民道義觀の上に立つ時、初めて革新政治が行はれ得る。この意味で正義の語が現實政治に持ち込まれたことの意味を認めようと思ふ。

(大朝、七・二八)

【11】 支那興亡の岐るゝ處

一 我社上海特電の報するところによれば、支那には對日決戦を叫ぶ主戦論者と、和平解決を唱へる穩和派とあつて、互に對立しつゝあるが、主戦論者は支那の統一状態と兵備の充實とに重きを置き、決戦によつて有利に局面轉換をなし得べしと確信しをるもの如くである。これに反して穩和派は日本の實力を輕視することの危険を説き、一支那軍の勝味なきは過去三週間の戦績に徴しても明かであると、暴虎馮河の愚を

飭めつゝある。但し表面的には盲目的抗日意識に押された民衆の勢ひ物凄く、日支全面衝突はいかにしても避け難い形勢である。支那としては、この際進んで日本と一戦すべきか、退いて和平轉換を策すべきかは、冷靜に決定對處せねばならぬ最後關頭の問題である。それこそ支那民族の安危興亡の岐れるところといはなければならない。最近南京政府が閻錫山、白崇禧ら軍界の領袖達を集めて最後の評定をしようとしてゐるのは、這般の消息を自ら語るものではないだらうか。

二

さて反蔣派一方の旗頭たる白崇禧が、今回蔣介石の招電により十年振りに南京に來り、蔣白會見の實現したことは、いかに西南派對蔣介石多年の確執を清算し得た證據となるべき事實であつて、支那の統一が抗日戦争ゆゑに完成したといへるのかも知れない。然しながら、それが果して支那永遠の利益であるか否かは、日本軍との決戦に勝ち得て始めて決まることである。しかも勝敗の数はすでに明白なるにかゝはらず、自ら求めて敗戦の苦汁を嘗め、一朝にして建設と統一の事業に致命傷を負ふがとき白崇禧らの抗日合作は、却て支那のために仇とならざるを得ないだらう。それなら、むしろ白崇禧ら西南派が不即不離、南京の對日決戦の決意を澁らす方が却つてましといはねばならぬ。それにも拘らず、支那を盲目的に支配した抗日意識は、支那の冷靜な政治家的判斷をも押

流さざればやまさらん勢ひを呈してゐる。支那がかくの如くして統一と建設の好機を逸し去らうとしてゐるのは、眞に惜みても餘りある痛恨事といはねばならぬ。

三

しからば、この時に當り和平解決は果して可能なりやといふに、これもとより至難の業である。既に蔣汪兩巨頭のしぼく／＼聲明したやうに、對日一戦以外に活路はないとされ「日本もし武力をもつて強壓し來るならば、あくまでも應戦する」といふ意味のことを繰返し述べてゐる。抗日はその國內統一工作の要具として機會あるごとに利用されたところ、今さら引込みのつかない立場に置かれてゐるのは事實である。しかし至難であるとして絶對にその途なしとはいへぬ。困難は困難だが、勢ひ窮して變じないはずなく、變じて通じないことはない。變通の餘地は必ずあると見るのはひとり吾人の信念のみではないのである。南京政府の當局者達によく／＼冷靜に考へるがよい。戦つて勝つ見込ないとすれば、一朝慘敗を喫した後、果して如何。中央軍の實力を過信した民衆の夢が一旦破れたら、南京政府は無残な最期を遂げねばならぬ。ただに現在の政府が潰れるだけでなく、後から來るものはかの多年鎬を削つた共產黨のほかにあり得ないことは、およそ識者の一致した結論である。その時になつて共產黨の抗日喚聲に見す／＼引摺られたことを後悔するとも、最早や追つ

かないのである。南京政府の末路は四億民衆の水火の苦に比すればまだ軽いことだ。その時になつて蒼生塗炭の苦を救ふとしてももう無駄であらう。今こそ安全なるコースにその針路を取り直すべき時ではないか。

四

しからば南京政府は戦ひを避けさへすればそれで安全か。決してさうではない。共產系抗日人民戦線派といふものに煽動工作されて來た一般民衆は、南京政府の和平解決を喜ばないのは明白である。彼らは支那の軍備は日本に對して遜色ないものと安信し、對日決戦は人民の總意であると揚言してゐる。だからしてもし政府が戦はずに和解を計るならば、抗日戦線派的民衆の政府に對する信望は忽ち地に墜ち、共產黨勢力の培養に拍車をかける結果となるのは明かだ。すでに戦ふも非、和するも非、共に共產黨の思ふ壺にはまるとしたなら、南京政府は八方塞がりの窮地に在るといはねばならぬ。果してしからば、南京政府は遂に自滅の外はないか。いな／＼困難ではあるが確かに活路はある。それは勢ひの窮するところやむを得ずして下さるべき南京政府の決心如何にある。それは抗日の潮流を中斷して、親日互助の大道に立ちかへり得るか否かで決まることだ。吾人は今その具體的方法について示唆を與ふべき立場にゐない。たゞ意思あれば必ず途あり、南京當局自ら速かにこれを計ればよいのである。

日支兩軍いまだ全面的衝突にいたらざるに先だち、これを決するを最上とし、一戦して惨敗を喫し、國民の總意必ずしも戦ひを欲するものにあらざることを明かにして、後これを決するを中策とし、百戰百敗して完全に共產黨の陥穽に陥つて後、これを決するのは下の下である。よつて思ふに支那は今こそ日本と提携して東亞安定のために一大決心をなすべき秋だ。汪兆銘の「日人、吾人に敵たるを許さず、また友たることも許さず」とする詠歎は甚だしき誤解といはなければならぬ。皇軍幾萬肅として河北の野を壓す、今こそ眞に反省すべき時であらう。

(大朝、八・六)

【三】 亡状ますます甚し上海の將兵射殺事件

上海共同租界の越界道路であるモニュメント路において、自動車にて通行中のわが陸戦隊將校及び兵士を、支那保安隊及び支那軍隊が射殺した事件は、時が時であり、また重ねんくの陸戦隊侮辱事件として頗る重大性質をもつてゐる。租界越界道路は租界當局の行政管下であり、各國人の通行の自由を有するところである。その路上において制服制帽の帝國軍人を包圍射撃して殺害するに至つては、如何なる觀點から見ても、これを誤解または過失とするわけには行かない。明かに侮日挑戦行爲と斷定さるべきものである。今更改めて共同調

査または證據蒐集の必要はないのではないか。殺害せる事實そのものが歴然たる證據ではないだらうか。

上海事變後の日支停戦協定によつて、蘇州河北の上海附近一定の地域には、支那の武装軍隊を入れないことになつてゐる。しかるに第三艦隊參謀長より海軍省へ達した電報によると、射殺現場附近には「保安隊及び支那兵密集し、警戒嚴重なり」とある。停戦協定を侵犯せる事實はまた歴然たるものがある。また保安隊といつてもたゞ名稱を保安隊といひ、保安隊の服装をしてゐるのみで、大砲を有し、機關銃を有し大部隊の戰闘訓練をするなど、實質は全く支那軍隊である。この事實はすでに數年前から日本出先官憲の重視するところであつた。支那側では堅白同異の言をもつて、日本側の警告を無視して益々保安隊の増強を圖つてゐた形跡があつた。従つて今回の射殺事件も、全く北における蘆溝橋事件と同様、保安隊末梢の侮日事件と解釋するわけには行かない。根據は國民政府の排日政策に發してゐるのである。

上海におけるわが陸戦隊は、上海事變以來實に穩健自重の態度を一貫してとつて來てゐるのである。幾多の忍ぶべからざる陸戦隊員に對する侮辱事件があり、支那人の魔手によつて幾多の貴重な人命を失つてゐるのである。その度毎に證據の蒐集、調査、外交交渉と實に慎重なる態度をとり、手を替へ品を替へて支那側の反省を求めて來てゐるのであつた。こ

の王道的態度に對して酬いられたものは、支那側の反省に非ずしてむしろ陸戦隊輕視の風であつたのである。證據調べや外交交渉をやつてゐる間に、何時の間にか有耶無耶に葬られて、初頭の斷乎たる決意も、決意の實行しようもなき状態に立至ることがあつた。この支那側の常套的狡猾な手段に對しては、上海居留民が常に切齒してゐたところである。

在來上海に頻發した居留民、陸戦隊員射殺事件は多くは、南京政府の内部に本據を有するテロ團體や、その他の政治團體のテロ行爲であつた。だから犯人が國內深く逃げ込んだが最後、なか／＼犯人の逮捕や、證據物件の蒐集は困難であつた。従つて交渉に入るや、支那側は得意の糊塗手段によつて事件を曖昧にしてしまつたのである。しかるに今回の事件はこれと全くスケールを異にし、保安隊の集團部隊の行動である。もはや事件の共同調査や、證據蒐集の必要なきまで明確な侮日挑戦の事實である。吾等は海軍當局が萬全を期して、慎重なる態度をとることを望むけれども、支那側の常套手段に對しては十分の警戒を拂はんことを希望するのである。吾等は斯くのごとき事件が頻發するのは、常に國民政府の排日政策に淵源することを説いて來た。従つて目下日本が直面してゐる大問題は、斯くのごとき事件の斷片的、局部的解決でなくて、その根源に對して、禍根の芟除の手が延ばされることである。これが出先當局の外交交渉によつて平和裏に出來

れば、これに越したことはない。日本は過去において幾度かこれを試みたのである。その度毎に支那の態度は悪化するのみであつた。吾等は今日外交交渉のみによつて國民政府の反省を求むることの無駄なることを知る。(大毎、八・一一)

【四】 抗日政權を斷乎膺懲 政府の方針いよ／＼決す

事變發生以來、「隱忍に隱忍を重ね、事件の不擴大を方針とし、努めて平和的かつ局地的に處理せんことを企圖し」て來たわが政府も、上海における支那側の暴戾なる攻撃に會しては「隱忍最早その限度に達し」て不擴大、局地解決の方針を一擲せざるを得なくなつた。十五日早朝、遂に「支那軍の暴戾を膺懲し、もつて南京政府の反省を促すため、今や斷乎たる措置をとるのやむなきに至れり」と、聲明されたのである。かくて全面的衝突の餘儀なきに至つたことは、日支兩國民のために一時甚だ不幸の事態であるけれども、しかしながらこの事態は、支那における「自國國力の過信と帝國の實力輕視の風潮」並に「排日、抗日をもつて國論昂揚と政權強化の具に供し」來つた南京政府及び國民黨に對し、その迷夢を覺醒せしむるに絶好の機會とも稱すべく、東亞永遠の平和のために、一度びは避くべからざる試練に、今や逢着したものだといはねばならない。

問題の禍根が蒋介石政権の抗日方針にあり、これに對する直接の打撃を加へなければ、日支間の平和關係が確立されな
いといふ認識を、北支事變の最初より全國民の共にするところであつたことは、民間の輿論と議會の言論に徴しても明白である。舉國一致の覺悟は實にこの認識に發したものであつた。然るに政府獨り何故か甚だ慎重にして、わが實力の發動を聊か小出しにしたために、却つて支那側の抗日熱を募らせ
て、結局上海の如き事態を生ぜしむるに至つたのは遺憾である。しかしながら今や朝野文武を擧げて、支那抗日の禍根を
芟除する方針と決心において完全に一致したのである。戦局は相當擴大するものと豫想され物質的、精神的の負擔も加重されるに相違ないが、國民はすでにこれに耐へる覺悟を持つてゐる。この上はたゞ迅速徹底的なる軍事行動によつて、抗日の禍根を絶つのみである。
(大毎、八・一六)

【五】 銃後の援後と持久性

暴戻飽くなき支那軍の抗戦は、遂に上海方面にまでおよんで事態不擴大のわが方針は、遺憾ながらこれを一擲するのやむなきに至り、宿年毎日の過誤は、いよ／＼その民族的運命を窮地に追ひつゝあるに對し、わが皇軍正義の陣は堂々炎熱の天地を制して、北支にはた南支に着々として膺懲の實を擧

げつゝあり、その威武の然らしむるところ、もとより當然のことに屬すといふべきであるが、同時に現地出動將兵の慘苦は、敵軍不法の慘虐の前に、また烈々無比の酷暑の下に、銃後國民のひとしく感謝感激に堪へないところである。

二

今次事變の勃發と同時に湧き起つた銃後援護の赤誠は、舉國一致、その誠意と眞情とを盡して、全國各地あらゆる方面に成果を收めんことを努め、上下相應して萬遺漏なきを期しつゝあることは、諸般の實績に徴して、まことに心強き極みでなければならぬ。既に軍事扶助法は改正せられ、その運用は、この機會において、適切に効果をあらはし、軍人援護資金、各種軍事扶助團體などによつて實施せられつゝある一方、ことに最近の調査によつて、全國における重要官公衛、銀行會社、工場などに勤務するものゝ出征する場合、その大多數が、皆いづれも十分の待遇方法を講じ、出征全期間給料全額支給を最として、相率ゐて家族扶助に理解ある態度を示しつゝある事實が明かにされたことは、その士氣に及ぼすところ極めて切實なるものあることを思はしめるのである。

三

かゝる銃後の扶助にあつて、最も慎重戒慎を要する點は法律ならびに制度の形式化に囚はれず、親切かつ綿密な處置をもつて、あくまで實情に適應すべきことである。都會と地

方とによつても、その事情には異なるものがあり、同じく都會のうちにあつてもまた地方各方面についても、それ／＼個々別々の事態に即して、その緩急を分つべきであり、盡忠報國の念は國民一體の希求であるが、その生活の實體は必ずしも一様ならざることを十分に考慮しなければならぬ。この點において將兵家族救援協議會のごとき、直接その任にあたるものがよく融通無碍の善處に竭し、その機能の發揮を全からしむべきである。救援の事業はたゞ誠實と努力の奉仕によつて、實質的に運営されなければならない。忍ぶべきを忍び、堪ふべきに堪へて、萬民ひとしく皇國興隆の運命を負ふの契機にあたり、有無相通するの方策を講じて、窮迫訴ふるところなかりしものに對しては、その困苦を加重せしむることがあつてはならないのである。

支那各地の居留民もまたすでに引揚げ來つて、内地に歸還し、或は將に歸還しつゝあるものも少くないのであるが、彼らは實に邦家の發展の最前線に沿うて、多年海外活動の衝にあたり、いはゆる平和の戦士たる榮譽を擔ふものであるが、たま／＼無謀不遜なる侮日抗日の犠牲となつて、その巨大なる權益を現地に遺留し、僅に身をもつて難を避け來つたものであり、これが救援もまた決して等閑に付せられてはならないのである。内務省は、これらについても、萬全の方途に出でたと傳へられるが、隣保相扶の必要は、この方面にも擴充

せらるべき必要があり、その精神的物質的の打撃に對し、國民的な同情を具現して、彼らをして捲土重來の活躍を期せしむる間、その英氣を挫かしめないだけの用がなければならぬ。

四

時局の進展に伴つて、その地域はますます／＼廣汎に亘り、事態はいよ／＼深刻となりつゝある。恤兵慰問に、國防整備の獻金に、銃後援護の意義と効果とは、一層重大かつ必須の度を増し來つたのであるが、この際吾人の最も相警むべきは、この程度の緊張と異常の興奮との持久性である。東亞の和平は、我が國民の祈念であり、これが達成の使命の前には、なほ幾多の困難を突破しなければならぬであらう。現に來れるもの、更に次いで來んとするもの、これを顧み、かれを望んで儼たる、國家的信念の上に立つとき、その緊張は、久しきにわたつて屈せず、撓まざる弾力を保持しなければならぬ。その興奮は、一朝にして崩れ一夕にして消ゆるものであつてはならない。斷然として進み、確乎として往くの覺悟をもつて、これが實踐を遂行成就せしめるためには、大膽にして果敢なる勇猛心の奮起とともに、細心にして堅實なる持久力の養成を期すべきであつて、その間にいさゝかの弛緩なくまたいさゝかの間隙なきときこゝにはじめて敵前銃後の責務を完うし得ることを知るのである。
(大朝、八・一七)

【六】 國民精神總動員の計畫
注意すべき内容

政府は「國民精神總動員」の實施を計畫してゐるといふ。「學國一致」「盡忠報國の精神」を涵養し、銃後活動の強化、資源の愛護、時局認識の徹底等につとめ、長期の非常事態に堪へて、最後の目的を貫徹しようとの國民的決意を固くする全體的運動をおこさうとするものと考へられる。

今回の事變が今後いかに發展し、どれだけの努力を要し、如何なる結末を齎らすか。これは今日のところ固より豫想を許さない。たゞ明瞭なのは希望だけである。即ち迷蒙暴戻の支那に對する膺懲を十分に遂げ、彼をしてその非を衷心より懺悔せしめ、日支の親善と東洋平和とに對するわが國の誠意を理解せしめて、これを實現して相携へて共存共榮の道を辿りたいといふのである。不幸にして支那はこれに對して何等の好意を示さないのみか。わが國を仇敵として、排日抗日を以て國民教育の根幹とし、同時にその政權の基礎を強固ならしめる手段としてゐるのである。隨つてこれにその過誤を自覺せしめることは容易の業ではない。

わが國は明治以來多くの外征を試みたが、國運を賭して戦つたのは、先づ日清日露の戦争に指を屈する。今次の紛争はなほその端緒の時期にあるから、その前途は逆睹し難いが、

支那政權の頽冥と今日の戦局の状況とより察すれば、到底簡単に済むものとは思はれない。思ふにその規模と重大性において、決して日清日露の兩役に譲るものではない。その規模の國力に對する相對的關係はともかく、單に絶對量よりすれば、實にわが國空前の事變といつて差支ないとも思はれる。隨つてわが國が今次出師の目的を達するについては、前線將士の奮闘は日毎傳へられる通りであるが、また國民の側において非常な努力を要するはいふを待たぬ。

しかも國民の緊張度に至つては、或は日清日露の兩役に及ばないのでないかと恐れられてゐる。これはわが國民のわが軍隊に對する信頼の程度甚だ強く、一方國力の相當充實してゐることの自覺の徴證として喜ぶべきことかも知れない。しかし油断は如何なる場合においても禁物である。獅子は兎を搏つに全力を以てするといふ。獅子とても虎豹と闘ふ時と兎を搏つ場合は、その心理においておのづから差があるであらう。しかしその氣と體とを緊張せしめ、全精神を相手に集中して、これに打勝つ以外、殆ど全く餘念がないことにおいては、何れの場合にあつても同じなのである。この意味において、わが國は今次の紛争終局の目的を達するためにその全力をつくさねばならぬのである。

全力とはいふまでもなく前線のみならず傾倒しつくして些の餘裕をものこさぬことではない。前線をして最大の効果を擧げ

は上下ひとしく一體となり、たゞたゞ恐懼感激、措くところを知らないのである。忠誠の念は切々として胸に溢れ、和協の心は相應じ相誓つて、一意みな勲慮を安んじたてまつらんことを期するばかりである。

二

さきに、北支の一角に事變の端を發するや、炎暑の候をもつて直に特別議會を召集せられ、國民の總意をもつて、その局地的解決につとめ、ひとへに事態の擴大を避けしめられたに拘はらず、節、秋風の時に入つて、事態は更に深刻なる一進展を示すにいたり、上海における現下の情勢は、その國際的複雜性すらも加へんとしてゐるのはすこぶる遺憾といはねばならぬ。

今やこゝに重ねて戦費ならびに緊急の重要諸案を提出せしめられ、協賛の任を竭さんことを努めしめ給ふにあつて、わが帝國の期するところ、一に中華民國との提携協力にあり、東亞平和の確立を目的として、これが達成に盡さしめ給はんことを明かにせられたことは、聖慮まことに畏しとも長き極みである。もとより皇軍の威武は、陸に、海に、空に、まさに南北を壓し、百戰萬難を冒して、その忠烈勇猛の行動は、中外相率ひて嘆賞するところ、すでに平津一帯の地にあつては、治安の維持につとめて新たなる體勢を具顯し、また察南においては、自治獨立の實現を宣言したるがごとき、かくし

しむべく、國民のあらゆる機關と努力とが最大の能率を擧げるをいふ。これがために國民精神の總動員といふことは甚だ必要である。もとより政府の計畫の具體的なことはわからなから、その内容に對する意見を述べることを得ないが、何れにせよ國力充實のために、國民に全能率を發揮せしむべく種々の考案をめぐらすは今日の喫緊事である。由來わが國の社會は相當に亂雜不統一である。この亂雜不統一の裡にまた一種の長所も餘裕も發見せられるのであるから、一概にこれを斥けるわけにも行くまじく、あまりに統制病にかゝるのも考へものであるが、しかしこれに檢討を加へるべき部分は甚だ多いのである。これについては國民精神の作興は無條件はねばならぬ。かくて今次の出師の目的を十分に達すると同時に、この改善緊張の状態を永久に傳へることが出来るならばその意味は一層大きなものとなるわけである。

(大毎、八・三〇)

【七】 開院式勅語を拜す

一

天皇陛下 親臨の下に舉行あらせられた第七十二臨時議會の開院式にあたり、下し賜はつた優渥なる勅語を拜するに、舉國一致、東亞の時局に對處すべき重大契機において、實に異例の聖旨に出でさせ給へるものであつて、奉戴拜誦、國民

て隣邦の民衆は着々その眞にみづから要望するところを知つて、彼我共存共榮の福利に向はんとしつつあり、中華民國のうちにあつて果して何者が強ひて日支の提携を阻止し、國運をかへて衰滅に導きつゝあるかを反省せんとしつつあるのである。

三

事ここに至つては、無意義にして有害なる抗日の迷妄を脱せしめ、和親の大局的見地に達せんためには、しばらく破壊の犠牲もまたやむを得ざるものとしなくてはならない。しかもその多大の犠牲は、たゞ適切なる建設によつてのみ償はれる。建設の力を失ひ、その時を逸して、徒らに破壊に向つて混沌の途を盲進することは、わが多年の友邦のために、いよ／＼もつて忍び難きものなることを痛感するのみである。

吾人は今次の臨時議會が、この國民的理想と信念のために奮勵して、宏謨翼贊の重責を果し、聖慮に副ひたてまつらんことを期待するのである。(大朝、九・五)

【八】 時局對處の目標、首相と外相の演説

開院式に賜はりたる勅語の聖旨を體して、如何にこれを奉行するかの際に閣僚はみな恐懼してゐる。五日の貴衆兩院における首相および閣僚の所説は、いづれもその骨子を此處に置いてゐるのである。近衛首相は「去る七月七日、北支に

事變が勃發致しまして以來、帝國政府が執り來りましたる根本方針は、あくまで支那政府の反省を求めて、その誤れる排日政策を放棄せしめ、もつて日支兩國の國交を根本的に調整せんとするにある」ことを繰り返してゐるが、しかし特別議會當時とは異なり、少からずその態度を明白にし「この際帝國として執るべき手段は、出來るだけ速かに支那軍に對して徹底的打撃を加へ、彼をして戰意を喪失せしむる以外にない」が、それでもなほ且容易に反省しなければ「帝國として長期にわたる戦ひも勿論辭するものではないのであります」と言明するに至つた。これは先日の廣田外相の外人記者に對する言明と相待つて、わが政府の態度を極めて直截に表明してゐるといふからうと思ふ。

しからば近衛首相が「長期戦も辭せず」といひ、廣田外相が「根本的解決の見透し」を必要とするといふ事態の目標はどこに置かれるのか。この點について近衛首相は「一國が特定他の一國を排斥侮蔑することをもつて國策となし、國民教育の方針として、かゝる思想を幼少なる兒童の頭腦にまで注入するが如きことは、古今東西の歴史において未だかつて類例を見ざるところ」といひ、廣田外相は「畢竟南京政府のみならず、地方軍閥に至るまで多年自己政治強化のため、排日、抗日の氣風を煽動し、民心を激北するのみならず、進んでは赤化分子と苟合して、日支の國交を悪化せしめ」といふ

てゐるのであるが、これは實に日支兩國の關係といふよりも東洋一帯の平和を震撼する行爲であり、態度であるといはねばならぬのである。従つてこの事態を絶滅することは、ひとりわが國の威信のためばかりではない。それはまた東亞の平和のためであり、あはせて世界の平和のためでもある。

以上の所説によつて明瞭なるが如く、今回の事變は、その關係するところ、只ひとりわが國の威信だけではないのである。従つてこれが收拾の方法如何によつては、世界の平和に非常な影響を及ぼすことであらうと想像される。この點に關して、首相も外相も、少しも觸れてをらぬのは未だその時期でないにしても、少からず物足らぬ感を國民にもたせはせぬであらうか。(大毎、九・六)

【九】 自ら欺く支那の聲明

國際聯盟に對する支那の第二次聲明が用意され、このほど南京政府外交部から發出されたことが明かとなつた。上海來電によれば、右聲明は極めて勝手な事實を述べ立て、徹頭徹尾自國の非を蔽へるもので、嚴正中立の立場にある第三國に對してならん訴力を有するものでないのは、もちろんであるが、兩次の聲明を通讀して吾人の到底黙過し得ないものあるを痛感せずにはゐられないのである。試みにその最も甚だし

い數點を指摘すれば、その全文がいかにも虚構の事實によつてでつち上げられた文書であることが明白となるであらう。まづ順序として第一次聲明書について見るに(第一)蘆溝橋事件後、日本の軍事行動の擴大は「正規の外交手段による解決を日本が拒否したため」であるといふのは、わづかに半面の理を述べるにすぎない。支那側の抗日政策が日支間の正當外交關係を歪曲せしめ、すでに正規の外交手段によつては匡正すべからざる状態を現出してゐたことについては、支那は到底その責任を免れることはできないのである。俗諺に頭かくして尻かくさずといふのは、支那のこの場合によく當はまるものではないだらうか。

二

(第二)「日本陸戦隊によりて上海における武力衝突が促進され」たといふことも事實轉倒これより甚だしきはない。上海の衝突は大山大尉慘殺事件に端を發し、支那が一九三二年の停戰協定を蹂躪して増兵したことから激發されたものであるのは掩ふべからざる事實である。(第三)「戦團の場所より遠距離にある都市が日本の爆撃の犠牲となつた」と、言ふのはかくいへば近距離にあるものにはやむを得ないことが支那によつて暗黙の中に肯定されてゐるわけだが、近代戦争にありては距離の遠近は問題でない。日本空軍の目標は軍事施設主として飛行場の爆破であつて、いづれも戦團圏内にあることを

自ら立證してゐるのである。(第四)日本の軍事行動は今更説き立てるまでもなく、全く自衛行動の建前からなされつゝあるものであつて、これを「日本が大陸全體を含む計畫を遂行せんとするもので」といふが如きは、轉倒した事實から導かれた間違つた結論か、若くは夢の如き支那側の錯覺といふのほかはない。(第五)従つて結論として各種の國際條約を引用し「國際聯盟の注意を喚起する」といへる支那政府の聲明は眞に嚴正中立の立場にある第三國人から見れば、一顧の價値なき勝手極まる文書でなければならぬのである。

三

さらに第二次聲明にいたつては一層甚だしきものがある。すなはち(第六)支那は日本が「全支那海岸に對船舶の封鎖を宣言し」たことを指摘してゐるが、これより先き支那は自ら「國際河川ともいふべき揚子江を封鎖し、かつまた上海港の一部を閉鎖したること、並にこれに充用するために日本汽船六隻を不法にも沒收せる事實については全然忘れたるが如き態度である。實に日本海軍の交通遮断はかくの如き暴行に對する報復膺懲の手段として誘發實行されたものであることを忘れてはならないのである。(第七)加ふるに日本飛行機は屢次非戰鬥員を爆撃」したといふ一節は、實に盗人だけだしいといふも決して過言でない。これこそ正に英國大使の遭難事件を想起させ、英國の獨斷的對日抗議の尻馬に乗るもの、自

國機の所業について強ひて目を掩ふものといはねばならぬ。かのカセイ・ホテル、大世界を爆撃して一度に二千四、五百人の犠牲者を出した事件、重ねて先施公司を爆撃して四、五百人を殺傷せる事件更に米船ブレンデント・フーヴァ號の爆撃事件は、果して何人の手によつてなされたといふのか。こんなことを羅列して世界を欺かうとする支那政府の厚顔無恥にいたつては、吾人はいふところを知らないのである。

四

終りに非戰鬥員殺傷の問題は、英國の獨斷的抗議ありて以來、頗る支那政府の興味を牽いたやうであるが、支那今次の聲明はむしろ反對に支那軍の無法な射撃によつて、婦女小兒の避難所たりし虹口方面に惹起された非人道的慘劇、我が總領事館に對する計畫的砲撃病院船に對する非人道極まる砲撃等々に對して支那自ら抗議してゐるかの感なきを得ないのである。吾人は國際聯盟が支那の欺瞞的文書を默殺するのが當然であると信ずるものである。(大朝、九・一二)

【10】儼たるわが根本方針、支那の聯盟提訴

南京政府は國際聯盟に對して、支那事變に關する提訴をなし、併せて虚構の逆宣傳に躍起となつてゐる。それは見えすいた以夷制夷策の延長であり、南京政府としては蓋し豫定の行動を執つたまでのことであらう。しかし當の聯盟を自體

は、聯盟本來の使命たる世界恒久平和の樹立といふ點において、全くその機能を失つてゐる。聯盟の創立以來、常任理事國の一員として眞正の意味における世界平和の維持に協力して來た日本が、滿洲事變を契機として遂に聯盟を離脱するに至つた理據もそこにあつたのである。歐洲自體が「廢人」と稱して憚らぬ聯盟において、今更支那事變を如何に處理しよう、それは日本の關知しないところである。

日本は名實共に東亞の安定勢力を以て任じてゐる。事東亞の平和に關する限り、その國力を傾倒してこれに善處する方針を確立してゐるのである。しかして支那の抗日政權が、執拗に日本に挑戦して來たことは、如何なる點から見ても、東亞の和平を念願とする日本の根本方針と相容れ難いものである。南京政府が日本の侵略行爲を云々する支那事變の根本原因は、實にこゝに存するのである。公平なる第三者が蔣介石政權の強化された道程を仔細に検討するならば、その最大の原動力が、南京政府の執り來つた侮日、排日、抗日政策にあることを發見するに相違ないのである。日本が東亞現實の情勢に即して、一再ならず和平親善の手をさし延べて來たに拘らず、逆に武力によつて抗日政策の徹底を期するといふのが南京政府の根本方針である以上、日本は國家自衛のために、更に東亞永遠の平和のために、抗日政權を膺懲しなければならぬ。これまた第三國が冷靜なる態度を以て、日本の立場に

立つてみれば極めて容易に諒解し得られるところであると信ずる。抗日の名において支那の民衆を欺瞞し、遂に今次の如き不祥事を惹起せしめ、抗日のためにはコミンテルンと握手し、國內共產黨と妥協し、共產軍と行動を共にして憚らない蔣介石政權を徹底的に膺懲するのなければ、日支兩民族の眞の提携、ひいて東亞の恒久平和は到底望み得ないのである。日本は今や舉國一體、この根本方針の貫徹を期して、甚大なる犠牲を拂ひつゝあるのである。支那事變を機縁として東亞の和平について關心を新たにしたりした國々があるならば、かれらはこの現實の情勢について、公平周到なる検討を下すべきであらう。(大毎、九・一六)

一、皇軍慰問

出征の皇軍將兵各位に捧ぐ

○北支の部 學校

拜啓 新秋の氣漸く立初候處愈々御勇健の段邦家のため慶賀此の事に奉存候
陳者今回の事變勃發以來既に二閱月、閣下並に麾下將兵諸

士には勇猛果敢の進撃を續けられ、海空軍との緊密周到なる聯絡の下に寡兵よく衆敵を制壓、以て其の暴戾を膺懲し國威を中外に發揚せられたる赫々の武勳は、我等の齊しく感激深謝措く能はざる所に御座候

今や局面は愈々擴大東亞安危の秋、而も解決の鍵は一にかかつて皇軍活動の成果に存するものと存候、過般七十二臨時議會開院式に方りては長くも優渥なる

勅語を下し賜り國民の進むべき所を示され給ふ茲に 聖旨を奉體し舉國一致國民精神總動員の波は澎湃として起居り銃後の護彌々堅きもの有之候

幸に後顧の慮なく皇國百年の大計の下に皇軍の威力を遺憾なく發揮せられ所期の目的達成のために御盡瘁の程願上候

尙幾もなく嚴寒に向ふ折柄折角御自愛被成下度候

茲に感謝の微衷を致し併せて武運長久を祈り度如斯御座候

九月十五日

敬 具

○ 五年 上 杉 博

祖國を遠く離れ、氣候の變化の激しい大陸に、幾多の辛苦をもつともせず、東洋平和の爲、皇國の爲に身命を鴻毛の輕きにおいて奮戦せられる皆様を御様子に新聞に、ラヂオに、ニュース映畫に見聞する毎に、私達銃後の國民は、感謝の言葉もなくたゞ感涙に咽ぶばかりであります。

皆様今こそ確乎たる信念を持つて東亞の禍根を絶つべく彼を膺懲せねばなりません。胸を没する濁流を渡り、膝を埋める泥濘を冒し、峨々たる嶮岨に敵を追ひ、永年にわたつて築かれたる堅壘をも終に突破し、而も味方に幾十倍する支那兵を向ふに廻して之を撃滅せられる皆様方の事を思ひますと、私達銃後にゐるものはどうして安閑としてゐられませう。

畏れ多くも 天皇陛下には近年稀なる今年の夏の暑さにも御避暑の御事なく、早朝より夜遅く迄御冷房の御装置なき御居間で、軍務、政務をみそなはせられました。又 皇后陛下におかせられましたも「なくさめむことの葉もかなた、かひのにはをしのひてすくすやからを」の御歌と共に出征軍人遺族御救恤に多額の御内帑金を御下賜あらせられました。

皇室の限りなき御仁慈を仰ぎ、皆様方の御勇戦を偲んでは私達は各自、己の業務に専心精勵して、国力を充實し増進すべく鋭意努力を致さねばならぬと緊張してゐます。

今や内地各地の愛國諸團體の活躍は目覺しく、國民の愛國心もその最高潮に達し、その赤誠は巷に咲く愛國美談、街頭に見る千人針、千人力、又國防獻金、獻品、皇軍慰問金となつて流露してをります。

先般七十二臨時議會開院式に當りては 畏くも優渥なる勅語を下し賜り國民の嚮ふべき所を示し給はりました。誠に恐懼感激に堪へません。政府も出征軍人遺族扶助法を適用し

暴利を取締り、又官民一致の國民精神總動員なるものを起され、近衛首相自から街頭に立たれるに到りました。かくて國民は上下を擧げて打つて一丸となり皇國萬年の大計の下に進んで、精神的にも物質的にも皆様方に後顧の憂無からしめんと努めて居ります。

我國は昔から幾度か難局に遭遇して参りました。その度に私達の父祖はよくその國難を打開して國威を發揚しました。今や、我國未曾有の大難關は私達の眼前に展開して参りました。私達は時艱を克服して帝國の躍進譜を奏で此を天恵の機會として大に進出せんと意氣込んでゐます。勿論その大任の多くは國防第一線に立たれる皆様方に俟たねばならぬとしても、すぐ第二線に私達が待機してゐるわけです。國民の堅き團結の前には長期の抗争を標榜する南京政府は素より、迷夢に掩はれた列國の策動が何であります。

どうか皆様、皇國の爲、東洋平和の爲に折角御自重、御自愛、愈々御奮闘の程切に御願ひ致します。(十月一日)

○ 五年 小 川 絢 夫

神無月も既に半ばを過ぎ、内地では漸く山、野に樹梢は色増し、草間にすだく虫の音にも物のあはれを覺え、夜空に懸れる月の影にも秋風の身に沁みる心地のする氣候となつて來ました。

皆様は東洋永遠の平和のため、尊き膺懲の使命を帯びさせられ、炎熱金を熔かす盛夏にも、寒風肌を射す嚴寒にも、或は北支南支の泥濘膝を没する惡路や曠野や山嶽やを踏破せられ、或は中支の空に肉弾となつて敵を撃滅せられ、或は支那附近海上を封鎖して空爆風雨下に曝されながらも任務を遂行せられ、硝煙彈雨の間よく艱苦に耐へ、飢渴を忍んで日夜生死の危険線に出入し、父母妻子を忘れて日本武夫の面目を發揮せられる御事どもを、新聞ラヂオ、ニュース映畫に拜しました。私達は唯々熱き涙のはふり落つるを禁じえないのであります。

我等銃後の國民は精銳なる皆様方の御奮闘によりまして安穩に生活してゐられるのであります。打寄せる思想經濟國難は決して我等の安逸を許しません。畏れ多くも 聖上陛下に於かせられましたは、七十二議會に臨ませられ、優渥なる 勅語を賜ひ、又近衛首相は國民總動員して盡忠報國の精神を國民生活に實踐せん事を諭されました。我等は

陛下の 聖旨を畏み質素を旨とし、舉國一致奉公の誠を致し、銃後の護に任じようとの覺悟を益々堅くしてゐます。街頭に於ては千人針や千人力や獻金を踵を接し、家庭に於ては一つの空糞をも捨てないで役立たせるやうにしています。今後は外國からの資澤品の輸入は一切しない事になりました。私達の學校では皆様方の勞苦を偲ぶため、時々日の丸辨當にし

て儉約した金を獻金してをります。そして日々専心學業に勵み、體力を練磨して、將來第二の國家の干城たらん事を期して居ります。皆様どうか後顧の憂なく、充分御活躍せられん事を御祈り致します。

嗚呼、一日も早く支那上下の人心が東洋平和に目覺め、日滿兩國の眞意を解し、容共排日を捨て、比隣其の幸を一にする樂しき日の來らん事を期待してやみません。

私達はこの非常時に於ける日本の現狀に鑑みまして、直接何等君國の爲に役立つ事の出來ないのを遺憾に思ふのみであります。せめて私達は學生の自分を守り、將來國家の重きを擔つて起つに充分なる力を養ふ事が國家に對する責務であり、皆様に對する感謝の途と心得まして、勵んで居る次第であります。

北支曠野の昨今は、最早や内地の酷寒にも比すべき寒さかと存じます。又南支はまだ殘暑消え去らないでせうが、何分大陸のことゝて氣温も急激に變化します故、どうぞ皆様國家の爲いよ／＼御身御大切に遊ばれます様、終りにのぞみ、武運長久をお祈り申上げます。(十月一日)

○ 四年 永福 靖

厳しい大陸氣候と戦ひつゝ、北支、南支の天地に正義の鋒を翳して、暴戾無智な支那兵の膺懲に、東洋平和の確立に、

皇國の爲に奮闘して居られる皆様方に私達は心から感謝致して居ります。先頃は支那の不法、無智慘虐、不法射撃、停戦協定蹂躪、通州事件、更に租界地爆撃等毎日の新聞に、或は一日に幾度も出る號外に、私達は何度義憤の拳を固めた事でせう。此頃では皆様方の一命を投げ出しての御奮戦の御蔭で日々の新聞ラヂオの報道も連戦連勝、空軍活躍のあつた爲か數ヶ月ならずして敵に大打撃を與へ、鈍感なる支那國民も漸く目覺めかけて來、戦勝を喜ぶと共に誠に有難く思ひます。

皆様今こそ東亞の禍根を絶つべき時です。斷乎として動かざる信念を以て、我々銃後の國民も亦學國一致難局打破に邁進致して居ります。灼けつく鐵兜の下に、峨々たる嶮岨、茫茫たる曠原に味方に何倍する支那兵と戦ひ、濁水のクリークを渡つて敵を殲滅せられる皆様方の事を考へますと、我々として内地で安閑としてはゐられません。各自が第七十二回帝國議會開院式に賜つた勅語の意を體し、内閣告諭を守り盡忠報國の精神を國民生活に實踐して己の業務に専心精勵し、我等學生も各々本分を盡し、國威を輝かすべく努力致して居ります。内地各地に於ては、愛國諸團體の活躍目覺しく、國民の愛國心も最高潮に達し、赤誠は國防獻金、軍用機納金等となつて流露して居ります。又政府は遺憾なく出征軍人遺族扶助法を適用し、暴利を取締り、民間の者もよく政府と協力し、皆様方に後顧の憂なからしめて居ります。

皆様、我が日本の理想たる東洋平和保全の爲、日清日露の兩戦を始め、近くは滿洲上海事變に私達の父祖は幾萬の尊い血を流したのです。然して此度東洋平和確立、正義貫徹の大任は我々の双肩に掛つて來ました。然もその多くは第一線の皆様方に掛つてゐるのです。今やソ聯、英國は日支間に干渉する様子があり、其の他世界を覆ふ暗雲は危機を孕んで、日本の使命は益々重大であります。此の秋にあつて我々は正義の爲に何處迄も戦はねばなりません。北支、南支をば單に尊き鮮血を以て彩つた流血の丘とする事がどうして出來ませうか。

どうか皆様。東洋平和の爲、正義貫徹の爲、廣くは世界平和の爲に益々御自重奮闘の程切にお願ひ致します。尙終に皆様の武運長久を御祈りします。

○ 四年 山崎健二郎

空は青々と澄み白雲がふわ／＼と浮いて、實に美しい秋がおとづれてまゐりました。

山に海に、野に街にさわやかな秋光がみなぎつてゐます。けれども全日本はこの秋の色に魅せられず、香に魅せられず、こぞつて益々心を引きしめて、日支事變といふ難關を突破しようといひたすら務めてゐます。この美の國日本に、否東洋に平和の光を輝かさんと。

街へ出て見ると可憐な小學生達が「慰問金お願ひします」と慰問金をあつめてゐますし、市場等へ行つて見ると多くの女の人たちが愛國の千人針を縫つてゐます。

又青年團員は、車を引つづつて各家々を訪ねて、古新聞、古雑誌等を集めて、慰問金の一助にしようといふ汗水を流してゐます。これこそ車に積んだ寶物で、如何なる立派な寶物にも勝るものだと思ひます。

又子供達は紙で日本の旗を作り、學校のかばんを背おつて竹の軍刀をふりかざして「それ支那軍が逃げる、追ひかけてやつ／＼けるやつ／＼ける」と呼ばはりながら戦争ごっこに熱中してゐます。

この様に銃後の老幼男女皆こぞつて、東洋平和の爲に働いて居られる兵隊さん達を應援してゐます。

又一方、北支、南支の兵隊さん達は御國のために身を擲つて働いて下さつてゐるのです。

新聞、雑誌、映畫等を通してこれ等の兵隊さん達が日の御旗の本に敢然と、膺懲の劍を執つて戦つて居られるのを見た時、涙の流れるのを禁ずることが出來ません。

どうか兵隊さん。そちらはもう寒いと聞いてゐますが、お身體を大切になさつて、無事、暴虐支那を打倒されて凱旋せられんことを切にお望み申上げます。どうぞお身體を大切に。

東亞の原野に膺懲の戦火開かれて早や幾月、皇軍の進む處敵なく、其の後には春の如き平和郷が展開してゐます、然し此の爲に幾多の艱難辛苦を経、生命を賭して戦つて居られま

ず兵隊さん達の事を考へますと、何事につけても只管感謝の外は有りません。

亞細亞を蔽ふ暗雲を吹拂ふ我が軍こそ、東洋の平和を永遠に守る神聖な軍隊です。日本魂の進む處如何なる難關も突破し、常に神助が有ります。

時局は決して樂觀を許されません。歐米諸國は隙有らば利を得んものと狙つて居ます。然し乍ら正義正道を持して進軍する皇軍の連戦連勝破竹の如き勢を以てしては、如何ともする事が出来ず、空しく拱手傍觀の態であります。

國內では到る處、舉國一致國難に當る氣慨の現れて居ない處は有りません。千人針、獻金等は街頭隨所に見受けられ、總てが愛國心を濃く描き出して居ます。

極東の平和は今迄幾度か頑迷固陋なる支那の爲に亂されて來ました。今度と言ふ今度は徹底的に其の禍を除き、其の源を絶ち、東洋をして一大樂土と爲さしめ 天皇陛下の御稜威を普く傳へしめねばなりません。

神國日本が一度破邪の劍を執るからには、萬國を敵とし見送り人のない或る應召兵士の方を、行きずりの一青年が通行の人々に呼び掛け、僅か二三町の間に三百人からの見送り人が集り、萬歳の聲高らかに出發されたといふ事です。日本人でないと思ひます。

又ニュース映畫を見て感激し、その足で獻金に行つた方が何人あるか數へられません。或ひは兵隊さんを泊めて當局から頂いたお金をそのまゝ、獻金した人も澤山あります。それだから僅か二ヶ月半許りで、一新聞社が集めた金額だけでも百四十五萬圓近くあります。他の新聞社その他公共團體や陸海軍に獻金された總計は幾らになるか勘定し兼ねます。

又同じく或る新聞社ではじめた軍用機獻納資金募集總額は既に五百五十萬圓の大金になりました。又血書に依る従軍志願や、拳銃、日本刀或ひは軍馬、軍鳩、軍犬の獻納等々枚擧に暇有りません。又學生の僕等は常にも増して一層に緊張、勉強に體育に勵んで居ます。そして他日皆さんの後を受けついで國の爲に盡さんことを願つてゐます。

皆さん方の御苦勞に加ふるに、銃後の守りが有つて、日の丸の進む所敵無く、各地の要所々々が占領されて行くことは非常に痛快です。然し、支那政府當局の無自覺さには、呆れてしまひます。今まで闘つて來た共産黨と握手をし、必ず負ける日本との戦ひを飽くまで續けて、可憐な命を捨てゝゐるとはどうしても腑に落ちません。可哀想なのは支那の民衆

でも毫も動かぬと云ふ氣構へが必要で。我れに大和魂あり又我々第二の國民が居ます。銃後の熱誠は日増に盛んになつて行きます。

皇國日本は決して敗れる事はありません。時候はいよゝゝ寒さに向ひます。くれゝゝも御體に御注下さい。御武運の長久を祈り上げます。

皆さん。

人道を無視した支那兵をあらこちらに、懲らしめて行かれるのは大變でせう。毎日の新聞に依りますと、支那兵も昔程馬鹿に出来ないらしいですね。相當な軍律も有り良い新兵器も備へて居るさうですね。毒ガスまでも使ひかねまじき暴戻な支那兵を、泥濘と戦ひ、飢と渴に悩まされ、或ひは疲勞を冒して攻めて行かれる皆さんの御苦勞は、到底僕等の想像を許さない程大きいでせう。皆さんの御苦勞を新聞に讀み、ラヂオに聞き、映畫や畫報に見ますと、何となく熱いものが目頭に溜つてまいります。そしてこの尊い犠牲と御苦勞に報いるべく、一層奮勵せねばならぬと思ふ氣持が胸一杯に溢れて來ます。それは僕一人だけでは有りません。

日本人たる者總てが持つ共通な感じで。その現れが毎日の新聞に山程載つてゐます。例へばこんな事が有りました。

です。何時自分の身邊に危險が迫つて來るか分らない所で、毎日びく／＼して、その日を送つてゐるのはほんとうに可哀想です。だが今まで暗かつた地方にも、曙光がさして來て、既に察哈爾地方には自治政府が出來たさうです。

支那の人民にもだん／＼平和の光が廻つて來て、南京政府も眼をさまし、日本と手を取つて、世界平和に進まん日の近からんことを望んでゐます。しかしそれは中々實現しさうにもありません。飽くまで日本と戦ふつもりなら容赦は入りません。充分に、徹底的に、二度と起てないやうやつつけて、東亞の平和、否世界の平和を亂すものを驅逐してしまつて下さい。毎日の新聞で皆さんの御奮戰を讀むことを楽しみとし皆銃後の守りに努めて居ります。どうぞ後に心を置かれる事なく日本の聖戰に参加されて居る名譽を負つて、散々支那を懲りしめて、世界平和の近からんやう、御奮闘を御期待して居ります。そして血腥い風の吹き去つた後、平和の光がさして新興支那の呱呱たる産聲を聞く日に、皆さんの力強い足音が日本の津々浦々にまで響き渡ることをお祈りします。

終りに臨み諸將士方の御武運のためだからんことを心より御祈り申し上げます。

もう秋も末、吹く風も一層冷く感ぜられる様になりまし

た。支那にて御活躍の皆様おはり有りませぬか。今我々の眼は、耳は、あらゆるものが北支に、中支に、南支にとかたむけられてゐます。嚴寒なる冬も内地におとづれようとしてゐます。只今寒暑の差、殊に甚しき御地に於ては、その寒さ如何ばかりでございませう。ゴビの沙漠の彼方からやつて来る寒風、我々の想像に絶するものがありませう。あの勇壯なる軍歌に送られ、懐かしの母國をば後に出征されて以來、猛烈なる飢と寒さとに戦ひ、萬里の長城をはるか彼方に眺めながら、我が帝國の爲に東洋平和の爲に歩武堂々と支那膺懲の聖戦を進めて居られる皆様方のお姿を思ひ浮べますと、たゞ

〳〵感激と感謝とに胸が一杯になります。天皇陛下の御爲に、大日本帝國の爲に、家を忘れ、身を忘れてお盡しなすつてゐる忠勇なる我が將士は忠孝兩全の人として、我々の手本とすべき方々であります。と共に帝國の世界に誇り得る立派な國民性の化身であります。強いばかりが武士ではない。強いながらも又情ある我が皇軍將士こそ、眞の武士といふべきであります。

抗日！ 排日！ と物事の判別のつかぬ小さい頃から、たたきこまれたあの支那人が、よく日本兵になつてゐるといふことは眞に日本人といふものゝ偉さを感じたからで、皇軍將士の人格をよく表はしてゐます。我々銃後にありますものは此の如き話を聞きますと思はず萬歳を叫びたくありません。

我々第二國民たる者は、皆様方を手本とし立派な日本人となり、皆様方に負けず、ます〳〵我が大日本帝國の名を世界に輝かさうと心掛けてゐます。

待ちに待つた日、獨、伊防共協定も遂に成立致しました。私は此の報を得られた時の兵隊さん達の御心を想像して思はずほゝあみました。此の事は實に我が國にとつて喜ぶべきことで、百萬の味方を得た様な氣が致します。

日も短くなり日本獨得の夜襲の好時節となつて來ました。此の時にあたつて銃後の事には少しも御心配なく一層奮闘せられんことを希望致しますと共に皆様方の武運長久をお祈り致します。

〇 二年 今 村 吉 水

出征將兵の皆様。征くも送るも思ひは同じ國の爲に、萬歳歡呼の裡に出征されてから早幾月。毎日全支に於ける空爆や市街戦に、野戦や、山岳戦に胸のすく皇軍の捷報を知り、銃後の我々は歡喜に胸を躍らすと共に、皆様に滿腔の感謝を捧げて居ります。不眠不休の奮戦、爆撃、突撃の死闘、唯々盡忠報國何物も無き皇軍にして始めて出来る神技とすつかり泣かされます。「戦地の將兵のことを思へば、此れ位の難儀は何でもない」と何處でも云ひ交されてゐますが、之れは第一線の皆様に感奮興起してゐる銃後同胞の心からの叫びであり

ます。

皆様の夢寢にもお忘れなき故國日本は、既に秋深く柿實り栗こばれ始めました。

各學校では運動會が盛に行はれ、何れも時節柄軍國の秋をふさはしく彩つてゐます。

秋祭の神社は皇軍戦捷の祈願参拜でいつぱいであります。「祝出征新武運長久」の文字は都に鄙に、出征の歡呼は驛に港に氾濫してゐます。國防献金、慰問金品等毎日續々として盡きる所は知れません。

出征の皆様への慰問はもとよりですが、皆様出征後の御家族の慰問等の事も皆様が後顧の憂ひなき様努めて手落なく致されて居りますから御安心下さい。

防空演習も亦ありました。今年になつてから、もう三回目です。國民精神總動員の大運動は上下一體學國一致、いよ〳〵力強く始められ如何なる長期戦にも苦難にも斷乎として耐へる覺悟と準備は燃え盛つて行きます。かくて銃後の力は益々堅められて行きます。どうぞ此上にも心置きなく正義の戦に邁進願ひます。そして光輝ある凱旋の日を皆様と共にお待ちします。

今も又萬歳の聲がして参ります。誰かの出征です。感激にしーんと體が引きしまります。

では皆様。「彈丸に死すとも、病に死すな」と申す通り御

身體元氣に御奮戦下さい。皆様の武運長久を茲に祈り、改めて皆様と共に、

「天皇陛下萬歳」を叫びます。

〇 一年 片 山 美 秀

朝な朝なに汲む水も、やうやく冷氣を覺え、雨上りの日等寒ささへ感ずる折、北支の地に御活躍の皇軍將士の御苦勞が察せられ深く〳〵感謝致してゐます。

毎日の新聞に、ラヂオに報せられる實にすばらしき我が精銳の無敵振りに、思はず拳を固くにぎりしめます。

海陸の荒鷲の鮮かな空襲振り、陸戦隊の敵前渡河、近くは保定に、滄州に、石河莊に進軍又進軍の向ふ所敵なき陸軍部隊のお働振り、馬の蹄も取れるやうな山岳戦に、日夜苦闘を續けられる皇軍の皆様のお上を思ふにつけて、感謝と感激の涙あるばかりです。

私達がかうして安らかな日々を學校に家庭に送られるのも皆様のお蔭と思へば、何につけても思ひ起すのは寒い北支の地に身も家もすて、お働き下さる皆様方の事ばかりです。

神戸でも町角には千人針や千人力を作る婦人達、どんな急がしそりに歩む人も必ず一度立ち止り一針、心をこめて縫ひ一字書いて行かない人はありません。

日曜日には中女學校の生徒等が驛頭に立つて、國防献金

を募集し、新聞社等はトラックに種々な慰問品を満載して遺族の方を慰問されます。又全国一齊に愛國切手を發賣し、學校でも晝食後のパンを節約して、この切手を買ふ人もあります。

私の學校では此間野外演習を行いました。大變成績がよくて校長先生から時局柄喜ばしい事だと、おほめにあづかりました。

私達はまだ學生で何も出来ませんが、一生懸命勉強すると共に身體を充分に練磨して、やがて成人してから立派な帝國軍人としてお役に立つべく心掛けて居ります。

北支では、そろ／＼雪も降り出すとか申します。お寒い事と思ひますが、どうぞお體を御大切に立派なお働きをお立て下さい。そして

手柄話の數々をお土産物に、天晴凱旋なされる日をお待ちして居ります。

終に皆様方の武運長久をお祈り申し上げます。

○ 一年 木 崎 良 平

日々新聞紙上で、或はラヂオ、ニュース映畫等で、皆様方の勇猛果敢な働き振りを見ましては、唯々感謝の心ばかりであります。つい此の間神戸の埠頭に、我々は腹の底から萬歳を叫んでお見送りした兵隊さん達。その如何にも立派であつ

た兵隊さん達。その兵隊さん達が最早北支で盛に活躍してをられると聞いては、我々は自ら血湧き、肉が躍るのです。高い山を駆け上り、或は濁流のみなざる河を渡つたり、群がる敵兵の眞中へ猛然と飛込んで行つたり、全くの不眠不休の追撃戦に到る處で敵を全滅させて、陣地を占領されたのを見ては、感謝感激をとて筆舌では言ひ現せるものではありません。我々は皆さんの努力に對して、毎日心から御禮申してをります。

聞く處によりますと、支那政府は日本を馬鹿にし、日本同胞を閉め出しにしようとしてをるさうであります。又支那の國は日本とはどうしても一致出来ない共產黨を、仲間に入れてゐるといふことです。皆さん、どうか此上とも一生懸命に活躍下さつて、日本の威光を世界に輝かして下さい。

我々は皆さんの懐かしい故郷より、皇軍の武運長久を只管祈つてをります。

さうして皆さんの御奮闘を思うて、更に／＼勉強に力を入れ第二國民の務を完うすることをお誓ひ致します。

段々寒くなつて参りますから、此上とも御體を御大切に。皆様方の凱旋の日を今よりの楽しみに御待ち致してをります。

三、時事和歌

大君と御國の爲に大和華戰の庭に咲かせ我が友	五年	赤松成高
戰の後に憩へるつはものにやさしき秋の日射し明るし	〃	藤井正敏
暴風雨をついて南京空襲の我が空軍のたのもしきかな	〃	八木一之
大君のみこと畏み出で征くたすき姿は眼にしみるなり	〃	上杉博
家を身を國にさへげて出で征く雄々しき姿はらからを打つ	〃	〃
つはものの無事を祈りて運ぶ針やさしき心彈丸もよけなん	〃	〃
雄々しくも國歌うたひて息絶えし勇士の記事は涙して讀む	〃	〃
日章旗打振る前をつこりとよろこび勇みてつはもの、行く	〃	西谷勝行
出征を祝ひて歸る道すがら思はずなきて我は歸りぬ	〃	〃
送るもの送らるるものも涙あり出で行く船や旗のどよめき	〃	小島滿二
銀翼に日の丸赤き爆撃機見上げ思ふ上海の空	〃	佐野輝夫
出征の列車の窓に兵士等の白き姿は頼もしく見ゆ	〃	〃
着物さるのみにて汗する日の盛り鐵砲かっいで皇軍の行く	〃	片山稔

